

学位論文

教育学におけるニーチェ受容史に関する研究
— 1890 - 1920 年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容 —

松原 岳行

D072567

広島大学大学院教育学研究科

2009年1月23日 提出

目次

序章	研究の課題と視座	1
	1. 研究の課題	1
	2. 先行研究の検討	2
	3. 研究の視座	10
第1章	1890年代ドイツのニーチェブーム	18
第1節	ニーチェ受容の前史	18
	1. ニーチェの生涯と思想	18
	2. 同時代人の無反応	20
第2節	青年とニーチェブーム	22
	1. ニーチェブームの到来	22
	(1) 予定調和史観の相対化	22
	(2) ニーチェブーム・ニーチェ派を示すさまざまな呼称	23
	2. ニーチェブームの風景—小説『超人クラブ』より	24
	3. ニーチェブームの分析	25
	(1) 社会現象としてのニーチェブーム	25
	(2) 受容行為としてのニーチェブーム	26
	小括	27
第3節	年長世代の反応—ニーチェ派／反ニーチェ派の対立構図	28
	1. ニーチェブームに対する危機意識—反駁書の成立経緯と概要	29
	2. 批判される「超人」思想	30
	3. 喧噪の時代	31
第2章	1890年代アカデミズムが見たニーチェ思想	40
第1節	若き社会学者テンニースの反応	40
	1. 若きテンニースとニーチェ思想—1873-1883年	40
	(1) ニーチェ初期思想との邂逅	40
	(2) 熱狂的ニーチェファンとしてのテンニース	41
	2. 後期思想に対する批判—1893年以降	43
	3. 1890年代アカデミズムの限界	
	—テンニースのニーチェブーム批判から	45
第2節	精神病理学的な関心	47
	1. テュルク	47
	2. ノルダウ	48
	3. シュタイナー	49
	4. 精神病理学的ニーチェ論の意味	51
第3節	ニーチェ思想の学問化	52

1. 喧噪からの距離の確保—批判から分析へ	53
(1) 形式的側面	53
(2) 内容的側面	54
(3) 喧噪からの距離の確保	55
2. 学問化されるニーチェ思想	55
(1) 時期区分の作業	55
(2) 意味づけや権威づけの試み	56
(3) 学者としての自覚	57
(4) 喧噪から研究へ	58
第4節 教育学におけるニーチェ受容の前史	
—パウルゼンとツィーグラーの場合	59
1. 教育学者パウルゼンが見たニーチェ思想	60
(1) 年長世代と青年世代の断絶	60
(2) テンニースとの書簡から	60
(3) 知的アナーキズムとしてのニーチェブーム	61
2. 教育学者としてのツィーグラーとニーチェ思想	62
(1) 教育学者としてのツィーグラー	62
a) ヘルバルト批判	62
b) 学としての教育学への志向	63
(2) 『一般教育学』におけるニーチェへの言及	64
小括	65
第3章 「教育学者ニーチェ」の発見	74
第1節 E.ヴェーバー教育学の特質	74
1. ヴェーバーのプロフィールと研究動向	74
2. ヴェーバーの人格的教育学—教師の地位向上を求めて	75
3. 新教育運動への批判	
— 1910年論文「キャッチフレーズ教育学」より	77
4. 学問的な確実性の必要性	78
5. 教育学の自律性を求めて	
— 1905年論文「もう一度『実験教育学』」より	79
小括	81
第2節 1907年著作『若きニーチェの教育学的思想』	81
1. 成立経緯と構成	81
2. ニーチェの初期思想への限定化	83
(1) ヴェーバーの基本姿勢	83
(2) 回避される「超人」思想	
— 生物学的「超人」解釈と教育学者ヴェーバーの選択	85
3. 「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの提示	86
(1) 教育学の歴史への位置づけ	86

(2)ニーチェ思想の教育学的意義—「人格的教育学」	88
第3節 「教育学者」モデルの同時代的意味	89
1. 比較対象のプロフィールとその妥当性	89
2. ヴェーバー以前の教育学におけるニーチェ評価	90
3. 初期思想の限定的受容という戦略	91
第4章 「教育者としてのニーチェ」論の成立背景	102
第1節 「教育学者」モデルに対する違和感	102
1. 1907年以後の教育学におけるニーチェ論	102
2. ハーヴェンシュタインによる批判的書評	103
(1)プロフィールと1906年著作の概要	103
(2)1907年書評の分析	
—ニーチェが学問研究の対象とされることへの違和感	105
第2節 ニーチェ思想の人格化—コンラートの場合	106
1. 自然主義文学運動とコンラート	106
2. 1890年代の喧噪とその批判	108
(1)反ニーチェ派に対する批判	108
(2)ニーチェ派に対する批判	108
3. 学問化から人格化へ	109
(1)学問化の試みに対する一定の評価	109
(2)学問化への違和感	110
(3)ニーチェ思想の脱学問化＝人格化	111
小括	112
第3節 「教育者」の条件	112
1. 「教育者」概念の意味内容	113
(1)「教育学者」ではなく「教育者」	113
(2)「教師」ではなく「教育者」— „Erzieher“ 概念の同時代的意味	114
2. 「教育者としてのニーチェ」という表記の問題	115
第4節 青年におけるニーチェ受容形態の変遷	
— 1890年代の熱狂的ブームから1910年代の静かな読書へ	117
1. ニーチェブームの終焉	117
(1)ツィーグラ『19世紀の精神的社会的思潮』のプロフィール	117
(2)ニーチェブームが現在形から過去形へかわるとき	119
(3)歴史的事実としてのニーチェブームの終焉	120
2. ニーチェ読書の普及	121
(1)エーラーの論文「ニーチェは本当に死んだのか？」	121
(2)1910年代のニーチェ読書の普及を示す状況証拠	122
(3)労働者階級のニーチェ読書	123
3. ニーチェ読書という行為の特質	125
(1)ニーチェ読書のススメ	125

(2) 個人的行為としてのニーチェ読書	126
(3) ニーチェ読書と「教育者」概念の整合性	128
第5章 「教育者ニーチェ」の誕生	135
第1節 ハマーの1914年著作『教育者としてのニーチェ』	135
1. 青年運動家ハマーとニーチェ思想	135
2. 『教育者としてのニーチェ』の概要	136
3. 「教育者としてのニーチェ」という解釈モデル	139
(1) ニーチェ読書による「自己教育」	139
(2) 「自己教育」の象徴としての「超人」思想	141
4. 自己教育の成功例—ニーチェ読者の証言から	143
第2節 ニーチェ読書の弊害—青年の「自殺」問題	144
1. 「毒殺者」としてのニーチェ	145
2. ニーチェ読書による「自殺」のメカニズム	146
3. ニーチェ読書禁止令とその限界	147
小括	149
第3節 「教育者」モデルの特質と意味	149
1. 「教育者」か「毒殺者」か—ニーチェ読書への高い依存性	149
2. 優生学的思想としての「超人」	
—ニーチェ解釈上の内的連関性の希薄さ	151
3. 教育者としてのウィンタースポーツ—煽動者としてのハマー	152
4. ハマーの1914年著作『教育者としてのニーチェ』の意味	154
第4節 ハーヴェンシュタインの「教育者としてのニーチェ」論	156
1. 1921年論文・1922年著作の成立経緯と概要	156
2. ヴェーバーの「教育学者」モデルの批判的克服	158
3. 「教育学者」と「教育者」	
—2つのニーチェ解釈モデルの特質と意味	161
結章 教育学とニーチェ思想との関係性再考	177
1. 総括—教育学とニーチェ思想との関係性の歴史的検討	177
2. 1890-1920年代のドイツ教育学におけるニーチェ受容史の特質	181
3. 教育学とニーチェ思想との関係可能性	
—受容史研究のアクチュアリティ	183
参考文献	189
関連年表	200

序章 研究の課題と視座

1. 研究の課題

本研究の課題は、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) の思想が世に影響を与えはじめた 1890 年代初頭から「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルが一般化する 1920 年代までのドイツに目を向け、ニーチェが当時の教育学にどう受容されたのかを解明することである。

教育学がニーチェの思想と最初に関わりを持ったのは 19-20 世紀転換期のことである。以来ニーチェ思想は、ドイツ語圏や英語圏、日本において教育学研究の対象とされてきた。例えば『ツァラトゥストラ』や「超人」思想が自己教育論や自己形成論として教育学に受容可能だというのである。しかし周知の通り、ニーチェは教育家でもなければ体系的理論家でもなく、その意味でまさに非「教育」「学」的な存在である。そもそも教育学はニーチェ思想を受容できるのか。教育学はニーチェ思想といかなる関係を結びうるのか。こうした問題を歴史的に検証する作業が今まさに進められつつある。ニーマイヤーを筆頭編者とする研究論文集のタイトル『教育学におけるニーチェ?』(1998)¹⁾ の疑問符が象徴しているとおり、教育学がニーチェ思想を受容する行為それ自体が問われているのである。

なかでも注目を集めているのが、1890 年代以降にはじまるニーチェ受容史の草創期である。この時期のドイツ教育学におけるニーチェ受容は、ちょうど新教育運動期だったということもあり、ノールに代表される伝統的な新教育運動の歴史記述を手掛かりにして、「ニーチェの初期思想→青年運動→新教育運動」と予定調和的な受容展開を遂げたものと推測されてきた。後の教育運動へと直結する青年運動の全プログラムが、「青年の生の解放」を訴えるニーチェの初期思想に予告されているというのである。これに対してニーマイヤーらは、青年の多くがじつは過激な後期思想に熱狂していたこと、ニーチェが危険思想の持ち主として教師や親から忌避されていた事実などに注目し、ニーチェの初期思想が当時の教育学によって意図的に選択されたものであると説明する。

たしかに、これまで見落とされてきたニーチェ反対派の言動に注目することによって通説だった予定調和的な受容史を「選択の歴史」と書き換えたニーマイヤーらの功績は無視できない。また、ニーチェの実妹エリーザベトやアルヒーフ経営陣がニーチェの遺稿集等に手を加えていた事実にも注目し、ニーチェ受容史を「歪曲の歴史」と特徴づける見方も、当時のニーチェ解釈の限界性を裏づける試みとして評価できる。しかし、1890 年代から

1920年代までの教育学におけるニーチェ受容の実態は必ずしも十分には解明されていない状況にある。

第一に、ニーチェ反対派の存在を強調する彼らの研究視座は、従来の歴史記述の修正や相対化を意識するあまり、かえってニーチェ反対派／賛成派という安易な二項対立図式に陥りやすく、例えば、等しく教育学の文脈でニーチェを評価した解釈者間に見られるはずの「差異」が見過ごされるなどの問題を招いている。第二に、妹やアルヒーフの罪を暴露する歪曲史観は、ナチズムによるニーチェ受容の無根拠性を主張するなどの成果をあげている一方、当時の諸文献に真のニーチェ理解を求めること自体が無理であるというニヒリズム的な見解を招き、ニーチェ受容史を構成する史料群の価値を不当に軽視するという一面を持っている。つまりこれらの研究手法は、結果的に受容史記述を単純化するという欠点を抱えているのである。なかでも問題だと思われるのは、教育学におけるニーチェ受容史上もっとも注目すべき「1907年」の意味を見逃している点である。

1907年というのは、具体的に言えば、E.ヴェーバー(Ernst Weber, 1873-1948)によって「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルが示された年である。1890年代にはニーチェがまだ「青年の危険な誘惑者」として忌避されていたことを考慮すれば、ヴェーバーのこの論は、ドイツ教育学への本格的なニーチェ受容を刻印づける記念すべき「終着点」と見なすことができる。しかしこの1907年は、新たな受容史の開幕を告げる「出発点」でもあった。結論を先取りするなら、1907年の「教育学者(Pädagoge)」論への違和感が1914年以降の「教育者(Erzieher)」モデル成立のひとつの要因となったのである。

以上を踏まえれば、もはや1907年は、教育学におけるニーチェ受容史上の「分節点」と考えなくてはならないだろう。ところがニーマイヤーらは1907年を素通りしてしまう。彼らの受容史研究は、肯定(受容)か否定(非受容)かを問うだけの単純な二項対立図式や極端な歪曲史観にもとづいているため、戦争という外的要因にばかり目が向き、結果的に1914年や1918年を受容史上の分節点と見なされてしまうのである。本研究では、注目すべきこの時期のニーチェ受容史を1890年代の「青年の危険な誘惑者」→1907年の「教育学者」→1914年以降の「教育者」というニーチェ解釈モデルの移行期と措定し、これらの解釈モデルが有していた意味や機能を具体的に検討することによって、当時のドイツ教育学におけるニーチェ受容の実態解明を目指すことにする。

2. 先行研究の検討

教育学におけるニーチェ受容史それ自体をテーマとする本研究の独自性と意義をより明確にするために、あらためて各方面における先行研究の整理と検討を行っておきたい。

(1)ニーチェ思想の教育学的意義を論じる研究

教育学におけるニーチェ受容史を考察対象とする本研究にとって必ずしも直接の先行研究にあたるわけではないが、教育学的な関心からニーチェ思想を論じる試みがあるということをもまずは確認しておきたい。

イスラエルのローズナウは、ニーチェ思想が現代の英語圏諸国とドイツ語圏諸国の教育学においてどう扱われているかを比較調査し、その成果を論文「『教育者としてのニーチェ』対『教育学におけるニーチェ?』 („Nietzsche als Erzieher“ kontra „Nietzsche in der Pädagogik?“)」²において発表した。ローズナウのこの論文タイトルが示すように、過去の姿勢を反省しつつ受容史研究に取り組むドイツ語圏とは対照的に、英語圏の教育学においてはいまなおニーチェ思想の現代的意義が積極的に論じられていると言える³。

わが国においても、ニーチェ思想の教育学的意義を論じようとする試みはしばしば発表されてきた。高橋勝の「F.W.ニーチェ—『自己教育』思想の開拓者」⁴をはじめ、初期思想に見られるニーチェの教育観を論じたもの⁵、ニーチェの思想を自己教育論や自己形成論として読み解こうとするもの⁶など、その数は少なくない。

英語圏と日本のニーチェ論に共通して言えるのは、ニーチェ受容史への関心が薄いということである。むしろ、ニーチェ思想の教育学的意義を検討すること自体に問題はない。むしろニーチェ思想のアクチュアリティを追求する姿勢や問題関心は重要であろう。しかし、これまでの試みが期待通りの成果を収めているわけではないこともまた事実である。それは、ニーチェ思想の教育学的意義を検討した論文がこれまで数多く発表されているにもかかわらず、同種の体系的著作がほとんど出版されていないという研究状況に象徴されている。少なくともわが国においては、相澤伸幸の学位論文『ニーチェと人間形成論—近代ドイツの教育学的人間形成論の系譜において—』(東北大学 2002年：2008年現在で未刊行)を除いて、ニーチェ思想の教育学的意義を論じた研究書は発表されていない。こうした研究状況を生んだ原因のひとつは、ニーチェ思想の非「教育」「学」的な性格に対する無関心、このようなニーチェ思想を教育学が論じることへの無自覚に求められるのではないか。本研究の出発点には、このような根本的とも言える問題関心が存している。

(2)ニーチェの初期思想→青年運動→新教育運動【予定調和史観】

すでに述べたように、本研究が考察対象とする 1890 年代以降のドイツ教育学におけるニーチェ受容については、ちょうどこの時期が新教育運動の成立・発展期にあたることから、精神科学的教育学派による運動史記述においても触れられてきた経緯がある。なかでも有名なのは、『ドイツにおける教育運動とその理論』におけるノールの次のフレーズである。「ニーチェの第 2 の『反時代』(※引用者注：『反時代的考察』の第 2 論文)の結論を想起してほしい。そこにはすでに青年運動の全プログラムが記されている」⁷。このよ

うにニーチェ思想と青年運動との関係が象徴的に語られることによって、この時期の青年におけるニーチェ受容は「教育的」な意味を持つ運動であったと推測されてきた。それと同時に、ニーチェの初期思想が青年運動を経て新教育運動へと順調に受容されていくという「予定調和の物語」も完成したのである。

シャイベの『新教育運動 1900-1932 年』も、『反時代的考察』第2論文を取り上げつつ「この著作の最後の数ページはすべての希望を託された青年たちへの力強い訴えである」⁸と述べ、ニーチェの初期思想→青年運動の予定調和的な影響関係を強調している。またフリットナー／クドリツキ編の『ドイツ新教育(第1巻)—教育運動のパイオニア—』⁹やレールスの『国際的運動としての新教育—ヨーロッパにおける新教育の生起と展開—』¹⁰においても、新教育運動との関係性という観点からニーチェ思想が取り上げられているが、いずれもニーチェ思想を典型的な「文化批判」と把握している点など、基本的には従来の予定調和史観を継承していると言える。

たしかに青年運動や新教育運動におけるニーチェ受容とその意味は、巨視的に見る限り、ノールらのように説明することが可能であろう。しかし、当時のドイツにおけるニーチェ受容の状況を微視的に分析すればわかるように、従来の歴史記述は修正を必要とするものである。詳細な考察は第1章に譲るが、例えば1890年代のドイツでニーチェ思想に夢中になったのは、ノールらの歴史記述から推測されるような、ヴァンダーフォーゲルに参加する健全な青年だけではなく、大都市のカフェで酒や煙草を味わう不健全な青年も含まれていた。この事実ひとつをとっても、予定調和史観がこれまでのように通用しないということは明白であろう。本格的なニーチェ受容史研究が求められているのである。

(3) ドイツ教育学によるニーチェ受容史研究—『教育学におけるニーチェ?』

【教育学におけるニーチェ受容史研究の確立】

教育学以外に目を向けるなら、いわゆるニーチェ受容史研究への関心は比較的早い時期から示されていた。デーツの著作『ドイツにおけるニーチェ像の展開』(1933)¹¹をはじめ、デルネグロの論文「ニーチェと現代—ニーチェ像の変遷—」(1943)¹²、エーレントライヒの論文「数十年來のニーチェ像の変遷」(1951)¹³、ピュッツの著作『フリードリヒ・ニーチェ』(1967)¹⁴、フィリップの学位請求論文「世紀転換期ドイツの雑誌出版界におけるニーチェ像」(1970)¹⁵、シュテッフェン編の論文集『ニーチェ—作品と影響—』(1974)¹⁶など、ニーチェ受容史そのものをテーマとした本格的な研究も少なくない。

それに対して、教育学の分野に特化した本格的なニーチェ受容史研究が開始されたのは比較的遅く、1998年のことであった。ニーマイヤーを筆頭編者とする研究論文集『教育学におけるニーチェ?』がドイツで公刊されたのである。

本書に収録されている論文のテーマを具体的に挙げれば、以下のとおりである。教育学におけるニーチェ受容史研究の意義と課題を示した「ニーチェとドイツ(改革)教育学」¹⁷、

1890-1914年のドイツ教育学におけるニーチェ受容をニーチェ反対派の言説から再構成した「青年誘惑者としてのニーチェー 1890-1914年の危機的状況と教育学側の攻勢」¹⁸というニーマイヤーの2論文のほか、1世紀に及ぶ教育学におけるニーチェ受容史を概観した論文¹⁹、「教育学の歴史」におけるニーチェの位置づけについて検討した論文²⁰、教育学者パウルゼンのニーチェへの反応を扱った論文²¹、「教育学のクラシカー」とニーチェとの相違点を強調した論文²²、受容史研究の視座からニーチェの教育論を批判的に分析した論文²³などである²⁴。

なおニーマイヤーは同様の研究成果を、教育学雑誌²⁵やニーチェ研究書²⁶、青年運動研究の年報²⁷等において精力的に発表し、2002年には『ニーチェ、青年、教育学』²⁸を公刊した。ホイヤーもまた、学位請求論文「教育理論家としてのニーチェ」をもとに『ニーチェと教育学』(2002)²⁹を上梓し、その第1章において教育学におけるニーチェ受容史を概説している。「教育学におけるニーチェ受容史研究」という新たな研究分野が今まさに確立期を迎えているのである。

【教育学がニーチェ思想を受容すること自体を疑うパースペクティブ】

ニーマイヤーらによって受容史研究が開始される以前のドイツにおいては、むしろ今日の英語圏やわが国に近い関心を持つ論者の方が一般的であった。ドイツにもニーチェの教育学的意義やアクチュアリティを示そうとする試みは存在したのである。具体例を挙げれば、ショイアール編『教育学のクラシカー』第2巻(1979)に収められたコケモールの「フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)」³⁰、レーヴの著作『ニーチェーソフィストおよび教育者一』(1984)³¹、フィッシャー／レーヴィッシュ編『起源から現代までの教育学的思想』(1989)に収められたレーヴィッシュの「フリードリヒ・ニーチェ」³²などである。

彼らは、例えば「教育学にとってのニーチェの意義はその教育哲学的批判の過激性のうちに存している」³³といった観点から、ニーチェを「教育学のクラシカー」や「教育者」として積極的に評価した。しかし、コケモールのこうした見解は受容史研究者によって「誤謬」と診断される。「あらゆる教育学をも不可能にしてしまうであろう過激な道德批判に対して教育学は手を出せない」³⁴。エルカースも言うように、そもそもニーチェは「確実な教育学的テーマを、つまりクラシカーとして承認されるだけのテーマを持ち合わせていない」³⁵のである。

ニーマイヤーらの研究論文集『教育学におけるニーチェ?』は、まさしくその「疑問符」が物語っているように、教育学がニーチェ思想を受容すること自体を問い直す試みなのである。

【予定調和史観を相対化する選択史観】

彼らの受容史研究が想定していたもうひとつの意図は、従来ほとんど疑われることのなかったノールらによる予定調和的な受容史記述を批判的に特徴づけ、修正することであっ

た。ニーマイヤーらによれば、ノールの『ドイツにおける教育運動とその理論』は、ニーチェの「教育学的規格化(pädagogische Normalisierung)」³⁶か、あるいはニーチェ思想の「脱過激化(Entradikalisierung)」³⁷にほかならない。すなわち、ノールらの歴史記述に描かれているニーチェ思想やその受容プロセスは、必ずしも当時の「実態」を伝えるものではないというのである。

ヴァンダーフォーゲルや青年運動への望ましいニーチェ受容を強調する従来の歴史記述は、「ニーチェファン」の耳には心地よく響く反面、「実態を瑣末化・単純化する」という側面を持ち合わせている。こうした観点から、ニーマイヤーらは、これまで隠匿されてきた「危険集団としての青年(Jugend als Risikogruppe)」や「青年誘惑者としてのニーチェ(Nietzsche als Jugendverführer)」の存在に目を向ける³⁸。当時の青年がじつは過激なニーチェの後期思想に熱狂していたこと、ニーチェの思想が年長世代や教師から忌避されていたこと、これらの事実からニーマイヤーらは、ニーチェの初期思想が「予定調和」的ではなく、当時の教育学によって意図的に「選択」されたものだと説明するのである。

ニーチェ反対派の存在に注目し、従来の予定調和史観を相対化した点は、たしかに大きな功績である。しかしながら彼らの研究は、「賛成派」対「反対派」という対立図式を強調することによって、逆に考察の視点が単純化されるという事態を招いている。等しく教育学の文脈でニーチェを評価した解釈者間に見られるはずの差異、とりわけ「教育学者としてのニーチェ」と「教育者としてのニーチェ」という2つの異なる解釈モデルの存在が看過されるといった問題はその一例である。すなわち、1890年代から1920年代までのドイツ教育学におけるニーチェ受容の実態は、いまだ十分には解明されていないのである。

(4) 実妹や資料館による捏造の歴史【歪曲史観】

ニーチェの実妹エリーザベトを中心とするニーチェ資料館の動きに注目しつつ、いわば資料批判的な観点からニーチェ受容史を描き出す試みがある。この立場を代表する研究はM.リーデルの著作『ワイマールのニーチェ』(1997)³⁹である。リーデルは、100年にも及ぶニーチェ受容史、とりわけナチズム期以降のニーチェ資料館周辺の動きに目を向けて、ニーチェ受容の歴史がいかにか「真のニーチェ」から遠ざけられていたのかを解明する。本書の各章題からも読み取れるように、リーデルの研究目的は、いわば「ニーチェ資料館の哲学(Philosophie des Nietzsche-Archivs)」、ニーチェ資料館における「哲学抜きにニーチェ主義(Nietzscheanismus ohne Philosophie)」や「ニーチェ哲学の一面化(Halbierung von Nietzsches Philosophie)」を暴露すること、すなわちニーチェ受容史を「歪曲の歴史」として描き出すことにある。本書の意図は、恒吉良隆らによって訳出された本書の邦題『ニーチェ思想の歪曲—受容をめぐる100年のドラマ—』を見ても明らかである。

第1次世界大戦時下(1914年から1918年)の教育学におけるニーチェ受容を論じたニーマイヤーの1999年論文⁴⁰においても、エリーザベトの戦略が批判的に取り上げられてい

る。「妹の精神からの戦争哲学者ニーチェの誕生」というフレーズが節題として使われていることから推察できるように、この論文においてもニーチェは明らかに実妹による歪曲の「犠牲者」として描かれている。すなわち、ニーマイヤーの論文を読む限り、1914年から1918年までのドイツにおけるニーチェ受容は、実妹によって強引にすすめられた「戦争政治のためのニーチェの道具化 (Instrumentalisierung Nietzsches für die Kriegspolitik)」⁴¹と一義的に印象づけられてしまうのである。しかし、このような把握によって、果たしてこの時期のニーチェ受容を語り尽くしたことになるのだろうか。

たしかに、エリーザベトを「主犯格」とする恣意的なアルヒーフ経営戦略、とりわけニーチェの遺稿集から幻の主著『権力への意志』を捏造したことは、リーデルやニーマイヤーが主張するように、ニーチェ受容史上見逃しえない重要な事実である。しかし、裏を返せば、『ツァラトウストラ』や『善悪の彼岸』、『道徳の系譜』など多くの著作はほとんど「無傷」だったわけであり、当時のニーチェ受容者が「捏造されたニーチェ」を存在する唯一のテキストとして読んだこと、さらに、その唯一のテキストから賛否も含め多種多様な解釈がうまれたこともまた事実である。

だとすれば、現在の研究水準から見て信じられないような読解、すなわち極度に恣意的かつ字義通りの単純なニーチェ解釈が横行したことの「罪」を、すべて実妹に着せるわけにはいかないだろう。「主犯格」の特定によって、ニーチェ受容という「事件」のすべてが解決するわけではないし、またそれぞれの現場でニーチェ思想と向き合った「実行役」の行為が不問に付されてもならないのである。

(5) 第1次世界大戦をニーチェ受容史上の分節点と見なす研究

1890年代から1920年代までのドイツ教育学におけるニーチェ受容史の展開や特質を考察するに際して、本研究では、ヴェーバーによって「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルが示された「1907年」に注目し、この年がいわば受容史上の「分節点」の役割を果たしたとの予備的仮説にもとづいて考察をすすめる。この点を強調するのは、従来のニーチェ受容史研究者が「1907年」の重要性を認識せず、「戦争」などの外的要因のみによって安易にニーチェ受容史の「時期区分」を行っているからである。とりわけ第1次世界大戦は、これまで多くの研究者によって、ニーチェ受容史上の「分節点」と見なされてきた⁴²。

例えば、クルメルの2巻本『ニーチェとドイツ精神』⁴³の対象時期は、第1巻が「1867年から1900年まで」、第2巻が「1901年から1918年まで」となっている。クルメル自身が必ずしも明確に述べているわけではないが、本書の副題から、1900年は「ニーチェが死んだ年」、1918年は「第1次世界大戦が終結した年」という理由から設定されているものと推測できる。ノルテの『ニーチェとニーチェ主義』⁴⁴は、1890年代から1914年まで、すなわち第1次世界大戦が勃発する年までを考察対象としている。またアシュハイムの『ニ

ーチェとドイツ人』⁴⁵においても、その第2章が「1890 - 1914年のドイツとニーチェ論争」と題されており、1914年の第1次世界大戦勃発がニーチェ受容史上の分節点と見なされている。さらに、1998年に公刊されたケスターの著書『禁じられた哲学者—ドイツ・カトリック界におけるニーチェ受容史研究(1890-1918)—』⁴⁶も第1次世界大戦の終結までが考察対象となっている。

教育学におけるニーチェ受容史研究においても同様の傾向が見られる。例えばニーマイヤーは2000年論文において、20世紀の教育界におけるニーチェ受容史を「1914年までの時代」「1914年から1918年」「1918年から1933年」「1933年から1945年まで」「1945年から今日まで」という5つの時期に区分している。彼は、第1次世界大戦、ナチズム政権の誕生、第2次世界大戦など、ニーチェ受容史の外部で起こった出来事を「分節点」にして考察を進めているのである。より詳細な考察を試みた論文を見ても、各サブタイトルに明記されているとおり、1998年論文「青年誘惑者としてのニーチェ—1890-1914年の危機的状況と教育学側の攻勢—」(Niemeyer1998-b)が1890年代から1914年までを、1999年の論文『「略奪兵」—第1次世界大戦期の教育学におけるニーチェ受容—』(Niemeyer1999-a)が1914年から1918年までを考察対象としており、ニーマイヤーが第1次世界大戦の開戦をニーチェ受容史上の「分節点」と想定していることは明白である。このように、従来の研究において「1907年」は、教育学におけるニーチェ受容史上きわめて重要な意味を持っているにもかかわらず全くといってよいほど無視されており、その結果、1914年に発表された「教育者としてのニーチェ」論の存在や意味もまた、十分に検討されないまま今日に至っている状況にある。

(6) 日本におけるニーチェ受容史研究の状況

次に、ニーチェ受容史に関するわが国の研究状況を確認しておきたい。まず教育学におけるニーチェ受容史に関する先行研究であるが、ノールによる予定調和史的な記述を紹介しているか⁴⁷、過去に『教育学者としてのニーチェ』や『教育者としてのニーチェ』という著作を執筆したことのある人物としてヴェーバーやハマー、ハーヴェンシュタインの存在に触れる程度で⁴⁸、拙論⁴⁹を除けば、受容史そのものをテーマにした本格的な研究は見当たらない。

次に、教育学に限らずに、ニーチェ受容史に関するわが国の先行研究を概観しておこう。わが国のニーチェ研究者の中で、もっとも早い時期にニーチェ受容史それ自体に対してアカデミックな関心を寄せたのは、西尾幹二である。西尾は、2部作の自著『ニーチェ』の第1部に「日本と西欧におけるニーチェ像の変遷史」と題する序論を用意し、1890年代以降のドイツと日本におけるニーチェ受容史の草創期を概観した。「当時ひとびとはどのようにニーチェを『誤解』していたか、いまはそれを問うことがむしろ大切である。誤解による興奮、非難や批判の類もまた、ニーチェという伝説形成にこれまでに大きく寄与し

ているからである。」⁵⁰ 西尾のこの見解は、ニーチェ受容史研究の目的と意義を示すものとして首肯されうる。なお本論の構成は、①「1890年代」、②「1900年－1920年」、③「第1次世界大戦－1930年」、④「1930年－第2次世界大戦」となっている。

恒吉良隆による「表現主義におけるニーチェ受容(I)(II)」⁵¹や「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(I)(II)」⁵²などの論文も、わが国における数少ないニーチェ受容史研究の一部と考えてよい。「本来ならば、自己のうちに育んできた想念や思考が、多かれ少なかれ他者のうちに見い出された(※引用者注：下線部は原文ママ)時に初めて、正当な影響関係が成立すると見るべきだろう。然るに、当人が他者のうちに見つけ出したものが、一方的に偏ったものであったり、時にまったくの曲解や誤解であったりすることも当然起こりうるわけである。ニーチェの場合には、その思想や概念が多義的な解釈を許容するがゆえに、そのような広義における『影響』もまた決して軽く見過ごすことはできないと思われる。」⁵³ 恒吉のこの見解は、曲解や誤解も含めた幅広い影響関係に目を向けるべきというニーチェ受容史研究上の視座を示したものと言えよう。しかし、これまでの彼の研究成果を見る限り、恒吉自身の関心はむしろニーチェ資料館やニーチェの実妹エリーザベトの行為に向いているように思われる。なお先にも述べたように、恒吉はリーデルの『ワイマールにおけるニーチェーあるドイツの Drammer』(邦題『ニーチェ思想の歪曲—受容をめぐる100年の Drammer』)の訳者である。

「ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況(I)(II)」⁵⁴や「ニーチェのドイツ文学に与えた影響史論考」⁵⁵の著者である舟越清にも、ニーチェ受容史への関心は認められる。ただ、前者における舟越の関心はむしろ19世紀ドイツの自然科学の動向に向いており、また後者においても、ドイツにおけるニーチェ受容史研究の動向や内容の紹介は見られるものの、舟越自身による受容史そのものの分析はなされない。舟越自身の言葉を借りれば、「ニーチェのドイツ文学に与えた影響に関する総合的な研究成果を概観した」⁵⁶にとどまっている。なお舟越には「ニーチェの教育観」という論文⁵⁷もある。

また、『現代思想の源流』に収められた三島憲一の「ニーチェー力への意志のモルフォロジー」⁵⁸も、ニーチェ受容史を検討することの重要性を示した試みである。三島は、「現在におけるニーチェの意味を考えると、解釈の歴史を切り離すことはできない」⁵⁹と述べ、アクチュアルなニーチェ受容史研究の一形態を提案している。青年運動におけるニーチェ受容の特徴も概説的に示されている⁶⁰。

拙論を除くわが国の研究状況をいまいちど整理しておくならば、教育学におけるニーチェ受容史に関する研究は皆無であり、また恒吉による数本の論文を除けば、ニーチェ受容史そのものをテーマにした本格的な研究も、管見の限り見当たらないという状況にある。

(7) その他のニーチェ受容史研究

ヒレブランド編著の『ニーチェとドイツ文学—1873-1963年のニーチェ受容に関する資

料一』⁶¹は、ニーチェ受容史研究の先駆的存在であると同時に、ドイツにおけるニーチェ受容史研究を試みる者にとっては貴重な資料集でもある。ヒレブランド自身による50頁ほどの解説論文も注目に値するが、本書の特筆すべき点はやはり、1873年から1963年までに発表された209編のニーチェ関連文献をおよそ300頁ほどの紙幅を割いて抜粋掲載していることであろう。完全網羅的な資料集とは言えないまでも、本書をドイツ文学界におけるニーチェ受容史の縮図と言うことは許されるはずである。恒吉も以前、「90年間のニーチェ受容の歴史を一眺のもとに鳥瞰できるという点で、かつてない有用な文献資料であり、今後の受容史研究には欠かせぬもののひとつとなると思われる」⁶²と述べ、本書の意義を強調している。

なお、本研究では原則として第一次史料(原典複写を含む)をもとに分析と考察を行っているが、史料自体の劣化や紛失等の事情により図書館からの借用ないし閲覧許可が下りず、一部入手できなかった文献もある。このわずかな欠損を補完する点において、このヒレブランド資料集は参考になった。なお本研究においては、こうした文献から引用をする場合には、ヒレブランドからの再引用であることを注記する。

ヘルフルトの「渡り鳥の巣(Wandervogelnest)におけるツァラトゥストラの鷺—ドイツ青年運動におけるニーチェ受容の形態と位相—」⁶³は、青年運動資料館発行の『年報』に掲載された論文であり、必ずしも本研究のテーマと直接関わるわけではないが、『教育者としてのニーチェ』の著者ハマーに関する記述などについては少なからず示唆を得ている。

グッツォーニ編の『哲学的ニーチェ受容100年史』⁶⁴は、ブランデスから、ハイデガー、サルトル、フーコー、ルカーチにいたるまで、著名な哲学者や思想家16名によるニーチェ論を収録した論文集である。本書においては、文学や芸術の分野、青年運動における熱狂的な受容とは一線を画す「厳密な意味で理解される哲学的なニーチェ像」の諸相が明らかにされている。

また、カンツィクの著作『文献学者と崇拜対象』⁶⁵においては1890年代から第2次世界大戦までのニーチェ受容史が「崇拜」として、シルマー/シュミット編による研究論文集『矛盾—初期のニーチェ受容—』⁶⁶においてはニーチェ受容の多面性が「矛盾」や「対立」として、それぞれ特徴づけられている。

3. 研究の視座

上述の課題にこたえるため、本研究では以下の諸点を研究の視座として設定する。

第一の視座は、「超人」思想への着目である。先述したように、ニーマイヤーらは当時のドイツ教育学におけるニーチェ受容を「選択」と特徴づけ、従来の「予定調和」史観を相対化することに成功した。これは紛れもなくひとつの功績である。しかし、「選択」と

という言葉で説明しきれぬほどニーチェ受容史は単純でもない。ニーチェ思想(A,B,C …)の「選択的受容」には、受容者(a)→ A、受容者(b)→ B、受容者(c)→ C …ではなく、受容者(a)→ A₁、受容者(b)→ A₂、受容者(c)→ A₃ …という事態が想定されるからである。つまり「有用な部分だけを取り上げた」という「選択」の結果だけではなく、ニーチェ思想のある部分を有用なものと解釈する「選択的受容」のプロセスもまた問われるべきなのである。そこで本研究では、ニーチェ思想の具体例として、後期思想に属する「超人(Übermensch)」に注目することにした。というのも「超人」思想は、1890年代以降のドイツにおいて多様な解釈が試みられた重要な言葉であり、「選択的受容」のプロセスを問う上で興味深い対象であるにもかかわらず、その実態が近年の受容史研究者によって全く解明されていないからである。本研究においては、1890年代の大都市の青年(第1章)、教育学者ヴェーバー(第3章)、青年運動家ハマー(第5章)らに目を向け、各ニーチェ受容者が「超人」という言葉とどのように向き合ったのかを詳細に検討することによって、「選択」の実態解明を試みる。

第二の視座は、青年におけるニーチェ受容形態の多角的分析である。当時のドイツにおいてニーチェ思想ともっとも近い位置にいたのはいつも青年たちであった。彼らのニーチェ受容形態や行動様式は、よい意味でもわるい意味でも、当時のドイツにおけるニーチェ解釈モデルの成立や展開にとって重要な役割を果たしたと考えられる。そこで本研究では、青年におけるニーチェ受容を「現象」と「行為」の両面から捉えつつ、多角的な分析を行うことにした。とりわけ大きな焦点となるのは、1890年代と1910年代における青年のニーチェ受容形態の相違である。かりに青年とニーチェ思想との関係性が、1890年代の「ニーチェブーム」に見られるような通俗的かつ表層的な受容形態であれば、おそらく「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルは成立していないはずである。1910年代以降、従来の熱狂的なブームが過ぎ去り、個人的かつ沈潜在的な受容形態としての「ニーチェ読書」が普及したからこそ、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルは成立し得たのではないか。本研究ではこのような仮説に基づき、1890年代の熱狂的ブームから1910年代の静かな読書へと変貌を遂げる青年のニーチェ受容形態を分析していく。

第三の視座は、「教育学者」と「教育者」の相違点に留意することである。これら2つのニーチェ解釈モデルは、例えば「教育(学)者としてのニーチェ」⁶⁷という表記の存在が象徴しているように、これまでほとんど同定されてきた。この一因はおそらく、われわれの注意が「教育学者ニーチェ」や「教育者ニーチェ」という表記の「教育」の部分に向けられるからである。哲学者や思想家として紹介されることの多いニーチェが等しく「教育」の文脈で評価されているという、両者の「共通項」が強調されてしまうのである。しかし、共通項の「教育」を削除すれば明らかなように、「教育学者」と「教育者」という両解釈モデルには、「学」の有無という相違が存在する。言い換えれば、ここには、ニーチェを「学説」として評価するか「人格」として評価するかという、解釈上きわめて重要な問題が含まれているのである。本研究では、「教育学者」と「教育者」という2つのニーチェ

解釈モデルの相違にも着目して、当時の教育学におけるニーチェ受容史を詳細かつダイナミックに描出したいと考えている。

注

* 1) Niemeyer, Ch./Drerup, H./Oelkers, J./Pogrell, L.v. (Hrsg.): *Nietzsche in der Pädagogik?* Weinheim 1998.

* 2) Rosenow, E.: „Nietzsche als Erzieher“ kontra „Nietzsche in der Pädagogik?“ Ein Vergleich der anglo-amerikanischen und der deutschen Nietzsche-Interpretationen am Vorabend des 21. Jahrhunderts. In: *Zeitschrift für Pädagogik* 46 2000, S.867-879.

* 3) 例えば次のものを参照。Gordon, H.: Nietzsche's Zarathustra as Educator. In: *Journal of Philosophy of Education* 14 No.2 1980, pp.181-192. Cooper, D.E.: On Reading Nietzsche on Education. In: *Journal of Philosophy of Education* 17 No.1 1983, pp.119-126. Golomb, J.J.: Nietzsche's Early Educational Thought. In: *Journal of Philosophy of Education* 19 No.1 1985, pp.99-109. Hillesheim, J.W.: Suffering and Self-Cultivation. The Case of Nietzsche. In: *Educational Theory* 36 No.2 1986, pp.171-178. Aloni, N.: The Three Pedagogical Dimensions of Nietzsche's Philosophy. In: *Educational Theory* 39 No.4 1989, pp.301-306. Hillesheim, J.W.: Nietzschean Images of Self-Overcoming: Response to Rosenow. In: *Educational Theory* 40 No.2 1990, pp.211-215. Sassone, L.A.: Philosophy across the Curriculum. A Democratic Nietzschean Pedagogy. In: *Educational Theory* 46 No.4 1996, pp.511-524. Johnston, J.S.: Nietzsche as Educator. A Reexamination. In: *Educational Theory* 48 No.1 1998, pp.67-83.

* 4) 高橋勝「F.W.ニーチェ『自己教育』思想の開拓者―」天野正治編『現代に生きる教育思想 第5巻(ドイツ②)』ぎょうせい、1982年、13-47頁。

* 5) 例えば以下のものを参照。森野衛「ニーチェ初期作品にみられる教育観」『沼津工業高等専門学校研究報告』第21号、1987年、233-241頁。麦倉達生「初期ニーチェの教育観」『滋賀大学教育学部紀要：人文科学・社会科学・教育科学』第39号、1989年、11-34頁。森本倫代「初期ニーチェにおける教育論―ギムナジウムにおける教養教育と自己教育思想―」青山学院大学教育学会編『教育研究』第45号、2001年、1-14頁。松田幸子「ニーチェの『教育者としてのショーペンハウアー』」『上田女子短期大学紀要』第27号、2004年、1-9頁。大川勇「ニーチェの教養理念―『われわれの教育機関の将来について』にみられるフンボルトへの回帰―」京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会編『社会システム研究』第9号、2006年、1-11頁。内藤貴(2006-a)「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論―Bildung理解を中心として―」三田哲学会編『哲学』第115号、2006年、1-23頁。

* 6) 例えば以下のものを参照。宮澤知江美「ニーチェにおける自己教育―学校教育を包括するものとして―」『関東教育学会紀要』第18号、1991年、53-59頁。宮澤知江美「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」『教育哲学研究』第67号、1993年、86-99頁。相澤伸幸(1998-b)「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」『教育哲学研究』第78号、1998年、1-16頁。内藤貴「ニーチェにおける遠近法主義のダイナミズム―ニーチェの自己形成論に関する一考察―」『慶應義塾大学大学院社会学研究

科紀要』第 52 号、2001 年、63-70 頁。 溝口隆一「誘惑と自己教育—ニーチェ哲学の教育的属性—」同志社大学哲学会編『哲学論究』第 17 号、2002 年、23-42 頁。

* 7) Nohl,H.: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt am Main (1935) 1957⁴, S.13. Vgl. Nohl,H.: Die neue deutsche Bildung. (1920) In: Pädagogik aus dreißig Jahren. Frankfurt am Main 1949, S.14.

* 8) Scheibe,W.: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim, Basel (1969) 1974⁴, S.19.

* 9) Flitner,W./Kudritzki,G. (Hrsg.): Die deutsche Reformpädagogik. Bd.1. Die Pioniere der Pädagogischen Bewegung. Stuttgart 1982.

* 10) Röhrs,H.: Die Reformpädagogik als internationale Bewegung. Bd.1. 1980. レールスの著作は、ニーチェの後期思想を紹介している点において一步踏み込んだ試みと評価することもできるが、飽くまでもそれはニーチェの「生の哲学」を解説するための紹介であって、ニーチェの後期思想が当時のドイツに及ぼした影響を及ぼしたのかを明らかにしているわけではない。

* 11) Deesz,G.: Die Entwicklung des Nietzsche-Bildes in Deutschland. Würzburg 1933.

* 12) Del-Negro,W.: Nietzsche und die Gegenwart: Wandlungen des Nietzschebildes. In: Deutschlands Erneuerung 26 1943, S.346-354.

* 13) Ehrentreich,A.: Wandlungen des Nietzsche-Bildes in den letzten Jahrzehnten. In: Die Sammlung 6 1951, S.140-148, S.239-248, S.271-277.

* 14) Pütz,P.: Friedrich Nietzsche. Stuttgart (1967) 1975².

* 15) Philippi,J.: Das Nietzsche-Bild in der deutschen Zeitschriftenpresse der Jahrhundertwende. (Diss.) Saarbrücken 1970.

* 16) Steffen,H. (Hrsg.): Nietzsche. Werk und Wirkungen. Göttingen 1974.

* 17) Niemeyer,Ch. (1998-a): Nietzsche und die deutsche (Reform-)Pädagogik. Vorüberlegungen zur Behebung eines Forschungsdesiderats. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.13-38.

* 18) Niemeyer,Ch. (1998-b): Nietzsche als Jugendverführer. Gefährdungslage und Pädagogisierungsoffensive zwischen 1890 und 1914. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.96-119.

* 19) Hoyer,T.: Über 100 Jahre Pädagogische Literatur zu Friedrich Nietzsche — mit einem Exkurs zur schultheoretischen Rezeption des Philosophen. In: Nietzsche in der Pädagogik ? Weinheim 1998, S.39-55.

* 20) Prondczynsky,A.v.: Historische Konstruktionen. Zur Rezeption Nietzsches in „Geschichten der Pädagogik“. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.56-79.

* 21) Uhle,R.: Der Nietzsche-Kultus in der Wahrnehmung philosophischer Pädagogik — das Beispiel Friedrich Paulsens. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.80-95.

* 22) Oelkers,J.: Einige Bemerkungen Friedrich Nietzsches über Erziehung und der Status eines „Klassikers der Pädagogik“. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.211-240.

* 23) Weiß,E.: Nietzsche und seine pädagogikhistorische Problematik. Theoretische und rezeptionsgeschichtliche Bemerkungen zu einer provokanten Bildungsreflexion. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.241-279.

* 24) 本研究のテーマと直接の関係はないが、この研究論文集には上記以外にも、ニーチェ思想とナチズムの関係性を論じたもの (Piecha,D.,S.132-194)、教育学とニーチェ思想との関係性(とりわけその希薄さ)

をインターネットの検索結果から分析したもの(Keiner,E.,S.357-369)など、興味深い論文が収録されている。

- * 25) Niemeyer,Ch.(1999-a): „Plündernde Soldaten“. Die pädagogische Nietzsche-Rezeption im Ersten Weltkrieg In: Zeitschrift für Pädagogik 45 1999, S.209-229. Niemeyer,Ch.(1999-b): Nietzsches Vorträge ‚Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten‘ im Kontext. Kritische Anmerkungen aus rezeptionsgeschichtlicher Perspektive mit Schwerpunkt auf Wagner, Lagarde und Langbehn. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 75 1999, S.173-207. Niemeyer,Ch.: Wie wurde mit Nietzsche im 20.Jahrhundert Bildungspolitik gemacht ? Ein Rückblick auf gut einhundert Jahre Rezeptionsgeschichte. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 76 2000, S.117-138.
- * 26) Niemeyer,Ch.(2001-a): Nietzsche als ‚Prophet der Jugendbewegung‘ — ein Mißverständnis ? In: Reschke,R.(Hrsg.): Zeitenwende — Wertewende. Berlin 2001, 181-187.
- * 27) Niemeyer,Ch.(2001-b): Nietzsche im Schrifttum der deutschen Jugendbewegung ? Ein kleiner Test auf eine große These anhand von drei Jugendbewegungszeitschriften. In: Jahrbuch des Archivs der Deutschen Jugendbewegung 2001, S.119-145.
- * 28) Niemeyer,Ch.: Nietzsche, die Jugend und die Pädagogik. Eine Einführung. Weinheim, München 2002.
- * 29) Hoyer,T.: Nietzsche und die Pädagogik. Werk, Biografie und Rezeption. Würzburg 2002.
- * 30) Kokemohr,R.: Friedrich Nietzsche(1844-1900). In: Scheuerl,H.(Hrsg.): Klassiker der Pädagogik. Bd.2. von Karl Marx bis Jean Piaget. München 1979, S.34-45.
- * 31) Löw,R.: Nietzsche, Sophist und Erzieher.— Philosophische Untersuchungen zum systematischen Ort von Friedrich Nietzsches Denken. Weinheim 1984.
- * 32) Löwisch,D.J.: Friedrich Nietzsche. In: Fischer,W./ Löwisch,D.J.(Hrsg.): Pädagogisches Denken von den Anfängen bis zur Gegenwart. Darmstadt 1989, S.212-226.
- * 33) Kokemohr, S.34.
- * 34) Prondczynsky, S.59.
- * 35) Oelkers, S.213.
- * 36) Prondczynsky, S.74.
- * 37) Niemeyer1998-a, S.16.
- * 38) Niemeyer1998-b, S.96-97.
- * 39) Riedel,M.: Nietzsche in Weimar. Ein deutsches Drama. Leipzig 1997. (恒吉良隆・米澤充・杉谷恭一訳『ニーチェ思想の歪曲—受容をめぐる 100年のドラマ』白水社、2000年)
- * 40) この論文(Niemeyer1999-a)には「略奪兵(Plündernde Soldaten)」というタイトルが付けられているが、それは『人間的、あまりに人間的』に収録されたニーチェ自身の次のような言葉に由来している。「最悪の読者というのは、略奪兵のように行動するものである。彼らは、自分が使えるものだけをいくつか選び取り、それ以外のは汚し、攪乱し、そして全体を冒瀆するのである。」(KSA2,S.436) これは、ニーマイヤーがこの時期のニーチェ受容を「犯罪」行為として捉えていることを意味している。
- * 41) Niemeyer1999-a, S.222.
- * 42) フィリップ(Philippi,J.)の学位請求論文「世紀転換期ドイツの雑誌出版界におけるニーチェ像」(1970)は、1889年および1911年という年をそれぞれニーチェ受容史上の重要な分節点と設定している。その理

由をフィリップは次のように説明する。「1889年という年はそもそもニーチェ批判の開始を意味している。これまで無視されてきたニーチェが批判の集中攻撃を浴びたのである。1911年は、『この人を見よ』が普通版として公刊された年である(すでに1909年に限定豪華版として出版されている)。(…略…)すなわち、彼はもはや議論の余地ある時代現象のひとつではなく、むしろ世間一般に認められた存在のひとつに数えられることになる。ニーチェそれ自体の問題はもはや執筆の対象とはならず、彼の哲学の一部分でしかない偏狭な箇所に関する記述が目立つようになる。つまりニーチェは、態度決定を要求するような切迫した問題から、学問科学的ないし文献学的な研究の領域となるわけだ。」(Philippi,S.4)一第1次世界大戦という外的要因によってニーチェ受容史を描き出そうとするのではなく、ニーチェ受容史の内側に目を向けた上で「分節点」を設定しようとするフィリップの姿勢は、本研究とも通ずるところがある。

* 43) Krummel,R.K.: Nietzsche und der deutsche Geist. Bd.1. Ausbreitung und Wirkung des Nietzscheschen Werkes im deutschen Sprachraum bis zum Todesjahr des Philosophen. Ein Schrifttumsverzeichnis der Jahre 1867-1900. Berlin, NewYork 1974. Krummel,R.K.: Nietzsche und der deutsche Geist. Bd.2. Ausbreitung und Wirkung des Nietzscheschen Werkes im deutschen Sprachraum vom Todesjahr bis zum Ende des Weltkrieges. Ein Schrifttumsverzeichnis der Jahre 1901-1918. Berlin, NewYork 1983. クルメルの2巻本『ニーチェとドイツ精神』は、それ自体ニーチェ受容史研究であるというよりも、他のニーチェ受容史研究者にとって貴重な文献目録集という性格を有している。「研究<目録」という性格は、読者を「利用者(Benutzer)」と呼び、本書出版の目的を「ニーチェ研究に役立つ道具の提供」と明言するクルメル自身の姿勢や言葉からもうかがえる(Krummel1974,S.VII-VIII)。

* 44) Nolte,E.: Nietzsche und der Nietzscheanismus. Frankfurt am Main, Berlin 1990. ノルテの『ニーチェとニーチェ主義』においては、ニーチェの生涯やニーチェ思想に関する検討の後、ニーチェ受容史が考察されている。ニーチェ受容史を「ニーチェ主義」と名づけ、厳密な意味において「ニーチェ」とは区別されるひとつの現象と捉えた点に、ノルテの研究の特徴がある。

* 45) Aschheim,St.E.: Nietzsche und die Deutschen. Karriere eines Kults. Stuttgart, Weimar 1996. アシュハイムの『ニーチェとドイツ人』は、1890年から1990年までのドイツにおけるニーチェ受容史を考察対象にした研究である。アシュハイムは、ニーチェ受容史を、ニーチェ思想とそれぞれの受容者とが織りなす「ダイナミックな共演の成果」と見なし、とくにニーチェ受容者(解釈者)の側に注目する。「選択的フィルタリング」や「絶え間ない改造」などと特徴づけられる受容史の具体的描写は注目に値する。

* 46) Köster,P.: Der verbotene Philosoph. Studien zu den Anfängen der katholischen Nietzsche-Rezeption in Deutschland 1890-1918. Berlin, NewYork 1998. ケスターの著書『禁じられた哲学者—ドイツ・カトリック界におけるニーチェ受容史研究(1890-1918)—』は、表題が示しているとおおり、キリスト教批判者であるニーチェの思想が当時のカトリック界においてどのような処遇を受けていたのかという点についてまとめた研究書である。

* 47) 高橋、前掲書。

* 48) 黒柳修一「F.W.ニーチェの教育思想についての一考察—『生涯学習論』との関連で—」『武蔵野美術大学研究紀要』第25号、1994年、113-119頁。相澤伸幸(1998-a)「ニーチェの形成論と19世紀の生理

学概念」『東北大学教育学部研究年報』第46集、1998年、45-59頁。相澤1998-b。相澤伸幸「ニーチェ形成論へのゲーテ自然学的アプローチ—ニーチェの教育学的人間形成論の構築に向けて—」『旭川大学女子短期大学部紀要』第29号、2000年、1-18頁。

* 49) 例えば、松原岳行「19-20世紀転換期の教育学におけるニーチェ受容—E.ヴェーバーのニーチェ論の同時代的意味—」『教育哲学研究』第81号、2000年、58-74頁。松原岳行「『教育者としてのニーチェ』という解釈モデルの成立過程とその意味—1907-1914年のドイツ教育学におけるニーチェ受容—」『教育哲学研究』第89号、2004年、103-119頁。

* 50) 西尾幹二『ニーチェ』第1部、中央公論社、(1977)1993年⁴、11頁。

* 51) 恒吉良隆「表現主義におけるニーチェ受容(I)—序説—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第44号、1980年、39-56頁。恒吉良隆「表現主義におけるニーチェ受容(II)—シュテルンハイムの『ドン・ファン』をめぐって—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第48号、1984年、50-64頁。

* 52) 恒吉良隆「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(I)」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第62号、1998年、45-63頁。恒吉良隆「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(II)—エリーザベトとルドルフ・シュタイナー—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第63号、1999年、91-112頁。

* 53) 恒吉1980、前掲書、52-53頁。

* 54) 舟越清「ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況I」成城大学文芸学部編『ヨーロッパ文化研究』第3巻、1983年、99-114頁。舟越清「ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況II—十九世紀転換期の近代自然科学者に見る内的世界の構造の変化—」成城大学文芸学部編『ヨーロッパ文化研究』第4巻、1984年、79-111頁。

* 55) 舟越清「ニーチェのドイツ文学に与えた影響史論考」成城大学文芸学部編『成城文藝』第161号、1998年、119-132頁。

* 56) 舟越1998、前掲書、130頁。

* 57) 舟越清「ニーチェの教育観(一)」成城大学文芸学部編『成城文芸(人文・社会編)』第38巻10号、1985年、146-159頁。

* 58) 三島憲一「ニーチェ—カへの意志のモルフォロジー—」『現代思想の源流』講談社、1996年、87-157頁。

* 59) 同上書、88頁。

* 60) 同上書、102-115頁。

* 61) Hillebrand, B.: Nietzsche und die deutsche Literatur. Bd.1. Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963. Bd.2. Forschungsergebnisse. Tübingen 1978.

* 62) 恒吉1980、前掲書、43頁。

* 63) Herfurth, Th.: Zarathustras Adler im Wandervogelnest; Formen und Phasen der Nietzsche-Rezeption in der deutschen Jugendbewegung. In: Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung 16 1986/87, S.63-110.

* 64) Guzzoni, A. (Hrsg.): 100 Jahre philosophische Nietzsche-Rezeption. Frankfurt am Main, Hain 1991.

* 65) Cancik, H./ Cancik-Lindemaier, H.: Philolog und Kultfigur. Friedrich Nietzsche und seine Antike in Deutschland.

Stuttgart, Weimar 1999.

* 66) Schirmer,A./ Schmidt,R. (Hrsg.): Widersprüche. Zur frühen Nietzsche-Rezeption. Weimar 2000.

* 67) 相澤 1998-b、前掲書、2頁。

第1章 1890年代ドイツのニーチェブーム

第1節 ニーチェ受容の前史

1. ニーチェの生涯と思想

ニーチェは1844年、ライプツィヒ近郊のレッケンに、プロテスタント系の牧師カール・ルートヴィヒ・ニーチェと母フランツィスカ(旧姓:エーラー)とのあいだに長男として生まれた。プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世にちなんでフリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェと名づけられたが、後にヴィルヘルムの名は捨てている。2年後には妹のエリーザベトが生まれた。

1864年、ボン大学の神学部に籍を置いたが、翌年には文学部に転部し、一時的に母親と対立する。この頃からニーチェは古典文献学の研究に情熱を傾け、ライプツィヒ大学に移った後は数々の論文を専門誌に発表、若き文献学徒として高い評価を受けることになる。なお、ショーペンハウアーの著作『意志と表象としての世界』との邂逅は1865年、若きニーチェに影響を与えたとされる音楽家ヴァーグナーとの出会いは1868年のことであった。

1869年、ニーチェは24歳という異例の若さで、スイスのバーゼル大学に古典文献学担当の員外教授ならびに附属高校の古典語教師として招聘されることになる(1870年には正教授に昇格)。学生時代の研究実績から博士論文の提出を免除され、ニーチェはライプツィヒ大学から博士号を得ていた。ニーチェが学者として華々しいスタートを切った頃、ニーチェ自身も志願看護兵として従軍した普仏戦争が勃発し、1871年にドイツの勝利で戦争は終結した。ニーチェが処女作『悲劇の誕生』を上梓するのはこの翌年のことである。

ニーチェの思想形成過程ないし執筆活動時期は、次の3つの段階に区分されることが通例となっている。

◆初期思想：1872-1877年

ニーチェの初期思想は『悲劇の誕生(Die Geburt der Tragoedie)』(1872)の出版をもって開始される。ギリシア悲劇が音楽の精神から生まれたものであるとする文献学的なテーマにもかかわらず、厳密な古典文献学の方法論を無視して哲学的に推論するニーチェの姿勢は、学界からの顰蹙を買うことになる。見方を変えれば、古典文献学や歴史主義への強い不信

感がニーチェを本格的な執筆活動へと向かわせたとも言えよう。いずれにしても、古典文献学というアカデミズムとの別離をもってニーチェは哲学者ないし思想家としてデビューを果たしたのである。その後、ニーチェは5回の連続講演「われわれの教育施設の将来について(Ueber die Zukunft unserer Bildungsanstalten)」(1872年1月～3月)を行い、1873年から1876年にかけては4編の『反時代的考察(Unzeitgemäße Betrachtungen)』を相次いで発表する。すなわち、第1論文『ダーフィット・シュトラウス—信仰者および著述家—(David Strauss, der Bekenner und der Schriftsteller)』(1873)、第2論文『生に対する歴史の功罪(Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben)』(1874)、第3論文『教育者としてのショーペンハウアー(Schopenhauer als Erzieher)』(1874)、第4論文『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー(Richard Wagner in Bayreuth)』(1876)である。この一連の『反時代的考察』を通じてニーチェは、普仏戦争での軍事的勝利を文化の勝利と勘違いする時代傾向に対して異議を唱えたのである。ニーチェの初期思想は、ショーペンハウアーやヴァーグナーの影響を受けたロマン主義的な「文化批判」と特徴づけることができる。

◆中期思想：1878-1882年

多くの論者も指摘するように、初期思想から中期思想への分岐点となる著作は、1878年の『人間的な、あまりに人間的な(Menschliches, Allzumenschliches)』である。ショーペンハウアーやヴァーグナーからの離反を印象づける実証主義的転回もさることながら、本書はニーチェがアフォリズム形式を最初に用いた著作としても注目に値する。かねてより激しい頭痛発作や視力低下に悩まされ長時間の執筆作業が困難だったニーチェにとって、数行から数頁程度の箴言を書き連ねるこのアフォリズム形式は、自らの着想を表現する最適な手段であった。『人間的な、あまりに人間的な』の続編となる『さまざまな意見と箴言(Vermischte Meinungen und Sprüche)』や『漂泊者とその影(Der Wanderer und sein Schatten)』、1881年の『曙光(Morgenröte)』や1882年の『悦ばしき知識(Die fröhliche Wissenschaft)』。この時期の著作はいずれもアフォリズム形式である。内容的にも、形而上学、宗教、道徳、科学などに対する懐疑や批判が目立ちはじめ、『悦ばしき知識』にはすでに後期思想の「永劫回帰」¹⁾や「神の死」が先取的に登場している。中期思想は、あらゆる意味において、後期思想の到来を予告しているのである。

◆後期思想：1883-1888年

『ツァラトゥストラかく語りき(Also sprach Zarathustra)』第1部が発表された1883年からニーチェが発狂するまでの期間がニーチェの後期思想にあたる。この時期の作品を執筆順に挙げれば次のようになる。まず1883年、第1部に続き『ツァラトゥストラ』第2部を、1884年には『ツァラトゥストラ』第3部を刊行し、翌年には第4部を完成させる。1886年には『善悪の彼岸(Jenseits von Gut und Böse)』を完成させ、1887年には『道徳の系譜(Zur Genealogie der Moral)』を出版した。1888年は、ニーチェが正常な精神状態にあった最後の年というだけでなく、ニーチェにとってじつに多産な年でもあった。『権力への意志(Der Wille zur Macht)』の出版計画は頓挫するが、原稿の一部を『反キリスト(Der Antichrist)』、

『偶像の黄昏 (Götzen-Dämmerung)』としてまとめたほか、『ヴァーグナーの場合 (Der Fall Wagner)』や『ニーチェ対ヴァーグナー (Nietzsche contra Wagner)』を完成、さらに自伝『この人を見よ (Ecce homo)』を執筆するなど、精力的に活動したからである。これら後期思想の特徴を一言であらわすならば、キリスト教的道徳や民主主義など「近代的なるもの」への批判的態度ということになろう。また古代ペルシアの聖者ゾロアスターをモチーフに創作された叙事詩『ツァラトウストラ』も、「超人」や「永劫回帰」などニーチェの中心思想が展開される重要な作品である。

* * *

ニーチェの生涯と著作執筆活動については、以上に概観したとおりである。古典文献学との離反から、歴史批判や文化批判を開始したニーチェが【初期】、アフォリズムという非体系的な叙述様式を体得し【中期】、やがてキリスト教批判や道徳批判の中で「神の死」や「超人」など独自の思想を熟成させていく【後期】。これが、ニーチェその人の思想形成過程に関するもっとも一般的な説明パターンである。では、ニーチェの思想は世間にどう受け容れられたのだろうか。ニーチェの著作はいったいどれだけ売れ、また同時代人たちはニーチェの思想にどのような反応を示したのだろうか。

2. 同時代人の無反応

バーゼル大学招聘以前の古典文献学に関する研究論文とは対照的に、『悲劇の誕生』以降のニーチェの著作に対する評価は概して低いものであった。ごく親しい人物を除けば、ニーチェの作品に好意的なコメントを寄せる論者はほとんど現れなかった。一方、批判的な反応は、古典文献学者ヴィラモーヴィッツ＝メーレンドルフによる論難書『未来の文献学！—バーゼル大学正教授フリードリヒ・ニーチェ著『悲劇の誕生』に答えて—』(1872)をはじめ、当初はいくらか示されていた²⁾。ところが、ニーチェは次第に批判すらされなくなっていく。とりわけ中期思想の諸著作や『ツァラトウストラ』などは無視同然であったという。時代に対してあれだけ激しく警鐘を鳴らしながら、ニーチェは学界や論壇からほとんど相手にされなかったのである。ニーチェに関する著作や論文の数が同時代人の反応の薄さを物語っている³⁾。

もっとも、いわゆるニーチェ論ばかりが「受容」のバロメーターになるわけではない。ある作家について公的に発言しようとする論者がいなくても、作家の著作が一般読者に読まれている＝受容されているケースは考えられるからである。ではニーチェの場合はどうだったのだろうか。彼の諸著作の売れ行きについて整理しておこう。

『悲劇の誕生』の発行部数は 1,000 部であった。ヴァーグナーの著作を出版していたフリッツ書局からの刊行ということもあり、処女作の出版としては恵まれた環境にいたのだが、同書は 1874 年 11 月の時点でまだ数百部の在庫を抱えていたとされる。また『反時

『道的考察』は、1874年11月までに第1論文『ダーフィット・シュトラウス—信仰者および著述家—』がおおよそ500部、第2論文『生に対する歴史の功罪』が200部、第3論文の『教育者としてのショーペンハウアー』は1875年までに350部を販売したという。

今日のニーチェの知名度を踏まえれば販売数がやや少ないようにも思えるが、それでも初期著作はまだ売れ行きがよい方であった。中期に入ると、販売数は伸び悩みを見せはじめる。1878年刊行の『人間的な、あまりに人間的な』は翌年までに120部を販売しただけ、『曙光』や『悦ばしき知識』などの販売実績も芳しくなかった。後期も次々と重要な作品を執筆していくが、販売数は落ち込んだ。事実、『ツァラトゥストラ』第1部から第3部はそれぞれ60～70部程度しか売れなかったという。こうした事情から、ニーチェの経済状態は悪化の一途を辿り、出版自体がきわめて困難な状況に陥ることになる。例えば1886年の『善悪の彼岸』は100部ほどの販売実績⁴⁴を記録したものの、形態としては『道徳の系譜』とともに自費出版を余儀なくされていたし、また『ツァラトゥストラ』の第4部などは、私家版として辛うじて40部を製本して親しい友人に献呈したにとどまるとされる。

自分の著作に対する関心や評価の低さについては、ニーチェ自身も自覚していたようである。1888年執筆の自伝『この人を見よ』の「序文」には次のようにある。

「私は近いうちに、これまで人類に突きつけられた要求の中でもっとも難しい要求を人類に突きつけなければならなくなるだろう。だとすれば、やはり私が誰であるかを述べておくことは、どうしてもしておかなければならないことのように思われる。もっとも、本来ならば、それは一般に知られていていいはずなのだ。私はこれまで自分を『身元不明のまま』にしておいたことはなかったのだから。しかし、私の使命の偉大さと私の同時代人たちの卑小さとのあいだの不均衡が生じたために、誰も私に耳を傾けず、目も向けないという状況が続いたわけである。(…略…)こうした事情であるから、本来は私の習慣に反し、さらに言えば私の本能の誇りに反することではあるが、次のように言う義務があるのだ。私の言うことを聞け！私はこういう者であるから。何よりも私を取り違えてくれるな！」⁴⁵

このように、ニーチェ自身は、自分に対する関心の低さや著作の売れ行き不振の理由を、同時代人の水準の低さに求めている。ニーチェの自尊心の高さに目が向いてしまうところであるが、いかなる理由を添えたにせよ、自分の著作が同時代人からほとんど見向きもされなかったことをニーチェ本人が自覚していたのは事実である。賛同でも批判でもよかった。同時代人の「反応」をニーチェは求めていたのである。

ニーチェに「吉報」が舞い込んだのは『この人を見よ』を執筆する数ヶ月前、1888年の4月初旬のことであった。ブランデスがコペンハーゲン大学においてニーチェに関する講義を行い成功を収めたとの知らせを受けたのである。ニーチェ思想への関心が徐々に高まりはじめていた頃であった。ただ周知の通り、ニーチェは1889年1月3日に発狂・昏倒、精神錯乱状態に陥ったまま10年ほどの歳月を過ごし、1900年8月にこの世を去ってしま

う。そして皮肉なことに、自らの著作や思想が世間にどのように受け容れられるのかをニーチェ自身がほとんど知らないまま、ニーチェ受容史は開幕を迎えるのである。

第2節 青年とニーチェブーム

1889年の発狂以前にはほとんど注目されなかったニーチェの著作が突然、世間の注目を集めることになる。1890年代初頭、ニーチェ受容史の開幕である。本節では、後のドイツにおけるニーチェ受容の展開にとって重要な意味を持つ1890年代の青年におけるニーチェブームに注目し、その内容や特徴を検討する。

1. ニーチェブームの到来

(1) 予定調和史観の相対化

最初に注目したいのは、1890年代の青年におけるニーチェブームが、なぜ、どのように、起きたのかという問題である。青年の内的かつ自発的な欲求からなのか、それとも何か別の要因が絡んでくるのか。まずはこの点を整理しておきたい。

これまでのように、ニーチェ思想→青年運動→新教育運動という予定調和的な歴史記述を手掛かりにすれば、1890年代の青年におけるニーチェブームも、教育に対して自覚的な青年の／自発的かつ健全な内的欲求に基づいて／必然的に巻き起こった／教育史上きわめて意義深い現象だったのではないかと推測されえよう¹⁾。しかし、1890年代のニーチェブームの実態を知ろうとするならば、われわれは「教育的」「自発的」「健全」「必然的」といった常套句を封印し、予定調和史観から自由な立場で考察をすすめるなければならない。

「1890年になると、ドイツにおいて突然(plötzlich)、ニーチェの著作に対する生き生きとした関心が寄せられ始めた。計り知れないほど数多くの研究論文や小論文、ニーチェに反対するパンフレット、ニーチェの敵に反対するパンフレット、きわめて多種多様な著作、さまざまな精神レベルで書かれた著作が出版され、書籍マーケットは溢れかえった。」²⁾

この文章は、ノールの『ドイツにおける教育運動とその理論』とほぼ同時期の1933年に書かれたものであるが、1890年代に入って各方面でニーチェが流行したという事実を伝えているのみで、このニーチェブームの描写には、青年運動の色も教育的な意味も見出せない。また、引用文中の「突然」という言葉に注目してもよいだろう。この「突然」という平易な言葉は、当時から現代にいたるまで、1890年代のニーチェブームの描写に際してしばしば用いられてきたキーワードであるが³⁾、この「突然」の語には、何か予定外

の偶発的な出来事といったニュアンスが込められていないだろうか。少なくとも、従来の予定調和史観は相対化されなければならないと思われる。

本研究では、ニーチェの発狂という衝撃的事件への通俗的な関心もまた 1890 年代のニーチェブームの原因のひとつではないか、と見ている⁴。例えば、印象主義の叙情詩人リーリエンクロンが友人のコンラートに宛てて送った手紙(1889年4月15日付)には次のように記されている。

「最新ニュース。(あくまでも噂話だけど!)フリードリヒ・ニーチェが発狂したって聞いたよ(当然、誇大妄想で)。とうとう彼は友人宛の手紙に、シーザーとか皇帝などと署名したらしい。ホント不名誉な話だよ。だって、彼は精神的に最高位に位置するドイツ人だったから。」⁵

ニーチェがトリノのアルベルト広場で発狂昏倒したのは1889年1月のことであるから、リーリエンクロンは「噂話」をその3ヶ月後に聞いたということになるだろうか。いずれにせよ、「ニーチェ」の名前とその思想は、発狂という悲劇的エピソードとともに広く知れ渡ったと思われる。1890年代のニーチェブームは意外にも通俗的なレベルで展開していったのである。

(2) ニーチェブーム・ニーチェ派を示すさまざまな呼称

さて、「ニーチェブーム」という用語だが、じつはこの言葉を直接的に示すドイツ語があるわけではない。ただ1890年代のドイツにおけるニーチェ思想の大流行という現実を、同時代人がそれぞれの言葉で表現しただけである。具体例を挙げれば、以下の通りである。なお合成語となっている場合を除き、„Nietzsche“は„N“と略記する。

- ・「ニーチェ主義(Nietzscheanismus)」⁶
- ・「ニーチェ崇拜(N-Kultus, N-Cultus, Nietzschekultus)」⁷
- ・「ニーチェ愛(Vorliebe an N, Vorliebe für N)」⁸
- ・「ニーチェスキャンダル(N-Skandal)」⁹
- ・「ニーチェムード(N-Fruidum)」¹⁰
- ・「ニーチェ式(Nietzscheade)」¹¹
- ・「ニーチェ熱(Begeisterung für N, Nietzschebegeisterung)」¹²

これら多様な表現を包括する言葉として、本研究では「ニーチェブーム」という言葉を採用することにした。

またニーチェブームの担い手を「ニーチェ派」と呼ぶことにする。これは、当時もっとも一般的に使用されていた呼称 „die Nietzscheaner / Nietzscheanerin“ を訳出したものであるが、当然これ以外にも「ニーチェ派」を指し示す呼称は数多く存在した。

- ・「ニーチェ信奉者(N-Anhänger)」¹³
- ・「ニーチェ信徒(N-Gemeinde)」¹⁴

- ・「ニーチェ賛美者(N-Anbeter)」^{*15}
- ・「ニーチェ隊(N-Bande)」^{*16}
- ・「ニーチェの弟子(Ns Jünger, N-Jünger)」^{*17}
- ・「ニーチェ瞑想家(N-Nachdenker)」^{*18}
- ・「ニーチェ崇拜者(N-Verehrer)」^{*19}
- ・「ニーチェ教の僧侶(N-Pfaffen)」^{*20}
- ・「ニーチェばか(N-Narren)」^{*21}
- ・「ニーチェ狂(Manie N's)」^{*22}
- ・「ニーチェ軍(N-Armee)」^{*23}
- ・「ニーチェ気取りの連中(Nietzschegigerltum)」^{*24}

これらの表現を一瞥しただけでも、ニーチェブームないしニーチェ派の通俗性がうかがえよう。少なくともこれらの言葉から健全な青年の姿を連想することは難しいはずである。いずれにしても、バリエーション豊富なこれらの呼称は、ニーチェブームという現象の特徴やニーチェ派の行動様式・受容形態を探る手掛かりともなるであろう。

2. ニーチェブームの風景—小説『超人クラブ』より

以下では、1890年代ドイツの青年におけるニーチェブームが実際どうだったかを探っていくことになるが、詳細な分析に入る前に、当時もっとも人気を集めた「超人」思想に焦点を絞ってニーチェブームの風景をイメージしておきたい。手掛かりとして用いるのは、青年の日常を描いた小説『超人クラブ(Der Klub der Übermenschen)』(1895)^{*25}である。

この小説は、女権論者としても知られるオーストリアの作家マイレーダー=オーバーマイヤーが雑誌『自由舞台』誌上に発表した作品である。主人公はブルジョア階級の青年7名であり、彼らによって全会一致で採択された結社の名称が「超人クラブ」であった^{*26}。

彼らは大都市の路地裏にあるいかがわしいカフェバーに昼間から出入りし、飲酒や喫煙を繰り返していた^{*27}。例えば「超人」を主人公にした合唱つきの悲劇作品を創作したり^{*28}、『自由新聞』という名称の雑誌を創刊しようとするなど^{*29}、彼らは文化的な活動にも従事するが、最終的に「超人クラブ」は「無政府主義的傾向を持つ秘密結社の結成」^{*30}という嫌疑をかけられ、警察当局の一斉摘発を受ける。秘密の引き出しに保管されていた「速記の議事録」や「会員規約」は押収され^{*31}、まもなくメンバー全員が警察で事情聴取を受けることになる^{*32}。以上がこの小説の概要である。

「超人クラブ」という同好会名^{*33}がすでに、1890年代の青年が「超人」という言葉にどれだけ魅力を感じていたかを示す興味深い一例であると言えよう。小説中の言葉を借りれば、青年は「超人になるという自尊心をくすぐるような誘い文句」^{*34}に夢中になったのである。では彼らは「超人」に何を夢見ていたのだろうか。重要な手掛かりを与えてくれ

るのは、警察当局によって押収された「会員規約」の内容である。「何ものも真ではない、一切は許されている (Nichts ist wahr, Alles ist erlaubt)」³⁵ というニーチェの言葉の細則として付記された三箇条は注目に値する³⁶。

I : 全員ありのままでいること (Jeder ist, wie er ist)

II : 全員したいことをすること (Jeder thut, was er will)

III : 全員出来る限り多くのものを所有すること (Jeder hat, soviel er vermag)

いかなる真理への意志も否定するニーチェの「何ものも真ではない、一切は許されている」という価値相対主義的見解が、ここでは道徳的無規律状態を礼賛する言葉として理解されていることがわかるだろう。メンバーにとっては、自分の「我欲」をどれだけ発揮できるかが「超人」になる鍵だったのである。

このように、ニーチェ派の青年にとって「超人」は目指すべき理想像であった。しかし、ニーチェ派に属さない人々にとってはそうではなかった。むしろ年長世代にとって「超人」は憂慮すべき危険思想でしかなかった。「超人」をめぐる青年と年長世代の意識の差、とりわけ年長世代の「超人」に対する否定的評価は、当時の小説や劇にもしばしば描かれている。例えば、マイレーダー=オーバーマイヤーの小説では警察が「超人クラブ」を摘発し、ホルツ³⁷の喜劇『社会貴族主義者たち』(1896)³⁸では若者の「超人の歌」を50代の詩人が批判し³⁹、エルンスト⁴⁰の喜劇『今日の青年』(1899)⁴¹では母親が「超人」に憧れる息子の将来を心配しているといった具合である⁴²。

われわれにとって興味深いのは、小説に描かれた青年たちが実在していたということである。続いては、1890年代ドイツの現実世界に目を向け、実際のニーチェブームを「現象」と「行為」の両面から分析する。

3. ニーチェブームの分析

(1) 社会現象としてのニーチェブーム

ニーチェブームを「現象」として捉えるとき、どのような特徴が見出されるだろうか。第一に指摘できるのは、現象そのものとしての特徴、すなわち形式的側面についてである。ニーチェブームは当時、次のように描写されている。

「ニーチェムード (Das Nietzsche-Fruidum) は、彼ら(※引用者注：ニーチェ派)の判断を麻痺させ、感覚を朦朧とさせる。ニーチェムードは一種の流行病 (Modekrankheit) を発生させ、まさに危険な伝染病、すなわち精神のインフルエンザ (Geistesinfluenza) と化している。」⁴³

これ以外にも、ニーチェ思想の影響作用が例えば「催眠術」に譬えられたり⁴⁴、ニーチェ思想そのものが「純度の高いアヘン」や「精神安定剤」などと特徴づけられることもあつ

た⁴⁵。

伝染病やインフルエンザといった比喩は、ニーチェブームという流行現象の特性、すなわちニーチェ思想がもつ伝播性や感染力の強さを表現したものであり、また催眠術や精神安定剤などの譬えは、ニーチェ派の青年に見られる麻痺作用や中毒症状、常習性といった特徴を言い当てている。いずれの言葉も、ニーチェブームという現象の波及力、ニーチェ思想の影響力の強さを表現したものと言えるだろう。

第二に指摘できるのは、ニーチェブームが青年の道徳的頹廢現象として憂慮されていたという点、いわばブームの内容的側面、社会現象としての特徴である。

1890年代ニーチェブームのマイナスイメージは、先に触れた伝染病やインフルエンザといった比喩からもうかがえるが、ニーチェブーム＝憂慮すべき社会現象という認識は他にも数多く示されていた。例えば、雑誌『自由舞台』に掲載された1892年の論文「ニーチェと社会主義」には、当時の青年の様子が次のように描写されている。

「彼(※引用者注：ニーチェ)から啓示を受けたばかりの生意気な『貴族』以上の笑い種はない。彼らは不潔なシャツの襟を立て、無精ヒゲを生やした面構えで、ライプツィヒ通りを超人気取りで徘徊している。無暗に叫び声を上げ、道化師のごとくふるまう貴族もいる。」⁴⁶

端的に言うなら、ここに描かれているのは、道徳的に頹廢した大都市の青年の姿である。注目すべきは、自称「貴族」の彼らが「ニーチェ派」だったということであろう。「善悪の彼岸」というキャッチフレーズの人気、「何ものも真ではない、一切は許されている」といった無規律なスローガンの支持、我欲の徹底的な充足を目指す「超人」への憧憬、「貴族主義的・無政府主義的な個人主義」⁴⁷の蔓延。これらは、小説の世界に限られたことではなく、現実世界に起きた事実だったのである。

「ニーチェが呪文を語り終えると、突然ドイツでは誰もが超人になった。(…略…)人々は借金を作り、少女を誘惑し、泥酔した。どれもこれもツァラトウストラの名誉のためになされた行為だった。」⁴⁸

1890年代のドイツにおいて圧倒的な浸透力と波及力を示したニーチェブームは、ニーチェ派と呼ばれる青年たちの道徳的頹廢現象であり、「超人」思想はその象徴だったのである。

(2) 受容行為としてのニーチェブーム

ニーチェブームを分析する際のもうひとつの視点は、「行為」としての側面、すなわちニーチェブームを社会現象として俯瞰的に眺めるのではなく、現象の内側に目を向け、青年におけるニーチェ受容の形態に着目するものである。

例えば、詩人ハルトレーベン⁴⁹の1890年の日記には、ニーチェブームの一端をうかがわせる次のような記述がある。

「昨日『三皇帝』で『人間クラブ(Menschenclub)』の集まりがあった。(…略…)もちろん話題はニーチェだった。いまニーチェが話題にならない場所がどこにあるというのだろうか！フォイステルは『ツァラトゥストラ』の『ねじ曲げ』や『恥知らずな先祖返り』には反対だと激しく抵抗していた。(…略…)僕が、ニーチェというのは何よりもまず美的に把握すること、すなわち楽しむことを(genossen)―まさに楽しむことを(eben genossen)！―彼自らが欲しているし、またそう読まれなければならない相手なのだよともう一度強調したら、仲間のハンスは僕に賛成してくれた。」⁵⁰

「超人クラブ」のようなニーチェ同好会が現実に存在したということも興味深いだが、ここで注目したいのは、当時の青年がニーチェを享樂的に受容していたという証言である。「ニーチェ派」を名乗るほどその思想に魅力を感じているのであれば、例えばニーチェの全著作を熟読するとか、あるいは諸概念の意味を吟味したり、思想の独自性や意義を検討するなど、もう少しニーチェ思想と真剣に向き合う姿勢が見られてもよいはずである。しかしニーチェ派の青年にはこうした沈潜的態度がほとんど認められない。彼らにとってニーチェは、「神は死んだ」、「善悪の彼岸」、「超人」、「君主道徳と奴隷道徳」といった刺激的なキャッチフレーズを提供してくれるだけの存在、「享樂的崇拜(genießende Verehrung)」⁵¹か「美的享樂(ästhetische Genuß)」⁵²の対象でしかなかったのである。

1891年のある雑誌記事によれば、ニーチェ派の行動様式は、「プチ超人と化し、泥酔しながら屈理屈を言い、彼(※引用者注：ニーチェ)の文体を真似しては、彼のためのプロパガンダを繰り広げ、自分自身が物笑いの種になる」⁵³という具合に描写することができるという。この時期の青年におけるニーチェ受容は、「読書」よりもむしろ「娯楽」⁵⁴に近かったのである。また、ニーチェ派の享樂的・表面的な受容スタイルは、「阿諛追従の徒」や「猿真似芸人」といった彼らに向けられた蔑称からもうかがえる⁵⁵。彼らは「ろくに理解もしないまま適当にニーチェから哲学的なキャッチフレーズを寄せ集める」だけで、言葉の意味やニーチェの意図を考えることもなく、ただひたすら「コピーする(copiren)」「猿真似する(nachäffen)」「稀釈する(verdünnen)」「水増しする(verwässern)」といった行為を繰り返すのみであったという⁵⁶。1890年代のニーチェブームという熱狂的な流行現象も、このような表面的な受容形態によって成り立っていたのである⁵⁷。

小括

ある匿名論者は、1890年代のニーチェ派を「カフェハウスの超猿たち(Ueberaffen des Kaffeehauses)」⁵⁸と名づけている。道徳性を欠いた野蛮な行為を繰り返す彼らはまさに「猿以上に猿」であり、ニーチェ思想に対する熱意や理解もせいぜい「猿真似」のレベルにとどまっている。これが「超猿」という言葉に込められた意味であろう。ニーチェブームの実態をうかがわせる象徴的な表現である。

1890年代の青年におけるニーチェ受容について考えるとき、新教育運動の歴史記述を手掛かりにすると、健全なヴァンダーフォーゲル青年の姿がイメージされやすいということは、すでに述べたとおりである。山名淳の『ドイツ田園教育舎研究』⁵⁹における「大都市／田園」図式に準拠するなら、1890年代の青年におけるニーチェ受容はこれまでもっぱら「田園的なもの」と考えられてきたのである。しかし、以上に見たとおり、この時期の青年におけるニーチェ受容は、決して青年運動の枠内にとどまるものではなかった。1890年代のニーチェブームは青年運動とは一線を画す一大ムーブメントとして展開され、実際はむしろ「病や道徳的頹廢などの否定的イメージ」⁶⁰の集成、すなわち「田園」の対極に位置する「大都市的なもの」⁶¹でしかなかったのである。

ただ、以上のような理由から、この現象の資料的価値までもが損なわれるわけではない。たしかにこのブームは、受容形態としては「キャッチフレーズのつまみ食い」や「猿真似」でしかなかったし、社会現象としては「憂うべき青年問題」、すなわち過激な後期思想に熱狂した青年集団「ニーチェ派」による道徳的頹廢行動でしかなかった。しかし、それゆえにこそこの現象は、年長世代に属する親や教師、知識人などにとって、ニーチェ思想に対する態度決定を迫る直接的な契機ともなった。

「ニーチェは文学的ダイナマイトである。彼は精神の爆弾―彼のアフォリズムのほとんどが爆弾のようなものだが―を製造する。幸運にもまだこの爆弾による実害はないが、われわれの文化全体、あらゆる宗教的・慣習的・政治的な理想を粉々に爆破する力がこの爆弾にはある。」⁶²

例えばベルン大学の哲学教授 L.シュタインは、自著『フリードリヒ・ニーチェの世界観とその危険性』(1893)のなかでこのように危機感を募らせ、「危険が迫っているから防壁を築け！」⁶³と警告を発している。1890年代青年におけるニーチェブームは、後のニーチェ受容(あるいはニーチェ批判)を刺激するという重要な機能を果たしたのである。

第3節 年長世代の反応―ニーチェ派／反ニーチェ派の対立構図

大都市の青年を中心に巻き起こったニーチェ思想の大流行。ニーチェ派と呼ばれる青年を魅了したニーチェ思想に対して、ニーチェ派以外の同時代人、とりわけ青年世代にしばしば対置される年長世代はどのような反応を示したのだろうか。

じつのところ、年長世代の反応はきわめて冷たいものであった。先取りの言うならば、彼らはニーチェ思想に対してまったく理解を示そうとせず、真っ向から容赦のない批判を浴びせたのである。その徹底した批判的姿勢は、彼らが出版した『反ニーチェ (Anti-Nietzsche)』や『反ツァラトウストラ (Anti-Zarathustra)』という著書のタイトルに如実に示されていると言えよう。本節では、こうした反駁書の内容を確認し、反ニーチェ派の代表

格であった年長世代がニーチェ思想をどのように批判していたのかを明らかにする。

1. ニーチェブームに対する危機意識—反駁書の成立経緯と概要

『反ニーチェ』および『反ツァラトストラ』という反駁書の内容分析に入る前に、それぞれの著者の簡単なプロフィールを確認しておきたい。

『反ニーチェ』の著者はデュボク (Julius Duboc, 1829-1903) という人物であった。デュボクは複数の大学で哲学を学び、学位取得後はジャーナリストや新聞社の責任編集者、著述家として幅広く活動した。1875年の著作『神なき生』は敬愛するフォイエルバッハに捧げられた。近年は、ナトルプに対する書評が注目を集めている¹。1896年には『現実の彼岸』²を出版、その抜刷増補版として公刊されたのが1897年の著作『反ニーチェ』³である。なお『反ニーチェ』出版時の年齢は68歳であった。

『反ツァラトストラ』の著者はヘンネ・アム・リューン (Otto Henne am Rhyn, 1828-1914) という人物であった。彼はベルンとジュネーブで哲学や歴史学を学んだ後、1859年から1872年まで教職に就き、1885年から1912年までは国立文書館員の職にあった。その他にも、1872年から79年まではライプツィヒなどで新聞編集者、1879年から85年までは「新チューリヒ新聞」の編集に携わっている。代表的な著作には、『スイス民族の歴史および古代から現代までの文化』(全3巻:1865-66年)、『ドイツ民族の文化史』(全2巻:1886年)などがある。1899年には著作『反ツァラトストラ』⁴、論文「フリードリヒ・ニーチェの理念の実現可能性を問う」⁵を発表した。なお『反ツァラトストラ』出版時の年齢は71歳であった。

このように、デュボクもヘンネ・アム・リューンも、さまざまな経歴を持つ老齢のジャーナリストであった。年長世代に属する人々にとってニーチェブームが憂慮すべき社会現象と認識されていたことはすでに述べたとおりであるが、ジャーナリズム界の大御所的存在であったこの両者はニーチェブームに対してどのような反応を示したのだろうか。

例えばデュボクは、ニーチェブームを「伝染病毒が蔓延した空気」⁶に譬え、病的症状とその波及力を問題視した。同様にヘンネ・アム・リューンも、無神論を唱えるニーチェの『ツァラトストラ』が着実に発行部数を伸ばしている現状を憂慮している。

「彼(※引用者注:ニーチェ)の『ツァラトストラ』は版を重ねてこのたび第9版が出版された。ということは、少なくとも9,000冊が売れたわけである。購入した全ての人がこの本を完読したとは思えないが、それでも例の『最新情報』(※引用者注:「神は死んだ」というフレーズを指す)が収められた冒頭部ぐらいは、確実に全員が目を通してはいるはずだ。貸出文庫やその他の図書館でこの本に触れた読者も計算に入れれば、10,000人を優に超える人々がこの作品の眩惑的な語り口によって無神論へと誘われた可能性がある」と推測しても構わないだろう。」⁷

年長世代を中心とする反ニーチェ派の意図は、「ニーチェのツァラトウストラによって催眠状態に引き込まれた人々」⁸、すなわちニーチェ派の青年たちを現実世界に連れ戻し、憂慮すべき社会現象であるニーチェブーム⁹を沈静化させることであった。

2. 批判される「超人」思想

「ニーチェもニーチェ派も、おそらく全員が一致団結してそう意図しているわけではないとしても、事実上はやはり野蛮状態への帰還を、武力権への、残酷さへの、奴隷制への帰還を目指している。それゆえ彼らは、まさしく無政府主義者と同様に反動的存在である。」¹⁰

ニーチェブームのこれ以上の拡大を防ぐために彼らが行った行動が『反ニーチェ』や『反ツァラトウストラ』という反駁書の出版であった。ニーチェ思想の大流行をくい止めるには何よりもニーチェ思想そのものの問題点を明るみに出すことが得策と考えたのである。

『反ニーチェ』においてデュボクが批判しているのは、『曙光』、『悦ばしき知識』、『ツァラトウストラ』、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜』、『偶像の黄昏』、『反キリスト』、すなわち80年代以降に執筆されたニーチェの後期著作全般である。また『反ツァラトウストラ』のヘンネ・アム・リューンも、『ツァラトウストラ』にとどまらず、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜』、『偶像の黄昏』も取りあげている。精神錯乱で責任能力を問えないとして『反キリスト』を批判対象から除外している点を除けば、ヘンネ・アム・リューンにおいてもニーチェの後期思想が主な批判のターゲットになっている。では、具体的に彼らはニーチェ思想の何をどのように批判したのだろうか。

例えば、ニーチェブームを「伝染病」に譬えたデュボクは、時代が罹患した伝染病に「超人の悪党貴族症」¹¹という病名を与えている。これはデュボクが「超人」をニーチェ思想の象徴と見なしていたことのあらわれであろう。デュボクはすでに『現実の彼岸』において、当時のドイツ人に見られる「現実感覚の欠如」¹²を痛烈に批判していたのだが、彼は、現実感覚を欠いた人間は「健全な理想モデル」よりもむしろ「歪んだ姿をした病的なモデル」¹³を好むものであるとしたうえで、「超人」思想がまさにこの「病的モデル」の典型であると指摘する¹⁴。ヘンネ・アム・リューンも、「ニーチェが神の代償として人類に提供しようとしたもの、すなわち、いわゆる超人は、幻影であり、単なる空想の産物にすぎない」¹⁵と述べ、「超人」に対する批判的姿勢を隠そうとしない。「超人」思想はまさに批判の標的となったのである。

そもそも「超人」思想は、ニーチェ自身によって明確に定義づけられた「概念」というよりもむしろ「モチーフ」に近いものであった。例えば、「私はあなた方に超人を教えよう一人間とは克服されなければならない或物である」¹⁶；「超人とは大地の意義である」¹⁷；「超人とは大海である」¹⁸；「超人とは、稲妻であり、狂気である」¹⁹。このように、「超

人」に関するツァラトウストラの発言はきわめて詩的かつ比喩的であり、この点が多様な解釈を許す原因となっていることも事実である。しかし、こうした諸特徴を持つ「超人」思想に対して、ヘンネ・アム・リューンは容赦なく批判を浴びせる。

「これら(※引用者注：「超人」をめぐる詩的表現)は、たしかに意味深長(tiefsinnig)のようではあるが、無意味(unsinnig)である。というのも、これらは何の意味も持たず、内容のない雄弁であり、思考の歯車が壊れてしまった者がペチャクチャ喋る気休めだからである。ニーチェ派のメンバーなら、これだけで超人概念の定義がわかったと言えるのだろうか？むろん、彼らはそう主張するだろう。とはいえ、各個人が確信を持っているわけではあるまい。なぜなら、彼らはそれを理解しているのではなく、ただ他人の言い種を真似て、才気に溢れている！とオウム返ししているにすぎないからだ。」²⁰

「超人」批判はさらに続く。『ツァラトウストラ』の序説には、古い価値が記された石板を破壊する「犯罪者」こそが新たな価値を創出する「創造者」であるといった内容の文章がある²¹。これは事実である。だが、「この犯罪者こそ創造者である」というニーチェの挑発的な表現は、ヘンネ・アム・リューンによって「創造者＝超人」というもうひとつの等式と組み合わせられ、「超人＝犯罪者」という批判的論理へと変貌する。彼に言わせれば、「残念ながらこの『犯罪者』という言葉が、ツァラトウストラの提示する『超人』概念に関する唯一の簡潔明瞭な説明なのである」²²。

デュボクやヘンネ・アム・リューンは、当時ニーチェ派の青年たちが夢中になっていた「超人」思想の病的性格や無根拠性を指摘し、ニーチェ思想に対して注意するよう同時代人に向けて警鐘を鳴らしたのである。

3. 喧噪の時代

デュボクやヘンネ・アム・リューンが批判したのは「超人」思想だけではない。例えばデュボクは、キリスト教道徳批判の文脈においてニーチェが用いた挑発的な造語「君主道徳と奴隷道徳」を次のように批判した。

「よく考えてみれば、『君主道徳(Herrenmoral)』など全くの不条理である。というのも、もし『君主』が怠け者(Lotterbuben)になったら、君主道徳ではなく怠け者道徳(Lotterbubemoral)が重要になるからだ。」²³

またヘンネ・アム・リューンは、『新約聖書』のパロディでもある『ツァラトウストラ』そのものを徹底的に批判している。

「新約聖書の福音書においては、最初から最後まで荘厳かつ崇高な言葉が使用されているが、それに対してニーチェの『ツァラトウストラ』には、下らない言動、神の冒瀆、粗暴さ、あいまいさばかりが目立ち、虚偽、間違った主張、歴史的事実の

歪曲、無意味な発言が充満している。」²⁴

このような批判の末に彼らが出した結論はそれぞれ以下の通りである。

まずデュボクが出した結論は、ニーチェの代わりにルターを推奨するというものであった。彼は、ニーチェが家系的にポーランド系貴族の末裔²⁵であることなどを理由に挙げながら、「盲目的にニーチェを賛嘆するドイツ人」に対して「生粋のドイツ人である偉大な人物ルター」の意義を強調した²⁶。デュボクに言わせれば、「真の国民的英雄」、ドイツ人にとっての「導きの星」として相応しいのはルターであって、一瞬のうちに過ぎ去る「ニーチェのごとき流星」ではないのである²⁷。

一方、ヘンネ・アム・リューンは、ニーチェ思想の根本的欠陥を結論部において指摘した。彼によれば、ありのままの事実を客観的に検討し、仮説を論理的に証明するからこそ、自然科学や歴史学などあらゆる学問は自らの理論の正当性を主張できる。ところが、ニーチェのテキストにはこうした学問的な手続きがほとんど欠落している。例えば「何ものも真ではない、一切は許されている (Nichts ist wahr, alles ist erlaubt)」という言葉などは、まさにニーチェ思想の根本的欠陥の象徴²⁸にほかならないという。「果たして彼(※引用者注：ニーチェ)は自分で何か証明したのだろうか？全然ではないか！」²⁹。こうしてヘンネ・アム・リューンは、ニーチェ派が「究極の真理」として崇める「何ものも真ではない、一切は許されている」にかわる新たな標語を掲げるのである。「研究されたものが真である (Was erforscht wurde, ist wahr)、公共の利益に資するものは許されている (was dem Gemeinwohle dient, ist erlaubt)」³⁰。

すでに確認したように、年長世代を中心とする反ニーチェ派の意図は、ニーチェ思想の問題点を浮き彫りにすることでニーチェブームという憂慮すべき社会現象を沈静化させることであった。では、デュボクやヘンネ・アム・リューンら年長世代が行ったニーチェ批判は、実際どれほどの効果を上げたのだろうか。

じつは当時の文献を見る限り、年長世代のニーチェ批判が目覚ましい成果をあげたと推測することは難しく、またデュボクやヘンネ・アム・リューンの反駁書によってニーチェ派の青年が「改宗」したという例も確認できない。それどころか、年長世代の攻勢によって、むしろニーチェ派と反ニーチェ派の対立構図はより鮮明なものになったと言えよう。それは、「無規律の熱狂」対「無規律の憎悪」³¹、「偏狭な敵対者」対「理解しがたい信奉者」³²の二項対立を強調する同時代人の描写からもうかがえる³³。結局のところ、ニーチェ派と反ニーチェ派が自陣の主張を繰り返すだけの噛み合わない議論は平行線を辿り、互いの優劣も決しないまま³⁴、ニーチェブームをめぐる混乱や騒々しきだけが顕在化することになる。ニーチェ受容史上、1890年代は、まさに「喧噪の時代」だったのである。

* * *

では、ニーチェ派および反ニーチェ派が繰り返すこのような喧噪のなかで、いわゆるアカデミズムに属する論者たちはどのような反応を示したのだろうか。第2章においては、この点について、テンニースやシュタイナーなど著名な学者の事例を挙げながら詳しく考

察することになるが、それは、「教育学」もまた当時のドイツアカデミズムを構成する一領域だったからである。

注

◆第1節

- * 1) ニーチェがジルス・マリア村のシルヴァプラナ湖を散策中に「永劫回帰」のインスピレーションを受けたのは1881年8月のことである。
- * 2) ボン大学の古典文献学教授 H.ウーゼナーが学生に向かって「このようなものを書いた者は学問的に死んでいる」と『悲劇の誕生』を酷評したことを伝え聞いてニーチェはショックを受けたという。
- * 3) ある調査によれば、ドイツ語で発表されたニーチェ論の数は、1870年代の10年間で15本、1880年代は11本なのに対して、1890年代は146本、1900年～1909年の10年間には404本ものニーチェ論が発表されている。1889年以前の低調ぶりが際立つ結果である。Vgl. Reichelt, H.W./Schlechta, K. (Hrsg.): *International Nietzsche Bibliography*. University of North Carolina 1968.
- * 4) 西尾幹二によれば、1888年に自費出版された『善悪の彼岸』には10編の書評が寄せられたという。西尾幹二「同時代人の批評」『ニーチェ全集(第Ⅱ期)』付録月報14号、1983年、3-8頁を参照。
- * 5) ニーチェの著作からの引用は以下の全集による。*Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, 15Bde. (einschl. Kommentar u. Konkordanz), Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (de Gruyter/ dtv) München, Berlin, New York 1980. (※以下KSAと略記)

◆第2節

- * 1) ノールが青年運動に教育的な意味を見出していた事実を想起したい。「青年運動は、現代教育のもっとも注目すべき、かつもっとも根本的な現象である。青年運動が教育学的に見てそれほど刺激的であるのは、それがあらゆる教育学の根底にある関係、すなわち世代間の関係をラディカルに変革するからだけではなく、その運動がそれ自身教育的であるということに自覚しているからであり、教育運動のもっとも重要な指導者を輩出し、その精神をすべての教育活動に普及させたからである。」(Nohl 1957, S.12)
- * 2) Deesz, S.9.
- * 3) Vgl. Ziegler, Th.: *Friedrich Nietzsche*. Berlin 1900, S.7. Weber, E. (1907-b): *Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt- und Lebensanschauung*. Leipzig 1907, S.1. Hillebrand 1978, S.1. 三島憲一も1890年代のニーチェブームが「突然」起きたと説明している。「ドイツ語圏の受容の歴史を考えてみますと、一八八九年に発狂したニーチェは、九二、三年頃から突然有名になりだします。驚くべきもので、アツという間に『ニーチェを読まねば人に非ず』という動きとなり、やがて一九〇〇年頃から始まるドイツ青年運動の中で、ブルジョワジーの子弟がニーチェを読み出し、第一次世界大戦までその傾向は続きます。」鶴飼哲・長原豊・三島憲一「(座談会)ニーチェ—その魅力と魔力—」『思想』第919号、2000年12月、10頁。

* 4) 西尾幹二はニーチェブームの発生原因を複合的に考えている。「ニーチェの著作をほとんど一顧だにしなかった世間が、一八九〇年を境にして突然の関心の高まりを示したことには、ほかに外的な原因も考えられる。当時ドイツにロマンティックなものを求める新しい精神的関心が高まり、自然科学的、機械論的人生観に対する反撥も起っていた。そのうえ無神論の宣言は、そのことだけならハインリヒ・ハイネやブルーノ・パウアーによってかなり徹底した形で提示されていたので、当時のひとびとに解りにくいということはもうなかった。白熱的文体、簡潔なアフォリズム、矛盾とパラドックス、純粋な主張の至高性は、青年の心を惹きつけるものをもっていたろうし、ツァラトゥストラの象徴性と神秘性はサンボリズムに慣れはじめた世代の詩人たちのこころをもとらえはじめた。自然主義への反撥として起った当時の文学は、新ローマン派などともよばれたが、やがてニーチェはそれへのもっとも大きな導きの星となっていくのである。加えて噂される謎めいた人格と悲しい結末は、ひとびとの関心をかき立てずにはおこななかったろう。」(西尾 1993、前掲書、21頁)

* 5) Lillienron: Brief an M.G.Conrad vom 15.4.1889. zit.n. Hillebrand1978, S.64.

* 6) Servaes,F.: Nietzsche und der Sozialismus. In: Freie Bühne für den Entwicklungskampf der Zeit 1892, S.85-88, S.202-211., S.86. Steiner,R.: Nietzscheanismus. In: Litterarischer Merkur 12 Nr.14. (2, April, 1892), S.105-108., S.105.

* 7) Stein,L.: Friedrich Nietzsche's Weltanschauung und ihre Gefahren. Ein kritischer Essay. Berlin 1893, S.III. Bölsche,W.: Die Gefahren Nietzscheschen Philosophie. In: Freie Bühne 4 1893 Reprint 1970, S.719-722., S.719-720. Tönnies,F.: Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Leipzig 1897, S.V. Hecht,M.: Friedrich Nietzsches Einfluß auf die Frauen. In: Die Frau 6 1899, S.486-491., S.487. Henne am Rhyn, O.(1899-b): Anti-Zarathustra. Gedanken über Friedrich Nietzsches Hauptwerke. Altenburg 1899, S.108. Ziegler1900, S.8.

* 8) Stein1893, S.17. Ziegler1900, S.7.

* 9) Bölsche,W.: Das Geheimnis Friedrich Nietzsches. In: Neue Deutsche Rundschau 5 (Freie Bühne) 1894 Reprint 1970, S.1026-1033., S.1027.

* 10) Hecht, S.486.

* 11) Henne am Rhyn1899-b, S.108.

* 12) Stein1893, S.98. Ziegler,Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts.(1.Aufl.) Berlin 1899, S.602. Ziegler1900, S.202.

* 13) Servaes,S.86. Stein1893,S.2. Steiner1892,S.105. Henne am Rhyn1899-b, S.III-IV. Reuschert,W.: Friedrich Wilhelm Nietzsche. In: Pädagogische Studien 22 1901, S.278-287, S.338-350, S.391-405., S.396.

* 14) Stein1893, S.2.

* 15) Stein1893, S.2. Henne am Rhyn, O.(1899-a): Zur Frage der Ausführbarkeit der Ideen Friedrich Nietzsches. In: Das neue Jahrhundert. Februar 1899, S.652-659., S.659.

* 16) Nordau,M.: Entartung. 2Bde. Berlin 1893 (Bd.2.), S.370-371.

* 17) Henne am Rhyn1899-b, S.64. Reuschert, S.393.

* 18) Hecht, S.486.

* 19) Grimm,E.: Das Problem Friedrich Nietzsches. Berlin 1899, S.3-4. Ziegler1899, S.604.

* 20) Ziegler1900, S.202.

- * 21) Tönnies, F.: Nietzsche-Narren. In: „Ethische Cultur“ und ihre Geleite. Berlin 1893, S.5-29., S.5.
- * 22) Stein 1893, S.9.
- * 23) Ibid., S.31.
- * 24) Steiner 1892, S.107.
- * 25) Mayreder-Obermayer, R.: Der Klub der Übermenschen. In: Neue Deutsche Rundschau 6 1895, S.1212-1228.
- * 26) Mayreder-Obermayer, S.1212-1213. なお「超人クラブ」のほかには、例えば「フリードリヒ・ニーチェ連合 (Friedrich Nietzsche-Verein)」や「自由精神クラブ (Klub der freien Geister)」などの名称が候補に挙げられている。
- * 27) Mayreder-Obermayer, S.1213. u.a.
- * 28) Ibid., S.1214.
- * 29) Ibid., S.1215.
- * 30) Ibid., S.1220.
- * 31) Ibid., S.1219.
- * 32) Ibid., S.1220ff.
- * 33) 「超人クラブ (超人倶楽部)」という同好会名は、1927年 (昭和2年) に発表された芥川龍之介の小説『河童』にも登場する。以下は『河童』の1シーン。1890年代のドイツにおけるニーチェブームを彷彿とさせる興味深い内容である。「トックの信ずる所によれば、芸術は何ものの支配をも受けない、芸術の為の芸術である、従って芸術家たるものは何よりも先に善悪を絶した超人でなければならぬと云うのです。尤もこれは必しもトック一匹の意見ではありません。トックの仲間の詩人たちは大抵同意見を持っているようです。現に僕はトックと一しょに度たび超人倶楽部へ遊びに行きました。超人倶楽部に集まって来るのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、画家、音楽家、彫刻家、芸術上の素人等です。しかしいずれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合っていました。のみならず時には得々と彼等の超人ぶりを示し合っていました。たとえば彫刻家などは大きい鬼羊歯の鉢植えの間に年の若い河童をつかまえながら、頻に男色を弄んでいました。又或雌の小説家などはテーブルの上に立ち上がったなり、アブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテーブルの下へ転げ落ちるが早いか、忽ち往生してしまいました。」芥川龍之介『河童』、新潮文庫、79-80頁。
- * 34) Mayreder-Obermayer, S.1213.
- * 35) KSA5, S.399.
- * 36) Mayreder-Obermayer, S.1213.
- * 37) ホルツ (Arno Holz, 1863-1929) の略歴を示しておけば、彼は東プロイセンのラストエンブルクに生まれ、やがてベルリンに移住。当地のギムナジウムに進学したが中退して新聞社に勤務することになった。1888年からヨハネス・シュラーフと共同生活をはじめ、小説『パパ・ハムレット』や戯曲『ゼーリケー家』を共作、ゾラの理論をさらに一歩進めた「徹底自然主義」の創始者と呼ばれるにいたった。喜劇『社会貴族主義者たち』(1896)は、政治家めいたプチブル文士たちの頹廢ぶりを描いた成功作。抒情詩でも伝統的形式から脱し、散文に近い独特の文体を確立したとされる。平井正編『ドイツの世紀末IV—ベルリン、世界都市への胎動—』国書刊行会、1986年、429頁の「人物小伝」を参照。

* 38) Holz, A.: Socialaristokraten. (1896) Das Werk von Arno Holz. Erste Ausgabe mit Einführungen von Dr. Hans W. Fischer, Bd.5, Berlin 1924, S.71. In: Emlich, W. u. Holz, A. (Hrsg.): Werke Bd.4. Neuwied, Berlin-Spandau 1962, S.5-93. zit.n. Hillebrand 1978, S.106. 杉谷恭一も指摘するように、ホルツの『社会貴族主義者たち』成立の背景には、明らかに「ニーチェ思想の爆発的流行」があった(『熊本大学教養部紀要』第19号、195-198頁)。なお、この作品に関しては翻訳版が出ている。嘉野隆太・久保田仁・栗崎了・杉谷恭一・田中雄次訳『社会貴族主義者たち(上)』(翻訳と解題)『熊本大学教養部紀要(外国語・外国文学編)』第19号、1984年、165-204頁。嘉野隆太・久保田仁・栗崎了・杉谷恭一・田中雄次訳『社会貴族主義者たち(下)』(翻訳)『熊本大学教養部紀要(外国語・外国文学編)』第20号、1985年、126-156頁。小島康男訳『社会貴族主義者たち』、平井正編『ドイツの世紀末IV—ベルリン、世界都市への胎動—』国書刊行会、1986年、338-366頁。

* 39) 以下は、原稿を持参した若者に向けて語られた50代詩人の台詞である。「(…略…)わたしははっきり言いますが、あなたのものは確かにすばらしい。いいかな、『蝶の歌』、こいつがまたいい題名だ。独創的だ。何でも好きなように言うがいいさ。ただ、『超人の歌』なんてのはどうもねえ……今じゃ、だれもかれも超人だ！あなた、ニーチェはお読みでしょうな！」(Holz, S.71. 小島訳、341頁)

* 40) エルンスト(Otto Ernst, 1862-1926)は、ハンブルクの民衆学校教師でありながら、劇作家や著述家としての活動も続けた多才な人物である。劇作としては、『今日の青年』のほかに、『教育者としてのフラクスマン』(1900)が有名。ニーチェとの関わりで言えば、彼には、ニーチェ思想が青年に悪影響を与えることを憂慮した『誤った予言者ニーチェ』(1914)という著作がある。この著作については、第5章において詳しく取り上げることにしている。

* 41) Ernst, O.: Jugend von heute. Leipzig 1899.

* 42) Ibid., S.41-44.

* 43) Hecht, S.486.

* 44) Stein 1893, S.9. Hecht, S.487.

* 45) Stein 1893, S.15.

* 46) Servaes, S.86.

* 47) Stein 1893, S.103.

* 48) Berg, L.: Der Übermensch in der modernen Litteratur. Ein Kapitel zur Geistesgeschichte des 19. Jahrhunderts. München 1897, S.216f. zit. n. Hillebrand 1978, S.13

* 49) 詩人で劇作家でもあったハルトレーベン(Otto Erich Hartleben, 1864-1905)は、ベルリンとライプツィヒで法学を学び、1890年以降は作家として独立。当初はベルリン、1901年からはミュンヘン、晩年にはイタリア北部に移り住んだ。教師とならび士官が芝居に登場するきっかけとなった悲劇『無礼講の日』(1900)が代表作。多方面のテーマで詩作活動に従事した。一時は『自由舞台』の編集主幹を務めた。平井正編『ドイツの世紀末IV—ベルリン、世界都市への胎動—』国書刊行会、1986年、431頁の「人物小伝」を参照。

* 50) Hartleben: Tagesbuch (1890) zit.n. Hillebrand 1978, S.68.

* 51) Stöcker, H.: Zur Nietzsche-Lektüre. In: Der Volkserzieher. Blatt für Familie, Schule und öffentliches Leben 2 Nr.45. 6. November 1898 u. Nr.46. 13. November 1898, Nr.45, S.2.

- * 52) Ibid., Nr.46, S.2.
- * 53) Grottewitz,C.: Der Kultus der Persönlichkeit. In: Freie Bühne 2 1891, S.233-236., S.233.
- * 54) Stein1893, S.98.
- * 55) Vgl. Ibid., S.96-97.
- * 56) Ibid., S.17-18.
- * 57) ヒレブランドは1890年代のドイツにおけるニーチェ受容の様相を次のように特徴づけている。「決して注意深く読まず、熱狂しやすく、心理学に『酔い心地になり』、定式化されたダイナミックな表現、逞しい諸概念(猛獣の本能、金髪の野獣、奴隷道徳・君主道徳、超人など)に興奮し、1870/71年の意味で戦争という言葉を読み(ニーチェの判断とは全く反対に)、そして誤解された非道徳主義によって性的無規律状態へと誘われていた。(…略…)人はニーチェを字義通りにとった。好み次第でニーチェの言葉を引用した。伝記的事実には一度も目を向けず、よりもよって自分の願望に合わせた解釈を投影させた。」(Hillebrand1978, S.9)
- * 58) J.: Ohne Titel. (Nachruf auf Friedrich Nietzsche) In: Kraus,K. (Hrsg.): Die Fackel 2 Nr.51. Ende, August 1900, S.19-22., S.21.
- * 59) 山名淳『ドイツ田園教育舎研究—「田園」型寄宿制学校の秩序形成—』風間書房、2000年。
- * 60) 同上書、42頁。
- * 61) 同上。
- * 62) Stein1893, S.9.
- * 63) Ibid., S.103.

◆第3節

- * 1) Vgl.Furrer,M.: Julius Duboc und Paul Natorp. Rezension und unveröffentliche Replik. In: Oelkers,J. u.a.(Hrsg.): Neukantianismus. Kulturtheorie, Pädagogik und Philosophie. Weinheim 1989, S.167-198.
- * 2) Duboc,J.: Jenseits vom Wirklichen. Eine Studie aus der Gegenwart. Dresden 1896.
- * 3) Duboc,J.: Anti-Nietzsche. Dresden 1897.
- * 4) Henne am Rhyn, O.(1899-b): Anti-Zarathustra. Gedanken über Friedrich Nietzsches Hauptwerke. Altenburg 1899.
- * 5) Henne am Rhyn, O.(1899-a): Zur Frage der Ausführbarkeit der Ideen Friedrich Nietzsches. In: Das neue Jahrhundert. Februar 1899, S.652-659.
- * 6) Duboc1897, S.20.
- * 7) Henne am Rhyn1899-b, S.10. 無神論者ニーチェに対してヘンネ・アム・リューンは次のように批判する。「神への信仰は死んでいないこと、それゆえ神を死んだと説明することは許されないこと、われわれとしてはこの点を改めて心に留めておこう。いくら影響力が絶大な著述家とはいえ、神そのものになることは不可能なのだ!このような神の冒瀆を必ずや制圧しよう!」(Ibid.)
- * 8) Henne am Rhyn1899-b, S.32.
- * 9) ヘンネ・アム・リューンはニーチェブームが本格化した時期を1895年頃と見ている。「1889年にニーチェの精神は死んだ。1892年には彼に関する書籍が出版されはじめたが、注目度はいまひとつであっ

た。それは1893年の時点でキュルシュナー文学事典がまだ彼について何も記載していないほどである。1895年ようやく喧嘩が始まり、彼の名前が頻繁に取り沙汰されるようになった。以後3年間で無数の著作が世に問われることになった。」(Henne am Rhyn1899-a, S.652.)

- * 10) Henne am Rhyn1899-b, S.148-149.
- * 11) Duboc1897, S.20.
- * 12) Duboc1896, S.VI.
- * 13) Ibid.
- * 14) Ibid., S.110-111.
- * 15) Henne am Rhyn1899-b, S.11.
- * 16) KSA4, S.14.
- * 17) Ibid.
- * 18) Ibid., S.15.
- * 19) Ibid., S.16.
- * 20) Henne am Rhyn1899-b, S.14-15.
- * 21) KSA4, S.26.
- * 22) Henne am Rhyn1899-b, S.18.
- * 23) Duboc1897, S.46.
- * 24) Henne am Rhyn1899-b, S.6-7.
- * 25) ニーチェ家には、先祖がポーランドの貴族ニエツキー(Niétzky)伯爵であるとの言い伝えがあり、ニーチェ自身もこの説を吹聴していたのは事実である。しかし、実際のところは、父方母方8代前まで遡及した実証的調査による限り、富裕市民や知識人の家系ではあっても貴族の家系ではなかったと推察されている。(清水本裕「ニーチェの家系」『ニーチェ事典』450-452頁を参照)
- * 26) Duboc1897, S.46.
- * 27) Ibid., S.47.
- * 28) 彼はニーチェのこの格言を「常軌を逸した結論」と見なし、「冷静沈着な学者」であれば決して到達し得ない境地であると批判する(Henne am Rhyn 1899-b, S.140)。
- * 29) Henne am Rhyn1899-b, S.140.
- * 30) Ibid.
- * 31) Servaes, S.86.
- * 32) Stöcker,H.: Der Wille zur Macht. In: Jugend Nr.18. 1903, S.306-308. , S.306.
- * 33) ヒレブランドも次のように指摘している。「初期の影響の特徴は、それが賛成および反対で(in seinem Pro und Contra)示される点にある。」(Hillebrand1978, S.XI)
- * 34) 反ニーチェ派によるニーチェ批判が決定力を欠いていたことも喧嘩の一要因だったと考えられる。例えばヘンネ・アム・リューンによる「超人」批判は次のようなものであった。「しかし超人とはいったい何なのか?ニーチェによれば、超人とは、大地の意義であり(?)、人間をその舌で舐めるべき稲妻であり(!)、狂気であって(たしかに!)、(…略…)」(Henne am Rhyn1899-a,S.653)括弧内(※下線部)の記号や

言葉はヘンネ・アム・リューンによる指摘であるが、いずれも挙げ足をとるようなレベルにとどまっており、到底「論証」と呼べるものではない。

第2章 1890年代アカデミズムが見た ニーチェ思想

第1節 若き社会学者テンニースの反応

本節では、若い世代に属する学者の代表としてテンニース (Ferdinand Tönnies, 1855-1936) に注目する。言うまでもなくテンニースは現代社会学の源流をなすドイツの著名な社会学者であるが、1887年に代表作『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を發表しているという意味においても紛れもなく1890年代のドイツアカデミズムを代表する学者のひとりである。また彼は17歳の時にニーチェの著作に出会い、本格的に学者デビューを果たした後の1890年代に2編のニーチェ論を發表している点でも非常に興味深い考察対象である。にもかかわらず、ニーチェに関するテンニースの発言はこれまで、テンニース研究の分野においてもニーチェ受容史研究の分野においても、決して十分に検討されてきたとは言えない状況にある¹⁾。

以上の問題関心から、本節では、テンニースが残したニーチェに関する発言をまとめ、ニーチェ思想に対する1890年代アカデミズムの反応の一類型を明らかにする。具体的にはまず、パウルゼンとの往復書簡集および『自伝』を手掛かりにしながら、若きテンニースとニーチェ思想との関わりについて考察する。次に、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』執筆前後のテンニースの動向を確認する。続いて1890年代に出版されたテンニースの2編のニーチェ論、1893年論文「ニーチェばか (Nietzsche-Narren)」²⁾と1897年著作『ニーチェ崇拜 (Der Nietzsche-Kultus)』³⁾を取り上げ、テンニースが見せるニーチェ理解の特質や1890年代アカデミズムが置かれた状況について考察する。

1. 若きテンニースとニーチェ思想—1873-1883年

(1) ニーチェ初期思想との邂逅

テンニースは1872/73年冬学期、17歳のときに、ニーチェの『悲劇の誕生』と出会う。そのときの思い出を彼は次のように回顧している。

「(…略…)ショーウィンドウに陳列されていた一冊の本が私の目にとまった。その

表書きには『音楽の精神からの悲劇の誕生』フリードリヒ・ニーチェ著とあり、それが私の心を強く捕らえた一当時いったい誰がこの存在に注意を払っただろう？(…略…)そのニーチェの本の購入を即決することは学生の私にはさすがにできなかった。だが1873年の夏休みにフーズムの学校図書館でそれを見つけ、ウキウキしながら、いやそれどころかほとんど啓示を受けたような感慨をもって読んだのだった。」⁴

ニーチェの処女作『悲劇の誕生』は1872年1月2日フリッツ書局から1,000部発行された。ちょうどテンニースの自伝が発表された1922年までに『ツァラトゥストラ』が累計発行部数300,000部以上を記録していた事実を想起すれば⁵、テンニースの申告どおりニーチェは当時はまだ無名の存在であったと言えるだろう。そのような時代にテンニースはニーチェの著作と感動的な出会いを経験したのである。

『悲劇の誕生』との出会いから1年後、テンニースは1873/74年冬学期をライプツィヒで過ごし、1874年の夏学期にはボンへ移る。この頃のテンニースは精力的に大学の講義に出席し、学術レポートの作成にも力を注いでいる。いわば学者としての自覚が芽生えつつあった時期であるが、当時をテンニースは次のように振り返る。

「ライプツィヒでもボンでも哲学講義は受講しなかった。だが両方の地で私は大学図書館の閲覧室にこもり、新聞だけではなく多くの著作を読んだ。ライプツィヒで私はニーチェの反時代的考察の第1論文『ダーフィット・シュトラウス、信仰者および文筆家』を見つけた。私もよく知っていた『古い信仰と新しい信仰』に関するものであった。私が聞き知っていた最初のシュトラウス批判というわけではなかったが、これほど強い感銘を受けたのははじめてだった。ある日、私は本屋で第2の『反時代』を見かけた。私はさっそくそれを買って求め、深い感動を味わった。それ以来私はニーチェの作品ならどれでも出版と同時に手に入れた。たとえ徐々に熱が冷めていってもそうだった。」⁶

「強い感銘を受けた」や「深い感動を味わった」など、およそ自伝で描かれる青春時代の思い出は一般に誇張されたり美化されたりするものかもしれないが、ありうべき脚色分を差し引いたとしても、青年テンニースがニーチェ思想に強い関心を抱いていたことは間違いないと思われる。テンニースは歴史上もっとも早い時期に属するニーチェ読者だったのである。

(2) 熱狂的ニーチェファンとしてのテンニース

1875/76年冬学期、「自分が何をしたいのかも全くわからないまま」ベルリンに向かったテンニースは、この地である人物と出会うことになる。長年にわたって手紙の遣り取りをし、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を捧げることになる相手⁷—テンニースより9歳年上の教育学者パウルゼン(Friedrich Paulsen, 1846-1908)である。

「パウルゼンの私への影響力は最初から絶大なものであった。(…略…)哲学史に関する観点、自然科学的・歴史的な認識、それらに勝るとも劣らない彼の—純粹に真理を追究する感覚と社会的な心情で満たされた—一人格 (Persönlichkeit) は、私の中に深く実り豊かな影響をとどめた。」⁸

自伝にこう記すほどテンニースにとってパウルゼンは重要な存在だったわけだが⁹、そのパウルゼンに宛てた手紙の中でテンニースはしばしばニーチェを話題に挙げている。手紙の文面からは、当時テンニースがいかにニーチェに夢中になっていたかが伝わってくる。例えば 1880 年に投函されたパウルゼン宛の手紙には次のようにある。

「(どこかの無法者たちが噂しているようですから言っておきますが)ニーチェは断じて精神病なんかではありません。彼はナウムブルクで母親と一緒に生活しています。ただ頭痛にはかなり苦しめられているようで、もうこれ以上長く生きられないと思うほどその症状は重いようです。」¹⁰

ニーチェが病弱でしばしば偏頭痛や嘔吐に苦しんでいたことは、今では常識の域に属する伝記的事実であるが、テンニースはニーチェの病状をじつに詳細に把握していると言える。実際この手紙が差し出された前年(1879年)、ニーチェは極度の体調不良に悩まされ 118 日間も病床に伏していたとの記録がある¹¹。情報の正確さもさることながら、安易な噂話に惑わされることなくテンニースがニーチェの病状を本気で心配していた事実は注目に値しよう¹²。テンニースの関心はもはや著作のみならずニーチェ本人へと向かっていたのである。

ちょうどその頃、ニーチェは体調不良を理由に休職中だったパーゼル大学教授職を辞し、気候のよい土地を転々としながら『ツァラトストラ』の本格的な執筆に取りかかる。ニーチェと友人パウル・レーとルー・ザロメ婦人の奇妙な三角関係がはじまったのは 1882 年 4 月頃のことである。ニーチェは何度かザロメに求婚するが拒絶され、レーとザロメ／ニーチェの対立図式が次第に鮮明になる。1882 年の 12 月にニーチェは自殺を考えるほど精神的に迫いつめられ麻酔薬を濫用したという報告もある¹³。その後ニーチェは 1883 年 6 月に『ツァラトストラ』第 1 部を公刊、同月『ツァラトストラ』第 2 部の執筆のために気候のよいスイス地方のジルス・マリアへと向かった。

ここでニーチェの失恋体験について触れたのには理由がある。じつはニーチェが自殺を考えた 1882 年 12 月にベルリンでレーとザロメを囲むサークルが立ち上がり、テンニースもそのサークルに顔を見せていたという記録が残っているのである¹⁴。ただ当時レーおよびザロメとニーチェとの関係に亀裂が生じていたことをまだ知らなかったテンニースは、あるときスイス地方に滞在していたレーとザロメの誘いを受けて、いよいよニーチェと面識を得ることができるのではないかと期待する。そのときの彼の興奮ぶりはパウルゼンに宛てた手紙(1883 年 5 月 31 日付)の文面によくあらわれている。

「おそらく 7 月になったら私はベルリンを経由して、その足でバイロイトまでパルジファルを観劇に行く予定です。ひょっとしたらベルリンではあなたのもとでお世

話になるかもしれません。その後はエンガディーンに足を伸ばすことになりそうです。というのはレーとザロメ嬢がエンガディーンへ来るよう親切かつ猛烈に私を説得するからです。おそらくそこではニーチェとも知り合いになれるでしょう。あなたは山がお好きなのだから8月にでもエンガディーンに来てください。そしたらランガートの山頂目指して登山できるじゃないですか。」¹⁵

結局テンニースはニーチェと個人的に面識を持つにはいたらなかった。スイスには出掛けたが、ニーチェとレー・ザロメの関係が悪化していたためにニーチェを紹介してもらえなかったのである。それでもテンニースはニーチェが訪れていたジルス・マリアに単独で向かい、しばらくその地に滞在しながら、散策中のニーチェの姿を目撃したり、ときにはニーチェからの「刺すような視線」¹⁶を感じたりしたという¹⁷。青春時代のテンニースは紛れもなく熱狂的なニーチェファンだったのである¹⁸。

2. 後期思想に対する批判—1893年以降

これまでパウルゼンとの往復書簡および1922年執筆の自伝を手掛かりに若きテンニースとニーチェとの関わりについて確認してきたわけだが、以上の考察から、1872/73年の冬学期以来テンニースがニーチェに高い関心を示していたことは明らかであろう。ところがニーチェを追ってジルス・マリアに向かった1883年以降、テンニースは一少なくとも往復書簡や自伝を見る限りニーチェに関する発言を控えるようになる。このことがニーチェ思想に対する関心の低下を意味するかどうかは別にして、結局テンニースが再びニーチェの名を挙げるのは1893年の小論「ニーチェばか」においてである。テンニースがなぜ1883年を境にしばらくニーチェについて発言しなくなったのか。その直接的な原因についてはテンニース自身が語っていないため特定できないが、例えばニーチェと面識を持つ機会を逸したこと、テンニース自身の問題意識とニーチェ思想とのあいだにズレが生じたこと、あるいは学者テンニースの出世作となる『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の執筆に専念したことなどの要因が複合的に作用したのではないかと推測されよう。いずれにせよテンニースは1893年に最初のニーチェ論を発表するまでの10年間、ニーチェに関して「沈黙」を守るのである。

ではテンニースが沈黙しているあいだニーチェの周辺では何が起こったのだろうか。1883年以降といえば、『ツアラトゥストラ』をはじめ『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』、『反キリスト』などの話題作が生まれた時期であるが、第1章で述べたように、当時のニーチェは必ずしも同時代的な関心を集めていたわけではなかった。ところが皮肉なことに、ニーチェ発狂後、ちょうど1890年代に入る頃から、にわかにはニーチェブームの徴候が見え始める。このようなニーチェブームが青年のあいだに蔓延しはじめていた1893年、テンニースは10年もの「沈黙」を破ってニーチェについて再び発言するのである。

テンニースは1893年論文「ニーチェばか」の冒頭で「じつに不愉快な劇の目撃者となった」と述べ、その「劇」の内容を次のように描写する。

「その不愉快な劇というのはこうだ。つまり、主人公ニーチェはかつて精緻で機知に富んだ何冊かの本を著述した—彼はまだ無名(unbekannt)であった。彼は半ば常軌を逸した数冊の本を執筆した—そして有名(berühmt)になった。」¹⁹

かつて「無名」だったニーチェがやがて「有名」になるというのがテンニースの目撃した「劇」のあらすじであるが、興味深いのは、無名時代のニーチェの著作が高く評価されているのに対して、その後のニーチェの著作が「半ば常軌を逸している」と著しく否定的に語られていることである。かつてあれだけ読書に没頭し、本人と面識を持ちたいとまで願っていた相手とは思えないほど、ここでのニーチェ評は厳しい。「沈黙の10年間」を境にニーチェに対するテンニースの評価は完全に「逆転」したとも言えよう。「後期のニーチェは初期の自分をことごとく否定した。(…略…)彼の『脱皮』は正常な発達段階の軌道を示さなかった。」²⁰—このことがテンニースには残念だったのである。ではテンニースはニーチェの後期思想をどのように論じているのだろうか。例えばテンニースは『ツァラトストラ』を次のように批判する。

「ツァラトストラとしてのニーチェにとって、ありきたりの尺度はどうでもよいことなのだ。それどころか彼は、不道德とはいかないまでも道德性に欠ける超人の振舞いを多めに見るどころか、唯一価値の高いものとして描き出そうとするのである。」²¹

たしかに「超人」はニーチェ自身によって明確に定義づけられている言葉ではなく、『ツァラトストラ』という作品自体に詩的な要素が多く見られるため、その解釈は今日のニーチェ研究の水準を持ってしても容易ではないが、それでもここで披露されたテンニースのニーチェ理解は、著名な社会学者のものとは思えないほど低次元の解釈にとどまっているように思われる。むしろその解釈は先に取り上げた小説『超人クラブ』や当時の文学青年に近いと言えるだろう。ここには「超人」の肯定的な意味は一切見出されない。

またニーチェの『反キリスト』に関して、テンニースは1897年著作『ニーチェ崇拜』のなかで次のような見解を示している。

「そもそもこの『反キリスト』は、外見上は論理や心理学、歴史が備わっているように見えるが、実際のところ何ひとつ学問的な価値は認められない。それは憎悪と激怒以外の何ものでもなく(…略…)乱暴な道德論か近視眼的なイデオロギーでしかないのに、威勢のいい言葉だとか弁護士風の狡賢さ、ベテランの域に達した不誠実さだけは備えているような代物で、つまりこれは作文練習以外に使い道はないのだ。この本から学べることと言えば、それは科学的・社会的な思想家にとって許されない態度がどういうものかという一点を除いて他にはないだろう。」²²

晩年の著作『反キリスト』に関しては、現在でも「饒舌でとどまることを知らない罵倒はいささか抑制を欠くきらいがある」などと評価されることもあり²³、その意味でテンニース

スの反応には十分に首肯しうる点もある。しかしテンニースの側にも学者としての冷静さを欠く部分があると言えないだろうか。指摘された内容は的確であるとしても、その語調が「売り言葉に買い言葉」的なレベルにとどまっているからである。

このようにニーチェの後期思想に対するテンニースの見解は一貫して否定的かつ批判的である。彼によれば、「超人」や「貴族主義」、「あらゆる価値の価値転換」²⁴や「善悪の彼岸」、「君主道徳と奴隷道徳」など、ニーチェの後期思想に登場する刺激的な言葉は互いに何の連関も持たない単なるキャッチフレーズ群でしかなく、またニーチェもこれら多種多様な言葉で「ふざけているだけ」であるため、ニーチェ思想と真剣に取り組もうとすれば「期待を裏切られる」ことになるという²⁵。結局テンニースはニーチェの後期思想を次のように特徴づけるのである。「彼の最後の諸著作が見せているのは、歪んだ表情を浮かべた醜悪な姿か、酔っぱらいや常軌を逸した人物、自暴自棄の人物が見せる(…略…)つまりデカダンの見せる態度である」²⁶。

それにしてもニーチェの後期思想に向けられたテンニースの言葉はいささか感情的であると言えよう。ニーチェファンだった若き日の手紙の文面でなら内心の率直な表現も許されるかも知れないが、このときすでにテンニースは主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を発表し、本格的に社会学者としての道を歩み始めていたはずである。かりにニーチェの後期思想を批判するのであれば、やはり「学者」にふさわしい冷静かつ客観的な分析が求められるところであろう。なぜテンニースはニーチェを批判するのにこれほど乱暴な言葉遣いを用いたのだろうか。

3. 1890年代アカデミズムの限界—テンニースのニーチェブーム批判から

例えば1893年の小論には次のようなフレーズがある。

「哀れなニーチェよ！これこそ本当に悲劇的な運命だ。君の名声は、不良化して荒れた若者たちがふれて回っているような酔っぱらいの名声と同じなのだ。以前の君ならもっとすばらしい名声を勝ち得るに値していたのに。」²⁷

この嘆きは、テンニースがニーチェの初期思想を高く評価していたこと、初期思想との対比において後期思想を痛烈に批判していることなどを示す証拠資料である。ただここでも「哀れなニーチェよ！」²⁸という感嘆符付きのフレーズやニーチェを「酔っぱらい」扱いするような比喩など、当時第一線で活躍していた社会学者のものとは思えない表現が用いられている。こうした言葉の裏には何があったのか。

やや結論を先取りして言うならば、ニーチェブームの存在が彼の感情的な言葉に大きく影響しているというのが本研究の見方である。すなわち1893年の小論「ニーチェばか」と1897年の著作『ニーチェ崇拜』は、そのタイトルに予示されているとおり、ニーチェ思想を享樂するニーチェ派と道徳的頹廢現象としてのニーチェブームをそれぞれ問題にし

ているのである。例えばテンニースは1893年小論の中で当時のドイツ文学の状況を次のように描写している。

「かりに酔っぱらいが現れて、ろれつの回らぬ舌でわめき罵り、ときに奇声を上げ、ときに威嚇したり悪態をついたりし、あるいは呻き声を上げて嘆き悲しみ、そして崩れるように倒れるまで路地裏をさまよい歩いていれば、小僧たちは酔っぱらいを取り囲み大はしゃぎするだろう。彼らはその男の足取りをついて回り、彼の仕草や挙動を真似するだろう。またかなりたちの悪い若者たちの場合、彼らは彼に対して悪口すら言うだろうし、彼を踏みつけにするだろう。そのような若者たちなら今日のドイツにいくらでもいる。あなた方も路地裏や下水溝に彼らを見出すはずだ。つまり新聞や週刊誌、月刊ジャーナル誌の中にである。」²⁹

冒頭に登場する「酔っぱらい」がニーチェのことを指しているのだとすれば、ここに描かれた内容はまさにニーチェブームに対する批判、すなわち1890年代以降『自由舞台』などの多くの雑誌や新聞をはじめ、小説や詩などの文学作品においてもニーチェが取り沙汰された流行現象の批判的描写であると解釈できる。またニーチェに熱狂する文学青年がベルリンなどの大都市で道徳的頹廢現象を巻き起こしていたことも1890年代ニーチェブームの一側面であったが、この点についてもテンニースは批判的に捉えている。

「(…略…)理路整然とした思考能力を持っているわけでもないのに、言葉や決まり文句だけはまったく意のままに操れるような輩がますます蔓延ってきた。連中は、昼夜を問わず大都市のカフェに入り浸り、向こう見ずな口をたたいたり、その脳を朦朧と混迷させたり、たばこの臭いを漂わせている。このような下らぬ連中にとって、自分の責任で生きよという天才(※引用者注：ニーチェ)の自由の告示は、彼らの安寧の知らせ、彼らの道徳意識を慰める機知に富んだ度数の高いアルコール(geistreicher Alkohol)となってしまったのだ。」³⁰

テンニースはニーチェ思想が青年の道徳感情を麻痺させる「度数の高いアルコール」のように作用していることを憂慮しているのである³¹。ニーチェの過激な言葉が青年たちを熱狂させ、興奮したニーチェ派の青年が道徳的頹廢現象を展開する。こうした憂慮すべきニーチェブームを前に、テンニースの言葉は激しくならざるを得なかったのかもしれない。「本書において私が願っているのは、注意深さ、慎重さ、冷静さを喚起することである」³²。これは『ニーチェ崇拜』の序文で語られた言葉であるが、ニーチェブームに対する彼の過剰な批判意識は、皮肉なことに、ニーチェ思想の問題点や危険性を冷静に論じるべきテンニース自身から「注意深さ」「慎重さ」「冷静さ」を奪ってしまった。本来持ち得ていたはずの明晰な洞察力や学者としての冷静さを保てないほどニーチェブームは激しく展開されたのである。

第2節 精神病理学的な関心

今日の研究状況からは考えられないことかもしれないが、ニーチェに対して寄せられたもっとも早いアカデミックな関心は、精神病理学的なものであった。すなわち、ニーチェ思想に見られる諸特徴が「精神異常」の症例として診断されたのである。本節では、精神病理学的な関心からニーチェを論じたテュルク (Hermann Türck, 1856-1933)、ノルダウ (Max Simon Nordau, 1849-1923)、シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) に注目し、1890年代のアカデミズムによるニーチェ論の一類型とその意味を明らかにする。

1. テュルク

最初に取りあげるのは、1891年に出版されたテュルクの著作『Fr.ニーチェとその哲学的迷路』¹である。この中でテュルクは、精神病理学の専門書からアルコール中毒患者²や精神錯乱者³の症例を紹介しつつ、次のように述べる。

「最近有名になり通俗的な関心を集めつつある哲学的作家フリードリヒ・ニーチェの症例は、精神病理学にとって非常に興味深く、しかも実際に起こった症例であると考えてよいだろう。(…略…)事実、フリードリヒ・ニーチェには遺伝性の重大な欠陥があり、最終的には自分自身も精神異常に陥り、精神錯乱状態に陥ってしまったのである。」⁴

テュルクによれば、あらゆる道徳を否定し野獣性を賛美するようなニーチェ思想を理解しようとする場合、その思想内容を分析する前に、まずこのような思想を生み出した個人を精神病理学的な観点から考察しなければならない。例えば、『善悪の彼岸』で繰り広げられる道徳批判などは、精神病の教科書がよく道徳的精神錯乱の典型例として紹介する「理屈狂 (folie raisonnante)」の一症状にほかならないという⁵。また、晩年の著作『ヴァーグナーの場合』や『偶像の黄昏』には、まさしく精神錯乱の予兆としてニーチェの「誇大妄想 (Größenwahn)」が確認されうるといふ⁶。

結局テュルクは、ニーチェの精神錯乱がどういうタイプのものであったのかを断定するには至っていない。すなわち、「ニーチェの狂気 (Irresein) を、破壊本能というかたちで表出する衝動的 (本能的) な精神錯乱と呼ぶべきか、それとも社会的本能や道徳的衝動の崩壊というかたちで顕著になる精神錯乱と呼ぶべきか、確証をもって最終的な決断を下すことはおそらくできないだろう」⁷というのである。ただ、テュルクにとって確実なことがひとつだけあった。それはニーチェが「精神錯乱者」であったということである。

では、いったいなぜテュルクは「ニーチェが精神錯乱者であった」という事実をあえて著作のかたちで世に問う必要があったのだろうか。この理由はやはりニーチェブームに求めなければならない。テュルクにとって重要だったのは、ニーチェが精神錯乱者であった

という個人的事実それ自体ではなく、そのような人物の思想がドイツ社会に悪影響を及ぼしつつあるという危機的状況の方だったのである。

「道徳的な精神錯乱状態に陥った学者(※引用者注：ニーチェ)の口から出たこの教えは、まったく予想通りとしか言いようもないが、自分自身に道徳的欠陥があるために『社会』の要求に対して違和感を覚えるような人々のあいだで大きな共感を得ることになった。とくに、大都市の精神的無産階級(Geistesproletariat der Großstädte)は、あらゆる道徳や真理が徹頭徹尾無駄であり個人主義の発展にとっては有害なものにすぎないというご立派な新発見に歓声を上げている。もともと、彼らは日頃からこっそりと『何ものも真ではない、一切は許されている』と自分に言い聞かせ、許容範囲内でそのモットーに従って行動していた。しかし、今や彼らはこのモットーを声高かつ誇らしげに公言してもよいことになった。なぜなら、フリードリヒ・ニーチェという新たな予言者がこの格言を最高次の生の真理として賞賛したからである。」⁸

このように、テュルクは例えばニーチェが援用したアサシンの言葉「何ものも真ではない、一切は許されている」が大都市を中心に一大センセーションを巻き起こしつつあることを憂慮していた。テュルクは、この言葉に象徴される道徳批判を精神錯乱の典型的な症状と見なし、ニーチェ思想を徹底批判するのである。

2. ノルダウ

次に注目したいのは、世紀末やデカダンスなどの時代現象を批判的に論じたノルダウ⁹の著作『変質(Entartung)』¹⁰である。2巻から成る『変質』は世界中で反響を呼び、日本語も含め各国語に翻訳された。なお „Entartung“ は「変質」のほか、「退化」「墮落」「劣化」「頹廢」などと訳される。以下、『変質』におけるノルダウのニーチェ批判の内容を考察する。

「チェザレ・ロンブローゾ教授に最大限の敬意と忠誠を捧げる」¹¹ という冒頭の言葉に示されているように、『変質』を執筆するに際してノルダウが依拠したのは、イタリアの犯罪学者ロンブローゾの理論である。ノルダウのこの基本姿勢は、章題に「診断(Diagnose)」や「病原論(Aetiologie)」といった用語を採用していることからもうかがえよう¹²。彼の関心は、「芸術や文学における流行傾向」をロンブローゾの精神病理学に依拠しながら科学的に分析することであった¹³。ノルダウは次のように述べる。

「変質者(Die Entartenden)は、必ずしも犯罪者や売春婦、無政府主義者や明らかな精神錯乱者だけに限られたことではない。ときには著述家や芸術家の変質者となる場合もある。」¹⁴

われわれにとって興味深いのは、ニーチェが「変質者」の代表格として徹底的に批判され

ていることである。

ノルダウによるニーチェ批判は、第2巻に収録された第3部「我欲(Das Ich-Sucht)」の第5章「フリードリヒ・ニーチェ」¹⁵において行われている。要するに、ニーチェが我欲を無条件に肯定する頽廢思想の持ち主として論じられているのである。

テュルクの見解に同意していることからわかるように¹⁶、ノルダウもまた、ニーチェの諸著作が精神病患者に典型的な思考パターンの痕跡をとどめているという。ニーチェは例えば次のように診断されている。

「逸脱行動の例として、残酷な行為を実行したりイメージすることで性的興奮をおぼえる患者がいることも挙げておこう。この症例は精神科医のあいだではよく知られている。この症例には学名がある。サディズムである。サディズムは、マゾヒズムに対置される性的倒錯の形態であるが、じつのところニーチェは極度のサディズム患者であった。もともと、彼の場合のサディズムはただ精神的領域に限られており、知的遊戯のなかで欲求は満たされるのであるが。」¹⁷

ニーチェに「理屈狂」や「誇大妄想」の症状を見出したテュルクとは異なり、ニーチェを「知的サディズム」と診断した点にノルダウの独自性は認められると言えよう。とはいえ、テュルクの場合と同様、ノルダウもまたニーチェ思想の「影響力」を問題視していたことは間違いない。ノルダウがニーチェを「変質者」の代表格として批判的に論じたのは、「ニーチェの誤った個人主義および貴族主義が皮相浅薄な読者を惑わせ、間違った方向へ導きかねない」¹⁸からであった。

最終章「治療(Therapie)」においてノルダウは次のように語る。

「時代病を治療するうえで私が有効だと考える方法はこうだ。すなわち、指導的な役割を果たしている変質者やヒステリー患者を病人と見なし、猿真似人間の正体を暴き、彼らに社会の敵(Gesellschaftsfeinde)という烙印を押し、こうした寄生虫がつく嘘に警戒するよう世に訴えることである。」¹⁹

「指導的な役割を果たしている変質者」ニーチェを「病人」と断定し、「猿真似人間」であるニーチェ派の青年を「社会の敵」として警戒すること、これがノルダウの考えた最善策だったのである。

3. シュタイナー

自由ヴァルドルフ学校の創設者として知られるシュタイナー²⁰のニーチェ論にも触れておこう。彼のニーチェ論といえば、1895年の著作『フリードリヒ・ニーチェ、時代の闘争者』²¹が想起されるが、他にもニーチェをテーマにした論文を数本書いている。例えばニーチェブームが始まってまだ間もない1892年には「ニーチェ主義」²²と題する論文を発表しているし、また1900年には「精神病理学問題としてのフリードリヒ・ニーチェの哲学」

(Steiner1900-a)²³ および「フリードリヒ・ニーチェの人格と精神病理学」(Steiner1900-b)²⁴ という2本の論文を医学専門誌に立て続けに寄稿している。シュタイナーにとってニーチェは精神病理学的な研究対象でもあったのである。

1892年論文「ニーチェ主義」の主な意図は、当時ちょうどその兆しが見えつつあったニーチェブームやニーチェ派の批判的描写であったが、同論文においてシュタイナーはニーチェが精神錯乱に陥ったプロセスを次のように推察している。

「ニーチェの神経は次第に弾力の強い状態に陥り、重要な問題に近づくと神経がバネのようにはじけ飛ぶほどになっていた。ニーチェはいよいよ電氣的な神経装置と化していた。世界の事物と出会い、電気の火花を散らしたかと思うと、今度は反発が生じ、もう一方の極に向かってはじけ飛ぶ。このような状態がその後も続いた。こうして成立したのが、彼の最後の数年間に書かれた著作である。この耐え難い状態はますます悪化し、結局は狂気に陥ってしまったのである。」²⁵

この洞察をさらに科学的に追究したのが1900年発表の2本の論文である。ここではニーチェがはっきりと精神病理学の研究対象として捉えられている。

「フリードリヒ・ニーチェの世界観に沈潜しようとする者は、精神病理学の立場からでなければ解明することができないような数多くの問題に直面するはずだ。他方また、同時代の文化に測りしれないほど多大な影響を及ぼした重要人物を論じることは、精神医学にとっても有意義であると言えるだろう。」²⁶

このように、シュタイナーにおいては、ニーチェ思想を精神病理学的に解析することの意義が、ニーチェ論の側と精神病理学ないし精神医学の側の両面から強調されている。では、具体的にシュタイナーはニーチェ思想をどう診断したのだろうか。

彼はまず、ニーチェ思想のうちに「破壊衝動」を見出す。すなわち、キリスト教道徳をはじめ、あらゆる事物に対して無際限の批判を繰り返すニーチェの言動は、通常では考えられない異常な破壊衝動によると考えたのである。

「ニーチェの思想世界には破壊衝動が認められる。誰かの見解や信念に対して判断を下すときに、通常の批評として心理的に許容できる範囲を彼が逸脱してしまうのは、このような破壊衝動のせいである。ニーチェが書いた文章のうちの大部分がこの破壊衝動の産物であることは、特筆すべきであろう。」²⁷

シュタイナーがニーチェのうちに見出したもうひとつの症状は「自己分裂」である。すなわち、彼の診断によれば、ニーチェ思想の非体系性や矛盾は、彼自身の内部における自己分裂によって説明できるというのである。

「ニーチェの精神生活のなかでもっとも特異な現象は、いつもは潜在的に現存しているがときおりはっきりと出現するような自己意識の二重性である。『ああ、私の胸の内には、2つの心が住んでいる!』という彼の言葉は、ほとんど病理学の域に隣接している。彼は『2つの心』の対立を和解させることができなかった。彼の論駁はほとんどこのような観点からでしか理解され得ないものである。彼は自分の敵

対者と実際にはほとんど一度も出会っていない。彼はまず最初に、自分が激しく非難したいと思う対象を奇妙なやり口で仕立て上げ、次に現実から相当かけ離れた妄想を相手に闘いを挑むのである。彼が闘いを挑んでいた相手は、決して外敵などではなく、根本的には自分自身なのであって、このことを考慮に入れてはじめて彼の闘いは理解されるだろう。」²⁸

以上に確認したとおり、シュタイナーもまた、テュルクやノルダウと同様、ニーチェ思想が精神異常者の思考の所産であると考えたのである²⁹。

4. 精神病理学的ニーチェ論の意味

ニーチェ受容史が本格的な開幕を迎えた 1890 年代以降、ニーチェに対して向けられた最初のアカデミックな関心がニーチェ思想それ自体の哲学的解釈にではなく、1889 年に発狂した精神病患者ニーチェの症例診断に向いたというのは、いかにも皮肉な話である。精神科医メービウスの有名な著作『ニーチェにおける病理的なもの』(1902)³⁰ が出版されたのは、この後まもなくのことである。ニーチェは、哲学者や思想家としてではなく、精神錯乱者ないし精神病患者として、アカデミックな受容史デビューを飾ったのである。

ただ、精神病理学的なニーチェ論は、必ずしも同時代人に歓迎されたわけではなかった。むしろ、彼らの試みに寄せられた反応は否定的なものが多かった。例えば、ノルダウの『変質』に対しては、「聖ロンブローゾと預言者ノルダウは、(…略…)ニーチェが実際に発狂した途端、彼らの理論にとって都合のいいように、彼のあらゆる発言から明白な狂気を読み取りはじめた」³¹ との批判が寄せられた。また、テュルクの 1891 年著作に対しては、直接的な反駁書が翌 1892 年に出版されている³²。

「テュルク博士はその小冊子のなかで、ニーチェ教授が重度の精神病に冒されているという痛ましい事実を必要以上に引き合いに出している。彼は精神医学の専門誌を援用することによって、ニーチェの全哲学が病める頭脳の所産であるということ、またそのような精神状態が „moral insanity“ という道徳的錯乱の紛れもない兆候をうむということの証明を試みているのである。」³³

反駁書の著者ツェルプストはテュルクのニーチェ論をこのように特徴づけている。しかし、ツェルプストの見るところによれば、「『病理学的なもの』はニーチェの『哲学』とは全く無関係である」³⁴。このような立場から彼は、テュルクが試みた精神病理学的なニーチェ論に対して個別具体的な批判を展開していくのである³⁵。

もともと、ツェルプストがニーチェ派の代表格と目されていたのは事実であり³⁶、その意味ではテュルクに対するツェルプストの反駁を、反ニーチェ派に対するニーチェ派からの攻撃³⁷ と解釈することも可能である。ただ、反ニーチェ派に属するすべての人がこの精神病理学的な方法論を支持したわけではなかった。例えば、『反ニーチェ』の著者デュボ

クは、狂気に陥ったニーチェには「責任能力」を問うことはできないとの見方を示している³⁸。また、『反ツァラトゥストラ』の著者であるヘンネ・アム・リューンも、自らの論駁対象が、ニーチェ個人ではなく、あくまでもニーチェ思想ないしニーチェ派であることを強調している³⁹。

「私がひとりの病人に対して個人攻撃をしているなどという見当違いの誤解はどうかご遠慮いただきたい！—違う！私はその男性(Mann)と闘うのではない。私が闘う相手はあくまでもその著述家(Schriftsteller)であり、(…略…)無神論的・非道徳的な教説であり、盲目的な彼の信奉者たちである。」⁴⁰

このように、彼らが用いた精神病理学的方法論は、ニーチェ派からは「批判」され、反ニーチェ派からも「回避」されたのである。

たしかに、精神病理学的な関心にもとづくニーチェ論は、同時代人の目から見ても、決して多くの支持を得た試みではなかった。また、ニーチェブームに対する危機意識やニーチェ派に対する批判意識が学者らしからぬ冷静さを欠いた発言に繋がるケースもあり⁴¹、その意味では、彼らもまたテンニースと同様、1890年代という時代の制約から自由ではなかった。しかしながら、彼らの試みは、そのプロセスに注目するならば、ニーチェ思想の「なぜ」を解明する試みだったとも言えるのではないか。ニーチェ思想がこれほど冒瀆的かつ野蛮なのはなぜか、彼の論証が支離滅裂なのはなぜかという問いに対して、彼らは、精神病理学という科学的根拠に基づいて「精神異常」(理屈狂、誇大妄想、知的サディズム、破壊衝動、自己分裂など)という明確な回答を与えたからである。テュルク、ノルダウ、シュタイナーによるこの精神病理学的なアプローチは、いわばアカデミックなニーチェ論の萌芽だったのである。

第3節 ニーチェ思想の学問化

今日の研究水準に照らし合わせれば考えられないことかもしれないが、社会学者テンニースの冷静さを欠いた反応も、精神病理学的な見地からニーチェ思想の異常性を証明しようとする試みも、紛れもない事実であった。1890年代のドイツアカデミズムはニーチェブームをめぐる喧噪に巻き込まれてしまったのである。しかし世紀転換期が近づく頃には、そうした喧噪から距離をとって冷静な議論をするべきだと主張する論者も現れてくる。例えば、神学者グリム(Eduard Grimm, 生没年不詳)の著作『フリードリヒ・ニーチェの問題』(1899)⁴²、ツィーグラール(Theobald Ziegler, 1846-1918)の著作『19世紀の精神的社会的思潮』(1899)⁴³や『フリードリヒ・ニーチェ』(1900)⁴⁴などがそうである。以下では、「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立背景ともなった「ニーチェ思想の学問化」の動きについて検討する。

1. 喧噪からの距離の確保—批判から分析へ

テンニースやノルダウらを憂慮させたニーチェブームに対して、グリムやツィーグラールはどのような態度をとったのだろうか。

ニーチェブームもニーチェ受容の一形態であるとの見地に立てば、ニーチェブームという社会現象の発生原因は、被受容者と受容者の共鳴、すなわち①「ニーチェ思想に内在する要素」と②「1890年代ドイツが置かれていた社会状況やメンタリティ」との親和性によって説明することができるだろう。グリムやツィーグラールが第一に考えたのは、このような分析視点からニーチェブームの発生原因を探ることであった。以下、グリムやツィーグラールが①と②の親和性をどのように説明しているかを形式的側面と内容的側面に分けて検討し、ニーチェブームに対する彼らの姿勢を確認する。

(1)形式的側面

彼らはまず、アフォリズム形式や詩的表現の多用などニーチェの諸著作に見られる形式的側面に注目し、こうした諸側面がニーチェブーム発生の一要因となったことを指摘する。すなわち、ニーチェ思想の形式的側面と1890年代を生きるドイツ人の気質のあいだには親和性が認められるというのである。例えばグリムは次のように述べる。

「この反時代人(※引用者注：ニーチェ)は、彼自身の意図を超えて、同時代的なものを持っていた。現代ドイツの精神は、(…略…)継続的な研究活動に真剣に没頭するには、あまりに落ち着きがなく、あまりに不安定である。彼はこうした人々を、変化に富み多種多様な色彩で輝くアフォリズムをもって出迎える。別に彼自身が意図していたわけではないが、彼は研究(Studieren)に誘うのではなく、まさにつまみ食い(Naschen)へと誘っているとも言えよう。固形食を受けつけない現代人の心のために、彼は流動食を提供するのである。」⁴

「流動食」をもっとも渴望していたのは言うまでもなく青年世代であるが、この点も、グリムの見るところによれば、ニーチェが「青年の心を魅了するだけの口調を十分に心得ていた」⁵からであり、また「教養俗物」、「君主道徳と奴隷道徳」、「超人」などのキャッチフレーズや各著作のタイトル選定において彼が抜群のネーミングセンスを発揮したからであるという⁶。

ツィーグラールもまた、ニーチェ思想の文体や表現技法に注目した。彼は、ニーチェのことを「美文家」、「アフォリズム作家」、「逆説家」、「詩人」などと呼ぶ一方⁷、1890年代を「性急な時代」と特徴づけ、ニーチェの諸著作と時代状況との親和性を指摘している。

「昨今のテンポの速い性急な時代にあって—いったい誰がいまさら根気強く真面目

な本を読みたいと思い、誰が一冊の本を完全に読了することができるだろう？ところがニーチェ作品の場合、ただ適当にページを捲ればよく、しかもすぐ使えるもの、仕上がったもの、まとまったものがどこか必ず見つかる仕掛けになっている。つまり彼は瞬間の哲学者 (Philosoph des Augenblicks) なのだ。」⁸

このように、彼らはまずニーチェ思想の形式的側面と当時のドイツ人の精神的気質との親和性に注目し、この点をニーチェブーム発生の一要因と考えるのである。

(2) 内容的側面

ツィーグラーは続いて、内容的側面における①ニーチェ思想と②1890年代ドイツの社会状況との親和性にも注目する。例えば彼は次のように述べる。

「超人という響きのよいこの言葉が、謙虚さの過剰に決して患わされることのない青年の心を、まるで意識不明か酩酊状態にあるかのごとく驚掴みにしたり、自分を天才と思い込んで君主を演じ、君主道徳の原理に従って生活する若者たちの行動を正当化していたのは、自明のことである。とはいえ、それなりの正当性や時代性が含まれていなければ、上述のような陶酔した雰囲気はこれほど蔓延しなかつたであろうし、ニーチェ熱 (Nietzschebegeisterung) もこれほど流行しなかつたであろう。」⁹

ツィーグラーは当時のドイツ人が置かれた精神的状況を、没個性性 (Individuallose)、千篇一律性 (Schablonenhafte)、画一性 (Uniforme)、単調性 (Monotone) といった言葉で特徴づけている。彼は1890年代のドイツ社会を、個性や個性的人格の存在しない独創性に欠けた世界と診断するのである。しかし、このような没个性的な雰囲気は、逆に、何か強烈な個性を求めるメンタリティをうむという¹⁰。ツィーグラーはまず、1890年代の青年における「超人」人気の背景に、このような単調かつ没个性的な精神的風土を見たのである。

さらにツィーグラーは、ニーチェブームが巻き起こったもうひとつ別の理由を指摘する。

「世紀末の青年や女性にとってニーチェが偉大なる誘惑者となったのには、別の理由がある。唯物主義や実証主義はわれわれの思考を平板化し、自然科学的な方法論は、外的世界の研究に対してはきわめて巧妙かつ精緻な効力を発揮するものの、精神生活に対しては多くの点で役に立たず、精神生活の深い部分にまでアプローチすることはできない。これは現に、実験心理学系の研究活動が示しているとおりである。そして哲学もまた、(…略…)あまりにも長い間、本能や衝動、感情や意志を忘れていた。哲学はひとつの全体を見出すこともなければ与えることもなく、もはやこれらを模索しようとしなかつた。ここにニーチェが現れたのである。」¹¹

すなわちツィーグラーは、唯物論・実証主義・自然科学の過剰な普及拡大によって人間の生(本能・衝動・感情・意志など)が不当に阻害されていることを指摘し、こうした精神状況を打破しうるアンチテーゼとしてニーチェの精神科学的な着想＝「生の哲学」に期待が寄せられているのではないかと推測したのである¹²。

(3) 喧噪からの距離の確保

ニーチェブームを道徳的頹廃現象として憂慮したテンニースやノルダウらと同様、グリムやツィーグラールもまた、ニーチェが大都市の青年のあいだで熱狂的に崇拝されているとの認識を示した。ニーチェブームの事実認定そのものに関して両者に見解の相違はなく、またグリムやツィーグラールがニーチェ派を支持するようなこともなかった。しかし彼らは、ニーチェやニーチェ派を相手取って猛烈な批判を展開することはなかった。彼らの関心は、『反時代的考察』を著した反時代人のニーチェがなぜ「時代」に受け容れられることになったのかという謎の解明¹³⁾、すなわち「流行到来(In-die-Mode-Kommen)」のメカニズムを分析することに向けられたのである¹⁴⁾。

グリムやツィーグラールがこのような態度をとったのは、ニーチェブームをめぐる喧噪に巻き込まれてしまった学者に対する批判意識があったからである。アカデミズムが果たすべき役割は本来、対象を冷静かつ客観的に分析し、その特質や意味を明らかにすることである。ところが、これまでニーチェ思想を真に学問研究の対象として取り扱った試みは示されていない。その理由のひとつは、すでに指摘したように、ニーチェブームとの距離の近さであった。こうしてグリムとツィーグラールは、そうした喧噪から可能な限り距離を確保しようとする。ニーチェブームという社会現象を憂慮し、ニーチェ派やニーチェ思想に激しい批判を浴びせるのではなく、そうした反ニーチェ派的な意識からも距離をとって、そもそもなぜそのような現象が起こり得たのかを解明すべきと考えたのである。ニーチェブームに関する彼らの冷静な分析は、ニーチェ思想をアカデミックに論じようとする学者としての自覚の現れであった。

2. 学問化されるニーチェ思想

ここでは、グリムとツィーグラールの諸著作においてニーチェ思想がどのように取り扱われているのか、ニーチェ思想の学問化の先駆的試みについて考察する。

(1) 時期区分の作業

第一に指摘したいのは、グリムやツィーグラールがニーチェ思想を時期区分しているという点である。例えばツィーグラールはニーチェ思想を3つの時期に区分した。第1期は「ショーペンハウアーとワーグナーに魅了されたニーチェ」、第2期は「実証主義者としてのニーチェ」、第3期は「ツァラトウストラとその告知」と名づけられており、『フリードリヒ・ニーチェ』の考察もこの時期区分に沿って進められている。一方、グリムは、第1

期「天才崇拜」、第2期「認識の優位性」、第3期「ツァラトゥストラとその超人説」、第4期「君主的本性」、第5期「問題としての崩壊と自らの崩壊」という具合に、ニーチェ思想を5つの時期に区分し、時系列的に考察をすすめている。

ある思想家や学者について研究する場合、その人物の生涯や執筆活動を「第〇期～第〇期」や「初期→中期→後期」などと時期区分することは珍しくない。時期区分することによって、その人物の思想形成のプロセスや特質が把握しやすくなるからである。その意味では、時期区分は学問研究の常套手段であるし、むしろ今日のニーチェ研究においても、こうした時期区分はよく行われている。しかし当時の状況を考えると、今や当たり前前の時期区分も特筆すべき試みであったことがわかる。

1889年にニーチェが発狂した時点で、ニーチェ思想の時期区分は原則的には可能となったはずである¹⁵。しかし実際には、ツィーグラールやグリムの著作が世に出るまで、ニーチェ思想の時期区分の試みはほとんど行われなかった。それどころか、ニーチェの初期思想や中期思想に対して関心が向けられることはほとんどなかった。当時のドイツにおいて「ニーチェ」という言葉は、ニーチェ派においても反ニーチェ派においても、とりもなおさず「後期ニーチェ」を指していたのである。このような時代状況を考慮すれば、グリムやツィーグラールの行った時期区分は、ニーチェの後期思想にしか目を向けないニーチェ派や反ニーチェ派、すなわち1890年代のニーチェブームをめぐる喧噪の批判的克服であり、したがってまたニーチェ思想の全体へ目を向けることの意義を主張する試みでもあったと言えるだろう。

(2) 意味づけや権威づけの試み

第二に指摘したいのは、とりわけツィーグラールに顕著な特徴であるが、ニーチェ思想を歴史的に意味づけようとする姿勢が見られる点である。例えばツィーグラールの著作『19世紀の精神的社会的思潮』の構成は以下の通りである。

第1部 1800年から1830年まで

第1章：3つの世界観

第2章：シェリングの自然哲学とヘーゲルの現象学

第3章：プロイセンの転落と復興

第4章：自由戦争の後

第5章：ヘーゲル法哲学の勝利

第2部 1830年から1848年まで

第6章：青年ドイツ

第7章：シュトラウスおよびフォイエルバッハに到るまでの宗教運動

第8章：フリードリヒ・ヴィルヘルム4世と40年代

第3部 1848年から1871年まで

第9章：1848－49年の革命

第10章：50年代の反動

第11章：ビスマルクとドイツ帝国の創設

第4部 1871年から世紀末まで

第12章：文化闘争

第13章：社会主義と社会民主主義

第14章：「世紀末 (Fin de siècle)」

全14章からなるこの著作の最終章「世紀末」のうちに、「フリードリヒ・ニーチェ」と「ニーチェの影響」という2つの節が収録されている。著作全体に占める割合は必ずしも大きくはないが、全体のページ数が700頁にも及ぶため、2つの節だけでも比較的まとまったニーチェ論となっている。

ここで注目したいのは、その内容よりもむしろ形式である。というのも、この著作にニーチェに関する項目が掲載されたこと自体が、ドイツ精神史へのニーチェ受容、いわばニーチェ思想を歴史的に意味づける試みと言えるからである。

また、ツィーグラールは『19世紀の精神的社会的思潮』『フリードリヒ・ニーチェ』の両著作において、ニーチェをしばしば他の哲学者や思想家、例えば、ソクラテス、ルソー、モンテーニュ、シラー、フンボルト、ゲーテ、シュライエルマッハーなどと比較しつつ、その類似点や相違点を指摘している。例えば、文化の頹廃を憂慮して「自然に還れ！」と訴えた点においてニーチェはルソーと類似しているとされる¹⁶。このような試みは、まだ学問的な評価の定まらないニーチェ思想に何らかの性格を与える「意味づけ」、あるいはニーチェ思想が学問的な取り扱いを受けるに値するものであることを示す「権威づけ」の役割を担っていたとも言えるだろう。

(3) 学者としての自覚

第三に指摘できるのは、ニーチェ思想を学問研究の対象として取り扱うべきことをグリムとツィーグラールが明言していたこと、いわば両者に学者としての自覚があったという点である。例えばグリムは、ニーチェブームをめぐる喧噪¹⁷への反省意識から次のように述べる。

「彼(※引用者注：ニーチェ)を賛美する前に、彼を非難する前に、まず彼を理解することを学ぶべきである。彼の非難者も、彼の崇拜者も同様に、このような理解がまだ全然足りないと私は思っている。(…略…)賛美したり非難したりするのは勝手だが、そのかわり、彼に関する事項を詳細に吟味することがまさに義務となる。この目的を達成するためには、彼の発言を真剣に受けとめること、個別具体的に究明

することが大切である。」¹⁸

グリムがニーチェ派と反ニーチェ派をともに批判していることは明らかであろう。その批判のポイントは、ニーチェに対する賛否如何ではなく、ニーチェ思想に向き合おうとする姿勢の有無であった。こうして彼は、両陣営の雑音に惑わされることなくニーチェに真正面から向き合うこと、彼の思想を詳細に検討することの重要性を主張するのである。

このような課題意識はツィーグラールにも共有されていた。実際ツィーグラールは『フリードリヒ・ニーチェ』の結論部において、自分自身のニーチェ論の意図を次のように総括している。

「たしかに私はこれまでの論述のなかで、論拠薄弱な箇所や矛盾を個別的に指摘し、そのうえで内在的な批判も行使してきた。しかしだからといって私は、彼(※引用者注：ニーチェ)がどうあるべきだったのか(wie er sein sollte)を示したかったわけではない。私が明らかにしたかったのは、彼がどうあるか(wie er ist)だけである。また私は、彼を解体したかったわけではなく、むしろ整理しようとしたのであり、その全体構成や発展段階にもとづいて彼のことを理解しようと思っただけである。」¹⁹

時期区分することによってニーチェの思想形成過程や特質を解明するという姿勢、また「どうあるべきだったのか」(当為・主観)よりも「どうあるか」(存在・客観)を優先させている点に、ツィーグラールの課題意識は如実にあらわれていよう。このように、グリムもツィーグラールも、学者としての自覚を明確に持っていたのである²⁰。

(4) 喧噪から研究へ

19-20世紀転換期以降、ニーチェ思想を学問研究の対象として扱うべきだとする課題意識は、多くのニーチェ論者に共有されることになる。例えばニーチェ資料館の関係者 E.ホルネッファーも、ニーチェ思想の学問化を訴えた一人である。

「われわれに残されている道はただひとつ。すなわち、真剣で、冷静な、徹底的批判(eine ernste, ruhige, gründliche Kritik)である。われわれは、ニーチェを知り(kennen lernen)、研究(erforschen)しなければならない。つまり彼が提示するものを、じっくりと時間をかけて考察し(lange, lange betrachten)、検討(erwägen)しなければならない。われわれが持っている知識や思想など、あらゆる手段を用いて、彼を吟味しなければならない(der Prüfung unterziehen)。学問科学的に彼を取り扱わなければならない(Wissenschaftlich müssen wir ihn behandeln)。」²¹

ホルネッファーによれば、ニーチェに犯罪者のレッテルを貼ることも、盲目的にニーチェ思想に追従することも、ニーチェ思想の取り扱いという点においては誤った方法であるという²²。こうして彼は、学問研究者として真剣かつ冷静にニーチェ思想に向き合うべきことの重要性を主張した。グリムとツィーグラールは、紛れもなくニーチェ思想の学問化を推進した第一人者であった。

時期区分による思想形成過程の解明、ドイツ精神史への位置づけ、他の思想家との比較検討などに象徴される、グリムやツィーグラールによる冷静なニーチェ論²³は、得体の知れないニーチェ思想に何らかの意味や性格を与える試みであり、その意味では「ニーチェ研究」の先駆的存在でもあった。この試みが一定の成果を収めたのは、彼らが意識的にニーチェブームの喧噪から距離をとろうとしたからである。例えばツィーグラールは1900年著作『フリードリヒ・ニーチェ』の最終頁で次のように述べている。

「時流に逆らうことを好んだ孤独者(※引用者注：ニーチェ)も、流行という時流に呑み込まれ、あまりに多過ぎる者たち(Vielzuvielen)の寵愛を受けることとなった。ただでさえ病的な誇大妄想のせいですでに歪んでいる彼のイメージは、これによってますます歪曲された。このような時流が過ぎ去って、無批判なニーチェ熱が消滅し、大声で騒ぎ立てるニーチェ教の僧侶や女流のニーチェ崇拝者たちが黙り込んで始めて、彼が一瞬のうちに通り過ぎる流星や鬼火にすぎなかったのか、それとも今後も光り続けながら新たな道を指し示してくれる星であるのかは、決定されるであらう。」²⁴

ニーチェブームをめぐる喧噪から距離をとらない限り、ニーチェ思想の真価は定まらない。彼らはそう考えたのであろう。いずれにせよ、グリムやツィーグラールが登場した19-20世紀転換期以降、ニーチェ思想は「崇拜／非難」の対象から「研究」の対象へと徐々にシフトしていくのである。

第4節 教育学におけるニーチェ受容の前史

—パウルゼンとツィーグラールの場合

第3章においては、ヴェーバーによって提示された「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの具体的内実や意味を解明することが主な課題となる。そのためには、彼以前の教育学者がニーチェ思想をどのように見ていたのか、いわばドイツ教育学におけるニーチェ受容の前史を確認しておくことが必要であろう。そこで本節においては2人の教育学者に注目したい。ひとりパウルゼン、もうひとは前節で取り上げたツィーグラールである。2人はともに1846年生まれであり、1844年生まれのニーチェとほぼ同世代に属している教育学者である。この両者が見せたニーチェ思想への反応を明らかにし、ヴェーバーにおけるニーチェ受容の意味を検討するための指標を得たい。

1. 教育学者パウルゼンが見たニーチェ思想

(1) 年長世代と青年世代の断絶

文化教育学の名で呼ばれることもあるように、パウルゼンの教育学は、教育を「年長世代から次世代への文化財の伝達」と捉えた点にひとつの特徴がある。それゆえ、パウルゼンにとって世代間格差ないし断絶の問題はきわめて重要なテーマであった。1907年の論文「父親たちと息子たち」は、まさに世代間格差の問題を正面から論じたものである。

「私は今日の青年たちを非難しているのではない」¹⁾とパウルゼンは言う。しかし、ノールも指摘しているように²⁾、パウルゼンにとって世代間断絶の問題は、年長世代の側ではなく、あくまで青年世代の側に起因するものであった。

「青年は、彼らが成長期を過ごすときの時代状況や社会環境の雰囲気を受容するものであるが、彼らはほとんど畏敬の声を耳にしない。逆に、各方面から彼らの耳に飛び込んでくるのは、興奮や情熱、不遜や敵意、陰険さの詰まった批判の声である。こうした批判の声は、家庭内、新聞誌上、漫画雑誌、パンフレット、文学誌に満ち溢れている。このような状況にあって、いったい誰が尊敬の念を抱けるといえるのか？ それどころか、敬意を払うという行為を今日いったい誰が恥ずかしがらないといえるのか？ 現代の『偉大なる男性』、現代の『精神的英雄』であるヘッケルやニーチェは、自分自身に対する敬意、自分だけの刹那的な思想に対する敬意を除いて、果たして何かを尊敬しているだろうか？ 全てを疑問視し、全てを廃棄し、全てを死んだモノとして説明すること—これが現代の著述家を決定づける口調なのである。」³⁾

年長者や伝統文化に対して敬意を払わない青年世代の姿がパウルゼンによって批判されていることは明らかであるが、とりわけ興味深いのは、パウルゼンが、年長世代と青年世代の断絶の背景にニーチェ思想の存在、すなわち青年におけるニーチェブームを指摘している点である。

(2) テンニースとの書簡から

本章第1節でも触れたように、1875/76年の冬学期、パウルゼンはベルリン大学にて9歳年下の学生テンニースと出会い、両者はその後、定期的到手紙の遣り取りをするなど、親密な交際を続けることになる。パウルゼンは1897年2月4日付の手紙の中でテンニースの著作『ニーチェ崇拜』に対して好感触を示す。

「親愛なるテンニース！ (…略…) さて例のニーチェ本(※引用者注：テンニースの1897年著作『ニーチェ崇拜』)ですが、大変楽しく読ませていただきました。面白かったので短時間で読み終えてしまいました。まさに今がチャンスでしょう。たし

かにニーチェばかりが改宗することはないかもしれません。でもまだそうっていない若者たちなら救いようがあります。彼らがニーチェに背を向けて自由になるよう手助けすることは可能なのです。」⁴

このようにパウルゼンもテンニースと同様、青年世代をニーチェ思想から救出し、一刻も早くニーチェブームを終わらせるべきだと考えていた。同じ手紙の中でパウルゼンは、ニーチェ思想の問題点を次のように指摘している。

「それ(※引用者注：ニーチェの粗雑乱暴な文章表現)こそまさに彼の思考に当初から見られた病理学的な側面です。自分の場合、理念がほとんど病的な域に達している—これは以前の彼自身の発言です。あまりにも豊かな発想力を持っていること、自分の考えを規律化し制御する能力があまりにも乏しいこと (allzu geringe Fähigkeit, sein Denken zu disziplinieren und zu kontrollieren)、これは彼が最初から持っている性向なのです。ゲーテはかつてこう言っています。あらゆるものに対して敬意を払わない行為は決して利口とは言えないと。これはニーチェにこそ当てはまることでしょう。ついでだから言うておきますが、自分の着想を論理的かつ客観的に制御すること (logisch-sachliche Kontrolle) への責任感や義務感が彼には欠落しているのです。」⁵

このコメントからもうかがえるように、ニーチェ思想に対するパウルゼンの反応はかなり厳しいものであった。テンニースに勝るとも劣らない酷評ぶりである。周囲に敬意を払わない不遜な態度をはじめ、思想や学説としての脆弱性、思想内容の病的性格など、パウルゼンにはいずれも「欠陥」だと思われたのである。

(3) 知的アナキズムとしてのニーチェブーム

テンニース宛の私信にとどまらず、パウルゼンは公的にもニーチェ批判を展開する。冒頭で触れた1907年論文「父親たちと息子たち」以前にも、「ニーチェ崇拝について」(1897年3月14日付)、「19世紀におけるドイツ民族の精神生活」(1900)などの評論を新聞や雑誌に寄稿し、ニーチェを「独裁的革命家」や「知的アナキスト」と批判した⁶。パウルゼンは、ニーチェの後期思想「君主道徳」を例にとりながら、ニーチェの意図や思想の特質を次のように分析する。

「この君主道徳の総体は、真偽を超越した (jenseits von wahr und unwahr) 単なる思いつきであり、善悪の彼岸 (jenseits von gut und böse) に立つ英雄でもある。現在通用しているものや一般に承認されているものの顔に一撃喰らわせたいという気持ちこそが、この思想の生みの親である。つまりこの思想は、真理や現実とは何の関係もない代物なのだ。」⁷

道徳性が欠如しているだけでなく、真理や現実とも無縁なニーチェの思想が、いったいなぜこのように受け容れられているのか。パウルゼンはその理由のひとつを、当時のドイツ人が置かれた精神状況に見出している。

「青年から大人にいたるまで、現代人は正しさを求める過剰な強制圧迫に晒されているが、このような強制圧迫もまた病理学的な異常現象の原因だと私は思っている。学校において、教会において、社会において、国家において、われわれは長年にわたって上から説教され、強制的に誤りを正されてきた。知的アナーキズムとは、こうした行為に対する主体の反動なのである。」⁸

このようにパウルゼンは、「知的アナーキズム」の原因をニーチェ思想だけに求めているわけではない。むしろ彼は、当時のドイツ社会に「主意主義」的な雰囲気蔓延していることを認め、それが「ニーチェを受容しようとするノリ (Bereitwilligkeit, womit Nietzsche aufgenommen wird)」⁹につながっていると指摘する。しかし、彼はニーチェ思想の流行を決して容認することはなかった。

「主意主義も、ニーチェの病める頭脳にかかると、最終的には、思考や論理に対する憎悪、意志だけの人間 (Nichts-als-Wille-Menschen)、野蛮崇拜にまで変貌してしまう。ただ、ニーチェ自身は決して意志の強い人間 (Willensmensch) ではなく、本質的には女性的で、影響を受けやすく、不安定で、弱々しい存在であった。それだけに彼は、力強い無制約の意志をいっそう情熱的に賛嘆する。だからこそ彼は、神経質な男性やヒステリックな女性にとってのアイドルなのだ。」¹⁰

パウルゼンは結局、知的アナーキズムとも特徴づけうる病的現象＝ニーチェブームを終わらせるためにどうすればよいか、具体的な対策を示すことはなかった¹¹。しかし彼は、世代間格差の問題、とりわけ青年世代の意識や行動を憂慮する教育学者として、ニーチェ思想の問題点や危険性を指摘しつづけたのである。

2. 教育学者としてのツィーグラールとニーチェ思想

ツィーグラールが『19世紀の精神的社会的思潮』や『フリードリヒ・ニーチェ』などの著作を執筆し、いわばニーチェ思想の「学問化」を推進した人物であるということは、すでに前節において明らかにしたとおりである¹²。そのことを踏まえつつ、本節では、ツィーグラールをニーチェ論者としてではなく、教育学者として捉え直した上で、あらためて教育学者ツィーグラールにとってニーチェ思想がどのようなものであったのかを検討したい。

(1) 教育学者としてのツィーグラール

【ヘルバルト批判】

ツィーグラールは、各地で開催された講演やシュトラーズブルク大学での講義ノートをもとに、『一般教育学』を出版した。教育学者としての彼の見解はこの著作のうちに確認することができる。端的に言うなら、ツィーグラールは反ヘルバルト派であった。「私に対す

るヘルバルト派からの誹謗中傷や破門宣告は激しさを増すばかりであろう」¹³とツィーグララーが自ら推測するほど、彼はヘルバルト教育学に対して批判的な態度を示していた。

第一の批判点は、その個人主義的な部分である。「ヘルバルトかナトルプか？」という究極の二者択一を迫られたらナトルプを選ぶだろうとツィーグララーは述べている。ナトルプといえば社会的教育学の提唱者として有名であるが、ツィーグララーも社会主義的な観点からヘルバルト教育学の個人主義的性格を批判し、逆にペスタロッチーを「教育学者のなかでもっとも偉大な社会主義者にしてプロレタリアート」¹⁴として高く評価している。

第二の批判点は、ヘルバルト教育学の思弁的・形式主義的な性格である。

「ヘルバルト教育学は筆舌に尽くしがたいほど無味乾燥なものであり、長年かけていっそう非生産的になってきた。ヘルバルト教育学は最終的には排除されるべきであり、理論も実践も、この教育学から解放されなければならない。」¹⁵

ツィーグララーはこのように述べ、思弁的・形式主義的な教育学のあり方を批判する。この点においては、ナトルプも例外ではなかった。もし実際に「ヘルバルトかナトルプか？」と問われるようなことがあれば「どちらでもない！」と答えるだろうとツィーグララーは言う。そして彼は、第三の立場としてシュライエルマッハーの名を挙げる。

「それゆえ私は最大限の敬意を表してシュライエルマッハーへと立ち返りたいと思う。というのも彼は、教育学の重要性を誰よりも早く認識し、その問題をはじめて正しく設定し、定式化したからである。」¹⁶

ツィーグララーはヘルバルト教育学を徹底的に批判した。しかしシュライエルマッハー教育学に対する高い評価からも明らかなように、ヘルバルト教育学への批判が「教育学」そのものに対する否定的な評価に直結しているわけではない。ツィーグララーが批判したのは、ヘルバルト教育学の「ヘルバルト」の部分(個人主義と形式主義)であって、「教育学」の部分ではなかったのである。

【学としての教育学への志向】

ヘルバルトやナトルプとの対比においてシュライエルマッハーを高く評価している点などを踏まえれば、教育学者としてのツィーグララーは、「思弁的教育学派」に対して批判的なスタンスをとる「精神科学的教育学派」の流れのうちに位置づけることも可能であろう。以下の引用は、ツィーグララーの構想する「教育学」のイメージがもっともよく示された箇所のひとつである。

「学問的なものは普遍的に妥当であることを要求する。では普遍妥当的な教育学(allgemein gültige Pädagogik)は存在するのだろうか？(…略…)教育という営みが、例えば気候風土や国籍、文化水準やそれに類する可変的かつ多種多様な要素に依存しているということはむろん真実であり、最終目標や手段という点においても、教育学は歴史的に、つまり例えば、生物学的にも、発生的にも、条件づけられている。しかし別の一面においては、倫理学や心理学との密接な関連から、次のようなこと

にも注意を払わなければならない。すなわち、われわれは教育学においても、普遍妥当的な要素、つまり普遍性を持つ人間的な要素を計算に入れることが許されているのである。このように考えれば、教育学は学問である (Pädagogik ist Wissenschaft) と言うことができるだろう。なぜなら、その基礎は心理学 (Psychologie) において堅固に基礎づけられ、その頂点は人間の使命についての問いを通して倫理的 (ethisch) に方向づけられなければならないからである。しかし、教育することそれ自体が重要となるがゆえに、つまり、教育の手段や方法が重要となるがゆえに、教育学は歴史的に条件づけられている。」¹⁷

ディルタイの 1888 年論文「普遍妥当的教育学の可能性について」を連想させるこの文章から、ツィーグラーが次の 2 点を主張していることは明らかであろう。すなわち、①「普遍妥当的な教育学」は存在しないということ、②しかし歴史的な制約を受けつつも「学としての教育学」は確実に存在するということ、である。「教育学は学問である」というヘルバルト以来の認識は、ツィーグラーにおいても共有されているのである。

(2) 『一般教育学』におけるニーチェへの言及

ツィーグラーの「教育学者」としての姿は以上に確認したとおりである。次なる課題は、教育学者としての彼がニーチェ思想をどう見ていたのかという点の解明である。そこで、教育学者として執筆した著作『一般教育学』において、ツィーグラーがニーチェ思想についてどう語っているかを確認してみると、ニーチェに関する著作を出版している人物とは思えないほど、そこでのニーチェへの言及は限定的なものであることが明らかとなる。『一般教育学』におけるニーチェへの言及は、例えば次のようなものである。

「人間はただひとり自分と向き合うだけの孤立した存在ではない。この世にロビンソンは存在しない。ルソーのエミールですら何らかのかたちで人間を必要としている。人間とはそういった存在ではなく、ある社会の一員であり、社会なしでは考えられない存在である。それゆえ倫理学は普遍的な福祉について語るものであり、そしてまさにこの点で、社会主義は個人主義に対して徹底的に闘いを挑むのである。というのも後者は、全般的に見て、人間を人間たらしめるという自らの使命を果たさず、ただ一面的に上流階級のことだけしか念頭に置かず、ほかの全ての人々を単なる『手先』としか考えないからである。ニーチェの君主道徳もこの問題を克服できていない。要するに、全体が幸福になるべきであり、人間は誰か他の人のための単なる手段であってはならず、誰もがそれぞれ人間らしく生きる権利を持っているのである。」¹⁸ (※下線は引用者)

この箇所以外にも、例えば『『超人』カースト制度』¹⁹、「ニーチェの君主的人間」²⁰、「ニーチェの『非道徳主義』」²¹ など、個人主義に対する批判のなかで何度かニーチェの名前や用語が確認できる。だが、これらはツィーグラーの批判対象である個人主義者たち

がニーチェ思想を好んで使用しているためになされた言及であって、ニーチェを積極的(この場合は批判的)に論じようという意図がツィーグラールにあるわけではない。上述の引用においても、わずかに下線部の文章だけが「ニーチェ」に関係している程度である。

また個人主義批判の文脈以外でも、ニーチェの造語「教養俗物(Bildungsphilister)」をツィーグラール自身が借用するか²²、大ヒットとなったラングベーンの『教育者としてのレンブラント』を引き合いに出しながらニーチェの影響力に触れている程度で²³、ニーチェ思想へのそれ以上の言及は見当たらない。『一般教育学』の執筆者=教育学者としてのツィーグラールにとって、ニーチェはことさら論じるべき対象ではなかったのである。

たしかにツィーグラールは『フリードリヒ・ニーチェ』においてニーチェ思想を詳細に論じている。しかしそこでのツィーグラールの関心は、ニーチェ思想の学問的な解明に向いているのであって、教育学的考察に向いているわけではない。『フリードリヒ・ニーチェ』と『一般教育学』という両著の存在が象徴しているように、ニーチェ思想と教育学は、少なくともツィーグラールにおいては、ほとんど交わることはなかったのである。

小括

以上、ドイツ教育学におけるニーチェ受容の前史として、パウルゼンとツィーグラールという2人の教育学者に注目し、彼らによるニーチェ思想の取扱いについて考察した。その際、教育学者として有名なパウルゼンについては、従来あまり知られることのなかったニーチェ批判の詳細を中心に、また第2章でニーチェ論の検討を終えているツィーグラールについては教育学者としての主張や立場を中心に、やや紙幅を割いて検討してきた。その結果明らかとなったのは、ニーチェ思想に対する2名の教育学者の冷遇ぶりであろう。すなわち、一方でパウルゼンは、青年世代に悪影響を及ぼしているという理由からニーチェ思想を「批判」し、他方、教育学者としてのツィーグラールは、ニーチェ思想を「受容」しなければ「批判」もしなかったのである。

ニーチェブームやニーチェ思想に対する批判的な態度は、青年教育に従事する学校教師においても共有されていた。例えばバウマイスターという教師は、ニーチェを「思春期青年の危険な誘惑者(ein gefährlicher Verführer der heranwachsenden Jugend)」と見なし、1890年代以降の「ニーチェ礼賛」に反対の態度表明をすること、また「超人」などの魅惑的なキャッチフレーズや「エキセントリックな個人主義」に惑わされているギムナジウムの生徒を現実世界に連れ戻すことが「良心的な教師の義務」であると訴えた²⁴。

このように、19-20世紀転換期頃のドイツ教育学において、ニーチェ思想は到底「受容」の対象ではあり得なかった。少なくとも1907年という年が訪れるまでは、ニーチェ思想はドイツ教育学の「圏外」に位置していたのである。

注

◆第1節

- * 1) テンニースのニーチェとの関わりに注目した研究者としてルドルフの名を挙げることができる。Rudolph,G.: Friedrich Nietzsche und Ferdinand Tönnies. Der 'Wille zur Macht' widerlegt von den Positionen eines 'Willens zur Gemeinschaft'. In: Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Berlin 1990, S.107-139. 彼は従来ほとんど無視されてきたテンニースの2編のニーチェ論を1990年にReprint版として紹介した。また同書に収録された論文のなかでルドルフは、テンニースのニーチェ論を「徹底的な批判的解体が繰り返された著作のうち、一時的にニーチェに熱狂した人物が試みた最初で唯一のニーチェ批判」(Rudolph, S.138)として位置づけ、その資料的意義を強調している。
- * 2) Tönnies,F.: Nietzsche-Narren. In: „Ethische Cultur“ und ihre Geleite. Berlin 1893, S.5-29.
- * 3) Tönnies,F.: Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Leipzig 1897.
- * 4) Tönnies,F.: Selbstdarstellungen. In: Schmidt,R.(Hrsg.): Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen. Bd.3. Leipzig 1922, S.199-234., S.203.
- * 5) Vgl. Weichelt,H.: Zarathustra-Kommentar. Leipzig 1922, S.218.
- * 6) Tönnies1922, S.204-205.
- * 7) Vgl. Tönnies1922, S.215.
- * 8) Tönnies1922, S.206.
- * 9) テンニースとパウルゼンの両者が知り合った直接のきっかけは、パウルゼン主催のカント演習(『純粹理性批判』講読)にテンニースが参加したことであった。テンニースの報告によれば、パウルゼンはしばしば若い学生を「ドロシー通りにある古風なベルリン料理の店カフェ・スイスに連れて行き、グラスビール片手に2時間ほど語り合うのを習慣としていた」(Tönnies1922, S.206)という。テンニースもこうした学問的・人間的な交際を通してパウルゼンの魅力を感じたものと思われる。
- * 10) Tönnies,F. u. Paulsen,F./ Klose,O. u.a.(Hrsg.): Briefwechsel 1876-1908, Ferdinand Tönnies und Friedrich Paulsen. Kiel 1961., S.74.
- * 11) 大石紀一郎・大貫敦子・木前利秋・高橋順一・三島憲一編『ニーチェ事典』弘文堂、1995年、710-711頁。
- * 12) また同年に送られた別の手紙には次のように書かれている。「(…略…)ただニーチェの病気はかなり重症です。彼がまもなく死んでしまうことを覚悟しておく必要があるかもしれません。残念なことですが。」(Tönnies: Briefwechsel, S.98.)
- * 13) 『ニーチェ事典』、712頁。
- * 14) 同上。
- * 15) Tönnies: Briefwechsel, S.185-186.
- * 16) Tönnies1922, S.214.

* 17) 1883年の出来事についてテンニース自身は次のように振り返っている。「1883年は再び私の運命を変える年となった。5月8日に愛する父親が死亡し、親しかった叔父も同時期にこの世を去ったのだ。(…略…)パウルゼンが私をベルリンに呼び寄せた。パウルゼンは妻の突然の死に相当ショックを受けていた。それから数週間後、私はベルリンからスイスに赴いた。わずかな時間だったが私はスイスでルー・ザロメ婦人およびパウル・レー博士という2人の興味深い人物と一緒に過ごした。ただ2人はかつての友人ニーチェと激しく仲違いしていた。結局この2人のもとを離れて数日間ジルス・マリアに滞在したのに私がニーチェと個人的に知り合うことができなかつた原因のひとつはこれである。ただジルス・マリアで私は何度もその孤独な隠者に遭遇したし、視力の弱い彼の両目から刺すような視線が私に向いているのもわかっていた。」(Tönnies1922, S.213-214)

* 18) たしかにテンニースは熱狂的なニーチェファンであったが、小心者の一面ものぞかせている。「私は一度ナウムブルクへ彼を訪ねようとしたが、彼が不在だったため、品のよい彼の母親と親しく会話をさせてもらった。ときおり私は彼に長い手紙を頭の中で書いた。実際に手紙を書いたり手紙を郵送したりすることは臆病な性格の私にはできなかつた。」(Tönnies1922, S.214)

* 19) Tönnies1893, S.5.

* 20) Ibid., S.22.

* 21) Ibid., S.7.

* 22) Tönnies1897, S.88-89.

* 23) 『ニーチェ事典』、21頁。

* 24) 「価値転換(Umwertung)」(Tönnies1893, S.VII)が1990年Reprint版では Unwertung と誤表記されている(Tönnies1990, S.10)。

* 25) Tönnies1897, S.VII. u. S.14-15.

* 26) Ibid., S.VI.

* 27) Tönnies1893, S.6.

* 28) Ibid., S.6. u. S.21. u. S.27.

* 29) Tönnies1893, S.5.

* 30) Ibid., S.10.

* 31) むろんテンニースにとってニーチェの後期思想は批判すべき対象であったが、一方で彼はニーチェ思想が文学青年たちによって都合よく利用されているというニーチェのいわば被害者的側面をも指摘している。テンニースによれば、多くの信奉者がニーチェの道徳批判を恣意的に解釈し、「道徳など笑うべきモノである」とか「自由精神に道徳は適用されない」といった自分たちに都合のよいスローガンを並べたという(Tönnies1893, S.10)。テンニースにとってニーチェブームは、「道化師」である文学青年たちがニーチェを「マネキン人形」のごとく操る現象と認知されたのである(Ibid., S.22)。

* 32) Tönnies1897, S.VII.

◆ 第2節

* 1) Türck, H.: Fr.Nietzsche und seine philosophischen Irrwege. Dresden 1891.

* 2) 「アルコール中毒患者やモルヒネ中毒患者」に見られる症状をテュルクは次のように説明する。「最初はきわめて繊細かつ洗練された道徳的性向が喪失し、続いて段階的に道徳的な崩壊が進行していき、例えば母性愛のようなもっとも単純かつ根源的な利他的(愛他的)な性向までもが消滅してしまう。その結果、場合によっては、破壊欲、血に飢えた残虐かつ快楽的な本能だけを持ち合わせた野獣性だけが人間に残されることになる。」(Türck, S.5)

* 3) 「精神錯乱者」の症状をテュルクは次のように説明する。「(…略…)十分な判断力を持ち合わせているように見えても、(破壊本能として現れる)衝動的ないし本能的な精神錯乱や(道徳的本能の破滅として現れる)道徳的な精神錯乱が認められることも付言しておくべきだろう。この点に関しては、精神病に関する教科書を開いて、『アルコール依存心理』、『遺伝性ノイローゼ(遺伝による精神異常)』、『(本能の)衝動性』、『道徳的な精神錯乱』といった項目を参照されたい。」(Türck, S.6)

* 4) Türck, S.9.

* 5) Ibid., S.27.

* 6) Ibid., S.71-72. 誇大妄想の例としては、「私の野心は、他の誰かが一冊の書物の中で言うこと、他の誰かが一冊の書物の中でも言わないことを、十の文章で言うことである」とか、「私は人類に、人類が所有するもっとも奥深い書物、私のツァラトゥストラを与えた」というニーチェの発言が挙げられている。

* 7) Türck, S.68.

* 8) Ibid., S.59.

* 9) ブダペスト生まれのユダヤ人。本名は Max Simon Südfeld。ノルダウに関しては、例えば以下の論文を参照。イェンス・マルテ・フィッシャー／村山雅人訳「デカダンスと変質—世紀末の批評家としてのマックス・ノルダウ—」J・A・シュモル＝アイゼンヴェルト編著／種村季弘監訳『論集世紀末』平凡社、1994年、124-148頁。貝澤哉「デカダンという病—世紀末ロシアとノルダウの『退化』—」早稲田大学比較文学研究室編『比較文学年誌』第30号、1994年、37-60頁。鎌倉芳信「自然主義文学とマックス・ノルダウ『墮落論』の読まれ方—」国文学言語と文芸の会編『言語と文芸』第119号、2002年、60-74頁。

* 10) Nordau, M.: Entartung, 2Bde. Berlin 1893.

* 11) Nordau 1893-Bd.1, S.VII.

* 12) 例えば「世紀末(Fin de siècle)」に特徴的な社会環境「大都市(Großstadt)」などは、変質者の爆発的増加をうみやすいという点において、マラリア熱が伝染する湿原と同レベルの危険度を有しているなどと論じられている(Nordau 1893-Bd.1, S.65)。

* 13) Nordau 1893-Bd.1, S.VIII.

* 14) Ibid., S.VII.

* 15) Nordau 1893-Bd.2, S.303-398.

* 16) Ibid., S.358.

* 17) Ibid., S.360-361. ノルダウはこれを「知的サディズム(intellektuellen Sadismus)」(Nordau 1893-Bd.2, S.385)と呼んだ。

* 18) Ibid., S.398.

* 19) Ibid., S.561.

* 20) シュタイナーは、ニーチェ資料館やニーチェの妹エリーザベトとの関わりも深かった。もともとシュタイナーはゲーテ・シラー資料館の編集員であったが、エリーザベトからの依頼を受けるかたちで、設立もないニーチェ資料館(1894年創設)の仕事を手伝っていた。ニーチェの蔵書目録や文献目録の編纂、ニーチェ哲学についての個人教授など、シュタイナーは精力的にエリーザベトに尽力するが、ニーチェ全集の編集方針の食い違いなどから1898年夏に絶交した。シュタイナーとニーチェ資料館との関係については、以下の論文に詳しい。恒吉良隆「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(II)―エリーザベトとルドルフ・シュタイナー―」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第63号、1999年、91-112頁。

* 21) Steiner,R.: Friedrich Nietzsche. Ein Kämpfer gegen seine Zeit. Weimar 1895.

* 22) Steiner,R.: Nietzscheanismus. In: Litterarischer Merkur 12 Nr.14. (2. April 1892) S.105-108.

* 23) Steiner,R.: Die Philosophie Friedrich Nietzsche's als psycho-pathologisches Problem. In: Wiener klinische Rundschau 14 Nr.30-31. 1900, S.598-600, S.618-621.

* 24) Steiner,R.: Friedrich Nietzsche's Persönlichkeit und die Psycho-Pathologie. In: Wiener klinische Rundschau 14 Nr.37 1900, S.738-741.

* 25) Steiner1892, S.108.

* 26) Steiner1900-a, S.598.

* 27) Ibid., S.618.

* 28) Steiner1900-b, S.740.

* 29) シュタイナーは結論部で次のように述べる。「彼(※引用者注：ニーチェ)の哲学思想が自己観察に依拠したものであるという事実と、この自己が内部において調和するのではなく分裂するものであったというもうひとつの事実、この2つの事実を結びつけて考えるとき、われわれはニーチェの多くの論述に関してはじめて完全なる明晰さを獲得することができるのである。」(Steiner1900-b, S.741)

* 30) Möbius,P.J.: Ueber das Pathologische bei Nietzsche. Wiesbaden 1902. メービウスのニーチェ論も含め、ニーチェの精神病に関しては以下の著書に詳しい。小林真『ニーチェの病跡―ある哲学者の生涯と旅・その詩と真実―』金剛出版、1999年。

* 31) Bölsche,W.: Die Gefahren der Nietzscheschen Philosophie. In: Neue Deutsche Rundschau 5 1894 Reprint 1970, S.1026-1033, S.1027.

* 32) Zerbst,M.: Nein und Ja ! Antwort auf Dr. Hermann Türck's Fr. Nietzsche und seine philosophischen Irrwege. Leipzig 1892.

* 33) Zerbst, S.VI.

* 34) Ibid., S.VII.

* 35) 以下の文章は、結論部からの引用である。「さて最後にもう一言だけあなたに言うておこう、テュルク博士！―あなたは、相当古くさい精神医学の入門書から『ニーチェの場合』をでっち上げるのではなく、むしろこの哲学者の著作そのものを手に取り徹底的かつ詳細に学ぶべきだったのだ。„moral insanity“ や『遺伝』について作り話をするのではなく、『ツァラトウストラ』や『悦ばしき知識』を読むべきだったのだ。」(Zerbst, S.83-84)

* 36) ツェルプストはニーチェについて次のように語っている。「私は大いなる憧憬の念に襲われた。(…略…)ある憧れが！何に対する憧れか？ひとりの『新しい神！』に対して。だがこの憧れは、星空に君臨する神に対してのものではない。そうではなく、元気で朗らかな地上の神に対して、精神の国のジークフリートに対して、力強く大はしゃぎする竜退治に対する憧れである！私はこのような者をフリードリヒ・ニーチェのうちに見出した。」(Zerbst,S.2) 反ニーチェ派はこの箇所をもとにツェルプストをもっとも典型的なニーチェ派と見なした(Stein1893, S.3, Hecht1899, S.486, Henne am Rhyn1899-b, S.108)。

* 37) 「テュルク博士の小冊子で私が一番気に入らないのは、彼(※引用者注：ニーチェ)への反駁を軽く見ていることである」(Zerbst,S.V)ツェルプストは冒頭でこのように述べている。ツェルプストに言わせれば、テュルクのニーチェ論は、例えば「道徳と戦うことは反道徳的である」といった類の単純な論証手続きをとっている点において、また直接ニーチェの著作に依拠せずに不確かな引用を行っている点においても批判されなければならないという。しかし、ツェルプストが想定した最大の批判点は、テュルクがニーチェを精神病理学的な観点から批判したということにあった。

* 38) Duboc1897, S.45.

* 39) 「退官した教授であるニーチェと『ツァラトゥストラ』や『善悪の彼岸』の著者は、本書においては完全に区別される」(Henne am Rhyn1899-b, S.III)というのである。

* 40) Henne am Rhyn1899-b, S.IV.

* 41) 例えばノルダウの次のような発言はその一例である。「ニーチェとともに『自由に徘徊する好色な野獣』に熱狂している連中に対して、われわれはこう叫ぼうではないか。『礼儀ある社会から出ていけ！われわれの世界から遠く離れたところで徘徊するがよい！好色な野獣には原野がお似合いだ！そこで満足しろ！(…略…)われわれの住む世界に好色な野獣のための場所など用意されてはいない。それでも敢えてお前がこの世界にとどまると言うのなら、棍棒で容赦なく殴り殺されるのを覚悟しておくがよい。』」(Nordau1893-Bd.2, S.556-557)

◆第3節

* 1) Grimm,E.: Das Problem Friedrich Nietzsches. Berlin 1899.

* 2) Ziegler, Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin 1899.

* 3) Ziegler,Th.: Friedrich Nietzsche. (Vorkämpfer des Jahrhunderts. Eine Sammlung von Biographien, Erster Band) Berlin 1900.ツィーグラー自身の申告によれば、この著作は「1897/8年の冬学期にシュトラースブルク大学において開講されたフリードリヒ・ニーチェに関する講義を一言一句ほぼ忠実に再現したもの」(Ziegler1900,S.VII)であり、前年出版の自著『19世紀の精神的社会的思潮』のために用意された「最初の補足」(Ibid, S.IX)である。

* 4) Grimm, S.245-246.

* 5) Ibid., S.247.

* 6) Ibid., S.250.

* 7) Ziegler1900, S.2-3.

* 8) Ibid., S.3.

* 9) Ziegler1899, S.602.

* 10) Vgl. Ibid., S.599.

* 11) Ibid., S.603.

* 12) ツィーグラールによれば、「精神的に死んだ状態のまま生き続けている」というニーチェ自身の悲劇的運命もまたニーチェブームの一因であるという (Ziegler1900, S.7)。

* 13) ツィーグラールは次のように言う。「このように考えれば、この反時代人 (Unzeitgemäße) が同時代的 (zeitgemäß) にならず、世間が彼に追従しない方がむしろ不思議と言わなければなるまい！」 (Ziegler1899, S.604)

* 14) Vgl. Grimm, S.245-246. Ziegler1900, S.2.

* 15) 当然のことながら、ある思想家の「最終期」を設定するためには、その人物の思想形成プロセスが終了—通常はその思想家が死去—していなければならない。

* 16) Ziegler1900, S.147.

* 17) ニーチェブームをめぐる 1890 年代の喧噪をグリムは次のように描写する。「ニーチェの著作を手に取り、すっかり惚れ込み、心を奪われる人がいる一方で、ある人はニーチェに異論を唱え、憤慨している。ニーチェに賛成なのか反対なのか (für oder wider Nietzsche) をめぐって大論争が繰り広げられている。」 (Grimm, S.2)

* 18) Grimm, S.4.

* 19) Ziegler1900, S.197. このように語られた直後、ヘンネ・アム・リューンの『反ツァラトゥストラ』は「知性を欠いた出来損ないの軽騎兵並の攻撃」であるとしてツィーグラールによって厳しく批判されている。ニーチェ思想の学問化は、反ニーチェ派の批判的克服でもあったのである。

* 20) このような学者としての自覚は、例えばニーチェ思想に対する精神病理学的な関心の否定にも繋がる。例えばグリムは、思想家や哲学者としてのニーチェを問題にする限り病気のことは関係ないとの立場をとっている。『しかしそうは言ってもやはりニーチェは狂気に陥ったのだから、突発した病気の症状が彼の著作にも現れていると考える方がむしろ自然じゃないかね?』—こういった問いかけに対しては次のように回答しよう。すなわち、このようなニーチェの問題 (das Problem Nietzsches) と問題としてのニーチェ (Nietzsche als Problem) とを混同するという事態は何としても回避しなければならないのだと。軽率な行動は慎むべきである。彼の最初の著作と彼の発病とのあいだに存するのは 18 年という期間だけである! だいたい彼の病気のことを引き合いに出すことがいったい何の役に立つというのか? (Grimm, S.4)

* 21) Horneffer, E.: Nietzsche-Vorträge. Leipzig 1908, S.34.

* 22) Ibid., S.33-34. 1890 年代以降のニーチェブームにおいてニーチェが「教祖」のような扱いを受けていることに言及した上で、ホルネッファーは次のように述べる。「ニーチェが一種の教祖と見なされるのも理解できないことはない。(…略…)しかし、にもかかわらず、彼は断じて教祖ではない。教祖なら信者を求めるだろう。そして自らの考えを絶対的な真理と見なし、無条件の服従や盲目的な信仰を要求するであろう。だがニーチェは全然違う。ニーチェは学問研究者であり、何世紀にも及ぶ学問研究の歴史を背負っているのだ。」 (Ibid., S32)

* 23) 冷静な議論とは言っても、ニーチェが発狂直前に執筆した『反キリスト』に対しては「まったく病的な著作(ganz krankhaftes Werk)」(Ziegler1899, S.598)と厳しい評価を与えている。

* 24) Ziegler1900, S.202.

◆第4節

* 1) Paulsen,F.: Väter und Söhne.(1907) In: Paulsen,F. (Hrsg. v. Spranger,E.): Gesammelte Pädagogische Abhandlungen. Stuttgart und Berlin 1912, S.497-516., S.504.

* 2) ノールはパウルゼンの1907年論文について次のように言及している。「(…略…)青年運動はヴァンダーフォーゲルによってようやく始まったばかりであった。1896年、ベルリン郊外のシュテークリッツにおいてその運動がどのように始まったかは、ブリューアーのヴァンダーフォーゲル史にもっとも的確に表現されている。また当時、年長世代がこの動きをどのように受け取っていたかが顕著に描かれているのは、1907年に書かれたフリードリヒ・パウルゼンの論文『父親たちと息子たち』である。パウルゼンはこの二つの世代の断絶を解き明かそうとした。しかし彼は青年に対して否定的な側面しか見ておらず、それゆえ青年の擁護者であるルートヴィヒ・グリュットやエレン・ケイは心の奥ではパウルゼンに背を向けていた。」(Nohl1957,S.14; 邦訳版『ドイツの新教育運動』明治図書、98頁)

* 3) Paulsen1907 zit.n. 1912, S.504.

* 4) Tönnies,F. u. Paulsen,F./ Klose,O. u.a. (Hrsg.): Briefwechsel 1876-1908, Ferdinand Tönnies und Friedrich Paulsen. Kiel 1961., S.320.

* 5) Paulsen: Briefwechsel, S.321.

* 6) Paulsen,F.: Zum Nietzsche-Kultus. (1897) In: Paulsen,F.: Zur Ethik und Politik. Gesammelte Vorträge u. Aufsätze. Bd.1. (Deutsche Bücherei. Bd.31.) Berlin 1905, S.54-58., S.55.

* 7) Ibid.

* 8) Ibid., S.56.

* 9) Paulsen,F.: Das geistige Leben des deutschen Volkes im neunzehnten Jahrhundert. (1900) In: Zur Ethik und Politik. 1905, S.59-66., S.61.

* 10) Ibid.

* 11) むしろパウルゼンはニーチェブームを理由にした思想弾圧に危機感を覚え、ひとりの大学教授として激しく抵抗する。「ではいったいこの症状に効く治療薬として何が考えられるだろうか?これまで以上に吟味を重ね、これまで以上に監督を強め厳しく強制することが、こうした精神の持ち主たちの好き勝手な言動を鎮圧するための正攻法だと思われている。とりわけ現在、あらゆる好意的な心情から、新聞雑誌各紙はこう呼びかけている。すなわち大学を規律化し、教授陣の職務上の義務を厳しくして、よい思想信条を報償する一方で、わるい思想信条には懲戒処分を下し、きわめて厳格な選別を実施すべきである—そうすれば国にも静寂が訪れるであろうと。—ああ、何たる蒙昧。聖画像や聖画像崇拜が増殖すれば、聖画像破壊主義者はなおさらそうした強制力を排除したいと思うものなのに!」(Paulsen1897 zit.n. 1905, S.58)

* 12) ツィーグラーは、テュービンゲン大学で神学、哲学、古典語学を学び、バーデン・バーデンやシ

シュトラースブルクのギムナジウムで教職をつとめ、後に哲学及び教育学の私講師としてシュトラースブルク大学に赴任、1886年には同大学の哲学及び教育学の正教授を任命され、1911年までその職にあった。1914年8月の第一次世界大戦勃発後は、義勇的にフランクフルト実科高等学校でドイツ語やラテン語、歴史の教鞭をとり、まもなく同校師範学科長に就任している。西部戦線へ巡回講演中であつた1918年に重病を患い、同年9月、野戦病院にて死去した。

* 13) Ziegler,Th.: Allgemeine Pädagogik. Sechs Vorträge. Leipzig (1901)1905², S.VI.

* 14) Ibid., S.5.

* 15) Ibid., S.2.

* 16) Ibid.

* 17) Ibid., S.4-5.

* 18) Ibid., S.9-10.

* 19) Ibid., S.15.

* 20) Ibid., S.16.

* 21) Ibid., S.53.

* 22) Ibid., S.68.

* 23) Ibid., S.97.

* 24) Baumeister,A.: Friedrich Nietzsche, ein gefährlicher Verführer der heranwachsenden Jugend. In: Lehrproben und Lehrgänge aus der Praxis der Gymnasien und Realschulen 70 1902, S.1-19., S.2.

第3章 「教育学者ニーチェ」の発見

本章においては、エルンスト・ヴェーバーの著作『若きニーチェの教育学的思想』¹⁾に注目し、彼によって提示された「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの具体的な内実を検討するとともに、ヴェーバーによるニーチェ受容の同時代的意味を解明することが主な課題となる。第1節では、ヴェーバー自身が「教育学」をどのように構想していたのかについて考察する。

第1節 E.ヴェーバー教育学の特質

1. ヴェーバーのプロフィールと研究動向

ヴェーバーは1873年7月5日、農家の息子として誕生した。1892年に民衆学校教師の職に就き芸術教育を担当するかわら、1902年からの3年間はイェナ大学やライプツィヒ大学で哲学、教育学、美学を修め、1907年には『教育学の基礎科学としての美学』という大著を出版した。これは新教育運動のひとつである芸術教育運動からも注目を浴び、彼の代表作と目された。その後もヴェーバーは教師として常に教育実践に関わりつつ、『芸術教育と教育芸術』(1914)など数多くの授業論や教師論を発表、1948年にその生涯を終えた²⁾。

このような経歴を持つヴェーバーに対する研究関心は、これまでほとんど教育方法学的なものであった。すなわち、彼の代表作『教育学の基礎科学としての美学』や『芸術教育と教育芸術』を主な考察対象としつつ、芸術教育運動で一定の実績を上げたヴェーバーの教育方法論、人格を重視した教師論、授業を「芸術」に見立てた教育芸術論などが集中的に論じられてきたのである³⁾。また具体的な授業方法論や教育実践に特化されたこのようなヴェーバーへの関心は、芸術教育運動の枠内で活躍した教育実践家ないし理論的指導者という彼の歴史的立場づけをも規定してきた⁴⁾。

しかし当のヴェーバー自身が抱いていた問題関心や意図を明らかにしようとするとき、われわれは従来の教育方法学的な研究手法⁵⁾から距離を取らなければならない。すなわち、ヴェーバーが置かれていた当時の状況を考慮し、代表作と目される著作以外の文献も詳細に分析するという、歴史研究的なアプローチが重要なのである。そこで本節では、ドイツ

教育界が抱えていた問題状況を確認しつつ、これまでの教育方法的なアプローチでは取り上げられなかった諸論文、すなわち1905年論文「もう一度『実験教育学』」⁶や1910年論文「キャッチフレーズ教育学」⁷にも目を向け、ヴェーバーの教育学構想を解明したいと考えている。この試みは同時にまた、いわゆる新教育運動へと単純に回収されないヴェーバー教育学の新たな一側面を明らかにすることにもなるだろう。

2. ヴェーバーの人格的教育学—教師の地位向上を求めて

19-20世紀転換期以降のドイツにおける多種多様な教育改革傾向のうちに共通項を見出すなら、それは古い伝統的な学校教育に対する批判的意識ということになるだろう。知識伝達型の教育スタイルが批判され、教師—生徒間の人格的な交わりの重要性が見直されたのである。この意味で新教育運動は、いわば教材中心主義から人間中心主義への転回であった。ヴェーバーの教育論や教師論にも同種の見解が見出される。例えば1909年論文「教師の人格(Lehrerpersönlichkeit)」⁸には次のような見解が示されている。

「教育家が形成しようと試みるものは2種類ある。それは人間と教材である。ただ教育学的な形成活動の最終目標は常に人間である。教材作成の本来の目標も教師にとっては人間形成である。授業用資料の作成は、目的のための単なる手段、すなわち人間形成という最高位に位置する職務内容のなかの下位目標にすぎない。」⁹

教師の眼差しは、教えるべき知識の詰まった教材だけにではなく、目の前にいる人間＝子どもにも向けられなければならない。教材よりも人間を重視するという新教育運動的な見解に基づきつつヴェーバーが展開したのは、教師の人格を核としたいわゆる「人格的教育学(Persönlichkeitspädagogik)」であった。あらゆる真の教育活動を「成長しつつある人間に対して成熟した人間が及ぼす影響作用」と定義づける彼にとって、教育行為の唯一の担い手は「教育者や形成者の人格」にほかならなかったのである¹⁰。

ヴェーバーのこのような主張を教育方法学の専門領域とも言うべき「教師論」の枠内で解釈すれば、例えば「よりよい授業の成立にとって大切なのは教師の人格である」といった教育方法論や現代的意義が導き出されるのかもしれない。荒巻敦は同じ1909年論文の解読から次のような帰結を導いている。

「このようにみてくると現在の行政機関による教師への管理・締め付けが進むなかで新たな理想的教師像が模索されている現在においても彼(※引用者注：ヴェーバー)の教師論から学ぶべきことがあるように思われる。彼の求める教師像とはいわば教育芸術家(pädagogische Künstler)であった。(…略…)真の教育者の性質は純粹で力強い人間性に基づいているというのである。」¹¹

しかし当時のドイツ教育界が置かれていた状況、とりわけ教師の社会的地位を考慮すると、上述したヴェーバーの主張には別の一側面が見えてくる。

同一論文においてヴェーバーは次のように言う。「全身全霊をかけて教材に忠実であることを目指す教師は、(…略…)教材の奴隷となり、選択や行動の自由を失い、束縛に苦しみ、終わりなき日常に恐れおののくものだ」¹²。これは「教材」を重視する旧来型の教師に対する批判として読むことも可能であるが、じつは当時のドイツにおいてはこうした教師の姿が一般的だった。「辛抱、辛抱、また辛抱」と表現される教職に対するイメージが「哀れな『先生』に対する同情」を惹起したとヴェーバーは言う¹³。また「教材の奴隷」たる教職への世間の反応は「同情」から「軽蔑」へと容易にシフトする。ヴェーバーはこの1909年論文の冒頭で、エルンスト作の喜劇「教育者としてのフラクスマン」を観劇したときのエピソードを紹介しているが、「観客席が大爆笑に包まれた」というシーンを次のように再現描写している。

「まずは『先生』がインタビューされたときの模様に注意深く耳を傾けてみよう。
『しかし毎回ただ繰り返し同じ内容を教えていて、かなり退屈じゃないですか？』
『せいぜい子どもの興味を惹くだけのモノに、機知に富んだ人間が一生涯つきあえますか？結局は自分自身が子どもっぽくなりませんか？』
『あなたはほとんど命懸けでいつも腹を立てているわけでしょ？うちのフリッツのことを考えるだけで私なんかもう！私は教師なんかには絶対なりたくないわ！』

ドイツの平均的なブルジョア市民層がイメージする教師の日常はだいたいこんな感じだろう。ただひたすら繰り返される単調さ、何千もの砂粒でキシキシ音を立てる機械仕掛け、それはオイルがなければ到底耐えることができないほどだ。

そして今、突然われわれの前に、学校教師(Schulmeister)より高等な存在はいないと信じ込ませようとする者が登場する—誰が笑わずにいられようか！—地上階の観客席のあちこちから、二階席から、階上席から、さらには『天井桟敷』から、笑い声があがる。学校教師—ハッハッハッハ……！」¹⁴

このように、当時の教師の社会的地位は低いものであった¹⁵。こうした歴史的背景にヴェーバーの教師論を再定位するとき、そこには彼自身の別の意図が見えてくる。

ドイツの新教育運動において優勢を占めた「『子どもから』の教育学」の意味内容を分析した小林万里子¹⁶によれば、「ハンブルク学校改革運動における『子どもから』の教育学は、教師の側からみた場合、公立民衆学校制度内でほとんど権限を認められていなかった教師たちの存在意義をアピールするという意味をも含み込んでいる」¹⁷という。この分析結果を敷衍すれば、例えばヴェーバーの「あらゆる教育的な作用においては、形成され教育されるべき存在だけではなく、また教育プロセスを喚起するべき教材だけでなく、この全ての仕事を果たす人間、すなわち教師の人格が重要となる」¹⁸という主張の解釈枠組みは、もはや教育方法論的なものに限定されないだろう。むしろ「教師の人格」をことさら強調するヴェーバーの真の意図は—「教師の人格」よりも「教師の人格」という傍点の打ち方こそ相応しい—教師の地位向上であったと解釈できないだろうか。

3. 新教育運動への批判—1910年論文「キャッチフレーズ教育学」より

よりよい教育の実現を目指して、そして何よりも教師の地位向上を求めて、ヴェーバーは「教師の人格」を根幹に据えた教育理論を打ち立てた。この教育理論に「教育学」の名を与えるなら「人格的教育学」となり、その理論に基づきつつ展開された実際の教育運動を挙げるなら「芸術教育運動」となるだろう。レンナーや荒巻の指摘を待つまでもなく、ヴェーバーは芸術教育運動にとって重要な存在だったのである。

だが、結果としてヴェーバーの教育理論が芸術教育運動のなかで重要な役割を演じたという歴史的事実と、当時ヴェーバーが実際に何を意図していたのかは、必ずしも一致するわけではない。果たしてヴェーバーの教育学構想は芸術教育運動に完全に回収されてしまうものだったのだろうか。このように問うのは、ヴェーバーが発表した諸論文の中に、今日われわれが新教育運動と呼んでいる多種多様な教育改革動向に対する批判的な見解を認めることができるからである。とりわけ1910年に発表された論文「キャッチフレーズ教育学(Schlagwörterpädagogik)」は注目に値する。

「子どもから(vom Kinde aus)」という言葉に代表されるように、新教育運動の特徴のひとつに、多彩なスローガンやキャッチフレーズの使用を挙げることができる。「芸術教育」、「労作学校」、「人格教育」、「作業教育」、「公民教育」。こうした標語のもとに教育学者や教師たちが結集したのである。その意味で、スローガンやキャッチフレーズが現実を動かす推進力としての機能を果たした点は無視できないだろう。しかしヴェーバーはこれらを「キャッチフレーズ教育学」と名づけ、最終的には「あらゆるキャッチフレーズ教育学を撤廃せよ！」¹⁹というラディカルな要求を突きつける。では、いかなる点が批判の対象となったのだろうか。例えばヴェーバーはキャッチフレーズ教育学の弊害を次のように描写する。

「凄まじい狂気のコースはすでに始まっている。最近では、ただスケッチさせられたり、ただカンナで削らされヤスリで磨かされたり、ただ遊ばされ実験させられたり、ただ正字法や文法の練習ドリルをやらされたり、ただ歌わされたり、泳がされたり、あるいは顕微鏡で観察させられたりしている。

ああ、このようなキャッチフレーズ教育家の手に落ちた哀れな実験用モルモットたちよ！キャッチフレーズ教育家の手によって子どもたちの手足は、脱臼し、筋違いになり、歪みを生じ、退化しているではないか。もはや有機的な成長はなく、全身を考慮した健康かつ精神的な体操も見込めない。なぜなら、それこそがこの教育経営の特徴だからである。全部がスポーツに、手足バラバラで行う不自然なトレーニングになる。もちろんその他すべてを犠牲にして！ふくらはぎは不恰好に膨らみ、胸部は収縮する。あるいは、上腕二頭筋や頸筋が極端に鍛えられる代わりに、下肢は歪んで痩せこけたままとなってしまう。全体を見る視野が欠如している。個別の

ものが互いに関係し合っていることの意味に対する理解力が欠けているのだ。」²⁰

キャッチフレーズ教育家はそれぞれ魅力的なキャッチフレーズを掲げて教育実践を行う。これらの教育改革の動きがドイツ教育界を「活気づけている」点でヴェーバーも一定の評価は与えている。しかし彼の見るところによれば、全体的視野を欠いたキャッチフレーズ教育家は、子どもたちの健全な発達にとって「ひとつの危険因子」²¹でしかないのである。またキャッチフレーズ教育家の行動パターンは例えば次のように描写される。

「彼らは、何か新しい原理や新しいキャッチフレーズをどこかで見つけると、すぐにこの言葉に心酔し、考え方も、感覚も、意志も、何から何までその言葉に取り憑かれたようになる。彼らはその後、野生の馬が疾走するがごとく、言うなれば目隠し状態で世の中をひたすら駆け回るわけだ。」²²

以上の内容から、ヴェーバーが新教育運動と一定の距離を保っていたことは明らかであろう。とりわけヴェーバーにとって批判すべきと思われたのは、キャッチフレーズ教育学の「変わりやすい4月の天候」のような落ち着きのなさや性急さであった。「ここ数年の多種多様な諸努力を見て気づくのは、確実性や安定性の欠如である。このジグザグなコース(Zickzackkurs)に終止符を打ち、正しい道順を示すことのできる航海士が欠けているのだ。」²³—では「航海士」として期待されたものは何だったのだろうか。

4. 学問的な確実性の必要性

19-20世紀転換期のドイツにおける新教育運動に限らず、およそ教育改革と呼ばれる現象には印象深い言葉や効果的なフレーズが付きものである。しかし、それらは必ずしも学問的な基盤を持っているわけではない。宇佐美寛²⁴は、日本の教育界に見られる「問題解決…」「課題…」「主体的…」「生きる力…」「創造性…」などのフレーズ群を挙げながら、「これらの言葉は景気づけのための意味不明なスローガンにすぎない」と批判し、「責任ある研究を進めるための整合的な概念というものは、その定義が十分に明確でなければならない」と述べる²⁵。また同誌上で宇佐美も取り上げているアメリカの教育哲学者シェフラーは『教育のことば』²⁶のなかで次のように述べる。

「教育におけるスローガンは、数多くの点で明らかに定義とは異なっている。それは、全体として非体系的で、定義と比べてそれほど物々しさはなく、通俗的であり、じっくりと考えられるというよりは、熱心にあるいは励ますようにくり返し提示されるものである。スローガンはまた、教育理論を述べるにあたって重要な役割を担うことはない。」²⁷

このように、諸々の教育改革に登場するスローガンやキャッチフレーズには概して学問的な性格が不足していると言えるだろう²⁸。じつはヴェーバーが問題にしたのもその点であった。

「このようにキャッチフレーズが存在していること、またキャッチフレーズがこのように横行する無秩序状態は、時代の兆候なのだろうか？それともこの状態はそもそも現代の教育家に特徴的な仕事の流儀なのだろうか？あるいは単に気性の問題だろうか？こうした絶えざる落ち着きのなさや絶え間なく繰り返される目標転換が、本質的にどの辺りに起因しているのか？私はこの問題を一義的に規定することはできないが、その主要な原因は、個々の教師の人格が学問的に不確実な状態にある点に求められると思う。」²⁹

ヴェーバー自身も認めているように、キャッチフレーズの存在自体を抹消することは不可能に近い。だとすれば、むしろ重要なのは次々に登場してくる魅力的なキャッチフレーズに惑わされないこと、すなわち「新しいキャッチフレーズに左右されないこと、新しいキャッチフレーズに対して批判的姿勢をとること」³⁰であろう。短絡的でバランスを欠いた教育改革が横行する原因を学問的な基盤の欠如に見出すヴェーバーはこうして、客観的な判断基準や全体的視野を保証する「学問的な確実性」の必要性を主張することになる。

「われわれにとっての緊急課題は、優勢を占めるキャッチフレーズ教育学の大旋風に学問的な判断能力と確実性を導入することである。徹底的に考え抜かれた深遠なる職業観に自力で到達できた者、教育学の基礎や規範となるべき科学のうち単にそのひとつだけではなく全体から自らの教育学的価値観を体得する者、こうした者は、今日すでに現代のキャッチフレーズが舞う吹雪のなかでも安定した確実な生活を送っている。」³¹

そしてヴェーバーにとっては、キャッチフレーズ教育学に「学問的な確実性」を付与してくれるものこそ、「陶冶や教育の手段および方法を学問的に解明・拡充するもの」としての「教育学(Pädagogik)」にほかならなかったのである³²。

5. 教育学の自律性を求めて—1905年論文「もう一度『実験教育学』」より

以上に明らかにしたように、ヴェーバーは種々雑多なキャッチフレーズが飛び交っていた教育改革上の諸努力に「教育学」という学問的基盤を導入することの意義を強調した。ここで想起したいのは、19-20世紀転換期以降の新教育運動に関わった多くの実践者が自らの改革意欲に見合う「厳密な学問的基礎づけ」として「実験教育学」に期待を寄せたという事実である³³。果たしてヴェーバーの求めた「学問的な確実性」は実験教育学の登場によって解決されたのだろうか、それとも解決されなかったのだろうか。いずれにせよヴェーバーがこの実験教育学に対していかなる態度を示したのかを解明することは興味深い課題であろう。そこで以下では、1905年に発表された論文「もう一度『実験教育学』」に注目しつつ、ヴェーバーの言う「教育学」の性格や意味を考察したい。

1905年といえば、モイマンとライの共同編集によって『実験教育学』誌が創刊された

年である³⁴。こうした「追い風」を受けて実験教育学がまさにヴント流の「実験心理学の研究方法」³⁵の有効性を世に訴えようとしていた時期に、ヴェーバーは、実験教育学に対して否定的な見解を示す。すなわち「実験的な幼児心理学の成果が教育学的な教授法にとって基礎を提供しうるのだとする意見に対して、私はこれまでも否認してきたし、今でも否認している」というのである³⁶。

ヴェーバーによれば、心理学者もその研究方法を採用する実験教育学者も「学問研究者(Wissenschaftler)」である。「学問的な確実性」を重視する彼にとって、その意味で実験教育学は必要条件を満たしているように思える。だが彼によれば、「足し算すること、引き算すること、平均値を求めること」を主な仕事とする心理学者の行動は「数学的」でしかない³⁷。また実験教育学の流行は、学校を「実験室」ないし「生理学・心理学の診療所」にしてしまっているという³⁸。こうして彼は、「自分の担任している学級内で満足気に心理学的実験を実施する教師たち」を批判することになる³⁹。

「子どもの心理の反応は、影響を与える人格の心理によって規定されている。すでに見たように、研究者(Forscher)と教師(Lehrer)は符合するのではなく、ある意味で反対の立場にある。したがって、相手がもし教育家であれば子どもは発言したいという気持ちになるが、相手がもし心理学者の場合、子どもはただ反応するだけである。ここにこそ、いかなる教育学的な教授法も実験的な幼児心理学の成果に依拠することができないというわれわれの主張の根本的な理由がある。つまりあらゆる結果を総合しても一たとえマルクス・ロブジーン⁴⁰によってそう称されているとしても一教育学的な立脚点から見れば、その試みは単に副次的な意味しか持たないのである。」⁴¹

ヴェーバーが実験教育学を徹底的に批判したのは以上より明らかであろう。その批判点は実験教育学が「心理学」の申し子であったという事実求められる。さて、ヴェーバーの発言から距離を取って、20世紀初頭のドイツ教育界に登場した学問的潮流としての実験教育学に目を向けるとき、その「劇的な崩壊という歴史的事実」は無視できない。すなわち実験教育学は1920年以前に方法論上の説得性を失い、結果として「新教育運動の実践を基礎づける教育理論」たりえなかったというのである⁴²。また1905年に華々しいデビューを飾った『実験教育学』誌も、1911年には心理学系の雑誌と合併し、『教育心理学・実験教育学雑誌』という名称変更を余儀なくされる。「結局、実験教育学は心理学に包摂されてしまったと考えてよい」⁴³と木内陽一も指摘するように、実験教育学は「教育学」たりえなかったのである。

このように考えると、ヴェーバーはまるで実験教育学が数年後に劇的な結末を迎えることを、すでに『実験教育学』創刊の年に予期していたかのようにも思えてくる。いずれにしてもヴェーバーにとって実験教育学は教育学の名を冠していながらも心理学という外部から侵略してきた新たな脅威でしかなかった。こうしてヴェーバーは、ヘルバルトやツイラー、レーマンを引き合いに出しながら、教育的関係の「非合理性」や「直観」の大切さ

を強調することになる。これらの主張がたとえ学問科学的なレベルを引き下げるものであったとしても、ヴェーバーは教育行為の固有性を強調することで、実験教育学という外敵に対して「教育学の自律性」⁴⁴を堅持しようとしたのである。

小括

以上、ヴェーバー教育学の特質を明らかにするため、これまで看過される傾向にあった諸論文を考察してきた。その結果、当時のヴェーバー自身が抱いていた問題関心の内実が浮かび上がってきたと言えるだろう。具体的には、まず「教師の人格」を重視する彼の教育方法論には「教師の社会的地位の低さ」という歴史的背景があったことを明らかにした。またこの時期のヴェーバーには、種々雑多な教育改革の試みに「学問的な确实性」を与えるような、同時にまた教育学の存在基盤を脅かす他の隣接諸科学に対して「自律性」を主張しうるような、「学としての教育学」への志向性が認められることも確認できた⁴⁵。では、このような「教育学」構想を抱くヴェーバーが、果たしてニーチェ思想をどう論じるのだろうか。次節においては、『教育学の基礎科学としての美学』と同じ1907年に出版された著作『若きニーチェの教育学的思想』の考察を行うこととする。

第2節 1907年著作『若きニーチェの教育学的思想』

1. 成立経緯と構成

ヴェーバーの1907年著作『若きニーチェの教育学的思想』の土台となっているのは、イエナ大学のライン指導のもとで執筆されライプツィヒ大学に提出された学位論文である。レンナーによれば、ヴェーバーがライプツィヒ大学哲学部に学位授与を認められたのは1905年1月25日であった。「もう一度『実験教育学』」が1905年発表の論文であるから、ヴェーバーはまさに「教育学の自律性」や「学としての教育学」について自ら深く検討していた時期⁴⁶に、ニーチェに関する学位論文を完成させたと言える。翌1906年6月9日、ヴェーバーは学位論文「その世界観と人生観を背景にした若きニーチェの教育学的思想(Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche vor dem Hintergrund seiner Welt- und Lebensanschauung)」を提出し、査読者フォルケルトとハインツェから「1」の評価を得たという⁴⁷。なお、出版時の正式な書名は『その世界観と人生観との関連から見た若きニーチェの教育学的思想(Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt- und Lebensanschauung)』(Weber1907-b)である(※以下、再び『若きニーチェの教育学的思想』と略記)。

『若きニーチェの教育学的思想』の内容に関する詳しい考察に入る前に、目次から本書の構成を把握しておきたい。

序章

第1章 若きニーチェの哲学思想

ニーチェの青年時代

若きニーチェの模範

若きニーチェの認識論的見解

若きニーチェの形而上学的見解

ニーチェの形而上学的見解の批判

若きニーチェの諸著作

第2章 若きニーチェの文化問題

文化の定義

a. 否定的意味における文化：現代の文化

1. 一般論

2. 個別論

b. 肯定的意味における文化：過去の文化

c. 未来の文化

1. 未来の文化にとっての危機

2. 未来の文化のための手段と方法

3. 未来の文化の前兆

d. 文化化の推移

1. 音楽

2. 神話

3. 新しいドイツの芸術

e. 若きニーチェの心理学的見解と倫理的見解

f. 天才とその創造

1. 世界の目的および目標として

2. 文化の目的および目標として

3. 天才の出現様式

第3章 若きニーチェの教育問題

教育の目的および目標としての天才とその創造(天才の教育学的意義)

a. 教育理想

b. 教育方法

c. 教育施設

1. 否定的意味における教育施設

- 2. 肯定的意味における教育施設
ニーチェと教育史の関係
- d. 教師理想
 - 1. 否定的意味における教師理想：現代の教師
 - 2. 肯定的意味における教師理想：未来の教師
ニーチェの希望
- 第4章 若きニーチェの教育学的思想の検討
 - a. 主観的評価：彼の人格の表現としてのニーチェ教育学
 - 1. ニーチェの本性
 - 2. ニーチェの生
 - a. 客観的評価（※下線部は原典ママ）
 - ニーチェの歴史的位置
 - ニーチェの矛盾
 - ニーチェの誤謬
 - ニーチェの教育学的価値
 - c. ニーチェの教育学的意義

構成を一瞥してまず気づくのは、論証手続きが学問研究の流儀にならっているということである。学位請求論文として執筆されたという点からも明らかのように、本書においては各項目が「一般」と「個別」、「否定」と「肯定」、「主観」と「客観」などと図式化され、考察手順が学術的となっている。もうひとつは、「若きニーチェ」という限定的表現の使用である。すでに『若きニーチェの教育学的思想』というタイトルにも明確に示されているが、目次を見ても、第1章、第2章のみならず、第3章、第4章にいたるまで、すべての章題が「若きニーチェの～」で統一されていることがわかる。「若きニーチェ」、すなわちニーチェの初期思想を考察対象に据えているという点が、本書最大の特徴である。以下、『若きニーチェの教育学的思想』の内容を見ていくことにしよう。

2. ニーチェの初期思想への限定化

(1) ヴェーバーの基本姿勢

「現代文化へのニーチェの影響はきわめて強いものである」³⁾。1890年代以降のニーチェブームを振り返りながらヴェーバーはこう述べる。ただ「流行の哲学者 (Modephilosoph)」や「世紀末の哲学者 (der Philosoph fin-de-siècle)」と称されるなどニーチェへの関心や認知度が高くなる一方で、ニーチェ思想の影響や意義を学問的に評価する試みが不足している

状況にヴェーバーは問題意識を抱く⁴。この点に、「学としての教育学」の重要性を主張するヴェーバーの学者としての自覚を認めることができる。

さて、「学としての教育学」とニーチェ思想との関わりという点については、すでに第2章第4節においてパウルゼンとツィーグラールという2名の教育学者の事例を検討し、ニーチェ思想が教育学の圏外に位置づけられてきた歴史的経緯を確認したところである。しかし、青年に悪影響を及ぼすニーチェ思想を教育学者の立場から厳しく糾弾したパウルゼン、ニーチェ思想に関する学術書を出版していながら教育学との関係可能性を検討しなかったツィーグラールとは異なり、ヴェーバーは明確な教育学的関心からニーチェ思想を論じようとする。「本論が描き出そうとするのは、音楽家でもなく、詩人でもなく、予言者でもなく、本来の意味における哲学者でもない、教育学者ニーチェである」⁵。ではヴェーバーはそもそも教育学者ではないニーチェをどのようにして「教育学者」と評価するのであろうか。

例えばヴェーバーは次のように述べている。

「ニーチェの教育学的思想は、主として彼の教育学的実践から生じているのではなく、彼の哲学的な、とりわけ文化的問題から派生している。ニーチェが教育学者であるのは、彼の理念の実現に関する思想がまさに教育学的な思考を要請するからである。ニーチェの本来的なライフワークは文化問題の解決へと向けられていたのである。」⁶

ニーチェの文化的・哲学的な関心のうちに教育学的思想を見出そうとするヴェーバーは、「ニーチェは生涯を通じて教育学者であった」⁷との見解を示す⁸。ヴェーバーは基本的には、ニーチェの教育学的思想が初期から後期にいたるまで、その思想全体に確認できるという立場にあるわけである。

しかし著作のタイトルからも明らかなように、ヴェーバーは自らの考察対象としてニーチェの初期思想を選んだ。

「教育学者にとってもっとも価値ある時期は、疑いなく第1期⁹である。たとえニーチェが生涯にわたって教育学的問題に高い関心を寄せていたとしても、やはり狭い意味における教育学者であったのは、毎日講堂に立っていた時期、彼がバーゼル大学の附属高校で仕事をしていた時期、つまり1869-1877年の時期¹⁰である。」¹¹

初期思想を選択した理由が十分に語られているわけではないが、初期思想の重要性は明白に示されていると言えるだろう。つまりヴェーバーは、1869年から1877年までに執筆されたニーチェの作品、『悲劇の誕生』、4編の『反時代的考察』、連続講演『われわれの教育施設の将来について』を中心に考察を進めているわけだ。見方を変えるなら、『人間的な、あまりに人間的な』や『曙光』などの中期著作、『ツァラトゥストラ』や『道徳の系譜』、『善悪の彼岸』などの後期著作は、ヴェーバーの考察対象からほぼ完全に除外されているのである。

(2) 回避される「超人」思想—生物学的「超人」解釈と教育学者ヴェーバーの選択

若きニーチェへの着目というヴェーバーの基本姿勢は、単に初期思想を選択したというだけでなく、中期思想や後期思想を捨象したということをも意味している。このことを象徴的に示しているのが、「超人」思想に対するヴェーバーの解釈と態度である。

「若きニーチェの学説によれば、天才の創造は、世界の目的と目標であり、あらゆる文化や教育学的諸努力の目的と目標でもある」¹²。ヴェーバーもこう指摘するように、初期思想におけるニーチェの理想像は「天才」であった。そしてヴェーバーは「天才の創造」を主張するニーチェの初期思想を教育学的に読み解こうとする。「天才」が初期の理想だとすれば、後期思想におけるニーチェの理想像は「超人」である。言うまでもなく、当時「超人」は青年を中心にもっとも人気を博していたニーチェ思想のひとつであり、またニーチェの理想像という点における「天才」と「超人」の相関関係についてはヴェーバー自身も明白に認めているところである。このように考えれば、ヴェーバーが「超人」思想の教育学的な解釈を試みていたとしても不思議はないはずである。ところが、彼が「超人」を教育学的に評価することはなかった。

すでに述べたように、文学界や青年における熱狂とは対照的に、1890年代以降のアカデミズムが示した「超人」への反応は冷たいものだった。当時の学者が「超人」について語り出した直接の契機はむしろ、「超人」と化した青年の道徳的頹廃行動に対する憂慮からであった¹³。ところが、19-20世紀転換期頃にかけて「超人」にもようやく学問的な意味付与がなされることになる。その基盤となったのが、当時アカデミズムの一潮流を形成していたダーウィンの生物進化論である。例えばツァラトストラの「人間は動物と超人のあいだに張り渡された一本の綱である」¹⁴という言葉がまさに字義通りに解釈され、「超人」が進化論の延長線上に位置するはずの「生物学的概念」として理解されることになったのである。ヴェーバーは時期的にまさにその潮流の中にいた。事実、1904年のある著作において彼は次のように述べている。

「もしダーウィンの進化論が機械的に人間の生に適用されれば、(…略…)それは血の通わない定式となるだろう。われわれは断じてニーチェの超人を育成することなどできないのだ。」¹⁵

ヴェーバーが「超人」をダーウィン進化論の象徴と捉えていることは明白であろう。また『若きニーチェの教育学的思想』においてもヴェーバーは、初期思想におけるニーチェの理想像「天才」の説明に際して後期思想の「超人」を引き合いに出し、前者を「教育学的概念」、後者を「生物学的概念」と特徴づけたうえで、両概念の非連続性を強調している。

「若きニーチェが存在の目標やあらゆる真の文化の目標と見なしたのは、天才の創造であった。この目標の実現に着手するとき、問題は教育学的なものとなる。ではニーチェの見解によれば、天才を創造するとはどういうことなのか？若きニーチェの天才がまだ人間的な超種(Überart)という意味における『超人(Übermenschen)』で

はないということは、すでに確認したとおりである。天才はもっぱら超越的人格(Überpersonen)である。(…略…)天才を創造するとは、彼らを生物学的に馴致するのではなく、ルソー的な意味で消極的にはあっても、教育学的に影響を与えるということである。遠い将来に登場する超人類(Übermenschentum)の馴致のことをニーチェはまだ考えていないのである。」¹⁶

ヴェーバーの批判が「超人」の生物学的解釈にではなく、「超人」それ自体に向いている点に注意したい。すなわち、ヴェーバーは「超人」を生物学的概念として理解し、そして「超人」思想の教育学への適用可能性を否定したのである。以下の文章は、第4章「若きニーチェの教育学的思想の検討」に収められた小項目「ニーチェの誤謬」からの引用である。

「たしかに初期の天才崇拜は、超人育成理論の展開にとっての前段階であったかも知れない。しかしながら、若きニーチェにはただ天才の教育学的な創造という課題があっただけで、生物学的な馴致は存在しない。私の判断によれば、この点にこそ、後期思想と比較にならないほどに若きニーチェの教育学的価値があるのだ。進化論の法則に従って何千年か後によりやく到達できるようなものが、果たしてわれわれにとってひとつの教育目標であってよいのだろうか？」¹⁷

この見解からも明らかなように、ヴェーバーは後期思想との比較においてニーチェの初期思想を高く評価し、そのうえで中期および後期思想を全面的に捨象したニーチェ論『若きニーチェの教育学的思想』を執筆したのである。

3. 「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの提示

(1) 教育学の歴史への位置づけ

ニーチェの初期思想における哲学観や文化観に関する考察¹⁸を終えて、ヴェーバーは『悲劇の誕生』や『反時代的考察』、『われわれの教育施設の将来について』などの諸著作からニーチェの教育観を読み取っていくという作業に移るわけだが、彼の論述プロセスにはひとつの特徴がある。それは、ヴェーバーがニーチェの見解をしばしば他の教育学者や教育家のものと比較しているということである。すなわち、教育学の歴史においてすでに確固たる地位を占めてきた人物たちとの比較によってニーチェの位置を確認しようとするのである。いくつか具体例を挙げてみよう。

例えばヴェーバーは、ニーチェを「感情の教育学者」と特徴づけつつ、反主知主義的なその教育観がペスタロッチーの教育思想と親和性を有していると述べる¹⁹。またニーチェの教育観は、生徒の「自立性」や「自発性」を重視する点において、ペスタロッチーのみならず、モンテーニュやルソーらの見解とも類似するとされる²⁰。さらに「生」の教育学

的意義²¹を強調する点も、他の教育家との比較項目となっている。

「生の教育学的評価は若きニーチェのさらなる功績である。すでに見たように、この原則自体は別に新しいものではなく、教育学の歴史のうちにすでに多くの代表者（※引用者注：コメニウス、ルソー、ペスタロッチーなど）を見出している。しかし、ニーチェほど力を込めて、生を、あらゆるものを支配するだけの価値概念へと昇格させた人はいない。」²²

かりにニーチェのことをほとんど知らない読者がいたとしても、有名なペスタロッチーやルソーとの親和性を指摘すれば、ニーチェの教育観のイメージが多少は伝わるのではないか。ヴェーバーはそう考えたのである。

むろん、他の教育学者との比較によって明らかとなるのは親和性だけではない。例えば、主知主義的教育を批判するニーチェの教育観は、ライプニッツに代表される啓蒙主義教育思想の対極に位置していると指摘される。

「ニーチェの教育理想は一彼のペシミスティックな認識論や感情の倫理学に相応して一反主知主義的である。その点において彼の教育理想は、啓蒙(Aufklärung)の教育理想に真っ向から対立し、ライプニッツの教育学的主張に真っ向から対立することになる(…略…)」²³

このように、比較によって不親和性が指摘される人物もいる。教育学の体系化に貢献したヘルバルトも同様である。ヴェーバーによれば、主意主義的なニーチェ思想は主知主義的なヘルバルト教育学の対極に位置しているという²⁴。また、教育の方法を規定する「心理学」に関しては、ニーチェの方がヘルバルト以上に「正当性」を有しているとされる。

「ヘルバルトは『道徳性の意志強固』を、ニーチェは『宗教的道徳的性格』を養成しようとしている点において、たしかに両者の教育目標はほぼ一致している。しかし、ニーチェは『多方均等興味』や調和的養成を促そうとしているのではない。そうではなく、自然それ自体が大きな発達能力を持っているという観点から、一面的な力の発達を促そうとする。このときのニーチェは徹底的に個人主義者である。すなわち教育学的措置を加えるべきポイントは生徒の主体における一側面であるというのである。ニーチェの根本命題は疑いなくヘルバルトのそれよりも心理学的である。青年の場合、均等に多方面への強い興味を求めることは誤りであるし、また経験にも則さない。つまり『多方均等興味』は決して教育学的措置ではありえないのである。」²⁵

ヴェーバーが教育思想史上の人物との比較によってニーチェの位置を測定しようとしているのは、以上に確認したとおりである。彼自身も述べているように、教育学におけるニーチェ思想の位置は決して統一的で首尾一貫したものではない²⁶。しかしだからといって、ヴェーバーのこの比較の試みがすべて無駄であったということにはならないだろう。なかでも、教育思想史におけるカリスマ的存在であるペスタロッチーや「学としての教育学」の象徴的存在たるヘルバルトとの比較は、一定の有効性を示したのではないか。なぜなら、

教育学のクラシカーたちとの親和性・不親和性、あるいは評価の優劣にかかわらず、ニーチェはこのとき彼らと肩を並べ、教育学の歴史にその名を刻むことになるからである。「果たしてニーチェを教育学の歴史のどのあたりに位置づければよいのか」²⁷。まさにこのような問いによって、ニーチェをひとりの「教育学者」として把握する道筋は開かれたのである。

(2) ニーチェ思想の教育学的意義—「人格的教育学」

では、ニーチェはいったいどのような「教育学者」として評価されているのだろうか。ヴェーバーは「ニーチェが『第一世代』の青年を教育し、陶冶する制度を必要としていた」点に注目する²⁸。ニーチェの初期思想におけるこうした側面は、従来の「青年の生の解放者」のイメージとは異なって、明らかに教育者や教師を必要とする教育観であり、この点が民衆学校教師ヴェーバーの評価の対象となったものと考えられる。

「ニーチェによれば、教育者、教師は、不可欠のものである。現代ほど彼らが必要とされる時代はこれまで決してなかったし、さらに言えば、真の教育者や真正なる教師と出会うのが今日以上に珍しい時代もこれまで一度もなかった。現代の教師が示しているのはただ真正なる教育者がどのようであってはならないかに過ぎず、つまり彼らは若きニーチェの教師理想の反証なのだ。」²⁹

端的に言えば、ニーチェが提示した理想の教師像は「芸術家」という類型であった³⁰。芸術家的性格をそなえた教師が真の人間形成的な影響力を持ちうるという見解は、初期のニーチェと芸術教育運動とかかわりの深かったヴェーバーとで共有されている³¹。またヴェーバーによれば、これまでの教育学の歴史を概観してもニーチェほど「人格の価値や権利を力説した人はいない」³²という。こうしてヴェーバーは、ニーチェの教育学的主張の帰結が「すぐれた教師の人格」の強調であるとし、ニーチェの初期思想を「人格的教育学」と特徴づけることになる³³。「ニーチェ教育学」誕生の瞬間である。

ヴェーバーのこのような評価はまた、ニーチェを単に「教育学者」として把握するにとどまらず、じつに時局的なニーチェの教育学的意義を提示することにもなる。

「若きニーチェは非論理の教育学者であり、教育学的な主知主義の敵対者である。つまり彼は、前例がないほど鋭く情熱的に、単なる抽象的な知識の不自然さに注意を喚起したのである。けれどもわれわれは、つい最近までずっと合理主義に心酔し、啓蒙の時代からの潮流の強い影響下にある。このような主知主義的根本命題に対して、ニーチェはまさに次のことを強調したのである。すなわち、人間の精神的生のうちには、人間知性が十分に究明し尽くし得ない、つまり論理の測鉛が届かない領域があるということ。」³⁴

そして実際ヴェーバーは、自らも関わった芸術教育運動に対するニーチェの意義を次のように強調している。

「ニーチェは疑いなく現代の芸術教育学的動向のもっとも情熱的な予言者のひとりである。今日ますます広範囲にわたっている運動の要求のほとんどは、彼のうちにその独自の根拠と深奥なる語源を見出すはずである。実際また、この点にこそ現代の教育学に対するニーチェの本来的意義の大部分が存しているのである。」³⁵

こうして彼はニーチェを「完全に時流に適った教育学者(durchaus zeitgemäßer Pädagoge)」と評価し、ニーチェの初期思想がドイツ教育学に受容されるべきとの見解を示しつつ、ニーチェが最終的には「流行の教育学者(Modepädagoge)」にまで昇格することを期待するのである³⁶。

第3節 「教育学者」モデルの同時代的意味

1. 比較対象のプロフィールとその妥当性

ヴェーバーの「教育学者としてのニーチェ」論は同時代的にいかなる意味を有していたのだろうか。本節では、ヴェーバーが『若きニーチェの教育学的思想』を出版する1907年以前に教育系の新聞雑誌に掲載されたニーチェ論に注目し、それらとの比較を通してヴェーバーのニーチェ論の特質や意味を明らかにする。

そもそも1907年以前に発表された教育系のニーチェ論の数は限られているが、本研究では5本の論文を集めることができた。年代順にリストアップしておく、ティームの講演論文「『ツァラトゥストラかく語りき』について」³⁷、上級学校教師ロイシェルトの「フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ」³⁸、バイエルン州の教師新聞に掲載されたゲルトナーの「詩人哲学者および教育学者としてのフリードリヒ・ニーチェ」³⁹、ハイネの「教育学者としてのニーチェ」⁴⁰、ザクセン州の教員組合機関誌上に発表されたシェーデルの「もう一度ニーチェ教育学—『反時代的』ではない哲学的・教育学的研究—」⁴¹である。

これらの論文とヴェーバーの論との相違点を考察する前に、比較対象としての妥当性、すなわち両者の共通点を確認しておかなければならない。ここで注目すべきは、当時のドイツ教育界に「教育学」に関する共通認識があったかどうかという点であろう。ニーチェ思想をどのように評価していようとも、ヴェーバーと彼以前のニーチェ論者と同じ「教育学」を想定していなければ、両者の比較は成り立たないからである。

ヴェーバーが教育学の基礎科学として「美学」の重要性を主張したことは、『教育学の基礎科学としての美学』という大著の存在から明らかである。ただ、彼は決して「美学」の意義ばかりを強調したわけではない。本章第1節で確認したように、「学としての教育学」や「教育学の自律性」を求めるヴェーバーにとって、教育学の基礎科学としての「倫理学」と「心理学」が重要であるということは当然だったのである。では、「教育学の基

礎科学は倫理学と心理学である」というヘルバルト以来のこの認識は、ヴェーバー以外の論者にも共有されていたのであろうか。

例えばティームは次のように述べている。

「教育学的な構築物を成り立たせている基礎科学は、心理学と倫理学である。心理学が教材を調査研究する一方で、倫理学は教育学が目指すべき教育目標を設定する。心理学、倫理学、教育学は、哲学的な学問分野である。」⁶

またシェーデルも次のように述べている。

「教育学の基礎科学は、心理学と倫理学である。前者は教育されるべき対象を観察ないし調査し、後者は教育目標を設定する。教育学はいわばこの目標に到達するための道先案内人である。心理学、倫理学、教育学、これら3つはいずれも、哲学的な学問分野である。」⁷

少なくともティームとシェーデルの2名は、ヴェーバーと同様の「教育学」理解を示していると言えよう。もっとも、他の3名がそもそも「教育学の基礎科学」に関する発言をしていないため、必ずしも断定的なことが言えるわけではない。しかし、「体系的教育学は倫理学と心理学という2つの基礎科学の上に成り立っている」というライン編『教育学事典』第1版第5巻(1898)の「教育学(Pädagogik)」欄の記載⁸なども考慮に入れば、「教育学の基礎科学は倫理学と心理学である」という認識が当時のドイツ教育界において一定の共通理解を得ていたとの推測は十分に成り立つだろう。

2. ヴェーバー以前の教育学におけるニーチェ評価

ヴェーバーがニーチェ思想を人格的教育学として高く評価したことは前節で確認したとおりであるが、ではヴェーバー以前の論者たちはニーチェ思想をどう評価したのだろうか。

彼らはまずニーチェの初期思想、とりわけ文化批判に注目した。あらゆる文化は教育を前提としているという観点から、彼らはヴェーバーと同様、ニーチェの文化批判のうちにその教育観を見出そうとするのである⁹。具体的には、ニーチェが身体教育に注目したこと¹⁰、教育上の賞罰を否定したこと¹¹、母国語の教育を重視したこと¹²などが紹介され、「流行の哲学者」や「青年の危険な誘惑者」とは異なるニーチェの別の一面が明らかにされている。「われわれは教育学者ニーチェに対して本質的によい関係にある」¹³ というのが、彼らの基本スタンスであった。

また「教育学者としてのフリードリヒ・ニーチェ」の著者ハイネは次のように述べる。

「われわれ教師にとってとりわけ興味深いのは、彼(※引用者注：ニーチェ)もまた教師の基礎的な資質能力を評価している点である。教師は自らの全人格をもって教育者(Erzieher)としての職責を果たすべきであり、それゆえ教師は知識や本質などのあらゆる側面において全人でなければならないのである。」¹⁴

教師の資質能力として「人格」を強調した点においてニーチェが高く評価されていると言えるだろう。「人格的教育学」という言葉こそ見当たらないが、ヴェーバーと同様、彼らもまたニーチェ思想の教育学的意義をはっきりと認めていたのである。

ヴェーバー以前の論者におけるニーチェ評価の特徴として次に指摘できるのは、彼らが『ツァラトゥストラ』以降の後期思想の検討にかなりの紙幅を割いているということである。この時期のニーチェにほとんど教育論と呼べるものがないにもかかわらず、彼らが後期思想を重視したのは、当時、一般に「ニーチェ哲学はツァラトゥストラの教説において最高点に到達する」¹⁵ という認識があったからである¹⁶。つまり彼らは、初期の文化批判で鋭く提起された「問い」に対する「回答」を後期思想に求めたのである。

「洗練された人間こそ、ニーチェの最高の教育目標であり、彼を当時の精神的頹廢や無教養との闘争へと駆り立てたものでもある。では今日いったい人類は変わっただろうか？それとも人類はいつの日か変わるのだろうか？これこそがニーチェの揺るぎない確信であった！この小さなもの、日常的なもの、平凡なもの、あまりに人間的なもの、これらはいつの日か途絶えるべきだ！ニーチェの教説には深い道徳的本質が根ざしている。現世の発展を目指すこうした必要不可欠の超人世代のことをニーチェは『大地の意義』と呼ぶ。彼自身の言葉に耳を傾けてほしい。彼はこのように言っている—『人間とは克服されるべき何ものかである。(…略…)]と。』¹⁷

1907年以前の論者によるニーチェ評価は概ね以上の通りである。すなわち、①「教育学者としてのニーチェ」や「ニーチェ教育学」をテーマにした論文を執筆し、ニーチェの初期思想の教育学的意義を指摘するというヴェーバーと同様の試みを、ヴェーバーを先取りするかたちで世に問うたこと、また②ヴェーバーがほとんど取りあげなかったニーチェの後期思想を積極的に考察対象としていること。これらが1907年以前のニーチェ論の特徴であった。こうした点から判断すれば、彼らはむしろヴェーバー以上に「ポジティブ(積極的・肯定的)」にニーチェ思想の教育学的意義を論じているようにも思われる。

しかしながら、彼らは最終的には、ニーチェ思想の教育学への受容可能性を「ネガティブ(消極的・否定的)」に考えた。例えば、ハイネはニーチェ思想の影響が「学としての教育学」にも及びうるかどうかと問い、「否」と答えている¹⁸。シェーデルもやはり「ニーチェが教育学における権威(Autorität in Pädagogik)と呼ばれることは決してないだろう」¹⁹と述べている。このように、彼らはヴェーバーとは異なる結論、すなわち教育学にニーチェ思想は受容できないとの結論に到達したのである。彼らはなぜこのような決断を下したのだろうか。

3. 初期思想の限定的受容という戦略

ヴェーバー以前の論者が教育学へのニーチェ受容の可能性をネガティブに考えざるを得

なかったのは、端的に言うなら、彼らがニーチェの「後期思想」に深く言及してしまったからである。ではいったい後期思想にどのような問題があるのだろうか。彼らの証言をもとに具体的に確認してみよう。

第一の問題点は、中期以降に顕著となるニーチェ思想の非体系性や非論理性であった。例えば「彼(※引用者注：ニーチェ)は確固たる哲学的体系を残してはいないように、教育学についても何ら文脈づけることなく記述した」²⁰とか、「残念ながら彼(※引用者注：ニーチェ)はアフォリズム的な発言で満足してしまった」²¹などとして、ニーチェ思想の体系性の欠如が否定的に評価されている。これ以上に問題だったのは論理性の欠如＝矛盾の存在である。例えばハイネは、「超人」という一語の説明でさえ「完全に首尾一貫しているわけではない」と述べ、ニーチェ思想の非論理性を批判した²²。シェーデルの次のコメントは象徴的である。「ニーチェの著作のなかで遭遇する多くの矛盾を想起してみよ。これらが彼の教育学にとって致命的であることは間違いないはずである。」²³ 学問的な自律性を求める「教育学」にとって絶対に欠かすことのできない体系性や論理性が、ニーチェの後期思想には決定的に不足していると判断されたのである。

第二の問題点は、ニーチェの後期思想に見られる過激性や誤謬であった。例えば彼らは、「超人」というニーチェの理想像に違和感を示した。

「ニーチェもわれわれと同様、人類の向上を主眼においているということは否定できない。彼の『超人』は、人類が太古以来求めてきた理想に対する謎に満ちた憧れを表現した新たな仮象である。しかし、彼の超人とわれわれの理想とする人間とのあいだには大きな相違がある。」²⁴

彼らの見るところによれば、「超人」思想は「ダーウィン理論の悪用」²⁵にほかならなかった。「ニーチェは主著『ツァラトゥストラ』においてダーウィン理論を教育学に転用しようと奮闘し」²⁶、結果的に「教育問題(Erziehungsproblem)をもつばら自然科学に左右される育種の問題(Züchtigungsproblem)にすり替えてしまう」²⁷というのである。また彼らは、「超人」思想が「一面的な貴族主義的個人主義」²⁸の産物であることを指摘し、「君主道徳と奴隷道徳という誤った教説」²⁹とともに「超人」も批判する。彼らに言わせれば、「貴族主義的な選別」を目標として掲げる限り、ニーチェは決して「一般民衆学校の味方」にはなれないのである³⁰。以上を踏まえれば、「この危険な思想家(※引用者注：ニーチェ)に用心したまえ！」³¹というシェーデルの警告³²に象徴されるように、彼らは、後期著作において示されるニーチェの新たな理想像や道徳規範、すなわち「超人」や「君主道徳と奴隷道徳」などの思想内容にも強い抵抗を感じていたと言えるだろう。

ヴェーバー以前の論者は、後期の作品にこそニーチェ思想の核心部があるという判断から『ツァラトゥストラ』以降の著作に深入りし、非体系性や非論理性(形式的側面)、過激性や誤謬(内容的側面)などの諸問題³³に直面することになった。こうして彼らは、ニーチェ思想が「学としての教育学」に受容されがたいとの結論を導き出すことになる。

「学問科学はその認識のために、普遍妥当性(Allgemeingültigkeit)を、それゆえ必然的

に非人格性 (Unpersönlichkeit) を要求するものである。しかし、純粋に人格的な色彩を帯びていない文章がニーチェの著作にはほとんど見られない。そのためこの哲学者は、一般的に見て、学としての教育学 (Pädagogik als Wissenschaft) に対する影響力をほとんど示すことはないだろうし、また特殊な場合を考えても影響力はないものと思われる。それは、彼の根本命題が主観的な基盤に依拠しているからだけではなく、その際に彼が実現性や可能性の範囲外に想定されるような前提条件を出発点としているからでもある。」³⁴

「学としての教育学」の要求水準³⁵に照らして、ニーチェの思想はあまりに「主観的」かつ「非現実的」なものであった³⁶。結局、彼らはニーチェ思想の非「教育学」的な性質を無視できなくなり³⁷、教育学への受容可能性を否定する結論を導いたのである³⁸。

それに対してヴェーバーは、ニーチェが「流行の教育学者」となることを、すなわち彼の思想が「教育学」に受容されることを期待した。すでに明らかなように、ニーチェの後期思想そのものに対する評価という点では、じつはヴェーバーも 1907 年以前の論者と同じ見解を示している。にもかかわらず、ヴェーバーがこのような結論を導き出せたのは、彼が、さまざまな問題を含み込んだ後期思想や中期思想を大幅に捨象し、初期思想に焦点化することによって、論理的で健全な思想の持ち主としてのニーチェの姿をアピールすることに成功したからであろう。実際ヴェーバーは、論理性や体系性、実行可能性の点で、後期思想との対比における初期思想の優位性を強調している³⁹。ニーチェの初期思想だけを取り上げるという一見した限りでは消極的にも思えるヴェーバーの限定的受容は、さまざまな問題を抱えたニーチェ思想を確実に「教育学」に取り込むための積極的な戦略だったのである。

ヴェーバーのこの戦略は成功を収めることになる。彼の『若きニーチェの教育学的思想』が公刊された 1907 年、ライン編の第 2 版『教育学事典』第 6 巻に「ニーチェ」という項目が掲載されるという象徴的な出来事が起きたのである⁴⁰。それは文字通りニーチェ思想がドイツ教育学に受容された瞬間であった。

むろんこの項目の執筆担当者は、当時ドイツ教育界でもっともニーチェ思想の教育学的意義に精通した人物、ヴェーバーであった。記載内容も、自著『若きニーチェの教育学的思想』を要約したものである。「たしかにニーチェは全生涯を通じて高等レベルの教育学的問題に取り組んだ。しかし彼が狭義の教育学者であったのはこの最初の時期だけである。」⁴¹—このような観点から、ヴェーバーはここでもニーチェの初期思想に照明をあて、従来あまり知られることのなかったニーチェの教育論を解説するとともに、「ニーチェ教育学は人格的教育学である」⁴²としてニーチェ思想を高く評価している。ヴェーバーは冒頭で次のように述べる。

「今なおニーチェの名前は世間の評判であり、同時代人への影響力もきわめて広範囲にわたる意義を有している。ただ、いまだかつて彼は教育学者として評価されたことはない。」⁴³

事実、ライン編『教育学事典』の第1版は1895年から1899年にかけて出版されているが、該当する第5巻 („Nachahmung“ — „Römische Erziehung“)に「ニーチェ」の項目は見当たらない。第2版になってはじめてニーチェは『教育学事典』に収録されるべき「教育学者」として認知されたのである。

1907年という年は、1890年代にはまだ教育学の圏外に位置していたニーチェがドイツ教育学に正式に仲間入りを果たした記念すべき年だったのである。

注

◆ 第1節

* 1) Weber, E. (1907-b): Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt- und Lebensanschauung. Leipzig 1907.

* 2) ヴェーバーの経歴については以下の文献も参照した。荒巻敦「Ernst Weberにおける教育方法の芸術性」『広島大学教育学部紀要』第44号第1部、1995年、99-106頁。荒巻敦「授業における指導の芸術性—E.ヴェーバーの教育芸術論を手がかりに—」『教育方法学研究』第22巻、1997年、31-39頁。荒巻敦「芸術家としての教師—E.ヴェーバーの教師論を手がかりに—」『広島大学教育学部紀要』第48号第1部、1999年、71-78頁。

* 3) ヴェーバーに対してこれまでいかなる関心が寄せられたのか。この点を整理するにあたりまず驚かされるのは、同時代のドイツにも劣らない日本人の反応の早さである。荒巻によれば、1908年に佐々木吉三郎がその著『教育的美学』のなかで最初にヴェーバーを紹介して以来、彼は「多くの教育学者によって芸術教育論者、人格教育論者と位置づけられた」という(荒巻1999、前掲書、71頁)。なお荒巻は「戦前の日本においてウェーバー(※原文ママ)を扱った代表的な文献」として以下の著作群を挙げている(荒巻1999年、77頁)。佐々木吉三郎『教育的美学』(全3巻)、敬文館、1908-1912年。乙竹岩造『現代教育教授思想』目黒書店、1913年。渡部政盛『最近教育学説の叙述及び批判』大同館、1916年。阿部重孝『芸術教育』教育研究会、1922年。松原寛『芸術教育』イデア書院、1923年。関衛『芸術教育思想史』厚生閣、1925年。佐藤熊治郎『自発性の原理と展開』目黒書店、1926年。會田慶司『現代教育思潮概説』敬文社、1930年。荒巻の指摘以外にも、1914年著作『芸術教育と教育芸術』の翻訳書として『教育芸術の理論と実際』(相良徳三訳：改題)が1927年(昭和2年)にイデア書院から出版されるなど、戦前の関心の高さは特筆されるべきである。戦後に目を向ければ、1960年代の大津親人の業績、例えば「美学と教育学—E.ヴェーバーにおける教育学の美的理論—」『福岡学芸大学紀要(第四部：教職編)』1962年、1-11頁。ヴェーバー／大津親人訳「教師の価値創造と人格価値(『教育学の基礎科学としての美学』の一部訳)」『福岡学芸大学紀要(第四部：教職編)』1963年、1-17頁。90年代以降の荒巻敦の研究など、ヴェーバー研究には一定の蓄積があるが、いずれも教育方法学の領域に属するものである。

* 4) Vgl. Dolch, J.: Erziehung und Erziehungswissenschaft in Deutschland und Deutschösterreich von 1900 bis 1930.

München1933, Darmstadt 1968. 三枝孝弘「新教育運動の基本的諸相—教科教育の改革運動との関連で—」長尾十三二編『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988年、129-145頁所収、133-134頁。

* 5) むろん、いかによい授業を実践するか、そのとき教師はどう行動すべきかといった現代的な問題を、荒巻論文の副題に象徴されるように、「E.ヴェーバーの〇〇論を手がかりに」考察すること自体の意義は否定されるものではない。むしろ美学を基礎に据えた彼の教育論は今日の議論にも多くの示唆を与えてくれるであろう。

* 6) Weber,E.: Nochmals „Experimentier-Pädagogik“. In: Der Säemann 1 1905, S.228-232.

* 7) Weber,E.: Schlagwörterpädagogik. In: Die Deutsche Schule 14 1910, S.273-276.

* 8) Weber,E. (1909-a): Die Lehrerpersönlichkeit. In: Der Säemann 5 1909, S.269-277.

* 9) Weber1909-a, S.276.

* 10) Weber1909-a, S.275-276.

* 11) 荒巻 1999、前掲書、77頁。

* 12) Weber1909-a, S.274.

* 13) Ibid., S.270.

* 14) Ibid., S.271.

* 15) 「聖職者よりも高等な存在はいない—芸術家よりも高等な存在はいない—あるいはツェッペリンの時代であれば、技術者よりも高等な存在はいない—労働者よりも高等な存在はいない—あるいは『児童の世紀』においては、子どもよりも高等な存在はいない」—多種多様な「〇〇〇よりも高等な存在はいない」という定式が成立する時代にあって、学校教師(とりわけ民衆学校教師)だけは「〇〇〇」に当てはまらないのだとヴェーバーは述べている(Ibid.,S.270)。相対的に見ても当時のドイツにおける教師の地位は低かったものと推察されうる。

* 16) 小林万里子「ハンブルク学校改革運動における『子どもから』の教育学—民衆学校教師の存在基盤としての意味内容—」『教育哲学研究』第79号、1999年、59-74頁。

* 17) 同上書、69頁。

* 18) Weber1909-a, S.273-274.

* 19) Weber1910, S.276.

* 20) Ibid., S.273-274.

* 21) Ibid., S.275.

* 22) Ibid., S.273.

* 23) Ibid., S.274.

* 24) 宇佐美寛「『問題解決』というスローガン(教師のための記号論的発想11)」『現代教育科学』第45巻、2002年、明治図書、100-104頁。

* 25) 同上書、102頁。

* 26) シェフラー／村井実監訳『教育のことば』東洋館出版社、1981年。

* 27) 同上書、65頁。

* 28) シェフラーは「スローガン」の機能を次のように描写する。「教育のスローガンは、教育運動を

支配している重大な理念と態度を鼓舞する象徴を提供するのである。それは、運動の新しい賛同者を魅了し、古くからの賛同者には安心と力を与えるような共通の精神を表明するばかりではなく、それを奨励するのである。」(同上書、66頁)

* 29) Weber1910, S.274.

* 30) Ibid., S.275.

* 31) Ibid., S.275-276.

* 32) Ibid., S.275.

* 33) 木内陽一「実験教育学の終焉—新教育運動における教育理解と科学理論的基礎づけのずれ—」『教育哲学研究』第61号、1990年、50-63頁。この点について木内は次のように述べている。「このような視座(※引用者注：新教育運動の学説史研究という視座)からドイツの新教育運動を見た場合、確かに、実践者の改革への意欲に対して、それに見合った厳密な学問的基礎づけが強く求められていた事実を指摘することができる。本稿で取り上げた実験教育学が成立する直接的契機はここにあった。つまり、隣接諸科学ですでに著しく成果を上げている方法論を教育学に転用し、『子どもから』という標語の下に、微に入り細にわたって児童の事実研究を行い、それによってこの運動を科学的に基礎づけうるはずだ、このように考えられたのである。」(同上書、50頁)

* 34) 同上書、55頁。

* 35) 実験教育学と実験心理学の関係については小笠原道雄も次のように指摘している。「実験教育学にもっとも重要な刺激を与えたのは、いうまでもなく実験心理学である。実験教育学の発達は、実験心理学の研究手法、いわゆる『実験的方法』の採用にあったといつてよい。」(小笠原道雄「新教育運動の学問的基礎—ドイツ—」長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書、1988年、46-64頁所収、55頁)

* 36) Weber1905, S.229. 「もう一度『実験教育学』」というタイトルからも明らかなように、この論文は、同誌上に既発表の論文「実験教育学」(Weber, E., „Experimentier-Pädagogik“. In: Der Säemann 1 1905, S.21-27.) (①)に寄せられたロプジーンという反駁者からの「批判」(②)に対する「再批判」(③)である。1905年のヴェーバー論文から推測できる範囲で簡単に経緯を説明すれば、①ヴェーバーは「心理学実験が一般的に見て何と関係するのか、私はそれ自体の価値も、学問や生に対する意味、とくに教育学に対するその意味も、否定するつもりはさらさらなかった」にもかかわらず、②反駁者ロプジーンが「勝利の見込みのない無駄な闘い」を挑み、ヴェーバーのことを「直観系ベテラン」と呼んだため、③心理学と教育学の問題を改めて問い直すという意味も込めて、発表される運びとなったようである(Ibid., S.228-229)。

* 37) Ibid., S.230.

* 38) Ibid., S.232.

* 39) Vgl. Ibid., S.231-232.

* 40) ヴェーバーの論敵ロプジーン(Marx Lobsien)という人物であるが、詳細なプロフィールは不明である。ただヴェーバーの発言から推測するに、彼は主に実験教育学者ミュンスターベルク(Hugo Münsterberg, 1863-1916)に依拠していたと思われる。なお木内によればこのミュンスターベルクは、「モイマンと並んでヴントの弟子中で注目される人物」であり、その著『心理技術学』は「実験に基づく教育学研究のあり方を具体的かつ先鋭的な形で示しえた一つの事例」と特徴づけられるという(木内、前掲書、58-59頁)。

* 41) Weber1905, S.231.

* 42) 木内、前掲書、50-51頁。

* 43) 同上書、60頁。

* 44) ヴェーバーが構想していた自律的な学問としての「教育学」が具体的にどのようなものだったかについては、1907年論文「犯罪者、凡人、教育家」(Weber,E.1907-a: Verbrecher, Dutzendmensch und Pädagog. In: Die Deutsche Schule 11 1907, S.401-415.)における次のような見解からある程度イメージすることができる。

「教育学という学問は存在するか？それは疑いのないことだ。これを否認するとしたら、教育学的な学問がその他の学問領野から孤立した学問であると見なされてはならないこと、また教育活動や授業についての特定の学問専門分野と密接な関係にあるということを忘れているのだ。学問的な教育学は本来的には、倫理学、心理学、美学の研究成果を踏まえ、教育学的な諸努力を偉大な哲学的体系、とりわけ文化哲学者の問題や理念と比較することによって、教育学的な活動を詳細に解明すること以外の何ものでもない。この領域にこそ、あらゆる深奥なる教育学理論の源泉があるのだ。」(Weber1907-a,S.405)一すなわちヴェーバーは、教育学の自律性を脅かすような実験心理学、あるいは心理学に従属する教育学のあり方を批判したのであって、心理学それ自体の意義を全否定しているわけではない。1905年論文においてヘルバルトやツィラーを援用していることを考えると、ヴェーバーは最新の「実験心理学」は否定しつつも、伝統的な「表象心理学」には信頼を寄せていたと考えることも可能である。

* 45) ヴェーバーにおいて「教師の地位向上」と「学としての教育学」は内的連関性を持っている。この両者を繋ぐ場こそ教員養成施設であった。1910年論文「キャッチフレーズ教育学」において彼は次のように述べている。「学問的な不確実性は、われわれの準備教育の後遺症である。教員養成施設の卒業生に、徹底的に考え抜かれた深遠なる生命観や職業観が欠けている。ではこれらはいったいどこに由来しているのか？ドイツの教員養成施設は自らの学生に、紛らわしい多種多様な内容を、雑然と積み上げられた基礎知識を、相当数の科目において初期段階から注ぎかけている。だが、哲学的に全体を基礎づけることは疎かにされる、というか疎かにされざるを得ず、人々は言語道断な試験規定や規則で満足しようとしている。」(Weber1910,S.274-275)一すなわち、一般的な学問的知識を重視する傾向にある既存の教員養成システムを改め「学としての教育学」を基盤に据えた教員養成を実現できれば、教職の専門性が養成され、教師の地位も向上すると考えたのである。なお1907年の「犯罪者、凡人、教育家」は、「学としての教育学」を軸にした教員養成制度改革を訴えた論文である。

◆第2節

* 1) 『エルンスト・ヴェーバーとバイエルン州における改革教育論争』の著者レンナーによれば、ヴェーバーの生涯は次のように時期区分できるという。すなわち、1873-1894年は青年期・教員養成所時代・新人教員時代、1894-1902年は芸術的・政治的な活動に参加した時期、1902-1907年は体系の構築期、1908-1914年は体系の構築と自分のキャリアアップを目指した時期、1914-1918年は第1次世界大戦に関わった時期、1918-1920年は権威と革命の時代：ヴェーバーの国家危機体験とバイエルン教職員組合からの離反、1919-1933年は教員養成所の校長時代：教育学の専門家への変貌期、そして1933-1948年はナチズムの時代：ヴェーバーの辞職と晩年の生活である。レンナーも指摘するように、まさにこの時期のヴェ

ーバーは「体系の構築」を目指していたのである。Vgl. Renner,K.: Ernst Weber und die reformpädagogische Diskussion in Bayern. Stuttgart 1979, S.21-80.

* 2) Vgl. Renner, S.37.

* 3) Weber1907-b, S.1.

* 4) Ibid.

* 5) Ibid., S.3.

* 6) Ibid., S.4.

* 7) Ibid.

* 8) ヴェーバーはまた、ニーチェが哲学のみならず、心理学や倫理学、美学に関心を向けていた事実に触れ、この点もニーチェを「教育学の理論家」として論じることの根拠にしている。ヴェーバーに言わせれば、「心理学、倫理学、美学は、教育学の基礎科学に数えられるから」である(Weber1907-b,S.5)。

* 9) ヴェーバーは初期・中期・後期のことを第1期・第2期・第3期と言い表すこともある。

* 10) 第1章第1節でわれわれが確認した初期思想の時期区分(1872-1877年)とは多少異なるものの、この時期の該当作品は『悲劇の誕生』、『反時代的考察』、『われわれの教育施設の将来について』ということで、ニーチェの初期思想に関するヴェーバーの見方は通常のそれと一致している。

* 11) Weber1907-b, S.7-8.

* 12) Ibid., 74.

* 13) Vgl. Steiner1892, S.105-106. Tönnies1893, S.100-101.

* 14) KSA4, S.16.

* 15) Weber,E.: Zum Kampf um die allgemeine Volksschule. (Ein Versuch zur Klarlegung der eigentlichen Grundfragen und ein Beitrag zur bevorstehenden Deutschen Lehrerversammlung Pfingsten 1904) Langensalza 1904, S.6.

* 16) Weber1907-b, S.91. ヴェーバーはこの点について次のようにも述べている。「したがって、天才の創造というのは、自然科学者の、また人類学者や生物学者のテーマではなく、また社会経済学者や国民経済学者のそれでもなく、教育学者のテーマである。天才がいかに実現可能となるかという問題、この第一級の文化問題は、若きニーチェにとっては、天才的個体がどのように馴致されるのか?というものではなく、天才的な人間、あるいはそれに類する人間がどのように教育され、陶冶されるのか?というものである。」(Ibid., S.92)

* 17) Ibid., S.157.

* 18) 第1章、第2章においてヴェーバーはニーチェの哲学問題と文化問題を詳しく論じているが、その根底には次のような確信があった。「若きニーチェの教育学的思想は、本質的には彼の哲学的・文化的な信条の帰結である。若きニーチェの世界観や人生観の深い洞察こそが、彼の教育学的理論の完全なる理解を可能にするのである。」(Ibid., S.91)

* 19) Ibid., S.95.

* 20) Ibid., S.104.

* 21) この点についてヴェーバーは次のように述べている。「彼(※引用者注：ニーチェ)の最上級の哲学的・文化的な価値概念である生が、彼の全教育学的な評価基準としても役立っていることは、すでに

確認したとおりである。生の価値を有するものだけが教育学にとっての価値を持ち、生を活気づけたり維持したりするものだけが教育的に、また人間形成的に作用するのである。」(Ibid., S.129)

* 22) Ibid., S.164.

* 23) Ibid., S.94.

* 24) Ibid., S.71.

* 25) Ibid., S.117.

* 26) Ibid., S.155.

* 27) Ibid., S.168.

* 28) Ibid., S.101.

* 29) Ibid., S.142.

* 30) 「ただ創意に富んだ、創造的な芸術家のみが教育実践家の名をうけるにふさわしい。芸術家、真の天才、真正なる文化の担い手というのは同時に、ニーチェの理想的な教師類型である。大事なのは、その科学的な業績ではなく芸術的な創造であって、教育実践である。」(Ibid., S.148)

* 31) レンナーも言うように、ヴェーバーにとってのニーチェ哲学の最大の意義は「芸術家のごとき影響力を発揮する教師の人格内で最上級に位置する教育力として、人格の権利と価値を強調した点」であった(Renner,S.119-120)。

* 32) Weber1907-b, S.161.

* 33) Ibid., S.167.

* 34) Ibid., S.162.

* 35) Ibid., S.137.

* 36) Ibid., S.167.

◆第3節

* 1) Thieme,P.: „Also sprach Zarathustra“ Vortrag. Gehalten im Weißenfeller Lehrerverein am 13. Dezember 1900. In: Der praktische Schulmann 1901, S.218-235.

* 2) Reuschert,W.: Friedrich Wilhelm Nietzsche. In: Pädagogische Studien 22 1901, S.278-287, S.338-350, S.391-405.

* 3) Gärtner,F. Friedrich Nietzsche als Dichterphilosoph und Pädagog. In: Bayerische Lehrerzeitung. Eigentum des Bayerischen Volksschullehrervereins 36 1902, Nr.7-9. S.134-136, S.157-159, S.181-183.

* 4) Heine,H.: Friedrich Nietzsche als Pädagoge. In: Neue Bahnen 13 1902, S.275-287, 329-343.

* 5) Schädel,E.: Nochmals Nietzsches Pädagogik. Eine nicht „unzeitgemäße“ philosophisch-pädagogische Studie. In: Sächsische Schulzeitung (Organ des Sächsischen Lehrervereins und seiner Zweigvereine, sowie des Sächsischen Pestalozzi-Vereins.) Nr.14. (Freitag den 1. April) 1904, S.213-218.

* 6) Thieme, S.218.

* 7) Schädel, S.213.

* 8) Rein,W.: Pädagogik, philosophische. In: Rein,W. (Hrsg.) Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik.(1.Aufl.) Bd.5. 1898, S.164.

* 9) ハイネとシェーデルはそれぞれ次のように述べている。「あらゆる文化は教育を前提としており、したがってまたニーチェが他の哲学者以上に多くの面で教育問題に取り組んでいることも当然である。」(Heine,S.276)「あらゆる文化は教育を前提としている。それゆえニーチェが教育問題に取り組んでいるのはごく当然のことである。」(Schädel,S.213)

* 10) Gärtner, S.181. Heine, S.335.

* 11) Gärtner, S.181. Heine, S.338.

* 12) Heine, S.337.

* 13) Gärtner, S.157.

* 14) Heine, S.342.

* 15) Thieme, S.221.

* 16) Gärtner, S.157. Schädel, S.213.

* 17) Thieme, S.222.

* 18) Heine, S.342.

* 19) Schädel, S.217.

* 20) Heine, S.276.

* 21) Gärtner, S.158.

* 22) Heine, S.280.

* 23) Schädel, S.214.

* 24) Ibid., S.217.

* 25) Reuschert,S.396. ロイシェルトは次のように述べている。「天才を形成することが文化および歴史の目的である。これに続く目標こそが超人であるが、これは飽くまでも人間的なレベルでなければならぬというのである。ニーチェは言う。『人間はひとつの目標である』—『人間は目標ではない』。ニーチェのこのような変転はいったいどこから来るのか？われわれはまず彼にダーウィン主義の誤用が見られることを確認しなければならない。彼は未来における人間の進化のイメージを展開したが、それに対してダーウィンは人間の進化をただ過去に遡及しただけである。」(Ibid.)

* 26) Gärtner, S.157.

* 27) Schädel, S.217.

* 28) Heine, S.340.

* 29) Thieme,S.234. この点に関してティームは次のような見解を示している。「(…略…)ツァラトゥストラの教説をニーチェは自らの後期著作のなかで修正し、一般の共感を得るような主要思想を見捨てた。人類はより高次の本質を持つ第一世代のために発展すべきであるという仮説を彼は放棄した。大地の意義は、もはや未来の完全なる人類世代にではなく、強大な権力を持った個人にあるべきとされる。これこそが君主型人間である。大多数の民衆は『6、7人の偉大な人物に到達するために自然がとる回り道』に過ぎないどころか、これが人類発展の最高目標となるべきであるという。君主型人間を超える目的はもはや存在しないため、他の人間を暴力的に利用することが彼らの目的として許される。どういうわけでニーチェはこのような誤った教説を唱えることになったのだろうか？」(Ibid.)

* 30) ゲルトナーは次のように述べている。「『君主道徳』の告知者(※引用者注：ニーチェ)は、教師たちの予想通り、一般民衆学校の味方ではなかった。先述のとおり、彼の目標は、貴族主義的な選別があり、(…略…)それゆえ彼にとっては多数の幸福よりも少数の上昇の方が重要なのである。下等な生物が高等動物のような有機体にとって単なる栄養でしかないのと同様、彼に言わせれば、平均的人間や並の人間などは単なる手段、超人へと向かう橋にすぎないわけである。」(Gärtner, S.158)

* 31) Schädel, S.218.

* 32) 例えばゲルトナーはニーチェ思想の危険性を次のように指摘した。「ニーチェの思想は、まるでアヘンのように、感受性豊かな多くの人々の心に影響を与えた。ニーチェ思想をひとたび摂取しようものなら、この思想に酔い心地になり、もはやその思想なしでは耐えられない状態に陥るのである。」(Gärtner, S.134)

* 33) 後期思想に見られる諸問題の原因を「病氣」に求める論者もいた。「罵倒する者に正当性がないのは常だ！ニーチェも然り。しかし彼の場合、多くの乱暴狼藉や熱狂は、病理学的な次元に還元されるべきだろう。彼は病氣の男だったのだ。(…略…)すなわち運命によって彼は狂氣の闇に陥ったのだ。悪趣味な『反キリスト者』がその誇大妄想を証明している。」(Reuschert, S.404)

* 34) Schädel, S.218.

* 35) シューデルによれば、「ニーチェ教育学について語ろうとする場合、当然のことながら、この哲学者が心理学および倫理学とどのような位置関係にいるのかを解明する必要がある」(Schädel,S.213)という。教育学の基礎科学は倫理学と心理学だからである。しかしながら、後期著作において展開されるニーチェの心理学と倫理学は、少なくともシューデルの目には到底「教育学」の基礎科学たりえないものであった。「どう考えても彼(※引用者注：ニーチェ)の心理学は、真面目に努力している教育学者に感銘を与えることはできない。また彼の全哲学も、(…略…)倫理学には何の意味も示さないことは確実である。」(Ibid., S.217-218)

* 36) Vgl. Heine, S.342.

* 37) ゲルトナーは「ニーチェは文学の領域に出現した特異な存在である」と述べ、最終的にはニーチェを「詩人哲学者」としてのみ高く評価する(Gärtner, S.183)。

* 38) 例えばシューデルは、主観的かつ非現実的な発言ばかりを繰り返すニーチェよりも、カントやヘルバルトなどの理路整然とした哲学や教育学の方が数倍も重要であるとの見解を示す。

* 39) 論理性や体系性については「まだアフォリズムで叙述していなかった時期」と特徴づけ、実行可能性については「まだ同情道徳の憤慨せる敵対者ではなく、それゆえ後期の数年ほど思考や知覚もまだわれわれの思考や知覚と鋭く対立することがなかった時期」と述べ、ともに初期思想の優位性を明言している(Weber1907-b,S.8)。

* 40) Weber,E.(1907-c): Nietzsche, Friedrich Wilhelm. In: Rein,W.(Hrsg.): Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik Bd.6. Zweite Auflage. Langensalza 1907, S.281-287.

* 41) Weber1907-c, S.282.

* 42) Ibid., S.286.

* 43) Ibid., S.281.

第4章 「教育者としてのニーチェ」論の成立背景

1907年に成立した「教育学者としてのニーチェ」モデルも、わずか7年後の1914年には「教育者としてのニーチェ」と書き換えられてしまう。このモデルチェンジが「なぜ」「どのように」行われたのか。その背景を探り、「教育者としてのニーチェ」論の成立過程を明らかにすることが第4章の課題である。第1節と第2節においては、なぜモデルチェンジが要請されたのか、「教育学者」モデルに対して同時代人がいかなる反応を示したのかについて考察する。第3節、第4節の課題は、どのようにモデルチェンジがなされたのかを検討することである。いわばニーチェが「教育者」として把握されるための条件や背景を探る作業である。

第1節 「教育学者」モデルに対する違和感

1. 1907年以後の教育学におけるニーチェ論

「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立においてヴェーバーが果たした役割は大きいものであった。なかでも1907年という年は、ヴェーバーが学位論文『若きニーチェの教育学的思想』を上梓し、あわせてライン編『教育学事典』収録の項目「ニーチェ」の執筆担当をつとめたという点において、きわめて重要な意味を持っている。ドイツ教育学におけるニーチェ受容史のなかで「1907年」はひとつの大きな分節点をなしているのである。

教育関係者がニーチェを論じるケースも1907年頃を境に確実に増えている。入手できたものを年代順に挙げておけば、ロスマンの論文「ニーチェと改革者たち」¹⁾、ジモンによる報告「教育学に対するニーチェの位置」²⁾、イチューナーの論文「ニーチェ作品の教育学的内容を解明するための若干の見解」³⁾、A.シュタインの「教育と教養の問題に対する若きニーチェの位置」⁴⁾、ヴィンターフェルトの著作『ニーチェの見解における現代の教育制度』⁵⁾、メルデの著作『ニーチェのツアラトウストラと現代の学校に対するその意義』⁶⁾、ヨンコフの著作『教育理想としてのニーチェの超人理念』⁷⁾、ゴットリーブの論文「ギム

ナジウム、実科学校、フリードリヒ・ニーチェ」⁸、ヴァラシエクの論文「ニーチェの教育観」⁹、ゴルトベルクの「教育問題の創造者としてのニーチェとトルストイ」¹⁰、ヴェッセルリーの「教育改革や学校改革の先駆者としてのフリードリヒ・ニーチェ」¹¹、ロットの「ニーチェと古典的教養」¹²、クラインペーターの「学校改革者としてのニーチェ」¹³である。

このうち、ヴェーバーの名前と著作名を挙げているのは、イチュナー、ヨンコフ、ゴットリーブ、ヴェッセルリーの4名であるが、事典項目も含め、ヴェーバーのニーチェ論を参照した論者の数はもう少し多かつたのではないか。いずれにしても、ヴェーバーは1907年以後の論者にとって容易に無視できない「先行研究者」だったはずである。例えばイチュナーは、ニーチェに対して教育学的な関心を向けた点においてヴェーバーの1907年の著作を「興味深い本」¹⁴と賞賛している。またヴェッセルリーは、「ニーチェの教育学的理念を体系化し、論理的な結論を導こうとした」点においてヴェーバーの試みに一定の評価を与えている¹⁵。

しかし、彼らは必ずしもヴェーバーのニーチェ論の全てを認めたわけではなかった。例えばゴットリーブは、ヴェーバーの『若きニーチェの教育学的思想』が「きわめて勤勉かつ完璧な概要を示してくれている」として一定の功績を認めながらも、「私はこうした成果に全面的に同意することはできない」と述べ、ヴェーバーに対して批判的姿勢を見せている¹⁶。またヨンコフによれば、ニーチェの初期思想にしか目を向けないヴェーバーは「ニーチェの後期著作の教育学的価値を全然うまく捉えられていない」という¹⁷。このように、彼らはヴェーバーのニーチェ論に対して批判的な態度も見せる。「先行研究」の常として、ヴェーバーのニーチェ論もまた「克服されるべき対象」と見なされたのである。

2. ハーヴェンシュタインによる批判的書評

じつは1907年には、「教育学者」モデルに対する批判的書評も発表されている。ヴェーバーのニーチェ論に書評を寄せた人物こそ、後に『教育者としてのニーチェ』(1922)¹⁸という著作を発表することになるハーヴェンシュタイン(Martin Havenstein, 1871-1945)¹⁹である。以下では、ハーヴェンシュタインの1907年書評に注目し、ヴェーバーの「教育者としてのニーチェ」論がいかなる評価を受けているのかを確認する。

(1) プロフィールと1906年著作の概要

ハーヴェンシュタインの本職はギムナジウム教師であったが、文筆活動にも積極的に従事し、当初よりニーチェ思想にも高い関心を寄せていた。彼が最初に発表したニーチェ論は、1906年の著作『フリードリヒ・ニーチェ、青年を墮落させる者?』²⁰である。ハーヴ

エンシュタインの基本スタンスを確認するためにも、ここではまず彼の1906年著作の内容を確認しておきたい。

「それにしてもソクラテスはなぜ毒杯を仰がなければならなかったのか？アテネ市民が、彼は青年を墮落させる者だと思ったからではなかったか？」²¹。ハーヴェンシュタインが冒頭でこのように問いかけたのは、1890年代のニーチェブーム以降、ニーチェもまたソクラテスと同様の被害を受けているのではないかという認識があったからである。すなわち、ニーチェという「新しいソクラテス」の到来を受けて、ドイツ人もアテネ市民と同様、新参者に「青年を墮落させる者」のレッテルを貼り付け、誹謗中傷という名の「毒杯」を用意しているというのである²²。1906年のこの弁明書は、いわばニーチェに貼り付けられた「青年を墮落させる者」というレッテルを剥がす試みであった。

ハーヴェンシュタインの批判はまず、ニーチェ思想にまったく理解を示さない年長世代、とりわけ同業者である教師に対して向けられた。当時、多くの教師は青年の健全なる育成という大義名分のもとにニーチェ思想を徹底批判していた。ところが、ハーヴェンシュタインの見るところによれば、青年に対するニーチェの悪影響を憂慮する教師たちは「青年を気遣っていた (fürchten ~ für die Jugend)」のではなく、むしろ「青年を恐れていた (fürchten ~ vor der Jugend)」だけであるという²³。こうして彼は、青年との関わりを避けようとする教師の姿勢を批判し、ニーチェに貼られていた「青年を墮落させる者」の汚名を教師たちに返上した。

しかしながら他方で彼は、ニーチェ派の青年に対しても嫌悪感をあらわにする。「虚栄心で満たされた間抜けな青年が、ナイトカフェや女のいる酒場で『超人』という言葉が肩にどれほど重くのしかかってくるものなのかということには全くお構いなく『超人』ごっこに興じたり、早々に道を踏み外してしまった好色家が遅い時間にフリードリヒ通りを『善悪の彼岸』においてぶらぶら徘徊すること以上に嫌悪感を催すことはない」²⁴。ハーヴェンシュタインによれば、ニーチェ派の青年もまた反ニーチェ派の教師と同様、決してニーチェ思想の正しい理解者ではなかったのである²⁵。

こうして彼は、ニーチェ自身が厳格な教育を主張していたことなどを指摘しつつ²⁶、ニーチェ思想に関するさまざまな誤解を解いていく。ハーヴェンシュタインに言わせれば、逆に、反ニーチェ派の教師やニーチェ派の青年の側こそ、「ニーチェを腐敗させる者 (Nietzscheverderber)」²⁷だというのである。

本人も認めているように、ハーヴェンシュタインによって語られているのは「ニーチェが何でないのか」²⁸である。これまでニーチェに貼られてきた不名誉なレッテルを剥がすことが、本書の第一の意図だったからである。ただ、ハーヴェンシュタインは結論部で「ニーチェが何であるか」という問いに対して示唆的な回答を寄せ、そのなかで「心の天才」、「魂の解決者」、「魂の覚醒者」と並んで、ニーチェを「教育学の王者 (König der Pädagogik)」²⁹とも呼んでいる。ハーヴェンシュタインもまたヴェーバーと同様、ニーチェ思想に教育的な意義を見出していたのである³⁰。

(2) 1907年書評の分析—ニーチェが学問研究の対象とされることへの違和感

ヴェーバーの『若きニーチェの教育学的思想』が出版されたのは、ハーヴェンシュタインが弁明書を出版した翌年のことである。この出版を受け、ハーヴェンシュタインは雑誌『種まき人』に「教育学者としてのニーチェ (Nietzsche als Pädagog)」(※下線部は原文ママ)と題する書評を寄せた。ライプツィヒのヴンダーリッヒ出版から、仮綴じ版が2マルク、上製本が2.5マルクという値段で公刊されるという書籍の基本情報に続いて、本書の内容紹介が行われている。

ハーヴェンシュタインによれば、ヴェーバーの功績は何よりもまず「教育学に対するニーチェの意義を正当に評価したこと」³¹であった。

「ヴェーバーはここで大きな一歩を踏み出す。すなわち彼の課題設定は、若きニーチェの教育学的思想を収集し(zusammensuchen)、整理する(ordnen)ことであった。また必要があれば、その思想を解釈し(deuten)、他の学説と比較する(vergleichen)。そして、とくにニーチェ思想と他の教育思想が一致しているかどうか、ニーチェの教育学的思想が実践の場に適用可能かどうかを吟味する(prüfen)。ニーチェの諸著作を熟知している者なら、この課題が決して容易でないことはわかるだろう。」³²

このように、ハーヴェンシュタインはヴェーバーのニーチェ論に対し一定の評価を示している。これまで無視されてきたニーチェ思想の教育学的意義を明示したこと、またニーチェを「青年の危険な誘惑者」から「教育学者」に昇格させたことは、ヴェーバーの紛れもない功績なのである。

しかし、ハーヴェンシュタインは徐々にヴェーバーの「学術研究(gelehrten Forschung)」や「学問研究(wissenschaftliche Erforschung)」の功績を皮肉的に言い換えはじめる。それは、1906年著作などにおいて「自分自身がすでに何度かニーチェの教育学的意義を指摘し、またその意義をヴェーバー以上に高く評価してきた」³³という自負があったからでもある。

例えば、諸問題を抱えるニーチェ思想から「統一的で矛盾のないもの(etwas Einheitliches, Widerspruchsfreies)」、つまり理解可能な部分だけを「摘み取る(herabholen)」というヴェーバーの強引な姿勢がターゲットにされている。ハーヴェンシュタインは、ニーチェ思想の「体系化(Systematisierung)」や「規格化(Vereinheitlichung)」を最優先させるヴェーバーの試みが、ときに「事実の歪曲」を犯し、本来あるべきニーチェ思想の魅力を無視してしまっているとも指摘する。すなわち彼に言わせれば、ヴェーバーの真の意図は、自分の思い通りにニーチェを「支配すること(Herr zu werden)」にほかならず、したがってまた1907年の「教育学者としてのニーチェ」論もニーチェ思想に対する「暴力(Gewalt)」でしかないのである³⁴。またニーチェを「教育学者」として説得的に提示する上で有効だった教育思想史上の人物との比較検討も、「ニーチェのオリジナリティが否認されたり、彼の思考様式の生き生きとした本質が寸断されたりするかのよう印象を与える」³⁵とされ、むしろ

る否定的な評価へと変わっている。

教育学のコンテクストにおいて等しくニーチェを肯定的に評価しながらも、ヴェーバーとハーヴェンシュタインのあいだに見解の相違が見られることは、以上より明らかであろう。少なくとも1907年の書評においては、ニーチェ思想を学問研究の対象とすることへの違和感や批判意識が如実に示されている。そこで本研究においては、ハーヴェンシュタインやその他の論者が示した「教育者としてのニーチェ」論への違和感が後の「教育者としてのニーチェ」論の成立を後押ししたのではないかという仮説に基づいて、今後の考察をすすめていくことにする。

第2節 コンラートによるニーチェ思想の人格化

1922年に『教育者としてのニーチェ』を公刊することになるハーヴェンシュタインが、ヴェーバーの「教育者としてのニーチェ」論に違和感をおぼえ否定的な見解を示していたという事実。この事実を踏まえれば、われわれは、ニーチェを「教育者」と捉えるか「教育者」と捉えるかという見解の相違に敏感でなければならないだろう。ここには、ニーチェを「学説」として評価するか「人格」として評価するかという、解釈上きわめて重要な問題が含まれているのである。

以上の問題関心から、本節ではコンラート(Michael Georg Conrad, 1846-1927)という人物に注目する。コンラートは、自然主義文学運動に携わった人物として紹介される程度で、ニーチェ受容史研究においてもさほど注目されてきたとは言えない¹⁾。ところが彼は、1890年代以降のニーチェ派や反ニーチェ派、ニーチェ研究推進派などへの批判を通して、ニーチェ思想とのアクチュアルな関係性を模索し続けた人物でもある。とくに興味深いのは、非「学問」的なニーチェ思想を「学問研究」の対象にすることへの違和感や問題意識がコンラートに確認できるという点である。本節の目的は、コンラートのニーチェ論に注目し、ニーチェ思想の学問化とほぼ同時に開始されたニーチェ思想の脱学問化＝人格化の思考プロセスを明らかにすることである。

1. 自然主義文学運動とコンラート

自然主義文学運動との関わりという観点からコンラートの活動に目を向けるならば、次の2つが指摘されうるであろう。すなわち、ひとつは雑誌主宰者としての活動、もうひとつは小説家としての活動である。

コンラートが雑誌『ゲゼルシャフト』を創刊したのは1885年のことである。19-20世紀転換期ドイツにおける雑誌出版界の動静に詳しいフィリップによれば、コンラートが創刊

したこの雑誌は、1902年に廃刊されるまで、自然主義系の文学青年に大きな影響を与えたという²。興味深いのは、この文学青年の一部がニーチェ派でもあったという点である。例えば印象主義詩人ダウテンダイは、この雑誌でニーチェの存在を知りニーチェ派になった一人である。

「私は一激しいシュトゥルム・ウント・ドランクの持ち主、M.G.コンラートによって頑強かつ勇敢に創刊された『ゲゼルシャフト』誌上で、はじめて詩人哲学者ニーチェの肖像を見た。それは1891年のことで、ヴェルツブルクの〈ハルモニー〉の閲覧室においてであった。肖像には、彼の全著作についての短い解説を含む感激調の一文がついていて、またこの偉大な人物が精神錯乱に陥り、いまナウムブルクの母のもとで暮らしているが、おそらく二度と思想の透明度を取り戻すことはないだろうとの情報を伝えていた。私は閲覧室を出て、さっそく書店へ向かった。そしてニーチェの作品『ツァラトウストラかく語りき』が欲しいと言った。大学書店では誰ひとりこのドイツの哲学者の名前を知らなかった。」³

ダウテンダイは1913年発表の回想録「私の遍歴時代の思想の糧」において、当時をこのように振り返っている。コンラート自身がそう意図していたかどうかは別として、雑誌『ゲゼルシャフト』はニーチェ派から一目置かれる存在だったのである⁴。

コンラートは雑誌主宰者としてだけでなく、自ら小説や詩を発表することによっても自然主義文学運動と関わった。作家としての彼の代表作は小説『堇色の闇の中で』⁵であるが、興味深いのは、この小説が「ツァラトウストラ=ニーチシュキ(Zarathustra-Nietzischki)」なる聖人を崇拜する民族の物語だということである。1890年代のドイツ文学界には、ニーチェ思想に含まれる「超人」や「善悪の彼岸」などの過激なキャッチフレーズが小説や詩のモチーフとしてしばしば援用されたという背景があり、1890年代を象徴するひとつの文学ジャンルを形成していた。これらの作品は「ニーチェ小説」と呼ばれるが、コンラートの小説『堇色の闇の中で』も、使用されている言葉⁶やストーリー設定⁷などから判断して、典型的な「ニーチェ小説」に分類することができる。

従来のように自然主義文学運動という枠内でコンラートを捉えようとする、彼の試みは1890年代のニーチェ派にきわめて近いものであったと推測されてしまうだろう。実際、ドイツ文学におけるニーチェ受容史の資料集を編纂したヒレブラントは、コンラートを「ニーチェの熱狂的なファン」⁸と特徴づけ、彼の言動を1890年代のニーチェ派と同類のものに見なしている。しかし、コンラートのニーチェ論を詳細に分析していくと、そこには、反ニーチェ派だけではなくニーチェ派も含めた1890年代のニーチェ受容のあり方それ自体を克服していこうとする明確な意識を認めることができる。以下、1890年代の克服を目指すコンラートの発言を確認していくことにしよう。

2. 1890年代の喧噪とその批判

(1) 反ニーチェ派に対する批判

コンラートにとってもっとも許しがたかったのは、ニーチェ思想にまったく耳を貸そうとせず、既存の価値尺度によってニーチェを全否定する、いわゆる「反ニーチェ派」であった。彼らは、ニーチェ派の急増という時代状況の中で『反ニーチェ』や『反ツァラトゥストラ』といった反駁書を出版し、例えば「ニーチェも彼の信奉者たちもみな極度に反動的である！」⁹などとして、ニーチェ思想の弊害や危険性を訴えた。

こうした反ニーチェ派の言動に対して、コンラートは論文「ニーチェをめぐる闘い」(1899年)などを発表し、彼らの姿勢を徹底批判する¹⁰。とりわけコンラートが問題視したのは、『反ツァラトゥストラ』の著者ヘンネ・アム・リューンであった。

「彼(※引用者注：ヘンネ・アム・リューン)は、(…略…)この詩人哲学者(※引用者注：ニーチェ)の著作に収められた重要な言葉のうちのたった一語すら正しく理解することを諦め、理想のメロディを奏でる生の楽譜上の音符ひとつ正しく聴こうとせず、無限の魅力を感じようとしめない。」¹¹

コンラートの見るところによれば、反ニーチェ派の言動は単なる「あら探し(bemäkeln)」や「ケチつけ(bekritteln)」でしかない¹²。こうしてコンラートはニーチェに対する反駁書『反ツァラトゥストラ』を「もっとも愚かな本のなかの一冊」として一笑に付すのである¹³。

ただ、反ニーチェ派に反対の立場だからといって、コンラートがニーチェ派に属していたと結論してはならない。1899年論文「ニーチェをめぐる闘い」のタイトルには、「われわれがニーチェ派の極端な個人主義的見解に与しないことは、読者諸氏には改めて言及する必要もないだろう」¹⁴というコメントが注記されている。この見解からもうかがえるように、コンラートはむしろニーチェ派に対して批判的だったのである。

(2) ニーチェ派に対する批判

例えば1895年の著作『政治の中の超人』¹⁵においてコンラートは、当時の青年ニーチェ派の思考や行動パターンを分析し、「彼らは、衣服や姿勢、顔つきや身振り、言葉や作品の中で、つまらない普通の世界に向かって、われらは崇高だ！と繰り返し喧伝しなければならないと信じ込んでいる」¹⁶と述べる。ただ、彼はこのような現状を決して世の流れとして容認することはなかった。コンラートによれば、このようなニーチェ派の言動は、「超人主義(Übermenschentum)」という言葉に象徴されているという。こうして彼は、皮肉を込めてニーチェ派の青年を「現代の超人(Der moderne Übermensch)」と呼び、彼らに対して厳しい態度を貫く。

「現代の超人が仮面をつけて精一杯背伸びをしているのはわかっている。役のために必死で努力しているのも知っているが、化粧の下から吹き出す汗のニオイにみな気づいている。」¹⁷

コンラートによれば、「超人」を標榜する青年は、じつのところニーチェとは一切関係がなく、汚物や安酒からできあがった単なる「怪物」にはほかならない。ニーチェ派の言動も、彼の目には「誤解されたニーチェ主義」や「軽薄なツァラトゥストラの猿真似主義」としか映らなかった¹⁸。「能力のある人(Könnner)」と「知っているだけの人(Kenner)」とのあいだには相当の開きがあるとコンラートは考える。すなわち彼に言わせれば「ニーチェはニーチェ(Nietzsche ist Nietzsche)」¹⁹なのであって、ニーチェ派やニーチェ主義とは別物なのである。コンラートは、ニーチェブームが本格化する前からすでに、ニーチェ派を名乗る青年たちの軽薄さを皮肉的に描写していた。

「ニーチェが正当性を認め、真理であると把握したからといって、それが、誰彼問わず万人にとっての正義や真理となるには程遠いだろう。何人かの若者はすでに、ニーチェ哲学を現代思想のカノンとして告知したり、彼の評価や価値転換が万人に対して拘束力を持つべきであると主張したがっているようだ。しかしながら、この現象が実証しているのは、彼らが先導の羊なしでは生きていけないこと、彼らが制限と束縛を絶えず渴望しているということ、要するに、彼らの奇妙な畜群的本性だけである。」²⁰

ニーチェ思想を熱狂的に崇拝しているからといって、必ずしもニーチェの思想を正しく理解できているとは限らない。少なくともコンラートの見るところによれば、ニーチェ派に属する多くの青年もまた、反ニーチェ派と同様、ニーチェ思想の正当なる理解者とはならなかったのである。

3. 学問化から人格化へ

(1) 学問化の試みに対する一定の評価

通俗的かつ表層的なレベルでニーチェに刺激を求めていたニーチェ派と、最初から反動的と決めつけてニーチェを一切拒絶した反ニーチェ派。立場は正反対であるが、両者はともにニーチェ思想を誤解していたという点で共通している。誤解に基づくニーチェブームとニーチェ批判の喧噪はまた、1890年代のニーチェ受容の限界でもあった。

しかしながら、すでに第2章第3節で詳述したように、世紀転換期が近づく頃には、こうした喧噪から距離をとって冷静な議論をするべきだとするアカデミカーも現れてきた。『19世紀の精神的社会的思潮』や『フリードリヒ・ニーチェ』を著した教育学者ツィーグラー、『フリードリヒ・ニーチェの問題』を公刊した神学者グリムなどがそうである。彼

らの著作においては、例えばニーチェの思想形成過程が3～5段階に区分されたり、思想内容がドイツ精神史のうちに位置づけられたり、あるいは他の思想家や哲学者との比較対照が行われるなど、得体の知れないニーチェの思想に何らかの性格や意味を与えようとする試みが見られるようになる。ツィーグラールやグリムの登場によって、ニーチェ思想はいわば学問化されていったのである。こうした学問研究推進派の動向に対してコンラートはいかなる反応を示したのだろうか。

例えばコンラートはツィーグラールの試みを次のように特徴づけている。

「ツィーグラールは、全てにおいてニーチェの著作という確固たる根拠にもとづき、ニーチェの発展段階に通底する何本もの繊細な糸を見出しながら、それらが持つ両義性を解釈し、その成果をニーチェ精神の全体像に織り込もうと試みており、よろこばしいことに、彼は大部分において成功している。また彼は、教授然とした粗野な態度でその輝かしい対象に殴りかかることもほとんどない。」²¹

またグリムのニーチェ論に対してコンラートは次のようにコメントしている。

「神学者グリムは、不屈の勤勉さをもって、ニーチェの思考過程に見られる非常に厄介な紆余曲折を辿り、学問的な未熟さも見られるその認識論的考察を追跡している。この勤勉さには、思わず心を揺り動かされる。」²²

ツィーグラールとグリムの関心は、ニーチェ思想をめぐる喧噪にではなく、ニーチェ思想それ自体に向いていた。この点でコンラートと彼らの基本的スタンスは一致している。ニーチェ思想に向き合おうとしないニーチェ派や反ニーチェ派とは異なり、周囲の雑音に惑わされることなく自らニーチェ思想に向き合おうとする学問研究推進派の姿勢は、コンラートにとって十分評価できるものと思えたのである。

(2) 学問化への違和感

しかし、両者に対するコンラートのコメントを注意深く追っていくと、それぞれ微妙にトーンが変化していくことに気づく。例えば、ツィーグラールの著作は「ニーチェという問題を解明するというよりも処理しようとする無邪気に頑張っている」²³とされ、グリムの試みも「ニーチェ研究にどっぷりハマっている」²⁴などと、やや皮肉的に評されている。また別論文の中でコンラートは学問研究推進派の試みを「手荒な真似」と特徴づけているが、それは、ニーチェ思想を初期→中期→後期などと時期区分し、思想内容を緻密に分析しようとする学問化が、ニーチェ思想を「解剖」し、バラバラになった破片を「顕微鏡で観察する」行為に似ているからである²⁵。直接ニーチェ思想に向き合おうとする姿勢それ自体は評価できるが、学問研究の対象にするというニーチェ思想の取り扱い方には問題があるというのである。

コンラートは、ツィーグラールとグリムのニーチェ論に共通する方法論上の問題点を次のように指摘する。

「ツィーグラー教授の場合も、主要司祭グリムの場合も、ニーチェをめぐる知識を、内的な自己体験からではなく、非人格的な研究意欲の成果として積み上げているという印象は否めない。ニーチェのなかでわれわれが尊敬しているのは、今世紀最高とも言うべき天才的な芸術家的本性であるが、両者は明らかにこの本性をまともに理解しなかった。彼らにとってニーチェとは、最初から最後まで基本的に、ひとつの理論上の問題なのである。しかし、それによって彼らは、ニーチェの全てを掌握できたわけでもないし、本来のニーチェを理解できたわけでもない。それゆえ、(…略…)外観は完璧なように見えるが、彼らの叙述は依然として疑わしいのだ。」²⁶

ツィーグラーやグリムによる学問化の試みが難解なニーチェ思想を解説するうえで有効な手段となったことは間違いないだろう。だが、「理論上の問題」としてニーチェ思想を詳細に検討しても、その全てを理解できるとは限らないし、逆に、「学問の名誉のために」²⁷というアカデミズムの流儀を押し通すことによって、ニーチェの魅力が損なわれてしまう可能性もある。このような観点から、コンラートはニーチェ思想の学問化に難色を示したのである。

(3) ニーチェ思想の脱学問化＝人格化

ツィーグラーやグリムによる学問化の試みは、1890年代の喧噪を克服するという大きな成果を上げた。しかし、この試みは同時に、ニーチェ思想と学問研究の相性の悪さ、ニーチェ思想の非「学問」的な性格を再認識させることにもなった。

学問研究推進派の立場からすれば、この相性の悪さは、矛盾や非論理性といったニーチェ側の「欠陥」として捉えられる。しかし、ニーチェ思想の意義を確信している者の立場からすれば、逆にニーチェに学問研究のメスを入れること自体が「暴力」だと把握される。いずれにせよ、非「学問」的なニーチェ思想を学問研究の対象とすることにはさまざまな問題が伴うのである。

こうした問題に直面して、コンラートが見出した解決策は、非「学問」的なニーチェ思想を積極的に肯定することであった。ニーチェ思想の意義を確信する彼にとって、それはいわば当然の決断であろう。このとき彼が目にしたのは、ニーチェその人の「人格」である。「偉大なる人格の統一体 (die grosse Persönlichkeits-Einheit)」²⁸ や「人格像 (Persönlichkeits-Bild)」²⁹ といった言葉を用い、学問研究のメスが及び得ない「人格」という不可侵の領域に目を向け、その重要性を強調することによって、コンラートはニーチェそのものを拡張する³⁰。学問研究だけでは決して汲み尽くすことのできない「本来のニーチェ (der eigentliche Nietzsche)」³¹ や「全ニーチェ (der ganze Nietzsche)」³² という新たな思想世界を用意したのである。

当時すすめられつつあったニーチェ思想の学問化に反対し、最終的にニーチェの「人格」の意義を強調したという点から、コンラートのこの一連の試みを人格化と呼ぶこともでき

よう。ニーチェの意義を「学説」から「人格」へとシフトするこの試みはまた、矛盾や非論理性といったニーチェ思想の欠陥を覆い隠すことにもなった。換言すれば、思想や学説の諸矛盾がニーチェという「人格」のうちに解消されるのである³³。以下の引用は、コンラートによるニーチェ思想の人格化の特徴がよくあらわれた文章のひとつである。

「冬は、真夏とは違う世界を出現させるし、春は、秋とは違う日差しや雰囲気をもたらす—これこそまさに自然の素晴らしさではないか！全人(Vollmenschen)や自我の芸術家(Ich-Künstler)の場合もそうだ。季節や気温の変化があるからこそ、素晴らしい統一や文化の調和が生まれるのだ！(…略…)ああ、ニーチェの場合なのに、精神を味わい、その美しさとエネルギーを吸収するのではなく、言葉ひとつにこだわり、小さな点で言い争いをするとは一硬直化や矮小化とも呼べるこうした行為の何とみすばらしいことか！」³⁴

小括

反ニーチェ派はもちろん、ニーチェ派も、そして両派を克服したニーチェ研究推進派も、コンラートの見るところによれば、結局「本来のニーチェ」を見出すことはできなかった。ニーチェ思想の意義や魅力というものは、「ブーム」という通俗的な受容形態によっても、「学問研究」という暴力的な受容形態によっても、決して理解されえないからである。こうして彼は、人格化されたニーチェ思想、すなわち「全ニーチェ」や「本来のニーチェ」なるものを「直接われわれ個人の感覚に作用させること」³⁵が重要であると主張する。このような方法によらない限り、ニーチェ思想の正しい理解は不可能だというのである。

では、コンラートのこの提案はどう評価されうるだろうか。例えば「精神を味わう」とか「美しさとエネルギーを吸収する」などと説明される受容方法も、また「英雄のごとき誠実さこそニーチェの最内奥の本質である」³⁶という見解も、学問研究推進派の試みを完全に克服できているわけではない。むしろニーチェ論として評価するなら、コンラートの主張はツィーグラやグリムのそれに比べ、具体性や説得力を欠いている。しかしコンラートのこの試みは決して軽視されてはならない。というのも、「学説」対「人格」、「非人格的な研究意欲」対「内的な自己体験」³⁷という構図のなかで、後の時代のニーチェ信奉者が選択したのは、ニーチェの「人格」であり、「内的な自己体験」としての「ニーチェ読書」という受容形態だったからである³⁸。

第3節 「教育者」の条件

本章第3節および第4節においては、「教育学者」から「教育者」へのモデルチェンジ

が「どのように」行われたのかという観点から、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立過程を解明する。いわばニーチェが「教育者」として把握されるための条件や背景を探ることが以下の具体的な作業であるが、本節ではまず、「教育者」に求められる条件、すなわち「教育者」概念の意味内容を「教育学者」や「教師」といった類似概念との比較において明確にしておきたい。

1. 「教育者」概念の意味内容

(1) 「教育学者」ではなく「教育者」

「教育学者」と「教育者」の相違を考えるため、前節においては、両者の共通項である「教育」を外し、ニーチェ思想を「学説」として捉えるか「人格」と捉えるかという問題について、コンラートのニーチェ論を手掛かりに考察を行った。ここでは、同じ問題を、改めて「教育学者」「教育者」両概念に再定位して考えておこう。

„Erzieher“ は、近年「社会教育」の文脈において特定の「職名」をあらわす言葉としても用いられているようであるが、「教育」する「者」という意味から、語そのものを「教育者」と訳すことに異論はないものと思われる。それに対し、„Pädagoge“ は訳語の選択に迷うドイツ語のひとつである。

„Pädagogik“ はしばしばその両義性が指摘される概念である。平野正久は、„Pädagogik“ が、狭義においては「教育学」を意味する一方で、広義においては理論と実践を含む総体としての「教育」という意味を持つ言葉でもあることを指摘している。また、„Pädagogik als Wissenschaft“ という限定的表現があること自体、„Pädagogik“ の意味の広さや非学問的性格を裏書きしているという”。このように考えれば、„Pädagoge“ もまた、教育思想や教育理論を展開する「教育思想家」や「教育学者」のみならず、実際に教育行為に携わる「教育従事者」や「教育実践家」をも含み込む広義の概念として理解する必要があるだろう。

以上を踏まえた上で、本研究においては „Pädagoge“ に敢えて「教育学者」の訳語を当てることにする。むしろ、理論と実践の両義性を考慮して „Pädagoge“ を「教育家」と訳すことも検討したが、ニーチェの教育学的思想を「人格的教育学」という「学説」として評価するヴェーバーの意図を汲み、少なくとも当時のニーチェ受容の文脈における „Pädagoge“ は、いわゆる「教育学者」を意味するものとして解釈することにした。

最後に、日本語表記の「教育者」と「教育学者」の違いを確認しておきたい。単純に考えれば、「教育者」は「教育する者」、「教育学者」とは「教育について考える者」のことを指すと言えよう。すなわち「教育者」には教育される対象＝被教育者の存在がなくてはならないし、同様に「教育学者」には、教育について考えた所産＝教育理論や教育思想がなくてはならない。前節で考察したとおり、ここにはやはり、「人格」対「学説」の対立

図式が存しているのである。例えば、ある人物を「教育学者」と評価する場合、通常われわれは彼が「生きている人間」かどうかを問題にはしないだろう。このときもっとも重要なのは、彼が提示した「教育思想」の内容だからである。逆に、ある人物を「教育者」と見なす場合、彼が「被教育者」を対象にした「教育実践」を展開しているかどうかは問われなくてはならず、したがって当然「死んでしまった人間」はもはや「教育者」になることはできない。このように、「教育者」と「教育学者」のあいだには、単なる語感レベル以上の相違が存在するのである。

(2) 「教師」ではなく「教育者」— „Erzieher“ 概念の同時代的意味

「教育する者」(教育者)と「教育について考える者」(教育学者)の相違は、以上から明らかであろう。しかし、「教育する者」としてわれわれは「教師(Lehrer)」という言葉を用いることがある。「教師」と「教育者」は果たして同じ概念なのだろうか。かりに両者に違いがあるとすると、その違いは何なのか。当時のドイツにおいて „Erzieher“ 概念がいかなる意味を有していたのかを確認する必要があるだろう。

19-20 世紀転換期のドイツにおいて出版された教育学的著作や教育学事典のうち、ベストセラーになった教育学者レーマンの 1901 年著作『教育と教育者』²⁾とその改訂版(1912 年)³⁾、1903 年から出版されたライン編『教育学事典』第 2 版⁴⁾、1913 年から出版されたロロフ編集の『教育学事典』⁵⁾などを参照した結果、「教育者」概念の同時代的意味内容について、おおよそ次のようなことが明らかとなった。

* * *

【①学校という枠を超出していること】

レーマンが「教育者(Erzieher)」概念の比較対象としてしばしば引き合いに出すのは「教師(Lehrer)」という概念である。この „Lehrer“ という語をレーマンは「教職員」という意味で用い、批判している⁶⁾。この意味でレーマンの主張は文化批判にも通底する「学校批判」であった。当時の教育学事典において „Lehrer“ が独立の項目としてではなく各学校の教師別に説明されていることからもうかがえるように⁷⁾、当時この語は「学校」という空間で勤務する「職業としての教師」を意味していた。見方を変えれば、「教育者」概念には、「学校という枠を超出する」という意味内容が込められていたのである。

【②生徒と個人的な関係を結ぶこと】

「教育者」による教育とはどのようなものなのだろうか。当時のドイツで一般的になされていた学校教育とは、「集団授業」や「反復練習(Drill)」であった。しかしレーマンによれば、教室で生徒全員に向けて行われる「教師」による一斉授業では、合理的な知識伝達はできても、生徒たちは心を閉ざしてしまうという⁸⁾。ある人物を「教師」ではなく「教育者」として評価しようとするとき、たしかにわれわれは、その人物が一個の「人格」として生徒とどう向き合っているか、教育の内容や結果だけではなくその形式やプロセスに

も注意を払う。生徒一人ひとりとの信頼関係が構築できた場合にのみ真の教育は実現可能となる。こうした見地から、「教育者」には「個々の生徒との関係」を大切にできることが必要とされたのである”。

【③生き生きとした人格であること・人格的な影響力を有していること】

「教育者」が「職業」ではなく「人格」でなければならないということも重要である。教育学事典における „Erzieher“ の項目に関しても、独立項目としては掲載されていないものの、それぞれ „Lehrerpersönlichkeit“ (Rein)、 „Persönlichkeit des Lehrers“ (Roloff) を参照するよう指示がある。またレーマンも、真の教育は「教育設備」ではなく「教育的かつ模範的な一人の人格 (eine erzieherische und vorbildliche Persönlichkeit)」によって行われうるとの見解を示している。レーマンが結論部で「真に教育的な活動が目指される場合に例外なく重要となるのは、生や熱意、人格、人間から人間への自由な影響力である」¹⁰ と強調しているように、当時「教育者」概念には「生き生きとした人格であること」「人格的な影響力を有していること」が付帯条件として求められていたのである¹¹。

* * *

多くの論者が指摘するように、文化批判の主要なモチーフは、生徒の生や個性を軽視した学校教師による主知主義的教育に対する批判であった¹²。実際ニーチェは初期著作『反時代的考察』において、生を軽視し教師にとって効率のよい集団授業をすすめるような学校教育を批判し、そこから青年の生を解放するよう訴えた。①学校という枠を超出していること、②生徒と個人的な関係を結べること、③生き生きとした人格であること・人格的な影響力を有していること。これらを意味内容として条件づけられた「教育者」概念は、まさに19世紀後半以降の文化批判的思潮のなかで醸成されたのである。

2. 「教育者としてのニーチェ」という表記の問題

本節で検討しておきたいもうひとつのテーマは、「教育者としてのニーチェ」という表記、とりわけ「教育者としての○○○(～ als Erzieher)」という形式についてである。

そもそも「教育者としてのニーチェ (Nietzsche als Erzieher)」という表記の使用例は、歴史上どこまで遡及することができるのだろうか。この表記を最初に用いたのは、じつはニーチェ本人である。表記の使用が確認できるのは、1888年に執筆され1908年に公刊された自伝『この人を見よ』においてである。「なぜ私はこんなに賢明なのか」「なぜ私はこんなに利発なのか」「なぜ私はこんなによい本を書くのか」「なぜ私は一個の運命であるのか」という4部構成¹³のうち、第3部「なぜ私はこんなによい本を書くのか」の『反時代的考察』に関する記述において、ニーチェ自身が「そこ(※引用者注：『反時代的考察』第3論文「教育者としてのショーペンハウアー」)では、『教育者としてのショーペンハウアー』ではなく、その対極の『教育者としてのニーチェ』が語っているとさえ言えるだ

ろう」¹⁴と述べているのである。「教育者としてのニーチェ」が「教育者としてのショーペンハウアー」の「対極」に位置するという点も興味深いテーマではあるが、ここでは『反時代的考察』の第3論文「教育者としてのショーペンハウアー」そのものに注目したい。

1874年に発表された本書はニーチェの初期思想に属しており、一般的にはいわゆる文化批判的著作の代表的存在と目されている。新教育運動の歴史記述にもしばしば登場するラングベーンの人気ベストセラー『教育者としてのレンブラント』(1890)は、ニーチェの「教育者としてのショーペンハウアー」に刺激を受けて執筆されたといわれる。スターンによれば、文化批判的思潮の中で「教育者としての〇〇〇」という形式が流行した最大の契機はこのラングベーンの1890年著作の大ヒットであったというから¹⁵、ニーチェもまた「教育者としての〇〇〇」というフレーズの流行に一役買ったと言えよう。だとすれば、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立プロセスを解明する鍵は、『反時代的考察』の第3論文「教育者としてのショーペンハウアー」に隠されているのではないか。

『反時代的考察』第3論文「教育者としてのショーペンハウアー」のなかで、ニーチェは「自分の経験に従ってショーペンハウアーを教育者として描き出す」¹⁶と述べる。この「経験」は、具体的にはショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』の読書を指すが¹⁷、じつはこの「教育者としてのショーペンハウアー」ほどニーチェ自身の読書経験が重要な役割を担っている作品はない。実際「教育者としてのショーペンハウアー」にも次のような言葉がある。「彼の著作を手に取り最初の数ページを読んだだけで、その瞬間にはっきりと、この著者なら全ページを読破し、著者の語るあらゆる言葉にも耳を傾けるであろうことを知るショーペンハウアー読者がいるが、私もその一人である」¹⁸。ニーチェ自身、「読書」経験を通じてショーペンハウアーを「教育者」と評価したのである。

ここで注意しなければならないのは、「読書」という沈潜在的な行為が、いわゆる「ブーム」に見られるような通俗的かつ表層的な受容形態とはまったく異なるということである。「ショーペンハウアー読者」を自認するニーチェも、「ショーペンハウアーを柔弱に現代に適合させようとしたり、彼を物珍しい刺激的なスパイスや一種の形而上学的なコショウのごとく使用する」ような浅薄なショーペンハウアーブームを批判した¹⁹。要するに、ニーチェブームとニーチェ読書、ニーチェ派とニーチェ読者は、それぞれ明確に区別されなければならないのである。

以上を踏まえれば、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立には、言葉の真の意味における「ニーチェ読者」の存在が不可欠になってくると言えるだろう。第1章で考察した1890年代の熱狂的なニーチェブームやニーチェ派の青年は、「危険な青年誘惑者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立根拠とはなり得ても、決して「教育者」モデルの成立をアシストすることはなかったのである。つまり、後は、ニーチェ読書が実際に1910年代のドイツにおいて普及していたという事実と、ニーチェ読書という行為が具体的に「教育者」概念の意味内容と整合性を示すということ、この2点が確認されれば、「教育者としてのニーチェ」論の解釈史的背景はほぼ整うことになるはずである。次節で

は、現象としても行為としても 1890 年代のブームとは明確に区別される「ニーチェ読書」が 1914 年の「教育者としてのニーチェ」論の成立を後押ししたのではないかという仮説にもとづき、1890 年代から 1910 年代にかけてのドイツ青年におけるニーチェ受容形態の変遷とその意味について詳しく検討する。

第4節 青年におけるニーチェ受容形態の変遷

— 1890 年代の熱狂的ブームから 1910 年代の静かな読書へ

1. ニーチェブームの終焉

ニーチェ読者の登場、ニーチェ読書という新たな受容形態の普及のためには、「ニーチェブーム」という古い受容形態がまず後退しなければならない。1890 年代以降続いてきた「流行」は 1910 年頃を境に本当に終焉を迎えたのだろうか。この点を確認するために、ツィーグラの著作『19 世紀の精神的社会的思潮』に再び注目する。

すでに第2章第3節において考察したように、この著作は、それまで学問的な評価が定まらず宙に浮いていたニーチェの思想をはじめてドイツ精神史のうちに位置づけた試みとしても重要であるが、ここでは別の視点から取り上げてみたい。というのも、この著作は 1899 年の初版から 1921 年の第7版まで修正を加えつつ版を重ねており、やや先取的に言うなら「フリードリヒ・ニーチェ」「ニーチェの影響」両節の記述内容にも変化が見られるからである。

(1) ツィーグラ『19 世紀の精神的社会的思潮』のプロフィール

本格的な検討の前に、まずは初版から第7版までの出版年、発行部数、タイトル等の経緯を一覧表で確認しておきたい。なお下線部は修正が加えられた箇所を示す。

1899 年 【第 1 版】

『19 世紀の精神的社会的思潮』(1.-5.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin 1899.

1901 年 【第 2 版】

『19 世紀の精神的社会的思潮』(6.-8.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin 1901.

1910 年 【第 3 版】

『19 世紀の精神的社会的思潮』(9.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin 1910.

1911年 【第4版】 (Ziegler1911-a)

『19世紀の精神的社会的思潮』(10.-14.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin 1911.

1911年 【第5版】 (Ziegler1911-b)

『19世紀ドイツの精神的社会的思潮』(15.-20.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im neunzehnten Jahrhundert. Berlin 1911.

1916年 【第6版】

『19-20世紀ドイツの精神的社会的思潮』(21.-23.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin 1916.

1921年 【第7版】

『19-20世紀ドイツの精神的社会的思潮』(24.-30.Tausend)

・ Ziegler, Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin 1921.

ツィーグラの『19世紀の精神的社会的思潮』は、1899年に初版が公刊された後、1901年に第2版、1910年に第3版、1911年には第4版と第5版、1916年に第6版、1921年に第7版という具合に版を重ね、発行部数は第7版までに3万部を記録している。その間に著作タイトルの変更も数回経験している。

初版は、第1部「1800年から1830年まで」(第1章～第5章)、第2部「1830年から1848年まで」(第6章～第8章)、第3部「1848年から1871年まで」(第9章～第11章)、第4部「1871年から世紀末まで」(第12章～第14章)の4部構成となっており、「フリードリヒ・ニーチェ」および「ニーチェの影響」の両節が収録されているのは第14章である。第2版以降の改訂版においても基本的にこの4部構成は変わっていないが、第2版時に第4部の表題が「1871年から1900年まで」に、第3版では、第3部第10章が「50年代の反動」(第10章)と「世紀半ばの自然科学と哲学」(第11章)に分離独立したことから、必然的に従来の第14章が第15章に、またその章題も「Fin de siècle」から「Jahrhundertende」に修正された。第4版および第5版時に構成上の変更はなかったが、第6版時には著作タイトルが「19世紀～」から「19-20世紀～」と改められたことに伴い、第4部の表題が「1871年から1914年まで」に、第15章の章題が「Jahrhundertende」から「Jahrhundertwende」にそれぞれ修正されている。このように『19世紀の精神的社会的思潮』は時代状況に応じてタイトルや章構成に修正を加えつつ版を重ねている。

ニーチェに関して言うなら、例えば初版から第7版まで最終章に「フリードリヒ・ニー

チェ」と「ニーチェの影響」の両節が収録されている点など、一見したところ、とくに大幅な修正箇所はないように思われる。ところが詳細に検討していくと、ニーチェブームに関する記述のうちに決定的とも言えるような修正が見つかる。

(2) ニーチェブームが現在形から過去形へ変わるとき

まずは「フリードリヒ・ニーチェ」と題された節の冒頭箇所を引用してみよう。

「ところで現代ドイツの青年は、彼らが無政府主義的に思考する点において個人主義的傾向の只中にある。とりわけ彼らはフリードリヒ・ニーチェ、19世紀の終わりに現れたこの個人主義の唱道者の影響下にある。」¹

1899年初版は以上の通りである。1901年の第2版も若干の語順変更があるのみで文意は同一であるが、1910年の第3版になると若干の修正が加えられている。

Und nun zurück zum Individualismus, dessen eigentlicher Wortführer am Ausgang des neunzehnten Jahrhunderts Friedrich Nietzsche gewesen ist. Unter seinem Einfluß steht heute in Deutschland alles, was individualistisch denkt und fühlt und will, vor allem die Jugend und die Frauen.

「さて個人主義に話を戻せば、19世紀の終わりに現れたこの本来の唱道者はフリードリヒ・ニーチェであった。個人主義的に思考し、個人主義的に感じ、個人主義的に意欲する全ての人、とりわけ青年と女性たちが、今日のドイツにおいては彼の影響下にある。」²

1910年の第3版では、青年とともに新たに女性がニーチェの影響下にあると指摘されている点など、従来のものと比べてやや組み替えが行われているが、大まかな文意は初版を継承していると言えるだろう。個人主義を中心としたニーチェブームが「現在進行形」の現象として描写されている点も初版以来変わっていない。では次に翌年の第4版で同一箇所がどうなっているのかを確認してみよう。

Und nun zurück zum Individualismus, dessen eigentlicher Wortführer am Ausgang des neunzehnten Jahrhunderts Friedrich Nietzsche gewesen ist. Unter seinem Einfluß stand eine Zeitlang alles, was individualistisch dachte und fühlte und wollte, vor allem die Jugend und die Frauen.

「さて個人主義に話を戻せば、19世紀の終わりに現れたこの本来の唱道者はフリードリヒ・ニーチェであった。個人主義的に思考し、個人主義的に感じ、個人主義的に意欲する全ての人、とりわけ青年と女性たちが、彼の影響下で一時期を過ごしたのである。」³

一見しただけでは第3版と第4版の違いはわかりにくいだが、後半部の文章を注意深く見ていくと、使用されている単語はほぼそのままに、時称が「現在形」から「過去形」に修正されていることがわかる(※下線部を参照)。ツィーグラールは、第3版(1910年)を刊行

してから第4版(1911年)を印刷するまでのあいだにニーチェブームの終焉を認識し、第4版以降、ニーチェブームを「過去の一現象」として紹介するのである。

同様に「ニーチェの影響」と題された節の結論部にも注目してみると、やはりここにもニーチェブームの終焉を象徴するコメントが見つかる。

【第1版】【第2版】

「彼が一瞬のうちに通り過ぎる流星や鬼火にすぎなかったのか、それとも今後も光り続けながら新たな道を指し示してくれる星であったのかは、このような時流が過ぎ去ってはじめて決定されるであろう。」⁴

【第3版】【第4版】

「彼が一瞬のうちに通り過ぎる流星や鬼火にすぎなかったのか、それとも今後も光り続けながら新たな道を指し示してくれる星であったのかは、このような時流が過ぎ去り、激しい喧噪が鳴りやんだときはじめて決定されるであろう。」⁵

第3版改訂時に下線部が加筆された以外は、初版から第4版まで、この文章自体に修正が加えられた形跡はない。ただこの後に続く文章に注目してみると、第3版までと第4版改訂時とは大きく内容が異なっていることが判明する。すなわち初版から第3版までは、「～過ぎ去ってはじめて決定されるであろう」という上述箇所の直後に、「というのも今日なおこの人物は、あらゆる種類の好意と悪意によってあまりにも甚だしく混乱し不安定な状態にあり、観察者もまだあまりに彼と近い位置にいるからだ」⁶という文章が続いているのに対し、第4版ではこの文章が削除され、代わりに「流行の哲学者は何よりも急激に時代遅れ(aus der Mode)になるものだ」⁷という象徴的な言葉が用意されているからだ。

以上を踏まえれば、1890年代以降さまざまな問題を引き起こしてきたニーチェブームも1910年代に入る頃には終焉を迎えたと推測できるのではないか。少なくともツィーグラーは、第3版刊行後から第4版改訂までのあいだ、すなわち1910年から1911年のあいだに、間違いなくブームの終焉を実感したのである。

(3)歴史的事実としてのニーチェブームの終焉

1910年頃にニーチェブームの終焉を感じ取ったのはツィーグラーだけではなかった。例えば1914年に発表されたある論文⁸には以下のような見解が示されている。

「15年前までニーチェは一般に誹謗され嘲弄されている小党派の予言者であった。その後10年間、彼はブルジョア階級のあいだで下品かつ不愉快な流行となった。だがその流行もここ5年ですっかり消滅した。」⁹

1914年から見て「15年前」は1899年であるから、論者の回顧が正しければ、1890年代以降にはじまるニーチェブームは、途中、世紀転換期頃に現象としての性格を変えながらも1909年頃までは継続し、そして「ここ5年」、すなわち1909年から1914年までに「消滅」したことになる。この証言も、ニーチェブームの終焉が1910年頃に訪れたことをうか

がわせるものである。

またヘーマンという論者は、まさに1910年、「世界観とニーチェ」と題する論文¹⁰を発表し、ニーチェブームの終焉を宣告する。彼は、「大胆不敵な世界の粉碎者」、すなわち神の死を宣言したニーチェ自身がもはや「死んだ、完全に死んだ、取り返しのつかない死を迎えた(ist tot, ganz tot, unwiderruflich tot)」¹¹と述べている。1900年に死んでいるニーチェが1910年に「死」を迎えるとはどういう意味だろうか。

ヘーマンの見解によれば、ニーチェは1910年の「死」以前に二度の死を経験していることになる。この比喩的な表現のうちに意味を読み込もうとするなら、例えば一度目の死を精神崩壊を招いた1889年の発狂、二度目の死を1900年に訪れた人間ニーチェの死と理解することもできよう。このように考えれば、ヘーマンによって「取り返しのつかない死」と語られた三度目の死はブームの終焉と解釈することもできるだろう。

事実、ヘーマンはニーチェの三度の死を「ニーチェは死んだ、完全に死んだ、彼の敵からだけではなく、最小限に見積もって自らの崇拜者からも、徐々にではあるが根底的に冷遇されることとなった」¹²と言い換えている。1890年代以降ドイツの大都市に住む青年を熱狂の渦に巻き込んだニーチェブームも1910年には終焉を迎えることとなった。この種の見方はヘーマンにも共有されているのである。

以上を踏まえれば、1910年頃のドイツにおけるニーチェブームの終焉は、ひとつの歴史的事実と認めることができるのではないか。少なくともツィーグラの著作の改訂経緯、1914年時点でなされたバープの回顧的判断、1910年時点で宣告されたヘーマンによる現状分析。これらの資料からはそう判断できるのである。

2. ニーチェ読書の普及

古い受容形態としてのニーチェブームが1910年頃に終息したということについては、以上に確認したとおりである。ただ、これだけでは「教育者としてのニーチェ」論の成立を後押しする要件としては不十分であろう。次に確認すべきことは、「ニーチェ読書」という新たな受容形態が1910年代のドイツに普及していたという事実である。

(1) エーラーの論文「ニーチェは本当に死んだのか？」

興味深いことに、1890年来のニーチェブームの終焉という事実に関しては、ニーチェ賛成派も素直に認めている。ニーチェの母方の従兄弟にあたりニーチェ資料館経営にも従事したR.エーラーもそのひとりである。しかしエーラーはブームの終焉を「ニーチェの影響力の失効」と捉えてはいなかった。ブームとは異なる新たなかたちでニーチェは青年に影響を与え続けていると主張するのである。

「ニーチェは本当に死んだのか？(Ist Nietzsche wirklich tot?)」と題されたエーラーの1911年論文¹³は、先に取り上げたヘーマンの1910年論文に対する応答である。このなかでエーラーはまずヘーマンの論文を「ニーチェおよびニーチェ運動に寄せた同情的な追悼文」¹⁴と特徴づけ、「外見上の様子からいくぶん早計に結論するなら、ニーチェをめぐる騒々しい喧噪や不愉快な言い争いはたしかに沈静化した」¹⁵と述べる。喧噪としてのブームが終息したことを認めているのである。ただエーラーにおいては、こうしたことが直ちに「三度目の」「ニーチェの死」を意味するわけではなかった。死亡宣告という比喩で語られるニーチェの影響力失効に対してエーラーは疑義を示すのである。

ではエーラーはどのように「ニーチェの死」を否定しようとするのであろうか。彼はまず1901年以降に出版されたニーチェに関するドイツ語文献数の一覧表を載せ、次にニーチェの初版本が古書業者によって高値で取り引きされているエピソードを紹介し、続けて次のように述べる。

「ただ、ある著者の生死にとって決定的なのはとりわけその著作の売れ行きである。この点について確実な数値データを発表する権限は残念ながら私にはない。しかし自分なりに調査を実施した結果、私はかなり有力な立場から、ニーチェの著作の売れ行きが(…略…)国の内外を問わずふたたび著しく増加しつつあるということを断言できる。」¹⁶

エーラーはこうして「ニーチェの死」を否定する。すなわち彼によれば、すでに死んでいるニーチェが生き還る可能性は、ニーチェ自身の著作が「読者」に読まれるその行為のうちに求めるほかない。同時にまた「ニーチェ読書」という行為がどれほどなされているかを測るほとんど唯一の指標はニーチェの著作の「売れ行き」であった。こうしてエーラーはニーチェブームの終焉を次のように説明する。「ニーチェの影響は決して途絶えてしまったわけではなく、(…略…)その影響はこれまでよりも静かになり(in der Stille)、深化した(in die Tiefe)だけなのだ」¹⁷。ニーチェブームは文字通り「沈静化」し、ニーチェ読書という潜在的な受容形態が新たに登場したというのである。

(2) 1910年代のニーチェ読書の普及を示す状況証拠

むろん「ブームから読書へ」という青年のニーチェ受容形態の変遷、1910年頃のニーチェブームの終焉＝ニーチェ読書の普及という意味づけの根拠を、エーラーの見解のみに求めることは許されない。とくにエーラーがニーチェの親戚にあたるということを考えて、われわれはエーラーの提示したデータの信憑性やそれに基づく主張の内容に対して、十分慎重でなければならない。

ところが当時のさまざまな文献に目を向けてみると、エーラーの観測があながち間違いではなかったことが判明する。例えば、1890年代にはほとんど使用例のない「ニーチェ読書(Nietzsche-Lektüre)」や「ニーチェ読者(Nietzscheleser, Nietzsche-Leser)」という言葉の登

場¹⁸、ニーチェの著作の発行部数増加という事実なども、1910年代ドイツにおけるニーチェ読書の普及を裏づける状況証拠と言えるだろう。1910年にツアラトウストラの解説書¹⁹（1922年に第2版²⁰を刊行）を出版したヴァイヒェルトによれば、『ツアラトウストラ』の累計発行部数は、1910年の時点で約7万部²¹、1922年までに30万部以上²²を記録したという。

そもそも『ツアラトウストラ』の解説書が出版されているということ自体が目ざされ得よう。というのも、ある本の解説書出版の企画が実行に移されるには、その本が一定の読者を獲得しているという前提条件が必要だからである。ニーチェ作品の解説書が出版されたという事実は、当時のドイツにニーチェ読者が一定数存在していたことを裏書きしているのである。

また、ニーチェ読者層の幅広さも特筆すべきであろう。1890年代のニーチェブームの主な担い手は大都市に住む教養市民層の青年たちであって、いわば限定的な現象であったとすることができる。それに対して1910年代のニーチェ読書はドイツ各地に住むあらゆる階層の人々に普及した点に特徴がある。当時の文献を見ると、例えば幼い真面目な生徒、労働者階級などもニーチェの著作を手にしていたことがわかる。騒々しいニーチェブームと比べれば目立たない静かな現象であるが、ニーチェ読書は確実に1910年代のドイツに普及していたのである。

では、彼らはニーチェ読書で何を感じ、何を得たのだろうか。以下では、労働者階級におけるニーチェ読書の実例を確認しておきたい。

(3) 労働者階級のニーチェ読書

レーヴェンシュタインという人物は、労働者を対象としたあるアンケート調査に関わり、ニーチェの『ツアラトウストラ』に手に取ったことのある労働者のさまざまな証言を入手することに成功した。その調査結果を、1911年論文「ニーチェと労働者階級」²³および1914年著作『労働者階級から見たフリードリヒ・ニーチェ』²⁴において披露している。具体的な職種は、鉱山労働者、塗装工、織物師、機械工、印刷工、紡績工、染め物師、パン焼き職人、日雇い労働者、金属工、旋盤工…とじつに多種多様である。果たして彼らはどのような読書感想文を寄せているのだろうか。

例えば、ある労働者は次のような感想を寄せている。

「頑張ってニーチェを読みました。私はその本を壁に投げつけてしまいました。こんな思想の迷宮に我が身を無理矢理押し込む必要などないのです。」²⁵

また、ある紡績工は『ツアラトウストラ』に対して次のようにコメントしている。

「フリードリヒ・ニーチェの本『ツアラトウストラかく語りき』を読み終えましたので、お望み通り、この著作に関する私の意見を今からご披露したいと思います。（…略…）私の考えを申し上げるなら、この本は、労働者階級のためにではなく、高い

身分階級のためだけに書かれた作品であり、またこの中でニーチェが念頭に置いている理想も、最初から最後まで、いわゆる君主的人間ないし超人です。彼にとって畜群的人間など嘲弄や軽蔑の対象でしかありません。しかし彼は次のことを忘れていきます。すなわち、たしかに超人なしに畜群は存在し得ないかもしれないが、超人も畜群なしには存在し得ないということをです。それどころか、この新しい教説が場合によっては混乱や損害をもたらすのではないかと私は考えています。」²⁶

「この手紙がご期待に添うものではなかったとしたら、どうか、私が第三階級の民衆学校出身であるという事情を汲んでください。ニーチェを正しく理解し評価することなど、学者でさえ難しいことなのに、欠陥だらけの民衆学校教育を受けただけの労働者にとっては至難の業なのです。」²⁷

ニーチェ思想は、ただ難解であるというだけではなく、貴族主義的な性格も帯びている。普通に考えれば、労働者階級とニーチェ思想に接点を求めること自体が無理な話である。その意味では、上述したような労働者の反応の方がむしろ自然であろう。アンケート調査の経緯や実施方法に関する詳細な情報が得られていないため、断定的なことは言えないが、アンケート回答者のコメントの文面から判断して、この調査に協力した労働者のうちの数名は、ニーチェの著作を読むようレーヴェンシュタインに依頼されたものと推測される。別にニーチェの著作を読みたいとも思っていなかったが、ニーチェ読書と読後感アンケートを依頼されたので調査に協力し、そして率直な感想を述べた。少なくともニーチェに対して拒絶反応を示した労働者に限って言えば、外部からの依頼以外にニーチェの著作に手を伸ばす特段の理由はなかつたろう。

しかし1911年論文と1914年著作で紹介されているアンケートの回答に目を向けてみると、そこには、レーヴェンシュタインからの依頼を受ける以前から自発的にニーチェ読書に取り組んでいる労働者の存在を確認することができる。なぜ労働者がニーチェの著作を手にとってみようと思ったのか。まったく無縁の関係にあると思われた両者を結びつけたものは何だったのか。

この点についてレーヴェンシュタインはまず労働の「機械化(Mechanisierung)」という時代背景を指摘する。産業化社会の実現は、かえって個人の尊厳や生きる意味を喪失させたというのである。こうして彼は、「空虚さ(Leere)」、「平凡な日常(Alltäglichkeit)」、「家庭内での疎外感(Einsamkeitsgefühl innerhalb der eigenen Familie)」という3つの要素を挙げ、これらが複合的に作用することによって、それまで精神的な領域とは無縁だった労働者がニーチェ読書に向かったのではないかと推測している²⁸。

そして興味深いことに、このような労働者のなかには、ニーチェ読書によってプラスの効果を得た者もいたようである。わずかな週給をニーチェの著作購入につぎ込み生活に困窮していた織物師は次のように証言している。

「たしかに私は平凡な織物師です。しかしニーチェから得たものすべてが私の心を高揚させました。ニーチェという広い野原から帰ってくるたびに私の内面は豊かに

なるのです。個人としての存在を超越した無限の領域にまで私の心を広げてくれたのはツアラトウストラでした。ツアラトウストラは私を徐々に生活の悲惨さに打ち克つような陽気さへと高揚させてくれました。」²⁹

また、ある染め物師は次のように語っている。

「私は本当に数多くの本を読んできました。いずれも名高い著者の作品ばかりです。ですが、ニーチェの主著『ツアラトウストラかく語りき』ほど私を本当に感動させ、熟慮へと駆り立てた本はこれまで一冊もありませんでした。私の全世界観は多くの強烈な衝撃を受けました。そして私の中で考え方にある変化が生じました。この本は、あまりにも不確かな多くの重圧から私を解放してくれたのです。」³⁰

大都市の教養市民層を中心に展開されたニーチェブームとは異なり、ニーチェ読書は、地理的にも階級的にも、1910年代のドイツに広く普及したと言えるだろう。だが果たしてブームと読書の違いはそれだけだろうか。「現象」としてだけではなく、「行為」としても、両者はまったく異なるのではないか。それは、いまここで確認した労働者の証言にもすでに現れているだろう。ニーチェ思想が単なるファッション(流行)でしかなかったブーム期と比べ、1910年代のニーチェ読者は、結果的にその思想を受け容れるか否かは別にして、それぞれが真剣にニーチェの思想と向き合っているように思われるからだ。ニーチェ読書は、「現象」としての顕在性を縮減させたが、逆に「行為」としての影響作用や効果を増すことになったとも言えるかもしれない。いずれにせよニーチェ読書は、ブーム期に見られた通俗的受容とは全く異なる行為なのである。そこで次に、「教育者としてのニーチェ」論の成立にとって欠かすことのできないニーチェ読書という行為の特質を改めて検討することにしたい。

3. ニーチェ読書という行為の特質

ここでは、ニーチェ読書を青年によるニーチェ受容行為と捉えたうえで、1890年代のニーチェブームにおける受容形態と比較しながら、1910年代のニーチェ読書の「行為」としての特質を整理する。また、そこで解明されたさまざまな特徴が「教育者」概念の意味内容と整合していることを確認したい。

(1) ニーチェ読書のススメ

1910年に『ツアラトウストラ』の解説書を出版したヴァイヒェルトを再び取り上げることにしよう。言うまでもないことだが、ヴァイヒェルト自身、ひとりのニーチェ読者である。『ツアラトウストラ』との出会いは、彼自身の申告³¹によれば1890年代半ばのことである。大都市のカフェを中心に繰り広げられていた1890年代の熱狂的なニーチェブー

ム。ヴァイヒェルトはまさにその熱狂と喧噪の中でニーチェの著作『ツァラトゥストラ』と出会い、そのとき以来「鎖よりも堅固なモノで繋がれている感覚」を意識しながら、何度も『ツァラトゥストラ』を手にとることとなる³²。

ではヴァイヒェルト自身はニーチェ思想をどう評価しているのだろうか。例えば彼は次のように言う。「ツァラトゥストラの超人ならびに回帰説を私は拒否する。作品中に多くの奇妙な点も見つけた。彼を腹立たしく思ったこともあるし、不快感を抱いたことすらある。」³³

ツァラトゥストラ解説本であるにもかかわらず、ヴァイヒェルトはこのように、しばしばニーチェ思想の貴族主義的性格や論理的な矛盾を指摘している。しかし同時にヴァイヒェルトは『ツァラトゥストラ』を「倫理的な真面目さの高揚」や「精神の自由へと近づく歩み」³⁴、「生をたたえる灼熱の賛美歌」³⁵などと特徴づけ、「ツァラトゥストラ読書」の魅力も伝えようとしている。例えば、1910年著作の最終節は以下のような文面である。

「何ひとつニーチェの思い通りにはならなかった。ただこの男がツァラトゥストラを創造したのだ！よし、ならばもう一度！—この生をたたえる賛美歌を歌ったのはこの男なのだ。あらゆる謎のなかでももっとも奇妙な謎解きの鍵を与えてくれるのは彼の意志の力である。彼の意志は自身の運命を強制する。彼は最後の生の閃光に点火して激しい炎を燃え上がらせようとする。ニーチェは消滅するが、ツァラトゥストラが生起する。計り知れないほど価値を上昇させる諸理念を告知する者がツァラトゥストラである。これらの理念は新たな啓示として登場する。世の中の根本的に変革するためにこれらの理念は存在する。ツァラトゥストラは何千年もの時間を手中に収めている。彼がその理念に込めた法外な意味、彼自身も満たされていた救世主意識—これらは決して無意味な誇大妄想ではなく、究極の自己防衛の試みであって、運命によって定められたものを懸命の努力によって克服しようとする感情の発露である。このような激しい闘いを目撃して誰が無関心でいられるだろうか？たしかに闘争手段は非難することもできよう。だが闘争それ自体はわれわれをいっそう感嘆させるであろう。それゆえ最後にもう一度だけ言うておこう。私にとってツァラトゥストラとは何か？それは、人間意志の誇るべき力をたたえた高らかな詩曲にほかならない。」³⁶

『ツァラトゥストラ』が「人間意志の誇るべき力をたたえた高らかな詩曲」として高く評価されているわけだが、とりわけここで注目したいのは、そのひとつ前の文章「私にとってツァラトゥストラとは何であるか？」である。

(2) 個人的行為としてのニーチェ読書

ヴァイヒェルトは「ツァラトゥストラが何か？」とは問うていない。彼は必ず「私にとってツァラトゥストラは何か？」と問うている。最終章のタイトルも「私にとってツァラ

トウストラは何であるか？」となっている。

彼は序文において1910年著作の性格を次のように説明している。「本書は、私の理解を説明することによって、つまりよい理解でもわるい理解でもなく、まさに私の理解を述べることによって、ツァラトウストラ読者がそれぞれ作品理解の一助にしてくれることを想定した試みである。」³⁷ 要するに、『ツァラトウストラ』の読書を勧める1910年著作に示されているのは、あくまでもヴァイヒェルト個人の読後感だということである。

また、レーヴェンシュタインは1914年著作のなかで、ある金属工が、肺結核療養所に入院中の友人宛に書いた手紙を掲載している。例えば1通目の手紙の中で金属工は次のように書いている。

「君に貸したニーチェの本3冊のことだけど、君の反応を聞いて僕は正直ガッカリしています。(…略…)ニーチェ哲学は自分には高尚すぎるって君は書いているよね。でもお願いだから、ひとりベッドに寝ている時間にでも、この3冊の本をすべて、一語一語一行一行しっかりと読んでほしい。(…略…)もちろん僕の思考力が及ぶ限りでの理解になるけど、これから何通か手紙を書いて君のためにフリードリヒ・ニーチェの哲学を解説してみせることは、僕としては全然構わないよ。でも、まずは僕の忠告に従って、もう一度『ツァラトウストラかく語りき』、『善悪の彼岸』、『曙光』という3冊の本を手にとり、ひとりで休んでいるときにでも真剣に目を通してほしい。君の病気の回復を願っています。君の忠実なる同僚より。」³⁸

また別の日の手紙は次のような文面になっている。

「地球上におけるもっとも壮麗な場所イタリア。この生気に満ちた土地でフリードリヒ・ニーチェは、彼の精神および彼の孤独を生きた。このひとりの永遠探求者、ひとりの孤独者は、僕たちプロレタリアから誤解されてるんだよ。だってフリードリヒ・ニーチェが本当に勧告しているのは弱者に対する強者の権利なんかではないから。彼の闘争が相手取っているのはむしろ、人間を予め規定された図式に分類する組織体、つまり現代の国家なのさ。」³⁹

このように、ニーチェ思想の魅力になかなか気づいてくれない友人に対して、金属工は何度も説得工作をつづけたわけだが、ある日の手紙の中でついに計画中止が告げられる。

「ニーチェに関する僕の考えを君にも感染させたいって最初の手紙の中で約束したけど、それが厚顔無恥な企てだったってことを僕は心得ておくべきだったのかもしれないね。もちろん各個人がニーチェを内的に体験することはできるけれども、こうした内的で神聖なる感情を分析しようとする、言葉はどうしても不器用になってしまうものだから。」⁴⁰

このように、病気療養中の友人をニーチェ読書によって元気づけようとする金属工の計画は失敗に終わった。「私にとってツァラトウストラは何であるか？」を強調するヴァイヒェルトの姿勢、金属工の一連の手紙は、ニーチェ読書を勧めようとするニーチェファンの行動や心理を伝える資料であると同時に、ニーチェ読書という行為の個人的性格や非伝播

性をうかがわせる資料でもあったのである。

(3) ニーチェ読書と「教育者」概念の整合性

①学校という枠を超出していること、②生徒と個人的な関係を結ぶこと、③生き生きとした人格であること・人格的な影響力を有していること。これらが当時のドイツにおける「教育者」概念の意味内容であった。

まず指摘できるのは、1890年代から1910年代まで一貫してニーチェの著作が、教科書としてではなく一般の通俗的な本として学校外で話題となっていたということである。青年がニーチェに関心を寄せたのは、ニーチェの著作、とりわけ道徳批判を中心とした後期著作が窮屈な学校教育に疲弊していた彼らの心を掴んだからである。つまりニーチェの著作は、青年賛美や学校批判という内容的な側面だけではなく、むしろその存在自体が学校という枠を超出しており、また生徒を学校から解放したのである(①)。

次に指摘できるのは、「読書」が各々の読者における個人的行為だということである。1890年代の熱狂的なブームは、青年が仲間内の結束力を確かめるために刺激的なニーチェの言葉をスローガンとして利用しただけであって、いわば青年とニーチェの希薄な関係性によって特徴づけられる。それに対し「読書」は個人の深い沈潜が求められる。ブームの沈静化＝1910年代の「ニーチェ読書」の普及によってはじめて、ニーチェは各々の青年と個人的関係を結ぶことができたのである(②)。

さらに、このことは読者への人格的な影響力を示すものとなった(③)。すでにニーチェ自身が「読書」の人格的な影響力を体験し、『教育者としてのショーペンハウアー』を執筆している。またエーラーは、1911年論文「ニーチェは本当に死んだのか？」の中で「ニーチェの死」を否定し、「ニーチェ読書」の普及のうちにニーチェの生き生きとした人格を認め¹⁾、同年の単著『人格の形成者としてのニーチェ』²⁾の中ではニーチェの意義が「理論的認識の絶対的価値のうちにはなく、むしろ同時代人への人格形成的な影響力のうち

に存している」³⁾と述べている。

1910年代の青年のあいだで普及した「ニーチェ読書」は、比喩的に言うなら、死んだはずのニーチェを生き還らせ、ニーチェを「教育者」と評価することのできる解釈史的な背景を用意したのである。

注

◆第1節

* 1) Roßmann, W.: Nietzsche und die Reformen. In: Bremer Schulblatt 12 (10. Mai 1907) S.57-59.

- * 2) Simon,O.: Nietzsches Stellung zur Pädagogik. In: Pädagogisches Jahrbuch 32 1909, S.86-100.
- * 3) Itschner,H.: Einige Gesichtspunkte zur Erschließung des pädagogischen Gehaltes der Werke Nietzsches. In: Achtehnter Bericht über das Großherzogliche Lehrerseminar zu Weimar. 1909, S.3-36.
- * 4) Stein,A.: Die Stellung des jungen Nietzsche zu den Fragen der Erziehung und Bildung. In: Pädagogisches Archiv 52 1910, S.73-99.
- * 5) Winterfeld,A.v.: Unser Erziehungswesen in der Auffassung Nietzsche's. Leipzig 1910. (Kultur und Fortschritt. Neue Folge der Sammlung „Sozialer Fortschritt“ Hefte für Volkswirtschaft, Sozialpolitik, Frauenfrage, Rechtspflege und Kulturinteressen. 286.)
- * 6) Melde,M.: Nietzsche Zarathustra und seine Bedeutung für die moderne Schule. Berlin 1910.
- * 7) Jonkoff,Th.: Nietzsches Idee vom Übermenschen als Erziehungsideal. Zürich 1911.
- * 8) Gottlieb,A.: Das Gymnasium, die Realschule und Friedrich Nietzsche. In: Zeitschrift für das Realschulwesen 36 1911, S.193-205, S.257-265.
- * 9) Wallaschek,R.: Nietzsche über Erziehung. In: Monatsschrift für christliche Sozialreform (Juni) 1911, S.302-313.
- * 10) Goldberg,R.: Nietzsche und Tolstoi als Schaffende am Erziehungsproblem. In: Leipziger Lehrerzeitung 18 Nr.43. 1911, S.968-970.
- * 11) Wessely,R.: Friedrich Nietzsche als Vorkämpfer für Erziehungs- und Schulreform. In: Pädagogisches Archiv 54 1912, S.601-631.
- * 12) Rott,J.: Nietzsche und die klassische Bildung. In: Blätter für deutsche Erziehung 14 1912, S.4-8.
- * 13) Kleinpeter,H.: Nietzsche als Schulreformer. In: Blätter für deutsche Erziehung 14 1912, S.99-101.
- * 14) Itschner, S.4.
- * 15) Wessely, S.601.
- * 16) Gottlieb, S.195.
- * 17) Jonkoff, S.10. ヨンコフは次のようにも言う。「ニーチェの第3期の教育学的意義が誤認されているのは不思議である。彼が生理想を構築し、生の意味を解明できると信じていた時期なのに。」(Ibid.)
- * 18) Havenstein,M.: Nietzsche als Erzieher. Berlin 1922.
- * 19) ハーヴェンシュタインは1871年11月28日、牧師の息子として誕生した。ギムナジウム卒業後は、ボン、ハレ、マールブルク、ベルリンなど各地の大学で、文献学や神学、哲学を専攻し、ギムナジウムにおいて学識経験を持つ教師(wissenschaftlicher Lehrer)として活躍した。第1次世界大戦中は歩兵部隊所属の志願兵として従軍し、第2次世界大戦時は、ナチズムに近い位置を保っていたとされる。1945年10月26日に死去するまでに多くの文章を書いた。Vgl. Hammerstein,N.(Hrsg.): Deutsche Bildung ? Briefwechsel zweier Schulmänner Otto Schumann – Martin Havenstein 1930-1944. Frankfurt am Main 1988, S.330-331.
- * 20) Havenstein,M.: Friedrich Nietzsche. Ein Jugendverderber? Eine Verteidigungsschrift. Leipzig 1906.
- * 21) Ibid., S.9.
- * 22) Ibid.
- * 23) Ibid., S.26.
- * 24) Ibid., S.22-23.

* 25) ハーヴェンシュタインは「彼(※引用者注：ニーチェ)自身や彼が欲したものと、愚か者や無法者たちが彼や彼の言葉から造りあげるものとを、良心的に区別せよ！」(Ibid., S.26)と訴える。

* 26) Ibid., S.27-28.

* 27) Ibid., S.58.

* 28) Ibid.

* 29) Ibid., S.59.

* 30) ハーヴェンシュタインも無条件にニーチェ思想を賞賛しているわけではない。「私はこれまでに少しでもニーチェの著作を未熟な少年少女の手に与えたり、よもやツァラトウストラを学校の教科書にすべきだなどと薦めているだろうか？そんなことは断じてない！」(Ibid., S.57)

* 31) Havenstein, M.: Nietzsche als Pädagog. In: Der Säemann 3 1907, S.30-34., S.31.

* 32) Ibid., S.30-31.

* 33) Ibid., S.30.

* 34) Ibid., S.31-32.

* 35) Ibid., S.31.

◆第2節

* 1) 例外的にコンラートを紹介したのものとして以下の2点を指摘しておく。Philippi 1970. Hillebrand 1978.

* 2) フィリッピは雑誌『ゲゼルシャフト』を次のように特徴づけている。「(※引用者注：19世紀末ドイツにおいて)新規参入を果たした雑誌のなかで、ミュンヘンの『ゲゼルシャフト』は特別な地位を占めていた。数年後に登場する『自由舞台』と同様、その雑誌は自然主義の決定的な味方となった。大胆かつ快活で、悩みを知らぬその出撃姿勢は、創刊者ミヒャエル・ゲオルグ・コンラートの行動力と熱意を反映している。この雑誌が目標に設定したのは、生と文学のあいだの連関を再び確立させることであった。新世代の文学作家らはこの理想に歩み寄り、『ゲゼルシャフト』は文学青年にとって指導的な雑誌となった。」(Philippi, S.19)

* 3) Dauthendey, M.: Gedankengut aus meinen Wanderjahren. München 1913. In: Gesammelte Werke. Bd.1. Autobiographisches, München 1925, S.339-405, S.399f. zit.n. Hillebrand, S.173. なおダウテンダイのこの回想は、白水社のニーチェ全集第1期第9巻付録の月報第2号(1980年)において西尾幹二も紹介している。

* 4) 創刊から10年を経た1895年、コンラートは『ゲゼルシャフト』第11巻の巻頭に「青年！」と題した読者向けメッセージを載せているが、このメッセージには、「永遠回帰」という言葉、『曙光』の巻頭に掲げられた有名なモットー、『悦ばしき知識』というタイトルの一部など、ニーチェ思想から多くのキャッチフレーズが借用されている。Conrad, M.G. (1895-b): Jugend! In: Die Gesellschaft 11 1895, S.1-3.

* 5) Conrad, M.G. (1895-a): In purpurer Finsterniß. Roman-Improvisation aus dem dreißigsten Jahrhundert. Berlin 1895.

* 6) 例えば、「ツァラトウストラ祭」(Ibid., S.80, S.102, S.239)、「ツァラトウストラ主義(Zarathustraismus)」(Ibid., S.187)や「ツァラトウストラ崇拜(Zarathustra-Kult)」(Ibid.)、「ツァラトウストラの回帰(Zarathustras Wiederkehr)」(Ibid., S.262)、また「超人(Ueberschensch)」(Ibid., S.80-81, S.102, S.267, S.317, S.336, S.346-347, S.352-353, S.355-356)、「超人の橋(Brücken des Ueberschenschens)」(Ibid., S.317)、「聖なる動物(heiligen Thieren)」

(Ibid., S.234)、「価値の価値転換(Umwerthung der Werthe)」(Ibid.)、「あまりに多すぎる者(Vielzuvielen)」(Ibid., S.315)など、ニーチェ思想を彷彿とさせるフレーズやモチーフがこの小説中にはしばしば見受けられる。

* 7) 「ニーチシュキ」という人物設定に関しても、例えば、そもそもニーチシュキが古代ギリシアの謎を徹底的に究明していたこと、『ヴァーグナーの場合』という著作を発表したこと、ツァラトウストラの精神がニーチシュキに受肉化されていること、青少年が彼の著作に熱狂したこと、大人世代が彼を論駁しようと試みたが結局は失敗に終わったことなど、ニーチェ自身の生涯や1890年代のニーチェブームの状況を反映した内容になっている(Ibid., S.236-239)。

* 8) Hillebrand, S.19.

* 9) Henn am Rhyn1899-b, S.148.

* 10) フィリップも次のように指摘している。「(…略…)ニーチェの真のオリジナリティに目を向けず、無条件に伝統的尺度を規準にしつつ彼を評価しようとするような批判家たちの盲目的な興奮ぶりを、コンラートはしばしば叱責している。」(Philippi, S.246)

* 11) Conrad,M.G.: Der Kampf um Nietzsche. In: Die Wage 48 1899, S.811-814., S.812.

* 12) Conrad,M.G.: Was duenket Euch um Nietzsche ? In: Die Insel 1 (2) 1900, S.201-207., S.204.

* 13) 「ニーチェの主著に対抗して吹聴された理解しがたい愚かな言動の数々も、われわれの感情を傷つけるのではなく、むしろわれわれを笑わせるものである。」(Conrad1899, S.812)

* 14) Conrad1899, S.811.

* 15) Conrad,M.G.(1895-c): Der Übermensch in der Politik. Stuttgart 1895, S.25, 26, 29. zit.n. Hillebrand, S.99-100.

* 16) Ibid., S.25. zit.n. Hillebrand, S.100.

* 17) Ibid., S.29. zit.n. a.a.O.

* 18) Ibid., S.26. zit.n. a.a.O.

* 19) Conrad,M.G.: Aus Friedrich Nietzsches Leben. In: Die Gesellschaft 6 1890, S.1253-1262., S.1262.

* 20) Ibid., S.1261.

* 21) Conrad1899, S.812.

* 22) Ibid., S.813.

* 23) Ibid., S.812.

* 24) Ibid., S.813.

* 25) Conrad1900, S.204.

* 26) Conrad1899, S.813.

* 27) Conrad1900, S.204.

* 28) Ibid., S.205.

* 29) Ibid., S.207.

* 30) フィリップも次のように指摘している。「『ニーチェ』という名前の背後にある人格(Persönlichkeit)をもっとも重要なものと見なすべきであること、またそれを個別的な観点からではなく全体として把握すべきであること、これらをもっとも巧みに言葉で表現したのは、ミヒャエル・ゲオルグ・コンラートとアウグスト・ホルネッファーである。」(Philippi, S.246)

* 31) Conrad1899, S.813.

* 32) Conrad1900, S.206.

* 33) コンラートによれば、ニーチェのような生まれつきの思想家や芸術家の場合、激しく揺れ動く矛盾の中にさえ、計り知れないほどの美しさや理性の輝き、新たな文化問題に関する意義深い予感が込められている。それどころか、ニーチェ思想が多くの矛盾を内包しているのは、ニーチェという人間があらゆる困難な問題やテーマに真剣に立ち向かった証拠であり、むしろその姿勢に敬意を表すべきであるという (Vgl. Conrad1900, S.206f.)。

* 34) Conrad1900, S.207. コンラートは学問研究推進派を「小事にこだわって大事を見逃す者 (Mückenseiger und Kameelverschlucker)」 (Ibid., S.206) とも特徴づけている。

* 35) Ibid., S.206.

* 36) Conrad1899, S.812.

* 37) Ibid., S.813.

* 38) 青年におけるニーチェ受容形態の推移を追っていくと、1910年代に入る頃には熱狂的ブームが沈静化し、かわりに静かな読書がドイツ全土に普及したことがわかる。詳しくは本章第4節で考察する。

◆第3節

* 1) 平野正久「新教育運動の提起したもの—ドイツ—」長尾十三二編『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988年、54-70頁所収、63-64頁。

* 2) Lehmann,R.: *Erziehung und Erzieher*. Berlin 1901. レーマンの『教育と教育者』には、ニーマイヤーも言及している。だが、ニーマイヤーによる引用はラガルデに関することであり、しかもレーマンが巻末の「注」で書いていることを2行分だけ引用しているに過ぎない。Vgl. Niemeyer1999-b, S.187.

* 3) Lehmann,R.: *Erziehung und Unterricht. Grundzüge einer praktischen Pädagogik. Zweite neu bearbeitete und erweiterte Auflage von „Erziehung und Erzieher“*. Berlin 1912.

* 4) Rein,W.(Hrsg.): *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik. Zweite Auflage. Langensalza Bd.2.(1904), Bd.5.(1906), Bd.6.(1907)*

* 5) Roloff,E.M.: *Lexikon der Pädagogik. Freiburg Bd.1.(1913), Bd.3.(1914)*

* 6) Vgl. Lehmann1901, S.127, S.163. u. Lehmann1912, S.133.

* 7) ラインの事典は *höheren Schule, Mittelschule, Volksschule* を、ロロフの事典は以上の3つに加えて *Hilfsschule, Fortbildungsschule* の項目を掲載している。

* 8) Vgl. Lehmann1901, S.161, S.319.

* 9) Lehmann1901, S.161, S.163.

* 10) Lehmann1901, S.318-319.

* 11) 『教育と教育者』にはニーチェに言及した箇所があるが、レーマンはニーチェを「教育者」とは捉えていない。(Ibid., S.128)

* 12) 例えば以下を参照。小笠原、前掲書、49-50頁。平野、前掲書、55-56頁。

* 13) 風変わりな内容もさることながら、『この人を見よ』は、「学説」<「人格」の象徴としても、ニ

ーチェ自身による読書案内としても、じつに興味深い著作である。まもなく1910年代を迎える時期(1908年)に出版されたことも特筆すべきであろう。

* 14) KSA6, S.320.

* 15) スターン／中道寿一訳『文化的絶望の政治—ゲルマン的イデオロギーの台頭に関する研究—』三嶺書房、1988年、185頁を参照。例えばレーマンは「言葉の完全かつ高次の意味におけるいかなる教育者もない」ことを憂慮していた(Lehmann1901, S.126-127 u. Lehmann1912, S.134)。19-20世紀転換期のドイツにおいて「教育者としての○○○」という形式が流行した背景には、そもそも「教育者」を求める時代の空気があったと見ることもできよう。

* 16) KSA1, S.375.

* 17) 下宿先の古書店での『意志と表象としての世界』との邂逅については、西尾1993、前掲書、313頁以降に詳しい。

* 18) KSA1, S.346.

* 19) Ibid., S.406.

◆第4節

* 1) Ziegler1899, S.586.

* 2) Ziegler1910, S.588.

* 3) Ziegler1911-a, S.588.

* 4) Ziegler1899, S.605. Ziegler1901, S.648.

* 5) Ziegler1910, S.606-607. Ziegler1911-a, S.606-607.

* 6) Ziegler1899, S.605. Ziegler1901, S.648. Ziegler1910, S.607.

* 7) Ziegler1911-a, S.607.

* 8) Bab,J.: Friedrich Nietzsche und die deutsche Gegenwart. In: Die Hilfe Nr.53. 1914, S.872-874.

* 9) Ibid., S.872-873.

* 10) Heman,F.: Weltanschauungen und Nietzsche. In: Der Türmer Nr.2. 1910, S.228-230.

* 11) Ibid., S.228.

* 12) Ibid., S.229.

* 13) Oehler,R. (1911-b): Ist Nietzsche wirklich tot? In: Der Türmer Nr.4 1911, S.554-556.

* 14) Ibid., S.554.

* 15) Ibid.

* 16) Ibid., S.555.

* 17) Ibid.

* 18) Vgl. Lauscher,A.: Friedrich Nietzsche. Kritische Studien. Essen 1909. Lauscher,A.: Friedrich Nietzsche. In: Monatsblätter für den katholischen Religionsunterricht an höheren Lehranstalten 11 1910, S.103-109, S.138-144, S.161-166. Fritsch,Th.: Nietzsche und die Jugend. In: Hammer Nr.209. 1911, S.113-116. Kiefl,F.X.: Friedrich Nietzsche und die christliche Pädagogik. In: Der Aar 2 1912, S.817-826. Gurlitt,L.: Friedrich Nietzsche als Erzieher. In: Das freie

Wort 13 1914, S.130-136.

- * 19) Weichelt,H.: Friedrich Nietzsche: Also sprach Zarathustra. Erklärt und gewürdigt. Leipzig 1910.
- * 20) Weichelt,H.: Zarathustra-Kommentar. Leipzig 1922.
- * 21) Weichelt1910, S.199.
- * 22) Weichelt1922, S.218.
- * 23) Levenstein,A.: Nietzsche und die Arbeiterklasse. In: Dokumente des Fortschritts 4 (April) 1911, S.238-240.
- * 24) Levenstein,A. (Hrsg.): Friedrich Nietzsche im Urteil der Arbeiterklasse. Leipzig (1914) 1919².
- * 25) zit.n. Levenstein1911, S.239. Vgl. Levenstein1914, S.4.
- * 26) zit.n. Levenstein1914, S.48.
- * 27) Ibid., S.49.
- * 28) Levenstein1911, S.238.
- * 29) zit.n. Levenstein1911, S.239.
- * 30) zit.n. Levenstein1914, S.50.
- * 31) Weichelt1910, S.304.
- * 32) Ibid., S.304-305.
- * 33) Ibid., S.304.
- * 34) Ibid., S.306.
- * 35) Ibid., S.307.
- * 36) Ibid., S.308.
- * 37) Ibid., S. V.
- * 38) zit.n. Levenstein1914, S.107-108.
- * 39) Ibid., S.110.
- * 40) Ibid., S.111.
- * 41) Oehler1911-b, S.555.
- * 42) Oehler,R. (1911-a): Nietzsche als Bildner der Persönlichkeit. 1911.
- * 43) Ibid., S.29.

第5章 「教育者ニーチェ」の誕生

第1節 ハマーの1914著作『教育者としてのニーチェ』

ニーチェブームのような通俗的かつ表層的な受容行為にかわって、「教育者」概念と整合性を示す「ニーチェ読書」が普及したことにより、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立条件はほぼ整ったと見ることができる。残された課題は、ニーチェを「教育者」と評価する論者の登場と、実際にニーチェに「教育」された成功体験を持つニーチェ読者の証言を確認することである。本節では、1914年に発表されたハマーの著作『教育者としてのニーチェ』¹に注目し、いかにしてニーチェが「教育者」となるのか、その説明論理を考察する。

1. 青年運動家ハマーとニーチェ思想

ハマー(Walter Hammer, 1888-1966)は、ヴェーバーやハーヴェンシュタインらとは異なり、教育学者ではなく、さまざまな問題について発言した青年運動家であった。本名はヘステライ(Hösteray)であったが、ニーチェの著作『偶像の黄昏—あるいは人はいかに鉄槌(Hammer)を持って哲学するか』に感銘を受けて、ペンネーム „Hammer“ を名乗ることになったといわれる²。1906年頃から著述活動をはじめ、青年運動に積極的に関与しはじめるのは、ハマーが20歳を迎えた1908年のことであった。

ハマーが参加した青年運動の団体は、「ドイツ先遣隊同盟(Deutscher Vortrupp-Bund)」である。「健全な生活」と「節制」をキーワードに「生活改革運動」を推進するこの団体は、1912年創刊の雑誌『先遣隊』のメンバーを中心に結成され、その数はマイスナー大会参加時に4000名に達したという³。先遣隊同盟の代表はヘルマン・ポーペルトという作家であった。1910年に発表された彼の小説『ヘルムート・ハリンガ』は、「アルコール中毒、婚前交渉、非ゲルマン化という三大汚染とされる社会問題」の解決に真正面から挑む青年判事ハリンガの姿を描いた物語であり⁴、1925年までに48版を重ね、発行部数はこの年までに累計31万部を記録したとされる⁵。ハマーもまた、さまざまな著作物を通して「生活改革」の重要性を訴えた先遣隊同盟の主要メンバーのひとりであった⁶。

1914年に『教育者としてのニーチェ』を発表する前から、ハマーはニーチェ論を執筆していた。具体的には、1908年の「高き山上のニーチェ」⁷、1910年の「ニーチェと彼の

健康への意志」(Hammer1910-a)⁸、1913年の「ニーチェと菜食主義」⁹などの論文、また1910年の著作『フリードリヒ・ニーチェー生活改革者と未来文化一』(Hammer1910-b)¹⁰である。このなかでハマーは、「今日の生活改革運動(Lebensreform-Bewegung)が目指しているのは、生活のあらゆる領域における健全化である」¹¹と述べる。このように、ハマーも「健全な生活」を目指す先遣隊同盟の基本精神を共有しているわけだが、われわれにとって興味深いのは、この一連の論攷においてニーチェが「生活改革者」として高く評価されていることである。すなわち、「徹頭徹尾ニーチェは今日的意味における生活改革者であった」¹²というのである¹³。

ハマーがもっとも軽蔑していたのは、「目的も闘争心もなくただ生きているだけの凡人」や「ビールと冗談で満腹状態の俗物」と特徴づけられるような不健全な人々であった¹⁴。彼は、ニーチェが「断固たるアルコール敵対者」¹⁵であったことを強調し、禁酒を訴える。同様に、1908年の「高き山上のニーチェ」においては、健康上の理由からニーチェが高い山地に避暑に出かけていた事実に注目し、高山の澄んだ空気や太陽の光がニーチェの健康上の苦痛を和らげ、同時に『ツァラトウストラ』などの最高傑作をうむことになったと指摘する¹⁶。1913年の論文においては、ニーチェと菜食主義(Vegetarismus)の関係が論じられている。ニーチェは自らの哲学を「菜食主義哲学(vegetarische Philosophie)」と呼ぶ一方で、禁欲主義としての「菜食主義」を徹底的に批判した¹⁷。菜食主義とニーチェの関係はこのようにアンビヴァレントであるが¹⁸、ハマーはニーチェが菜食主義のような「食事療法」に関心を示したこと自体を強調する。ハマーによれば、アルコール敵対主義、高い山地での生活、食事療法への関心、これらはすべて、ニーチェ自身が「健康」を求めて生きていたことの証しなのである¹⁹。そしてハマーは次のように啓発する。

「ニーチェ自身がそうしたように、何人も自分に厳しく、自らの生活規則を調整すべきである。今日の人間に欠けているのは自己規律(Selbstzucht)であり、健康を求める自らの意志である。」²⁰

ハマーにとってニーチェは、生活改革者の「仲間」と同時に「模範」でもあった。ハマーの言葉を借りるなら、「ニーチェはわれわれがいかに生きるべきかを教えようとした(Nietzsche hat uns lehren wollen, wie wir leben sollen)」²¹のである。

2. 『教育者としてのニーチェ』の概要

ハマーが『教育者としてのニーチェ』を発表したのは1914年のことであった。同書の出版は、すでに1913年論文「ニーチェと菜食主義」のなかで次のように予告されている。

「私は、来年中には『健康と男性文化へと導く教育者としてのニーチェ(Nietzsche als Erzieher zu Gesundheit und männlicher Kultur)』と題する詳論を発表したいと思っている。この本のなかで私は、われわれ民衆の力の再生を目指すあらゆる諸努力の弁護

人、例えばヴァンダーフォーゲル、アルコール敵対者、菜食主義者の弁護人として、ニーチェを評価する予定である。」²²

実際に公刊されたときにはタイトルが『教育者としてのニーチェ』と簡略化されたものの、同書においてニーチェが「健康」と「男性文化」へと導く「教育者」と想定されていることは明らかであろう。したがって「生活改革」というハマーの当初の目標は同書においても貫かれているのである。とはいえ、われわれとしては、ハマーにおけるニーチェの評価が「生活改革者」から「教育者」へと改められている点に注目しなければならないだろう。1914年の著作『教育者としてのニーチェ』においてニーチェは具体的にどのように評価されているのだろうか。詳しい考察に入る前に、本書の構成を整理しておきたい。

序文

- | | |
|------|-----------------|
| 第1信 | 現代の目から見たニーチェ |
| 第2信 | 理解するための鍵 |
| 第3信 | 現代の学校教師と新たな教育理想 |
| 第4信 | 無党派新聞の精神 |
| 第5信 | 現代人 |
| 第6信 | ドイツ人 |
| 第7信 | よきヨーロッパ人 |
| 第8信 | 国家という偶像 |
| 第9信 | 序列と社会民主主義 |
| 第10信 | 女性問題と男性復権 |
| 第11信 | 神は死んだ！ |
| 第12信 | キリスト教一人類の汚点 |
| 第13信 | 道徳の価値転換 |
| 第14信 | 一切は無罪！ |
| 第15信 | 大声の然り！ |
| 第16信 | 創造者 |
| 第17信 | 権力への意志 |
| 第18信 | 超人 |
| 第19信 | 愛、結婚、女性と子どもについて |
| 第20信 | 新たな人間理想 |

目次を一瞥して気づくのは、後期思想への言及率が高いということである。ほとんど全編にわたって後期思想が取り上げられている。なかでも、キリスト教批判や道徳批判、「神は死んだ」、「権力への意志」、「超人」など、当時タブー視されていた過激思想が積極的に論じられている点は注目に値する。考察対象を初期思想に限定したヴェーバーとは対照

的である。

もうひとつの特徴は、本書が「手紙形式」を採用しているという点である。それは、ハマー自身が本書を「この手紙」と呼んでいることから明らかであるが、各章が「第〇信 (Brief)」と表記されていること、一貫して2人称が大文字で „Du“ と表記されていることなどにも、「手紙形式」の典型的な特徴を見ることができる。

試みに、第1信の冒頭部を引用してみよう。

「さて、君 (Du) はもう長い間待ち続けて嫌気がさしているように見えるから、私は君にニーチェの思想世界を知ってもらおうと思う。私が君にもたすのは、幸運ではなく、疑念と危険である。私はツァラトゥストラに関して君に警告したが、それは、君がまだ学校を卒業しておらず、解放に飢えていて、まだ理解できないツァラトゥストラの言葉を貪欲に渴望する年齢にあったからである。君は私の忠告に従い、この本を傍らに置き、ヴァンダーフォーゲルの仲間に加わった。それは長い間この自然で素朴な青年運動に没頭するためである。こうして君は、頼もしい男、気骨のある人物に成長し、自主独立し、強くなった。今や君は前方へと駆り立てられ、これまでの君自身を超えた目標に向かって努力し、君の存在の意味を問い、新しい掘りどころを探し求める。君はすでにヴァンダーフォーゲルを超えて成長し、今度はヴァンダーフォーゲルの埋め合わせをしてくれる教育者を探し求めている。そして君は再びニーチェと出会ったのである。」²³

ここから読み取れるのは、想定される読者層が「ヴァンダーフォーゲルを卒業した青年」であるということと、そのような青年たちに向けてハマーが「疑念と危険で満たされたニーチェの思想世界」を提供しようとしていることである。また、引用箇所の最後を見れば、ニーチェがヴァンダーフォーゲルの埋め合わせをする「教育者」として紹介されていることも明らかであろう。では、ハマーは「教育者」概念をどう理解していたのだろうか。

例えばハマーは次のように述べている。

「欠陥は学校教師 (Schulmeister) の側だけにあるのであって、青年の側にはない。それゆえにまた、あらゆる学校教師に反対！青年は権利を保持すべきなのだ！われわれの学校教師文化こそが諸悪の根源なのだ。この闘争は、制度全体に向けられているのであって、単に学校の中だけではなく、生活全般における学校教師根性に向けられているのだ。われわれが必要としているのは教育者 (Erzieher) である。ニーチェはひとりの教育者なのだ。」²⁴

このように、ハマーは「学校教師」を徹底的に批判し、真の青年教育を実践することのできる存在として「教育者」という概念を用いている。すでに確認したように、当時のドイツにおける「教育者」概念には「教師」や「学校教師」に対置される理想的な教育従事者という意味が込められていたのだが、このような理解はハマーにも共有されていた。そのうえでハマーはニーチェを「教育者」と見なしたのである²⁵。

しかし、解釈上の疑問がもうひとつ残る。それは「教育者」と「教育学者」の違いであ

る。すなわち、「教育学者」モデルのヴェーバーはニーチェの教育学的思想【学説】を明らかにすればよかったのに対して、「教育者」モデルのハマーは「ニーチェ【人格】が直接的に青年を教育する」ということを説明しなければならないからである。いったいハマーはニーチェをどのようにして「教育者」と評価していくのだろうか。以下では、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルのメカニズムについて考察していくことにする。

3. 「教育者としてのニーチェ」という解釈モデル

(1) ニーチェ読書による「自己教育」

ニーチェが1914年の『教育者としてのニーチェ』出版時に通常の意味において「○○者」でありえないことは、改めて言うまでもないだろう。1900年8月25日に彼はこの世を去っているからだ。ニーチェがいわば1910年代のドイツに生き還ることができたのは、ニーチェ読書という行為の普及のおかげであった。ハマーはニーチェの影響力が当時のドイツ文化や生活にすでに浸透しつつあることを指摘しつつ、その傾向を歓迎している。

「ニーチェは単に芸術家、哲学者、改革者であるだけではなく、文化の要因であり、現代生活における力であり、われわれの時代には欠かせない傾向である。たとえ学校教師がこの新たな精神世界の侵略者を無視してきたとしても、ニーチェというこの傾向は生きて作用しているのである。」²⁶

「ニーチェ読書」という言葉こそ確認できないが、ハマーもまた、ニーチェの影響力が死後にもかかわらず「生きて作用している」ことを認めていたのである。ではニーチェ読書によって青年がいったいどのように教育されるというのだろうか。

第一に指摘できるのは、ニーチェの思想内容それ自体が持つ教育効果であり、いわば教育行為における「知識伝達」の側面である。例えば、第5信「現代人」や第6信「ドイツ人」においてハマーは、大都市の機械文化や現代ドイツ人の享樂的生活を批判したニーチェ自身の発言に注目する。すなわち、生活改革の重要性を訴えるニーチェの考え方【知識内容】を青年が学ぶべきだと主張するのである。ここではまさに「教科書」を読むのと同じ効果がニーチェ読書に期待されていると言えるだろう。

第二に指摘できるのは、ニーチェその人が及ぼしうる教育効果である。ハマーによれば、ニーチェ読書による教育においては、彼の思想内容のみならず、ニーチェ自身の生き方【生や人格】もまた「模範」として重要な役割を担うという。ニーチェの生き方のなかで、とりわけハマーが高く評価したのは、病弱だったニーチェが「健康」を強く求め、数々の苦悩を克服して「生」を全うしたことである²⁷。

「苦痛は生に対する抗議であると見なされてはならない。生(Leben)の代弁者であるツァラトウストラは、苦悩(Leiden)の代弁者でもあった。苦悩はまた生のひとつの

刺激である。ニーチェ自身は一彼の病歴、その克服の歴史を想起せよ—ニーチェ自身は、過酷な苦悩を味わい、その苦悩を祝福してきた。彼は幸運を嫌悪し、軽蔑すべき現代人の快適な暮らしを嫌悪した。『遅しくなれ！』ツァラトウストラは自らの弟子に向かってこのように叫んだ。」²⁸

病氣や苦痛を厭うのではなく、むしろ自分の宿命を肯定し、前向きに生きようとする姿勢。ハマーによれば、青年はまさにこのような生き方を何よりもまず学ぶべきなのである。また、ニーチェ自身の人格や生への高い関心は、彼の思想の変化や矛盾に対する見方をも左右することになる。例えばハマーは次のように述べる。「ニーチェ自身は、多くのことを経験し、多くのことを克服し、多くのことに別れを告げてきた。彼の変化は苦しい超克だったのである。」²⁹

また 1913 年論文においては次のように述べている。

「(…略…)ニーチェの発展過程を知っていれば、皮相浅薄な読者が嬉々として彼の著作から読み取るような自己矛盾 (Selbstwiderspruch) を見出すことはないだろう。たしかにニーチェの教説は変化に富んでいる。また後に彼自身の心に関わる切実な問題となったものの多くは、比較的早い時期に彼自身によって冗談交じりで拒絶されている (例えば、永劫回帰説)。しかしながら、これは通常の間にも見られる性質であり、必要不可欠のものである。というのも、成熟した人格は青年期の誤謬から自らを解放しなければならないからである。」³⁰

第4章第2節で取り上げたコンラートと同様、ハマーもまたニーチェ思想における「矛盾」を生き生きとした「人格」の象徴や「成長」の証しとして積極的に評価する。このように、青年はニーチェ読書【知識内容+人格】によって「生」や「健康」の重要性を学ぶことができるというのである。

しかしながら他方で、ニーチェ読書には通常の読書とは異なる側面があるということを忘れてはならないだろう。それは、ニーチェの思想世界を「幸運」ではなく「疑念と危険」と表現するハマー自身の見解にすでに端的に示されている。われわれは、ニーチェが言ったことのすべてをそのまま受け容れることもできなければ、精神異常に陥ったニーチェ自身の「生」をそのまま追体験できるわけでもない。たとえ教育効果があるとはいえ、ニーチェ読書は、「教科書」を読む行為とは性格がまったく異なるのである。ハマーも 1913 年論文において次のように述べている。

「ニーチェを盲目的に信頼するのではなく、ニーチェと向き合っても自分自身に忠実である、すなわち自分自身に従うべきであるというのが、私の意見である。ニーチェが繰り返し強調していることだが、彼は自分のうちに理想像を見出そうとするような人間と向き合おうとはしなかった。むしろ人間は誰しもが自分だけの模範を持つべきなのだ。」³¹

ハマーに言わせれば、ニーチェ読書という行為は「ニーチェとともに闘い、ニーチェを相手取って闘うこと (mit und gegen Nietzsche zu kämpfen)」³²にほかならない。「ともに闘う」

とは、ニーチェ読書における第一、第二の教育効果を踏まえ生活改革を実践するというほどの意味であろう。ところがハマーは続けて「ニーチェを相手取って闘うこと」をも要求している。じつは、この点がニーチェ読書の第三の教育効果をうみだすのである。「私は読者諸君には率直にお願いしようと思う。彼(※引用者注：ニーチェ)に圧倒されるのではなく、彼と格闘し(mit ihm zu ringen)、彼を超克することを(ihn zu überwinden)。」³³—ハマーによれば、ニーチェ思想の誤謬に対しては、ときに批判的に対峙することも必要だという。しかし批判するだけでは教育効果は得られない。「彼を超えて成長すること(über ihn hinauszuwachsen)」³⁴が重要なのである。

「ニーチェが述べたことすべてを真に受けたいよう気をつけろ！彼を超えて成長すること、彼に闘いを挑むこと—これが彼の希望である！そして君は今こそ彼を超克しなければならないのだ！」³⁵

このように、ハマーは、ニーチェ読者が疑念と危険で満たされたニーチェ思想を批判的に克服していくプロセスにも教育効果を認めたのである。ところが、ニーチェ思想の何をどのように批判し超克していけばよいのか、その道筋はハマーによってはほとんど示されない。読者は自分自身の力でニーチェを克服しなければならないのである。

「自分自身を教育すること(sich selbst erziehen)、何度も何度も自分を見失い、模索し、発見すること。これこそがニーチェの意向である。ニーチェとヴァンダーフォーゲルの指導者はわれわれに向けて同様の警告を発している。『君自身に手を差し延べよ！』ツァラトウストラはこう言った。『これは私の道だが、君の道はどこか？』」³⁶すなわち、ハマーの見るところによれば、ツァラトウストラ＝ニーチェは「これは私の道だが、君の道はどこか？」と突き放す発言をすることによって弟子に「自己教育」の重要性を伝えているのだという。ニーチェ読書による「自己教育」という第三のプロセスを経て、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルはようやく完成を迎えるのである³⁷。

(2) 「自己教育」の象徴としての「超人」思想

以上が「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルのメカニズムであった。すなわち、危険なニーチェ思想と批判的に向き合い、最終的にニーチェという存在を「超克」していくプロセスが、その教育効果を認められたのである。このようなハマーの説明論理の中でとくに重要な役割を担うことになるのが、例の「超人」思想である。

ハマーが主に「超人」について論じているのは第18信「超人」においてである。この中で彼は、「天才の遺伝」や「超人という種属の育成」など、生物学的に解釈されたニーチェ思想は「教育」の文脈で語る事が出来ないと述べる。「偶然」が支配するダーウィン進化論的概念が教育目標たりえないという点において、ハマーはヴェーバーと同じ見解を示したのである。しかし、ハマーはヴェーバーのように「超人」思想を回避することはなかった。ハマーは「ニーチェが動物学的な意味における新種を念頭に置いていたという

学術的見解の方こそが正反対の間違いだ」と述べ³⁸、「偉大さを目指して意識的になされる人間教育の幸運な着想」³⁹として「超人」を教育学的に意味づけようとする⁴⁰。

従来生物学的(あるいは動物学的)な解釈を批判することで、ハマーは「超人」を人間の意識レベルの問題に再定位することができたと言えるだろう。しかし、このことが直ちに「超人」の教育学的解釈の成功を意味するものとはならなかった。なぜなら、当時のドイツにはすでに「超人」と化した青年たち＝道徳的頹廃行動を繰り返す「ニーチェ派」が大都市を中心に溢れていたからである。生物学的解釈以上にハマーが問題と見なしたのは、到底「教育」とは結びつかないこうした「超人」イメージであった。こうした理由から、ハマーは、自分自身を「超人」と思い込む「勘違いニーチェ派」を批判することになる。「勘違いニーチェ派の芸術、つまりあの夜遊び集団、遊蕩児、カフェ作家たちの芸術というのは、神経を衰弱させるような作用を及ぼすだけで、生を肯定するようなものではない」⁴¹からである。こうしてハマーは、ニーチェ自身が享楽主義を嫌っていたこと、過酷な意志の持ち主であったことを引き合いに出しながら、これまで信じられてきた「超人」＝道徳意識の低い享楽主義という等式を否定し、「超人」の新たな解釈を試みるのである。

「ニーチェが無規律な享楽主義を軽蔑すべきものと見なしているのに、ニーチェ派を自称する現代の『超人』は、まさに熱狂的に享楽主義を王位につけようと頑張っている。しかし享楽主義を美化したり好き勝手に享楽しようとする者が、自分にも他人にも過酷さと厳格さで臨んだニーチェに拠り所を求めることは許されない。神聖なる古代ギリシアの自己規律こそが、われわれを身体的・精神的な貴族階級へと、つまり超人へと導いてくれるはずである。超人とはひとりの英雄であるべきなのだ。」⁴²

ハマーは「超人」が「自己規律の勝利」であると結論する⁴³。人間が「超人」になれるかどうかは、自らの「我欲(Selbstsucht)」を「自己規律(Selbstzucht)」によってどれだけ統制できるか否かにかかっているというのである⁴⁴。そして彼に言わせれば、この好個の模範こそが—「ニーチェ自身のように(wie Nietzsche selbst)」⁴⁵というフレーズが象徴しているように—ニーチェ自身の生き方⁴⁶にほかならなかつた。すでに1910年論文「ニーチェと彼の健康への意志」において、ハマーは「超人」について次のように述べている。

「この自己圧制者(※引用者注：ニーチェ)は、彼の仲間や未来の人間に健康への道を示すことができるよう自己を犠牲にした。彼は再びわれわれに生への意志を与えた。彼はある新しい理想をわれわれのために打ち立てたのである。それこそが超人である。人間は自己自身を超越すべきであり、自己自身を克服すべきである。超人はさまざまな風刺の原因となっているようだが、にもかかわらず、われわれにとっては一目標である。この目標によって、生を再び生きる価値あるものとし、懸命に努力すべきものと見なすことができるのである。」⁴⁷

ハマーの見るところによれば、「超人」とは、我欲を自己規律によって統制する厳格な「自己超克」の試みであり、青年が目指すべき「自己教育」の目標にほかならないのである。

4. 自己教育の成功例—ニーチェ読者の証言から

すでに明らかなように、ハマーの著作『教育者としてのニーチェ』においては、ヴェーバーの「教育学者」論とは異なり、ニーチェの後期思想が積極的に評価されている。なかでも「超人」は、厳しい自己規律による我欲の克服を意味する思想として高く評価され、「超人」を主要モチーフとする『ツァラトゥストラ』などの読書が推奨されている。少なくともハマーは、ブームのような通俗的受容形態では決して得ることのできない教育効果がニーチェ読書に期待できると考えたのである。では、実際にニーチェ読書によって「自己教育」効果を体感した人はいたのだろうか。ここで注目したいのが「ニーチェ読者」の証言である。

まずは、若い頃からニーチェを愛読したとされる詩人モルゲンシュテルン (Christian Morgenstern, 1871-1914)⁴⁸に目を向けてみよう。なぜならモルゲンシュテルンは、ニーチェが通俗的な崇拜対象でしかなかった 1896 年に「ニーチェ、教育者」と題する一文⁴⁹を発表しており、その意味において、受容史上ニーチェをもっとも早い時期に「教育者」と把握した人物だからである。モルゲンシュテルンは 1895 年、最初の詩集をニーチェに捧げた⁵⁰。「ニーチェ、教育者」はその翌年に『新ドイツ論集(旧自由舞台)』誌上に発表された論文である。このなかで彼は、未来志向型人間にとっては、ニーチェが「誘惑者 (Verführer)」ではなく「指導者 (Führer)」であり、「偉大な教師や先生」でもあると述べている⁵¹。ではモルゲンシュテルン自身にとってニーチェはどんな存在だったのだろうか。ヒレブラント資料集に収録されているモルゲンシュテルンの「日記」(一部抜粋)から、彼の言葉をいくつか拾ってみよう。

【1896年の日記：25歳】

「私のような人間にとってニーチェを読むこと以上に大きな危険はない。というのは、私自身が無価値であるという苦悩に苛まれる気分になるからだ。」⁵²

【1897年の日記：26歳】

「ニーチェを直視すれば、人類の目標がどこにあるのかがわかるはずだ。」⁵³

【1905年の日記：34歳】

「ニーチェとともに思考する者は、ニーチェと『対決する』ことにもなる。彼の『矛盾』が我慢ならない者は、一度も彼とともに思考したことがなく(さらに言えば感じたことがなく)、一また彼とともに飛翔した経験も持たないはずである。」⁵⁴

ニーチェ読書を通じてモルゲンシュテルンがさまざまな経験を積んだことがわかるだろう。彼にとってニーチェとは、崇拜の対象でもあり、人生の道標でもあり、ときには対決

の相手でもあったのである。

モルゲンシュテルンは「ニーチェを選び分け(erlesen)ようとするのではなく、体験(erleben)しなければならない」と訴える⁵⁵。彼によれば、こうしたニーチェとの向き合い方＝ニーチェ読書は「読者の心を揺さぶり興奮させるひとつの事件」であり⁵⁶、このときニーチェはほかならぬ「教育者」として読者の前に立ち現れるわけである⁵⁷。少なくとも、モルゲンシュテルンというひとりのニーチェ読者にとって、ニーチェは紛れもなく「教育者」だったのである⁵⁸。

同様に、1910年頃のドイツには、ニーチェ読書の「自己教育」効果を実感していた労働者も存在していたようである。第4章第4節で取り上げたレーヴェンシュタイン⁵⁹によれば、例えばパン焼き職人はツアラトウストラ読書を通じて「自己超克の幸福」を感じているし⁶⁰、また身体に障害を負った日雇い労働者は、「人間とは克服されるべき何ものである」というツアラトウストラの言葉から「自己教育への意志(Wille zur Selbsterziehung)」を学び取っている⁶¹。

「ニーチェの影響を私はただ純粹に個人的なものとかダイレクトに実践的なものとししか特徴づけることができないけれども、彼の影響力は自己教育への意志を私にもたらしてくれた。それでも私が苦悩して疲れてしまったときなどは、我が兄弟よ、高く、より高く、君の心を上昇させなさい！という言葉が支えとなり、私は何とか乗り切ることができた。こうして苦痛を伴う呼吸も、貧しい生活の悲哀も、忘れることができたのだ！」⁶²

この日雇い労働者は生活に困窮していたために『ツアラトウストラ』を購入することはできていない。ただ彼は図書館で本を借り、肌身離さず『ツアラトウストラ』を持ち歩き、時間の許す限り「読書」に没頭したと告白している⁶³。彼の言葉を借りるなら、ニーチェ読書はまさに「自己自身による個々人の教育(die Erziehung des Einzelnen durch sich selbst)」⁶⁴にほかならなかつた。ニーチェはここでもやはり読者に「自己教育」を促す「教育者」として出現していると言えよう。

以上に見たように、「教育者としてのニーチェ」という見方は、単にハマーひとりが主張したものではなく、実際に起こり得た解釈モデルだったのである。

第2節 ニーチェ読書の弊害—青年の「自殺」問題

ニーチェ読書による「自己教育(Selbsterziehung)」。これがハマーによって示された「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの内部構造であった。これは、単にハマーの説明のみならず、モルゲンシュテルンや労働者など実際のニーチェ読者の証言からも明らかであろう。改めて言うまでもなく、「教育者」モデルの成立には、ニーチェ読書という行

為がきわめて重要な鍵を握っているのである。ところが、ニーチェ読書がもたらす作用として当時一般に知られていたのは、「自己教育」ではなく、むしろ「凶悪犯罪」や「自殺 (Selbstmord)」であった。本節では、ニーチェ読書の弊害、とりわけニーチェ読書による青年の「自殺」問題を取り上げ、ハマーの「教育者」モデルの意味を検討するための指標を得たい。

1. 「毒殺者」としてのニーチェ

本節で取りあげる文献を年代順に挙げれば、マイヤーの著作『思想家、詩人、そして墮落させる者としてのニーチェ』¹⁾、ラウシャーの著作『フリードリヒ・ニーチェ—批判的研究—』²⁾と論文「フリードリヒ・ニーチェ」³⁾、フリッツの論文「ニーチェと青年」⁴⁾、キーフルの論文「フリードリヒ・ニーチェとキリスト教的教育学」⁵⁾、エルンストの著作『誤った予言者ニーチェ』⁶⁾である。

このうち、マイヤー⁷⁾の経歴は不詳ながら、ラウシャー⁸⁾はカトリック司祭の資格を持つギムナジウム教師、キーフル⁹⁾はヴュルツブルク大学カトリック神学部の教義学教授ということがわかっている。フリッツ¹⁰⁾は反ユダヤ主義ないし民族主義的ナショナリズムを標榜したジャーナリストとして知られ、ニーチェ本人に直接手紙を出して拒絶されたという経験も持っている¹¹⁾。またエルンストはハンブルクの民衆学校教師であるが、第1章でも触れたように、ニーチェ派の青年を風刺した喜劇作品『今日の青年』の作家でもあった。

ニーチェ読書の普及という時代背景¹²⁾の中で彼らが見た現実、ハマーの見立てとは全く異なるものであった。例えば、教師のエルンストは次のように述べている。

「矛盾に満ち、悪趣味で、まったく根拠に欠けた、誘惑的なニーチェの道徳哲学が、とりわけ若者の頭や心の内側において、純粋な本能の致命的な混乱や破壊をどれだけひきおこしてきたか、その一部始終をわれわれは目の当たりにしている。(…略…)すでに私ひとりだけでも、この誤った予言者のせいで道を踏み外したり、没落してしまった若者を、少なくとも5～6例は知っている。」¹³⁾

このように、エルンストは実体験に基づき、ニーチェ読書によって若者が深刻なダメージを受けることを警告した¹⁴⁾。また、当時の裁判事情に言及したある論文によれば、世間を騒がせるような凶悪殺人事件が起きた際、「ひょっとして容疑者はニーチェでも読んだのではないかね？」という言葉が予審判事たちの口癖であったという¹⁵⁾。ニーチェ読書はさまざまな弊害を引き起こしていたのである。

なかでも衝撃的だったのは、ニーチェ読書が原因と見られる生徒の「自殺」であった。例えばマイヤーは、「まるで消化のよい食事のように」吸収されるニーチェ思想が「狂気」や「自殺」という結果を招いているとして警鐘を鳴らした¹⁶⁾。またフリッツは、ギムナ

ジウム生徒の相次ぐ「自殺」事件を受け、次のような見解を示している。

「ライプツィヒのギムナジウム9年生(※引用者注：14～15歳)が自殺するのは、復活祭以降だけでも3件目である。その原因は学校教育から受ける過度のストレスではなく、不適切な著作、なかでもとりわけニーチェの著作の早すぎる読書である。個人の問題や家庭内の問題が悲しい出来事に関与している事例があるとしても、病的とも言える過度のストレスを感じた若い生徒に自殺という決断を迫った根本原因はやはりニーチェである。ニーチェに心酔したひとりの若い生徒がニーチェ読書を教室で流行らせたのだろうが、今やほとんどの生徒に感染してしまったのだ。」¹⁷

フリッチュに言わせれば、ニーチェは「教育者」どころか、「毒殺者(Giftmischer)」でしかなかった¹⁸。ニーチェ読書は、「自己教育」という正の作用のみならず、「自殺」という負の作用をもたらす行為でもあったのである。

2. ニーチェ読書による「自殺」のメカニズム

しかし、青年が自ら進んでニーチェの著作を手に取り、ニーチェ読書に没頭し、その結果「自殺」する。この一見不可解な因果連関をどのように説明すればよいのだろうか。

フリッチュは、諸著作に内在しているニーチェ自身の「生」の苦悩がニーチェ読者にも感染することによって、「生」からの逃避＝「自殺」が起こるのではないかと分析した。「憂慮すべきなのは、ニーチェが病気の男であること、そして彼の著作に内在している病的思考が、弱い心情の持ち主には感染してしまうということである」¹⁹。このように述べたうえでフリッチュは、ニーチェ読書による「自殺」のメカニズムを次のように説明する。

「あらゆるニーチェの思索活動の原動力は、虚栄心と自己賛美である。しかし、そのすぐ隣には、男性らしからぬ無力さと行動力の欠如が潜んでいる。これらがあらゆる生についてペシミスティックな軽蔑心をもって語るのである。しかも世界に絶望するよう若者を仕向ける調子で。軽蔑的な側面ばかりが強調された生に直面して、自意識過剰になった若者は、このような人生を送るには自分が惜しいと思ひ込むようになり、ついには彼自身の生にも軽蔑的に背を向けることになるわけだ。」²⁰

すなわちフリッチュは、ニーチェ読書を通じて「生」に希望も目的も見出せなくなった結果、読者は「自分自身の生に軽蔑的に背を向ける」＝「自殺する」と考えたのである。

一方、エルンストは、ニーチェ思想の「矛盾」に注目する。すなわち、通常の読書とは異なり、ニーチェの場合、気まぐれな著者の態度や発言に「翻弄」され、読者が混乱に陥ってしまうというのである。

「同一の時期において、同一の体系において、同一の思考過程において、いやそれどころか、たったひとつの同一の思想の中でさえ矛盾しているような思想家、そのように矛盾に満ちた思想家というのは、ひとつの形容矛盾である。自己変革するこ

とは、単に人間の権利というだけではなく、ある意味においては人間の義務でもあるが、しかしニーチェのような永遠の改宗者および背教者の場合、こう質問しなければならないだろう。すなわち、たくさんある彼の意見のうち、いったい自分ほどの意見を信じればいいのか？」²¹

人生の目的や生きる希望を求めてニーチェの著作を手にとった青年は、相矛盾するニーチェの言葉に戸惑うばかりで、結局「ひとつの答え」に辿り着くことができない。それは、ニーチェ自身がしばしば「反ニーチェ的 (antinietszsheanisch)」²² だからである。若い読者を惹きつけるだけ惹きつけておいて²³、途端に「さて、これは私の道だ、君の道はどこか？」と突き放す²⁴。こうした彼の気まぐれな態度が、ニーチェ読者を錯乱させ、人間不信に陥らせる²⁵。エルンストはそう考えたのである。

「生」に苦しむ病弱なニーチェの姿や言葉、自分自身を超克するがゆえに生じてしまう思想の「矛盾」、弟子を突き放すような発言など、ハマーの『教育者としてのニーチェ』においてはニーチェ読者を「自己教育」へと促すプラスの要素として説明されていたものが、ここでは、読者を「自殺」へと誘うマイナスの要素として説明されていると言えるだろう。少なくとも、フリッチュやエルンストの見るところによれば、「生」に苦悩したニーチェの言葉は、若者に生きる勇気を与えるものではなく、またニーチェ思想の「矛盾」も、十分な判断力を持たない若い読者を翻弄するだけであって、到底「教育」的な効果をもたらすものではなかったのである。

3. ニーチェ読書禁止令とその限界

ニーチェ読書の弊害を訴える論者がもっとも憂慮していたのは、読者層の「低年齢化」、すなわち青年の大部分が「早い時期に、あまりに早い時期に」ニーチェ思想という「危険な魅惑地帯」へと迷い込んでしまっているという現状であった²⁶。

例えばフリッチュは「強固な人生観をもった大人は違いが分かるため、きらきら輝く粗穀から栄養のある穀物を選び分けることを知っているのに対し、純朴な青年は見境なくその中のすべてを福音だと思い込む」²⁷ として、未熟な10代の生徒にとってニーチェ思想が「危険な食べ物」ないし「毒物」であると忠告する²⁸。エルンストも同様に「ニーチェは30～40歳の成人向けの作家であって、青年にニーチェを与える行為は子どもにラム酒を与えるに等しい」と述べ、「青年にとってニーチェ思想はとくに危険である」²⁹と警告した³⁰。青年の健全育成という見地から、ニーチェの著作は文字通り「有害図書」と見なされたのである。

「有害」指定を受けたニーチェの思想は、当然「規制」の対象となる。実際、当時のドイツにおいては「ニーチェ禁止令」とも特徴づけうる発言もなされた。例えばキーフルは「こんな毒のある著作から手と心を守れ！」と訴え、「子どもの心が育成される学校とい

う神聖な領域からニーチェを排除すること」を教師に要求している³¹。危険で有害なニーチェ思想【原因】を禁止すれば、自殺や凶悪犯罪などの問題行動【結果】を未然に防ぐことができると考えられたのである。

しかしながら、フリッチュやエルンストの論文において報告されているのは、むしろ「規制」の限界についてであった。例えばエルンストは、「私は青年にニーチェを禁止するとは言わないが、それは、言っても期待通りの効果を生まないからである」³²と述べ、ニーチェ禁止令の限界をはっきりと認めている。またフリッチュは、ニーチェ読書を禁止するという行為が逆の効果をうむことに注意を喚起した。「青年をこの毒殺者から保護するために今や何をすべきなのか？禁止することだろうか？一否！一周知の如く禁断の果実はかえって刺激的で、誘惑的だからである。」³³

そもそも「読書」という行為それ自体が私秘的な性格を有している。手荷物検査を実施すれば学校への持ち込みや授業中の隠し読みは防止できるかもしれないが、学校を一步出れば、生徒は好きな作家の「読書」に耽ることができるだろう。「規制」の限界については明確に認識されていたのである。

では、このような現実直面して彼らはいかなる提案を示したのだろうか。例えばラウシャー³⁴は次のように述べている。

「読書禁止令(Leseverbot)が一仮に忠告や警告というオブラートに包んだととしても一依然として効果がないというロロフの見解³⁵は、疑いなく正しいものである。事実、読書禁止令は、読書を抑止するというよりはむしろ、ニーチェ読書(Lektüre Nietzsches)への刺激剤として機能するはずだ。しかしながら、折に触れてニーチェの矛盾や極論に関して軽蔑的にいくつかコメントしつつ青年のあいだでのニーチェの評判を落とそうなどと考えることも、やはり全くの見当違いであろう。したがって次のようなこと以外に残された道はないのである。すなわちその方法とは、冷静かつ客観的な説明を通して、生徒たちにニーチェの主要思想に関する知識を与え、この思想がいかに無根拠なものであるのかを彼らに納得させることである。」³⁶

読書禁止令にかわってラウシャーが選んだ方法は、ニーチェ思想の誤謬や無根拠性を冷静に説明することであった。またフリッチュは、個人的な恨みも手伝ってか、「虚栄心の強い病人としてのニーチェの姿を嘘偽りなく暴露すること」を「次善策」として提案している³⁷。一方、エルンストは、教師の立場から次のように提言した。

「もし青年が断固としてニーチェを読もうとするか、すでに読んでしまったのなら、そのときは—これは私の提言だが—そのことについて彼らと語り合えばよい。君の愛すべき生徒たちに、冷静に、盟友関係のごとき愛をもって問うてみよ。『このような言葉を見て君は何を想うのかい？』と。『いったいどのようにして君はこのような教説を実生活に転用するのかい？』と。ソクラテスの産婆術を用いて、子どもたちの考えていることを、朦朧とした言葉の暗闇から太陽の明るい光のもとへ導き出してやるがよい。」³⁸

エルンストが示した提案は、有害なニーチェ思想をあえて話題に取り上げつつ生徒と直接「対話」というものであった。いかにも教師らしい興味深い提案であると言えよう。この種の解決策が実際にどれほどの効果を上げたのかは不明であるが、切迫した状況の中で彼らがニーチェ読書の「弊害」を真剣に議論していたことは、紛れもない事実である。

小括

本節の考察から何が言えるだろうか。第一に指摘できるのは、ニーチェ読書という行為が、「自己教育」という正の作用のみならず、「自殺」という負の作用をもたらすものであったことである。第二点目は、「生」に苦しむ病弱なニーチェの姿、自己超克の象徴としての「矛盾」など、ニーチェ読者を「自己教育」へと向かわせるはずの諸要素が、まさに「自殺」の決定的要因と見なされたという事実である。この両事実によって、ニーチェ読書による「自己教育」の可能性が全否定されるわけではないにしても、ハマーによって主張された「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの妥当性は相対化されなければならないだろう。そして第三に指摘できるのは、青年の「自殺」問題をめぐる議論のなかで、ニーチェ読書禁止令などの規制が期待通りの効果を生まないということ、読書行為を取り締まることの限界が、明確に示されていたということである。これもまた、読書という行為の私秘的性格を再認識させてくれる見逃せない事実である。これらの諸点を踏まえ、次節では、ハマーの「教育者としてのニーチェ」論の構造的特質や意味について検討したい。

第3節 「教育者」モデルの特質と意味

ハマーが期待したように、たしかに1910年代のドイツには、ニーチェ読書によって「自己教育」を体験した人々、すなわち「教育者としてのニーチェ」体験者が存在した。しかしながら、前節において確認したとおり、ニーチェ読書は生徒の「自殺」原因とも目されていた。ニーチェ読書がもたらす作用は「自己教育」なのか、それとも「自殺」なのか。ニーチェは果たして「教育者」なのか「毒殺者」なのか。両論入り乱れるこうした時代背景を踏まえつつ、ハマーの「教育者としてのニーチェ」論の特質と意味を検討することが、本節の課題である。

1. 「教育者」か「毒殺者」か—ニーチェ読書への高い依存性

結局のところ、ニーチェは「教育者」なのか、それとも「毒殺者」なのか。ニーチェ読

書による「自己教育」の可能性を説いたハマート、ニーチェ読書による「自殺」の危険性を訴えたフリッチュやエルンスト。果たしてどちらの「論」に、より高い説得性を認めることができるだろうか。

ニーチェ思想の「矛盾」に関する両者の説明を想起してみよう。すなわち、一方で、ハマートは「矛盾」にニーチェの生き生きとした「人格」や「自己超克」の証しを読み込み、それが読者を「自己教育」へと促すのだと説明した。しかしながら他方で、フリッチュやエルンストらは、ニーチェ思想の「矛盾」が、十分な判断力を持たない若い読者を翻弄し、「自殺」へと向かわせるのだと主張していた。両者の言い分は完全に平行線を辿り¹⁾、結局のところ、ニーチェ思想の「矛盾」がプラスに作用するか、それともマイナスに作用するかは、各々のニーチェ読者次第ということになる。このように、「教育者」モデルと「毒殺者」モデルのどちらに「論」としての説得性があるのかという問いに対して明確な回答を示すことは、困難をきわめるのである。

しかし、見方を変えれば、上述のような問いに答えられないということ自体がひとつの「答え」であるとも言える。すなわち、ニーチェが「教育者」になるか、それとも「毒殺者」になるかは、ニーチェ読者個人に完全に委ねられてしまうということである。ハマートの「教育者としてのニーチェ」論には、ニーチェ読書への高い依存性という特質が構造的に備わっているのである。

ハマートの見るところによれば、青年がそれぞれ直接ニーチェの著作を手に取り、ニーチェ読書に没頭することが、「教育者としてのニーチェ」実現のための第一歩であった。1890年代のニーチェブーム期に見られた通俗的かつ表層的な受容形態ではなく、沈潜が求められる個人的行為としてのニーチェ読書を通して、青年は「自己規律」の精神を学び、「男らしさ」や「健康」の大切さを知ることができる。また、ニーチェ思想の「矛盾」や「誤謬」を批判的に克服していくプロセスにも大きな「教育」効果が認められるという。つまり、読者がそれぞれニーチェによって「教育」される＝各々の読者にとってニーチェが「教育者」の役割を果たすというわけである。

1910年代のニーチェ読書の普及という時代背景が「教育者」モデルの成立を後押ししているのは事実である。しかし、ニーチェ読書の諸特質、例えば②個別的な関係が結べること、③人格的な影響力を有していることなどは、「教育者」概念とも整合性を持つ一方で、「毒殺者」モデルの成立基盤にもなっていた。ひとたびニーチェ読書に沈潜してしまうと、周囲の人間が何を言おうが、読者はもはや聞く耳を持たない。ニーチェ読書のこのような私秘的性格については、本章第2節の「ニーチェ読書禁止令とその限界」において確認したとおりである。また、ニーチェ読書の弊害を論じたエルンストは、否定的な意味で「ニーチェ化する(vernietzschen)」や「ニーチェ学者(Nietzschosophen)」という造語を用いているが²⁾、これはニーチェ読書という行為が「人格」に強い影響力を及ぼすことの証左であろう。人格的な影響力が強いからこそニーチェは「教育者」になりうるのだが、その反面「毒殺者」にもなりうるわけで、彼の影響力が「正」「負」のどちらに向かうかは

結局のところニーチェ読者次第ということになってしまう。要するに、ここではハマーがいわば「制御不能」に陥っているのである。

このように考えれば、ハマーの立場は、「ニーチェは教育者である」とする自論の妥当性要求においては、きわめて不安定かつ微妙な状態に置かれていると言えるだろう。たとえ「ニーチェを超越せよ!」「ニーチェに自己規律の精神を学べ!」と要求したとしても、ニーチェ読者が期待通りの効果を得るとは限らないし、最悪の場合、ハマーの意図や期待とは逆に、ニーチェ読書によって青年が「自殺」する場合さえ考えられるからだ。すなわちハマーは、「ニーチェは教育者である」と主張しながらも、青年にとってニーチェが本当に「教育者」となるか否かを自ら決定することができないという一種のアポリアに直面するのである。「教育者としてのニーチェ」論が内包する第一の特質は、「結論」を読者個人に委ねざるを得ないという、ニーチェ読書への高い依存性である。

2. 優生学的思想としての「超人」—ニーチェ解釈上の内的連関性の希薄さ

ハマーの「教育者としてのニーチェ」論に見られる第二の特質は、後期思想を積極的に評価したことに起因する諸問題、とりわけハマー自身のニーチェ解釈における内的連関性の希薄さである。要するに、「ニーチェらしさ」(詩的表現や矛盾など)が詰まっている後期思想が、首尾一貫したニーチェ解釈を困難なものにさせるという問題である。この点について確認するために、再び「超人」思想に目を向けてみることにしよう。

本章第1節において確認したとおり、ハマーにおいて「超人」は自己教育思想の象徴として理解されていた。しかし、青年の健全育成を目指すハマーの議論は、別の新たな「超人」解釈をうむことになる。第18信「超人」に続く第19信「愛、結婚、女性と子どもについて」の前半で展開されるのは、自称ニーチェ派による「性的逸脱行動」に対する批判である。「大都市に住む遊蕩児のように、今日『したい放題の生活』³に憧れる者がニーチェに抛りどころを求めることは許されない」。ハマーはここでも彼らの無理解を批判する⁴。しかしながら、ハマーがもっとも憂慮していたのは、性的快楽を追求する青年の行動が、人口の量的拡大を画策する国家に「生殖・出産マシン(Zeugungs- und Gebärmachines)」⁵として利用され、結果的に人間の「質」の低下を招くことであった⁶。こうしてハマーはあからさまな優生学的見解を展開する。

ハマーのこうした態度は、例えば特定の疾患や病弱者に不妊手術を施す「断種思想」に直結する⁷。また結婚に際しては「健康診断書の提示」を求めるべきだとも主張する⁸。「医者こそが結婚の仲介者および結婚の阻止者であるべきだ。結核患者や他の遺伝病患者に結婚や生殖行為を禁止することが医者の義務となるべきだ。」⁹ このように述べたうえで、ハマーは「優生法(rassehygienische Gebot)」の普及を真剣に訴えるのである。

19-20世紀転換期以降のヨーロッパを「優生学的な知のネットワーク」形成期と特徴づ

ける山内紀幸によれば、優生学とは、大都市化に伴う犯罪の増加、道徳的頹廢に対する「科学的な処方箋」であった¹⁰。この意味で、上述したハマーの見解はまさに「優生学的な知のネットワーク」に属していると言えるわけだが¹¹、注目すべきは、この章の結論部でハマーが『私は超人を生みたい』ということが君の希望であれ！¹² というツァラトウストラの言葉を引用していることである¹³。すなわち、第18信で「自己教育」の象徴として理解されていた「超人」思想が、第19信においては優生学的操作によって選別された次世代の子ども象徴として解釈されているのである。

エレン・ケイは『児童の世紀』において次のように述べる。

「ニーチェがその『超人』の思想の根拠を直接ダーキンの所説においていたというのではないが、(…略…)ダーキン説の一大結果たるを失わない。現代人中一人としてニーチェほど強烈に、現代の人類は単に動物と『超人』との間を繋ぐ橋梁ないし過渡に過ぎないのだと確信したものはない。このゆえに、ニーチェは、人種改善に対する人類の義務をば、ゴルトンにも劣らず、極めて厳粛なものに見なしていた。ただし、彼はその主義を表白するに、科学的証明をもってしないで、詩的表白・予言的表白の力をもってしたのである。」¹⁴

そもそも「優生学(Eugenics)」という言葉がゴルトンの造語であることを想起すれば¹⁵、ケイの「超人」理解が優生学的な意味内容であることは明らかであろう。この意味で、ハマーの優生学的「超人」解釈それ自体は決して突飛なものではない。ただ、ケイにおいて示されているようにダーウィンの進化論や遺伝理論などの生物学的知見を意識的に操作することが優生学にはかならないとすれば、ハマーの提示した2通りの「超人」解釈はねじれの位置にあると言わなければならない。すなわち、一方で生物学的解釈に対する批判から導き出された「超人」(教育学的解釈)が、他方ではよりラディカルな生物学的解釈(優生学的思想)として提示されるからである。

青年運動家のメッセージとして読めば、ハマーの主張に一貫性を読みとることは可能である。しかし、ハマーのニーチェ解釈における「超人」思想の内的連関性はほとんど破綻してしまっているのである¹⁶。

3. 教育者としてのウィンタースポーツ一煽動者としてのハマー

本章第1節でも触れたように、ハマーの属した団体「ドイツ先遣隊同盟」の主要な目的は、大都市の青年をアルコール中毒や性的逸脱行動から救済することであった。「我欲」を「自己規律」によって制御するというハマーの教育学的「超人」解釈は、まさにこうした青年に向けられたものであった。ところが「超人」思想は、優生学的な文脈においても援用されることになる。上山安敏が指摘するように¹⁷、先遣隊同盟が推進した生活改革運動は、優生学(民族衛生学)や社会ダーウィニズムへと容易に連結しうる契機を孕んでいた

のである¹⁸。

本章ではこれまでハマーをひとりの「ニーチェ解釈者」と見なして考察を進めてきたが、ヘルフルトも述べるように、ハマーには、ニーチェを利用して青年を社会ダーウィニズム的な理想へと導く「煽動者(Scharfmacher)」の一面も認められる¹⁹。誤解を恐れずに言うならば、ハマーにとって重要だったのは、ニーチェそのものではなく、社会ダーウィニズム的な理想の実現にほかならなかったのである。その証拠に、ハマーはニーチェ以外にも目を向け、それらの教育的意義を強調している。例えばウィンタースポーツもそのひとつである。

ハマーがウィンタースポーツについて詳論しているのは、具体的には 1910 年の『滑走スポーツ』²⁰と 1912 年の『ウィンタースポーツの危険』²¹においてである。「大都市」²²の悪影響を受けた不健康な人々に向けてウィンタースポーツの衛生学的な効果について広く啓蒙するということが、これらの著作の直接的な意図であった。ハマーはウィンタースポーツの意義を次のように説明している。

「大都市の住人、とくに知的労働者は、自身の健康維持のためにウィンタースポーツがいかに重要であるかということを感じつつある。座ったままの生活様式には、自由な運動時間が絶対に必要である。とくに都市部の空気がきわめて悪くなる冬の時期はなおさらである。ウィンタースポーツによってわれわれは、衛生学的に見て非常に優れた作用を得ることができる。ウィンタースポーツによって、深呼吸、テンポの速い心拍機能、筋肉の発達という効果が期待できる。そして結果的には、心地よい眠りと血行促進効果を得ることができるのだ。」²³

衛生学的な観点から人間の生活を見直すという「生活改良運動」のコンセプトがよくあらわれている文章であるが、われわれにとって興味深いのは、これらの著作の中でハマーがウィンタースポーツを「教育者」と評価している点である。すなわちハマーにおいては、ニーチェとウィンタースポーツが同等の扱いを受けているというわけである。1912 年著作『ウィンタースポーツの危険』の構成を以下に示しておこう。

- ・教育者としてのウィンタースポーツ (Wintersport als Erzieher)
- ・ウィンタースポーツの衛生学
- ・初歩的な危険
- ・スキー競技の危険
- ・雪崩の危険
- ・氷上スポーツの危険
- ・滑走スポーツの危険
- ・典型的な滑走事故
- ・滑走スポーツ規則

上記の構成からも明らかなように、「教育者としてのウィンタースポーツ」論が展開されるのは1912年著作の第1章においてである。そのなかで彼は次のように述べる。「ウィンタースポーツは身体の調和的な発達につながる理想的な手段である。しかしながらその最大の価値は、教育的な影響力のうちに求めなければならない。」²⁴

ハマーが想定しているウィンタースポーツは、具体的には、スキー、スケート、ボブスレーやスケルトンなどであるが²⁵、彼によれば、これらの滑走競技は「意志の鍛錬」や「自己規律 (Selbstzucht)」につながり、競技者は身体的にも精神的にも「成長」することができるという²⁶。例えばハマーは次のように言う。

「思い切りのある勇敢な行動へと教育するのもウィンタースポーツである。ウィンタースポーツをする人は、いつどの瞬間においても、予期せぬ出来事に遭遇するかもしれないという心の準備ができていなければならない。つまり臨機応変さが大切なのだ。臨機応変であるからこそ、危険が差し迫ったときにでも、素早く自分自身を救う決断を下すことができるものである。」²⁷

ハマーは「本来的なウィンタースポーツ (eigentliche Wintersport)」と「お気楽な冬遊び (harmlose Wintervergnügen)」とを峻別し²⁸、前者にのみ教育効果があると述べる。前者と後者を決した最大のポイントは「危険」の有無であった。彼に言わせれば、「まさに危険であることがウィンタースポーツを魅力的なものにし、教育的な価値を付与することにもなる」²⁹のである。このような観点から、事故や怪我を防止するためのあらゆる配慮はハマーによって批判されることになる。

「その意味では、操縦装置やブレーキ装置のある一人乗り用のソリに乗ることなど、教育的には価値のない行為である。こうした滑走マシンの操作に運動能力は必要ないからである。これはもはやウィンタースポーツではない。つまりここではスポーツ上の危険の克服が重要とされていないのである。」³⁰

このように、ハマーは危険を克服するプロセスに教育効果を認め、スキーやスケートなどのブレーキ装置のない危険なウィンタースポーツを「教育者」と見なすのである。

ハマーの見る限り、身体的な側面への影響を除けば、ウィンタースポーツもニーチェも、ともに青年を正しい方向へと導く「教育者」にほかならなかった。視点を変えれば、危険の克服、自己規律の精神など、「自己教育」につながる要素の所在さえ確認できれば、青年の「教育者」は、ニーチェであろうがウィンタースポーツであろうが、どちらでも構わなかったということであろう。煽動者としてのハマー³¹の目には、ニーチェも選択肢のひとつとしか映らなかったのである。

4. ハマーの1914年著作『教育者としてのニーチェ』の意味

本節を締め括るにあたり、最後にハマーのニーチェ論の意味を考えてみることにしたい。

まず、ハマーの1914年著作『教育者としてのニーチェ』が同時代的にどのような評価を受けたのかを、同書に寄せられた2つの書評から確認しておこう。

青年運動に理解を示した異色の学校教師グルリット³²は、ニーチェ読書の弊害を訴える「毒殺者」モデルを批判し、ハマーの1914年著作に対して好意的な書評を寄せた³³。

「新しい精神世界の創造者、偉大な思想家、倫理家、予言者および人類の教育者であるフリードリヒ・ニーチェは、学校や教会に勤める職業教育者の側からは未だに、青年に嚴重警戒を呼びかけるべき危険人物のような扱いを受けている。かりに青年が自墮落になったり、金銭を横領したり、法律に触れるような行為をしたり、あるいは自殺した場合、人々は即座に次のように説明する用意があるのだ—ニーチェ読者だ!と。」³⁴

グルリットの見るところによれば、ハマーの『教育者としてのニーチェ』は明らかに青年向けの「ニーチェ精神のプロパガンダ」³⁵であり、したがってまた学校教師という立場から見る限り、この本は「われわれ国家学校に対する公然たる闘争」³⁶にほかならない。にもかかわらず、グルリットが同書の出版を歓迎したのは、彼もまたハマーと同様、ニーチェを「偉大なる教育者」³⁷と捉えていたからである³⁸。こうしてグルリットは、「ヴァルター・ハマーの小型で安価なニーチェ本は青年の新たな意志の陶冶に目標と抛り所を与える点でかなり貢献するだろう」³⁹と賞賛することになる⁴⁰。ハマーの1914年著作『教育者としてのニーチェ』は「青年教育」に資するという理由で一定の評価を受けていたのである。

一方、『指導者新聞』に掲載されたO.リーデルの書評⁴¹には、「まさにこの本(『教育者としてのニーチェ』)は若者の心にとっては危険な毒である」⁴²という批判的なコメントが見られる。リーデルは、ハマー自身の不安定な立場や隠された意図に対しても批判的な視線を向ける。「この手紙によって私はただそのような若者を頼るほかないのだ。すなわち、すでに旅行を通じて豊かな経験を積み、たくましくなった若者、したがってヴァンダーフォーゲルという学校を出た若者である。」⁴³—これは1914年著作「序文」におけるハマーの言葉であるが、リーデルはハマーのこのような発言を受けて「君たちはこのようなお世辞に気づいているか？」と注意を促し、ハマーの『教育者としてのニーチェ』を読ませるぐらいならむしろニーチェの作品そのものを読ませた方がましであると述べる⁴⁴。こうしてリーデルは「この指導者新聞が宣伝付録の中で青年の頭をただ混乱させるだけの本を推奨しないことがきわめて重要である」⁴⁵として、同書に警戒するよう注意を促す。ハマーの『教育者としてのニーチェ』は「青年教育」に支障を来すという理由で批判されてもいたのである。

このように、ハマーの『教育者としてのニーチェ』に対する同時代的評価は必ずしも一義的なものではない。むしろハマーの提示した「教育者」モデルは、同書に寄せられた2つの書評にも示されているように、ニーチェ読書への高い依存性やハマー自身の煽動者としての側面など、さまざまな問題を抱えていた。しかしながら、「論」としての不安定性

や脆弱性を抱えながらも、ハマーがニーチェ読書の教育的意義を認め、「教育者としてのニーチェ」という新たなニーチェ解釈モデルを示したことは、紛れもない事実である。また、『教育者としてのニーチェ』のなかでニーチェの後期思想を積極的に評価したこと、とりわけ 1890 年代以降ずっと忌避されてきた「超人」思想を「自己教育」の象徴として教育学的に高く評価したことも、ハマーの見逃せない功績であろう。

第1節の冒頭でも触れたように、たしかにハマーは教育家ではなく青年運動家であり、『教育者としてのニーチェ』も、直接的にヴェーバーの「教育学者」モデルの批判的克服を意図しているわけではない。その意味で、ハマーの同書をそのまま単純に教育学におけるニーチェ受容例のひとつに数え入れることはできない⁴⁶。しかしながら、こうした批判的留保分を考慮に入れたとしても、ハマーがニーチェに対する評価を「生活改革者」から「(健康と男性文化へと導く)教育者」へと改めたことは、教育学におけるニーチェ受容史上においてもきわめて重要な一步を意味していると言わなければならない。なぜなら、「教育学者」でも「教師」でもない、ほかならぬ「教育者としてのニーチェ」という表現こそが、その後の教育学におけるニーチェ解釈を大きく規定するトポスとなったからである。「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルを提示したハマーの先駆的意義⁴⁷は揺るぎないものなのである。

第4節 ハーヴェンシュタインの「教育者としてのニーチェ」論

本節では、1920年代に発表されたハーヴェンシュタインのニーチェ論、1921年論文「教育者としてのニーチェ」⁴⁸および1922年著作『教育者としてのニーチェ』⁴⁹に注目し、その特質と意味を検討する。

1. 1921年論文・1922年著作の成立経緯と概要

ハーヴェンシュタインが1906年に『フリードリヒ・ニーチェ、青年を墮落させる者?』という弁明書を出版し、1907年にはヴェーバーの「教育学者としてのニーチェ」論に批判的な書評を寄せた人物であることは、すでに第4章第1節において確認したとおりである。1871年に牧師の息子として誕生した彼は、ボンやベルリンなど各地の大学において文献学や神学、哲学を専攻し、1903年以降はギムナジウム教師の職を得ていた。1906年の弁明書、1907年の書評は、ちょうどハーヴェンシュタインがギムナジウム教師として働きはじめてまもない頃の著作ということになる。ただ、ヴェーバーの「教育学者としてのニーチェ」論に対する批判的書評を発表してからのハーヴェンシュタインの動向については、第1次世界大戦時に歩兵部隊所属の志願兵として従軍したということを除けば、あ

まり詳しいことがわかっていない。1907年の書評以降、ハーヴェンシュタインが再びニーチェについて公的な発言をするのは1921年のことである。

ハーヴェンシュタインは、1921年に論文「教育者としてのニーチェ」、1922年には同名の著作を発表する。1921年の論文はニーチェ資料館のM.エーラーが編集したニーチェ論文集に掲載された小論、一方の1922年著作『教育者としてのニーチェ』は400頁近くある大著であるが、論旨は一貫している。すなわちハーヴェンシュタインの意図は、すでにタイトルにも示されているように、ニーチェが「教育者」としていかに意義深い存在であるかを示すことであった。

「素質と実績の両面においてフリードリヒ・ニーチェがひとりの教育者であったということは、彼を知る者であれば異論の余地はないだろう」³。ハーヴェンシュタインはこのように述べる。すなわち彼によれば、ニーチェには「真の教育者性」⁴が備わっているというのである。ではいったいハーヴェンシュタインは「教育者」をどのようなものとして捉えているのだろうか。彼は「真の教育者」を次のように定義づけている。

「真の教育者を形成しているのは思考とか知識ではなく『その背後に』存している存在であり、またそれは試験委員会の一問一答によって査定されうるものではなく、生の中にあるもの、生き生きとした人間との関係のなかで確かめられ示されるものであるということ、われわれは毎時間の経験から知っている。どれほど深く、真実のもので、また美しくあろうとも、思想や言葉によっては誰ひとりとして教育されることはない。教育するのは、常にただ人間の生き生きとした総体(die lebendigen Ganzheit des Menschen)、つまり人格(Personlichkeit)である。たしかにそれは、ある程度までは思想や言葉の中であらわれる。しかし、この思想や言葉が教育的に作用するとすれば、それは思想や言葉がそれ自体としてではなく、それらが真に教育的な人格の表現手段である場合に限られていよう。これこそが本来的な作用である。それらを意のままにできない人であっても、よい教師(Lehrer)となることは可能であるし、また一例えばルソーのように一偉大な教育学者(Erziehungswissenschaftler)や教育作家(Erziehungsschriftsteller)となるかもしれないが、そうした人は言葉の純粋な意味において教育者(Erzieher)ではないのである。」⁵

19-20世紀転換期以降のドイツにおける「教育者」概念の意味内容については第4章第3節において確認したとおりであるが、ハーヴェンシュタインにおいても当時の一般的な「教育者」理解が共有されていると言えよう。すなわち、真の教育作用を及ぼしうるのは思想や言葉ではなく「生き生きとした人格」であり、したがってまた「教育者」は、合理的な知識伝達を心掛ける「教師」や教育理論について考察する「教育学者」とは明確に区別される存在なのである。彼はニーチェの「生き生きとした人格」に高い教育効果を認めたのである。

こうしてハーヴェンシュタインはハマーと同様、「ニーチェ読書」の意義を強調する。「もし真正なる教育者性が人格に付着しているものだとすれば、ニーチェの教育者性も彼

と一緒に死んで埋葬されてしまったのではないか？」という疑問にも、彼は「違う」と答える⁶。「前代未聞のことだが、この偉大な教育者（※引用者注：ニーチェ）は、『叙述され、描かれた思想』とともに彼自身を、彼の本質を、彼の人格をその本の中に定着させる術を心得ていたため、彼自身も本の中で生き続け、引き続き作用している」⁷。ハーヴェンシュタインによれば、ニーチェは『ツアラトウストラ』を執筆しているときでさえ「小説家（Erzähler）」ではなく「教育者（Erzieher）」なのである⁸。

ハーヴェンシュタインは、例えば『ツアラトウストラ』第1部の最終章「贈り与える徳」、すなわちツアラトウストラが弟子たちを突き放す例の場面のうちに、「自己教育」を促す「教育者」としてのツアラトウストラ＝ニーチェの姿を見る。彼によれば、教育者ニーチェの真の意図は「自分の生徒を暴力的に押さえ込むことではなく、生徒それぞれに本当の自分探しをさせること（sein eigenes wahres Selbst finden zu lassen）」⁹である。またハーヴェンシュタインは「超人」思想に「ニーチェの最内奥の本質」があらわれているとして、「超人」を「自己自身に不満足感をおぼえ、自己自身を超えていくよう努力すること（Über-sich-Hinausstreben）の考えられうる最高の表現」と高く評価する¹⁰。このように、ハーヴェンシュタインの説明論理も、各読者が「ニーチェ読書」を通じて「自己教育」効果を得るというものであった。ニーチェ読書への高い依存性という構造的課題点¹¹も含め、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの基本メカニズムは、ハマーとハーヴェンシュタインの両者に共有されているのである。

2. ヴェーバーの「教育学者」モデルの批判的克服

とはいえ、「教育者」モデルの意図までもが両者に共有されているわけではない。青年運動家のハマーにとって「教育者としてのニーチェ」論はあくまでも「青年教育」のひとつの具体的な手段を意味していた。しかし、ハーヴェンシュタインにとって「教育者としてのニーチェ」論は、「青年教育」の手段以上の意味を持つものであった。やや先取りのに言うならば、1921/22年の「教育者」モデルにおいてはヴェーバーの「教育学者」モデルの克服が明確に意識されているのである。1922年著作の目次を見てみよう。

序文

導入

第1章 時代精神とその対立像

1. 時代の精神

2. ニーチェの英雄主義的人間性

第2章 生き生きとした教養

1. ニーチェ個人におけるアレクサンドリア主義の克服

2. ニーチェとシュペングラーという鏡の中の現代文化

3. 歴史病とその治療

第3章 高貴さ

1. 貴族的な根本的方向性

2. ニーチェと国家

3. ドイツ哲学のディオニュソス

4. 気高い理想

5. 超人

6. 貴族主義的思想と群衆

第4章 生の肯定

1. 思案家と思想家

2. 重力の魔—ニーチェの悪魔

3. 然りとアーメン

この構成からもうかがえるとおり、ハーヴェンシュタインは初期から中期を経て後期へと至るニーチェ思想のすべてを考察対象にしている。考察対象をはじめから初期思想にだけ限定したヴェーバーとは基本スタンスがまったく異なるのである。1921年論文の中でハーヴェンシュタインはすでに次のように述べている。

「ニーチェは生まれつきの登山家、精神の高みを放浪する者であった。高く、より高く、認識の山脈を登れば、それだけいっそう視野は広がる。しかしまた同様に、彼の教育的、人間形成的な作用の理想域も拡大した。最初は一反時代的考察の中で—懺悔をすすめる説教師や文化教師としてドイツ人を相手にしていたのだが、次に—彼の創造の中期におけるアフォリズム本の中で—彼の目的志向的思考はよきヨーロッパ人に向けられ、最終的にはツァラトゥストラ以降、彼は独自の思考と意欲の中で、人類の教師および教育者へと高く成長したのである。」¹²

ヴェーバーとは対照的に、ハーヴェンシュタインが『ツァラトゥストラ』以降の後期思想をもっとも高く評価していることは明白であろう。「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立にとって、後期思想はきわめて重要な役割を担うのである。

ヴェーバーと異なるのは考察対象だけではない。ニーチェをひとりの「教育者」、一個の「人格」として捉えるというハーヴェンシュタインの姿勢は、ニーチェ思想に対する接し方をも規定する。端的に言うなら、それは第4章第2節で考察したコンラートにおけるニーチェ思想の「人格化」と同様の論理である。

「人格化」の第一の特徴は、ニーチェが学問研究の対象とされることへの違和感を示すということであった。第4章第1節で明らかにしたように、すでにハーヴェンシュタインは1907年の書評の中でニーチェ思想の学問化に対して難色を示していた。彼の見るところによれば、ドイツのアカデミズムはニーチェの思想を「研究のメスで切り刻んだり(mit

den Messern der Forschung zu zerstückeln)、彼の全身を歴史的に葬り去ろうとしている (seine Gebeine historisch einzusargen)」¹³。ニーチェは決して「学問研究の対象」であってはならないと断言するのである¹⁴。

ではニーチェ思想とどう向き合えばよいのか。この点が「人格化」の第二の特徴につながる。すなわち思想の矛盾や誤謬をニーチェの「人格」や「生」のうちに統合しようという意識である。例えばハーヴェンシュタインは 1907 年書評の中で「私はニーチェ思想に見られる多くの矛盾をヴェーバーほど顧慮することはできない」¹⁵と述べている。それは「生という具体的な現実の中では、論理的に対置されるものがじつにしばしば、しかももっとも美しいかたちで一体化されている」¹⁶からである。すなわち彼によれば、ニーチェ思想に見られる多くの矛盾も、ニーチェという「生き生きとした人格」の中で「ちょうどある楽曲の中の不協和音のように消滅する」というのである¹⁷。それどころか、ニーチェ読者は「歪みとか矛盾の中に、あるいは背後に、自己超克の力を感じ取る」¹⁸とされる¹⁹。ハーヴェンシュタインは、ヴェーバーが捨象したニーチェ思想上のあらゆる欠点をまさに「人格化」の論理²⁰によって積極的に評価したのである。

もっとも、ヴェーバーの「教育学者としてのニーチェ」論に対する批判意識、あるいはニーチェ思想の「人格化」の萌芽は、ハーヴェンシュタイン以前の論者にも見受けられる。例えばヨンコフはニーチェの思想形成過程に「人格的な統一」を見出し²¹、ゴットリーブはニーチェの生を「厳格な自己規律と自己超克の生」と特徴づけて積極的に評価した²²。またイチュナーは病気に耐えた「勝者および克服者」としてのニーチェの「人格」に敬礼する²³。彼らはいずれもヴェーバーの「教育学者」論に言及した論者であり、その意味で上述の見解に克服の兆しを読み取ることも可能である。また『教育者としてのニーチェ』という名の著作がすでに青年運動家ハマーによって 1914 年に世に問われていたことも事実である。しかし、「教育者」モデルを提示することによってヴェーバーの「教育学者」モデルの批判的克服を企図したのは、ハーヴェンシュタインが最初であった。次の文章は、ハーヴェンシュタインの主張がもっとも端的に示された箇所である。

「ニーチェは教育学者 (Pädagoge) ではなく教育者 (Erzieher) であった。彼は徹頭徹尾この美しい称号を受けるに相応しい存在である。彼が当然受けるべきこの名誉を長きにわたり誰も与えてこなかったこと、またこのような本がまだ誰の手によっても書かれていないことは、不思議である。(…略…)『教育者としてのニーチェ』は誰も書かなかった。ただ『教育学者としてのニーチェ』というエルンスト・ヴェーバーによって勤勉かつ思慮深い仕事だけが私の目にとまった。だが、ニーチェは教育学者ではない。通常の意味においても発展的な意味においてもそうではない。ニーチェは教育者、しかも偉大な様式の教育者なのである。」²⁴

ハーヴェンシュタインによってヴェーバーの「教育学者」モデルが全否定されていることは明白であろう。このように、1922 年の大著『教育者としてのニーチェ』はヴェーバーの「教育学者」モデルに対するアンチテーゼであり、1907 年に批判的書評を寄せて以

来、新たなニーチェ解釈の可能性を求めて模索し続けてきたハーヴェンシュタインなりの「解決策」²⁵にほかならなかった。

その後のニーチェ論者が選んだ解釈モデルは、「教育学者」ではなく「教育者」であった²⁶。「教育者としてのニーチェ」という表現は、1920年代以降、いわば教育学がニーチェ思想を語る際の「常套句」となっていくのである²⁷。

3. 「教育学者」と「教育者」—2つのニーチェ解釈モデルの特質と意味

時系列的に見れば、「教育学者としてのニーチェ」論は「教育者としてのニーチェ」論によって批判的に克服されたことになるわけだが²⁸、これまでの考察を整理する意味でも、改めてヴェーバーとハーヴェンシュタインによって示された2つのニーチェ解釈モデルに目を向け、それぞれの特質や意味を検討しておきたい。

とくに強調してきたわけではないが、ヴェーバーとハーヴェンシュタインの教育観がほぼ同じであることは、これまでの考察より明らかであろう。彼らの理想とする教育論は、生き生きとした人格を持つ「教育者」によって個別的な教育が行われること、要するに「人格的教育学」にほかならない。しかしながら、彼らにおけるニーチェ思想の役割はまったく異なる。すなわち、一方でヴェーバーはニーチェの初期思想【学説】を「人格的教育学」と評価し、他方でハーヴェンシュタインはニーチェ自身【人格】を「教育者」と評価した。ヴェーバーが「学問研究」によってニーチェ思想の教育学的意義を解明したのに対し、ハーヴェンシュタインは「ニーチェ読書」の教育的意義を強調している。等しく「教育」の文脈でニーチェを高く評価しながらも、ヴェーバーの「教育学者」論とハーヴェンシュタインの「教育者」論は、内容的にも構造的にもまったく異なる2つのニーチェ解釈モデルなのである²⁹。

では、ヴェーバーとハーヴェンシュタインという2人の教育学者にとって、ニーチェの思想は果たしていかなる意味を持ち得たのだろうか。すでに明らかのように、ヴェーバーは『その世界観と人生観の関連から見た若きニーチェの教育学的思想』によって学位を取得し、その実績から『教育学事典』において「ニーチェ」の項目の執筆を任されることになった。ヴェーバーはいわばニーチェ研究によって教育学者としての地盤を固めたのである。にもかかわらず、ヴェーバー教育学におけるニーチェ思想の位置は必ずしも高いものではない。第3章第1節で取り上げた教育学に関する諸論文をはじめ、1907年の『教育学の基礎科学としての美学』や1914年の『芸術教育と教育芸術』などの著作においてもニーチェはほとんど登場しない³⁰。レンナーによれば、ヴェーバーの教育理論に強い影響を与えたのはニーチェよりもむしろフィヒテやシラーであったという³¹。教育学者としての発言機会はむしろ増えていくにもかかわらず、1920年代以降の教育学関係の著作³²においてもその傾向は変わらない。「ヴェーバーが学位論文のテーマを選択する際に何が決

め手になったのかは依然として不明である」³³。レンナーがこう述べるように、ヴェーバー教育学全体におけるニーチェの露出度は低いのである。その原因はどこに求めることができるのだろうか。

1907年のニーチェ論においては、これまで教育学において正当に評価されてこなかった、あるいはまったく無視されるか忌避されていたニーチェ思想の教育学的な意義を明らかにするという明確な意図があった。ニーチェを「教育学者」として高く評価できた点において、ヴェーバーの目的は十分に果たされたと言えるだろう。ところが、初期思想への限定化、他の教育家との比較、歴史的な位置づけの試みなど、ニーチェを「教育学者」と評価するために彼が用いた「戦略」は、まさにハーヴェンシュタインが指摘したように、「ニーチェらしさ(オリジナリティ)」の否認ないし捨象と表裏一体の関係にあった。誤解を恐れずに言うならば、「教育学者としてのニーチェ」論において示されるヴェーバーの教育学的主張は、ニーチェでなくても導き出せる結論なのである。ニーチェ思想を「人格的教育学」と特徴づけ、ニーチェを「教育学者」として高く評価することによって、逆にヴェーバーはニーチェ思想を「教育学」の枠内で論じる必然性や意味を見失ったのである。

一方、ハーヴェンシュタインは、1921年と1922年に「教育者としてのニーチェ」論を発表した後、1926年に「指導者としてのフリードリヒ・ニーチェ」という論文³⁴を執筆している。この論文においてニーチェは「指導者性を兼ね備えた教育者」³⁵と捉え直されており³⁶、ハーヴェンシュタインによるニーチェ解釈のその後の展開が期待された。ところが彼も1926年以降はニーチェ論を発表せず、その他の著作論文におけるニーチェへの言及そのものもほとんど見られなくなっていく。ハーヴェンシュタインは1920年代前半に国語授業に関する多くの著作編集に携わり³⁷、1927年には『トマス・マン—詩人および著述家—』³⁸を公刊、1930年頃からは雑誌『教育』に数々の論文³⁹を寄稿しているが、これらの著作論文においてニーチェは、ラガルデやラングベーン、シュペングラーらとともに名前が挙げられることはあるものの、もはや重要な存在ではなくなっている。

たしかにハーヴェンシュタインは、ヴェーバーとは異なり、1906年、1907年、1921年、1922年、1926年と、散発的ながら比較的長期にわたってニーチェ論を発表している。ハーヴェンシュタイン個人としては継続的にニーチェに関心を寄せていたし、その関心が好意的なものであったことも事実である。しかしながら、その関心も「研究」の域に達することはなかった。実際ハーヴェンシュタインは1922年の著作が「研究」ではなく「読書」の成果であることを強調している。

「本書は何らかの『研究(Forschungen)』から生じたのではない。私はニーチェの著作に携わって25年になるが、これまで彼の著作を決して『研究する(studieren)』のではなく、ただ読むだけ、繰り返し読みあさっただけである(nur gelesen und immer wieder gelesen)。」⁴⁰

ハーヴェンシュタイン個人においてニーチェが「教育者」であるという確信が揺らぐことはない。それは、ほかならぬ自分自身の経験が裏打ちしているからである。しかし同時に

彼は、自己の体験を教育学理論にまで発展させること、ニーチェ思想の教育的意義を体系化することに「限界」を感じたのではないか^{*1}。結局ハーヴェンシュタインにとってもニーチェ思想は「教育学研究」の対象とはなり得なかったのである。

以上に見たように、「教育学者としてのニーチェ」と「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルを提示しながらも、ニーチェ思想と教育学との関係性についてさらに議論を進展させることができなかつたという点において、ヴェーバーとハーヴェンシュタインという2人の教育学者は共通していると言えるだろう。そして、非「教育学」的なニーチェ思想と「教育学」との関係性の問題が根本的な解決を見ないまま、ニーチェ思想はやがてナチズムという「政治」と関係を結ぶのである^{*2}。

注

◆第1節

* 1) Hammer, W.: Nietzsche als Erzieher. Leipzig 1914.

* 2) Vgl. Herfurth, S.87.

* 3) 田村栄子『若き教養市民層とナチズム—ドイツ青年・学生運動の思想の社会史—』名古屋大学出版会、(1996)2002年²、88頁。

* 4) 上山安敏『世紀末ドイツの若者』三省堂、1986年、91頁。

* 5) 田村、前掲書、93頁。

* 6) ハマーは1924年に共和党を旗揚げし、国会選挙の候補者となる。1933年に予防検束され、オランダやデンマークへ亡命、ドイツ軍がデンマークを占領した後はベルリンに移送され、内乱罪で禁固刑に処せられた。戦後は再びジャーナリストとしての活動をはじめたという(同上書、172頁)。

* 7) Hammer, W.: Nietzsche im Hochgebirge. In: Davoser Blätter 37 Nr.34. (19. Sept.) 1908, S.3-5.

* 8) Hammer, W. (1910-a): Nietzsche und sein Wille zur Gesundheit. In: Gesundes Leben. Familienblätter für Gesundheitspflege und allseitige Lebensreform 1910, S.121-125.

* 9) Hammer, W.: Nietzsche und der Vegetarismus. In: Vegetarische Warte 46 Heft7. den 29. März 1913, S.63-65.

* 10) Hammer, W. (1910-b): Friedrich Nietzsche. Der Lebensreformer und seine Zukunftskultur. Leipzig 1910.

* 11) Hammer 1910-b, S. V.

* 12) Ibid., S.42.

* 13) 儉約家だったことも評価の対象となっている。「ニーチェは生活改革者であった。彼は可能な限り無欲であろうと努力した。ジェノバにおいて彼は月々 60 マルク以上のお金を使うことはなかった。」(Ibid., S.50)

* 14) Ibid., S.VI.

* 15) Ibid., S.38.

* 16) 「この偉大な思想家の生においては高い山地が重要な役割を担っていた。また彼の健康状態だけではなくその精神的な創作活動においても高い山地が有益な結果をもたらした—おそらくこう言って差し支えないだろう。」(Hammer1908, S.5)

* 17) Vgl. Hammer1913, S.65.

* 18) ハマーは「ニーチェが菜食主義者であったかどうか?という問いに対して、イエスカノーではつきり回答することはできない」と述べる(Hammer1913, S.64)。

* 19) ハマーは次のようにも述べている。「『私は、私の健康への意志、生への意志から、私の哲学をしてきた』—これがニーチェの根本意志であった。健康を求めて努力を重ねる中で、彼は自らの生の意味を理解した。彼の健康への意志(Wille zur Gesundheit)は、彼の哲学の基盤であると同時に目標でもある。」(Hammer1910-a, S.121)「彼の本質存在の根底においては、ニーチェは類を見ないほど健康な人間であった。というのも、まさに超人的な力(übermenschlicher Macht)とともに彼の健康な生を求める本能は常に出現していたからであり、また彼のきわめて健康な本性、生の意志は、彼を破壊しようと脅迫的に襲いかかる病魔を相手に、粘り強く対抗していたからである。」(Ibid.)

* 20) Hammer1910-a, S.123.

* 21) Hammer1910-b, S.VI.

* 22) Hammer1913,S.63-64. 1914年に公刊された『教育者としてのニーチェ』の出版は、もともと1910年著作『フリードリヒ・ニーチェ—生活改革者と未来文化—』の広告欄において、しかも年内に出版予定であると予告されていた。

* 23) Hammer1914, S.9.

* 24) Ibid., S.22-23.

* 25) 第3信の冒頭でハマーは次のように述べる。「教育者(Erzieher)の話になると、君はとっさに自分の学校教師(Schulmeister)のことを思い出すのではないか。でも安心したまえ。私が君に綴ろうとするのは、健康、調和的な力、男性文化へと導くひとりの教育者としてのニーチェについてであって、若者を教養人にしようと調教して身体的・精神的に若者を痛めつけるような従来の意味での教育者についてではない。」(Ibid., S.18)

* 26) Ibid., S.11.

* 27) 1914年以前の論においてもこの点は高く評価されている。「健康への意志があったからこそ彼は苦悩に満ちた生を耐え抜くことができたし、彼の作品がすべて完成した後に精神崩壊が彼を襲ったというのも、その意志のおかげである。」(Hammer1910-a, S.124)「たしかにニーチェは精神病の犠牲になった。しかしだからといって、彼は生涯を通じて精神異常を来していたのだという結論が導き出されるわけではない。むしろ彼の病歴は、彼の本質存在が基本的には健康そのものであったことを、また彼の作品が健康な人の営為であることを教えてくれている。」(Hammer1913, S.63)

* 28) Hammer1914, S.108.

* 29) Ibid., S.113.

* 30) Hammer1913, S.65.

* 31) Ibid., S.63.

* 32) Hammer1914, S.7.

* 33) Ibid.

* 34) Ibid., S.8.

* 35) Ibid., S.61.

* 36) Ibid., S.25.

* 37) 『教育者としてのニーチェ』は次のような文章で結ばれている。「現代はすでに完全にニーチェという傾向が浸透している。教育者ニーチェ (Nietzsche der Erzieher) はすでにその価値を認められており、またすでに彼はわれわれにとって余計な存在 (überflüssig) となった。ただ必要なことがひとつまだ残っている。それは彼を意識的に超克することだ。というのもツァラトゥストラはこう言ったからだ。『私から離れて、このツァラトゥストラの面影を振り払うがよい！もっとよいのは、ツァラトゥストラを恥辱と思うことだ！ひょっとすると彼は君たちを欺いたのかもしれないのだぞ。—いつまでもただの弟子でいるのは、師に報いる道ではない。なぜ君たちは、私の花冠をむしりとりとうはしないのか？君たちの道を行け！』」 (Ibid., S.166) ※下線部はハマーが書き加えたもの。

* 38) Ibid., S.135.

* 39) Ibid., S.136.

* 40) ハマー以前に同様の「超人」解釈を示した人物としてシュミットの名を挙げておこう。シュミットによれば「超人」とは、ダーウィンの進化論を連想させるような「動物学上な変化 (zoologische Wandlung)」を意味する言葉などではなく、あくまでも「新たな自己認識のひとつの形式」であり、「自己自身を超えてまったく根本的に変化を遂げるという人間観」にはかならないという。Vgl. Schmitt, E.H.: Friedrich Nietzsche an der Grenzscheide zweier Weltalter. Versuch einer Beleuchtung vom Standpunkte einer neuen Weltanschauung. Leipzig 1898, S.7.

* 41) Hammer1914, S.154.

* 42) Ibid., S.140.

* 43) Ibid., S.142.

* 44) Ibid.

* 45) Ibid., S.140.

* 46) ハマーはニーチェの生き方を次のように把握している。「彼(※引用者注：ニーチェ)は結局、伝統的な考え方や感情に代わるものをこれ以上与えることはなかった。これらの影響力から自分を解放すること、この多くが彼にとっては闘争を意味していた。しかし彼はこの多くを克服してきた。(…略…) 粘り強い闘争を続けながら一步一步前進し、彼は自己自身を超克した。自分の感情を犠牲にして。」 (Hammer1910-b, S.27) 「超人についてのニーチェの教えは、絶望から、自分自身の苦悩や時代への苦悩から生まれたものである。」 (Hammer1914, S.39)

* 47) Hammer1910-a, S.124-125.

* 48) ホフマンスタールとはほぼ同時期に活躍したグロテスク詩人・ナンセンス詩人であり、代表作に詩集『絞首台の歌』(1905)がある。青年期にはショーペンハウアーやニーチェを愛読し多くの詩作を残したが、肺結核を患った後は次第に神秘主義に傾倒し、シュタイナーの人智学運動に熱狂したとされる。

なおモルゲンシュテルンの略歴については以下の文献を参照した。種村季弘「ナンセンス詩人の肖像 9 : 人間の中の子供のために—クリスチアン・モルゲンシュテルンの場合—」『現代詩手帖』第12巻第1号、思潮社、1969年、75-83頁。諏訪功「不屈の人狼—モルゲンシュテルンの詩について—」『一橋論叢』第75巻、1976年、532-544頁。

* 49) Morgenstern, Ch.: Nietzsche, der Erzieher. In: Neue Deutsche Rundschau 7 1896 Reprint 1970, S.709-712.

* 50) モルゲンシュテルンは精神病の息子を看病していたニーチェの母親宛に次のような手紙を送っている。「この数行を書いている瞬間は、私の生涯の中でも、もっとも厳粛かつ感動的な瞬間のひとつです。私は24歳の若者ですが、最初の詩集をあえて捧げる相手が、かくも偉大な息子をこの世に与えて下さった尊敬すべきお母さま、とりわけ私にとってはひとりの解放者、模範、人生の最高の闘いのための覚醒者を贈って下さったお母さまなのです。勝利と誇りに満ちた、生を光明化するあの精神、孤独な人間がたびたび口にするような事柄の一切を超えていた王者のごとき感情は、お母さまの目の前にある詩のなかにも吹き抜けていると信じています。(…略…)私のこの本は、高貴にして不幸なあなたの息子の精神に、深い感謝と愛をもって捧げるものです。」(Morgenstern, Ch.: Brief an die Mutter Friedrich Nietzsches vom 6. 5. 1895. In: Morgenstern, M. (Hrsg. v.): Ein Leben in Briefen. Wiesbaden 1952, S.97. zit. n. Hillebrand, S.104)

* 51) Morgenstern 1986, S.709.

* 52) Morgenstern, Ch.: Nietzsche. Stufen. Eine Entwicklung in Aphorismen und Tagebuchnotizen. (Hrsg. v. Morgenstern, M. u. Bauer, M.) München (1929) 1941, S.80f., 83f., 85. zit. n. Hillebrand, S.110-111., S.110.

* 53) Ibid.

* 54) Ibid.

* 55) Morgenstern 1986, S.709.

* 56) モルゲンシュテルンがニーチェ読書によっていかに心が揺さぶられたのかを示す一例を挙げておこう。友人フリッシュに宛てた1902年2月24日付の手紙の中でモルゲンシュテルンは、幻の遺稿集『権力への意志』の読後感を熱く語る。「とくにこの冬は暇な時間があったから、僕はもう一度集中的に読書してみようと思ったんだ。ラガルデ、トルストイを読了して、12月に僕は、ニーチェの遺稿ノート『権力への意志』を手にとったよ。そのうち君も十分知ることになると思うけど、僕にとってこの『権力への意志』は、僕の知る限りでもっとも激しい人間精神の啓示を意味している。この本のニーチェ以上に深い洞察力を持った人間がどこかにいるなんて僕には信じられないね。それどころか、それ以外に出版された彼自身の生涯の作品も、彼のこの最後の遺作を前にすれば影が薄くなってしまいかも知れない。だってこの遺稿は、精神的な死を迎える前夜に彼がエネルギーと明晰さを振り絞って書き留めたものだから。この作品を前にしたら僕としてはもう黙って崇敬するほかないのさ。」(Morgenstern, Ch.: Brief an Frisch vom 24. 2. 1902. a.a.O., zit. n. Hillebrand, S.138-139)

* 57) Morgenstern 1896, S.710. 「教育者は教育する(Erzieher erziehen)!しかし最初の者は、自分自身で教育しなければならない(sich selbst erziehen)。そして私はこのような者のために書くのだ。」—この格言はニーチェ自身のものであるが、モルゲンシュテルンはこうしたニーチェの断片的フレーズを挙げながら、そこに「比類なき自己教育の証拠」が明記されていると述べる(Ibid.)。

* 58) 果たして Morgenstern にとってニーチェはいつまで「教育者」であり続けたのか。1912 年の日記のなかで彼は次のように述べている。「ニーチェが長い間にわたって私にとっての最高の存在であったのは、彼の人間としての偉大さにおいてであって、彼の哲学の様式—ああ、あまりにも時代的になってしまった—においてではない」(Morgenstern 1941, S.85; zit.n. Hillebrand 1978, S.111)。こうして(1912 年の) Morgenstern は「ニーチェは不毛(unfruchtbar)である」という否定的な見解を日記に書き記す。しかし Morgenstern はその日記の中でこう続ける。「私が敢えてこう発言するのは、かつて自分がニーチェを体験したからである」と。たしかに 1912 年の時点で Morgenstern にとってニーチェはもはや「教育者」ではあり得なかった。重病を患った Morgenstern に希望を与えてくれたのはシュタイナーであった。だがニーチェとの訣別を裏づけるこの日記は、同時に、Morgenstern にとってかつて一時期ニーチェが「教育者」であったことを如実に物語っているとは言えまいか。

* 59) ハマーもわずかではあるがレーヴェンシュタインの調査結果を参照している(Hammer 1914, S.64)。

* 60) Vgl. Levenstein 1914, S.54.

* 61) Vgl. Ibid., S.73-75.

* 62) zit.n. Levenstein 1914, S.103.

* 63) この日雇い労働者は、ニーチェ読書などの精神的活動に夢中になったことをめぐって父親と意見が対立していたようである。「同じくお茶の製造工場に働いていた父親と私との関係は、当時いくらか悪化し、緊張状態にあった。私が精神的な活動に手を染めていることに父は賛同してくれなかった。芸術や文学に手を出す労働者など、父にしてみれば、ひねくれ者に思われたようだ。それどころか私が劇場に出かけるようになった当初などは、父親から暴力を受ける危険な状態にあった。(…略…)こうして私はハレを離れる決心をした。どこへか? この答えはただひとつ。ベルリンだ!」(zit.n. Levenstein 1914, S.77) 上述のエピソードは、パウルゼンの 1907 年論文「父親たちと息子たち」において論じられた世代間格差の問題を象徴的に示す興味深い実例と言えよう。

* 64) Ibid., S.88.

◆ 第 2 節

* 1) Mayer, A.: Nietzsche als Denker, Dichter und — Verderber. Stuttgart 1907.

* 2) Lauscher, A.: Friedrich Nietzsche. Kritische Studien. Essen 1909.

* 3) Lauscher, A.: Friedrich Nietzsche. In: Monatsblätter für den katholischen Religionsunterricht an höheren Lehranstalten 11 1910, S.103-109, S.138-144, S.161-166.

* 4) Fritsch, Th.: Nietzsche und die Jugend. In: Hammer Nr.209. 1911, S.113-116.

* 5) Kiefl, F.X.: Friedrich Nietzsche und die christliche Pädagogik. In: Der Aar 2 1912, S.817-826.

* 6) Ernst, O.: Nietzsche der falsche Prophet. Leipzig 1914. なおエルンストは、この著作を上梓するにあたり、オイケン、テンニース、ヴァイガント、ツィーグラウの 4 名に対して謝辞をおくっている(Ernst 1914, S.IV)。

* 7) Adolf Mayer.

* 8) ラウシャー(Albert Lauscher, 1872-1944)は、1902年に神学の博士号を取得後、1904年からはエッセンで宗教教師を務め、1908年以降はケルンのフリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナジウムにうつった。1917

年にボン大学から道德神学の正教授に任命されている。

* 9) キーフル(Franz Xaver Kiefl, 1869-1928)は、1908年にヴュルツブルク大学の学長に選出された後、1911年にはカトリック系司教座教会参事会会員、1914年には司教座教会参事会首席にも任命されている。

* 10) フリッチュ(Theodor Fritsch, 1852-1933)は、1902年に雑誌『鉄槌(Der Hammer)』を創刊した。主著の『反ユダヤ主義教理問答』(1887年)は、1907年に『ユダヤ人問題ハンドブック』と改称された後も反ユダヤ主義者のあいだで人気を博し、第2次世界大戦の終戦までに49版を重ねたという。なお民族主義的ナショナリストとしてのフリッチュについては以下のものに詳しい。竹中亨『帰依する世紀末—ドイツ近代の原理主義者群像—』ミネルヴァ書房、2004年、119-161頁(第3章)。山名淳『夢幻のドイツ田園都市—教育共同体ヘレラウの挑戦—』ミネルヴァ書房、2006年、261-266頁(第6章2)。

* 11) フリッチュは次のように述べる。「ニーチェがあらゆるドイツ的なものに対してどれほど奥深く狂信的な憎しみの念を抱いていたかということはあまり知られていない。私はニーチェからの手紙を所有しているが、その中で彼は私の愛国的な努力のことで、私を嘲弄し、さんざん悪口雑言を重ねたのであった。」(Fritsch1911,S.115)実際、ニーチェの遺稿にはフリッチュに対する辛辣なコメントが確認できる。

「この時期に(※引用者注：1886年夏-1887年秋)私は、ライプツィヒのテオドール・フリッチュと名乗る超変人と手紙の遣り取りをした。というのも、フリッチュがあまりに厚かましかったので、私は何度か親切に足蹴にせざるを得なかったのだ。この今どきの『ドイツ人』のせいで私は幾度となく吐き気をもよおす。」(KSA12,S.200)「最近、ライプツィヒのテオドール・フリッチュ氏が私に手紙を書いてよこした。ドイツでこいつら反ユダヤ主義者以上に恥知らずで愚かな一味は絶対いない。私はお礼として正式に足蹴を返してやった。こんな賤民がツァラトゥストラの名を口にするなんて！吐き気！吐き気！吐き気！」(KSA12,S.321)なおニーチェとフリッチュの関係について論じたものとして次の論文を挙げておく。

Niemeyer,Ch.: Nietzsche, völkische Bewegung, Jugendbewegung: Über vergessene Zusammenhänge am Exempel der Briefe Nietzsches an Theodor Fritsch vom März 1887. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 79 2003, S.292-330.

* 12) ニーチェ読書の普及という時代状況についてラウシャーは次のように述べる。「ニーチェはよく読まれている(Nietzsche wird viel gelesen)。もしこのことを自分で確認したければ、試しに公立図書館からニーチェの著作を借りようとしてみればよい。少なくとも、この哲学者の最後の創作時期に属する著作が必要なときには決まって、現在この書籍は他の利用者に貸し出し中だと告げられるはずである。」(Lauscher1909, S.9)

* 13) Ernst1914, S.119-120.

* 14) 教師としてのエルンストの基本姿勢は次のようなものであった。「全員をできる限り支援するか、それとも才能ある者を優遇するか？—これは、ひとつの学級を任された教師が必ず直面する課題である。私は教師になってもう18年になるが、弱者を落ちこぼすような勇氣はさらさらなかった。それどころか私は一強者は自力でも前進すると考えて—弱者よりもむしろ強者を放置してきた。」(Ibid., S.86)

* 15) Vgl. Bab, S.872.

* 16) Mayer, S.6.

* 17) Fritsch, S.113.

ニーチェ派ではあり得ない。ドイツ人の気質、現代のドイツ精神に承諾された世界観や人生観を知りたい者は、ニーチェではなく、ラガルデに求めるだろう。(…略…)ニーチェが最終的に重大な病氣請負人に過ぎなかったのに対して、ラガルデはひとりの健康請負人である。ニーチェ病(Die Nietzsche-Krankheit)はここ 10 年来、まるで悪夢のように、教養ある青年の魂を襲い、多くの華麗な花々を枯らしてきた。われわれはニーチェ病から自らを解放する時がついにやってきた。ニーチェは克服されるべき何ものかなのだ(Nietzsche ist etwas, das überwunden werden muß)。」Roderich-Stoltheim,F.:Nietzsche's Macht-Philosophie und der Deutschenhaß. In:Hammer. Blätter für deutschen Sinn 14 (1. Januar 1915, Nr.301) S.1-7, S.3.

* 38) Ernst1914, S.134.

◆第3節

* 1) 「ニーチェが生を肯定するような作用をもたらすと主張するのはお人好しである。事実はその逆を証明しているからだ。」(Fritsch,S.114)ーフリッチュがこう述べる一方で、ハマーは、「彼(※引用者注：ニーチェ)は誇り高き者の自死を賞賛したが、生きることに疲れた者の自殺は軽蔑した」として、ニーチェ読書による「自殺」の可能性を否定する(Hammer1914, S.111)。

* 2) Ernst1914, S.105.

* 3) ドイツ語では „sich ausleben“ と表記される。直訳すれば「自己発展する」という意味にも解釈できる言葉だが、1890年代においては青年の享楽主義、道徳的頹廃行動、性的逸脱行動を意味する「流行語」であった(Vgl. Havenstein1906, S.19)。

* 4) Hammer1914,S.142. ニーチェ派に対する批判の根拠とされたのは、ニーチェがキリスト教以上に厳格な性道徳の持ち主であったこと(Ibid.)、「余りに大多数の人間が生まれること」を嘆くツァラトゥストラの台詞(Ibid., S.146)、そしてニーチェ自身が生涯独身だったという事実(Ibid., S.147)である。

* 5) Ibid., S.147.

* 6) Ibid., S.146-147.

* 7) Ibid., S.147-148.

* 8) Ibid., S.148.

* 9) Ibid.

* 10) 山内紀幸「モンテッソーリにおける『子ども』— 19-20 世紀転換期の優生学的な知の中で—」『教育哲学研究』第77号、1998年、78-91頁所収、79-80頁を参照。

* 11) ハマー自身「優生学的な知のネットワーク」が形成されつつある傾向を歓迎している。「生物学的な根拠に基づく人間のより高次の育成は、最近 10 年間でさまざまに試みられつつある。1909年ザルツブルクで開催された会議には 81 名に及ぶドイツ人の自然科学者と医者が参加し、この問題について綿密な話し合いが持たれた。」(Hammer1914, S.150)

* 12) KSA4, S.85.

* 13) Hammer1914, S.150.

* 14) Key,E.: The Century of the Child. 1900. 原田実訳『児童の世紀』玉川大学出版部、1960年、38-39頁。

* 15) 山内、前掲書、79頁を参照。

ニーチェ派ではあり得ない。ドイツ人の気質、現代のドイツ精神に承諾された世界観や人生観を知りたい者は、ニーチェではなく、ラガルデに求めるだろう。(…略…)ニーチェが最終的に重大な病氣請負人に過ぎなかったのに対して、ラガルデはひとりの健康請負人である。ニーチェ病(Die Nietzsche-Krankheit)はここ 10 年来、まるで悪夢のように、教養ある青年の魂を襲い、多くの華麗な花々を枯らしてきた。われわれはニーチェ病から自らを解放する時がついにやってきた。ニーチェは克服されるべき何ものかなのだ(Nietzsche ist etwas, das überwunden werden muß)。」Roderich-Stoltheim,F.:Nietzsche's Macht-Philosophie und der Deutschenhaß. In:Hammer. Blätter für deutschen Sinn 14 (1. Januar 1915, Nr.301) S.1-7, S.3.

* 38) Ernst1914, S.134.

◆第3節

* 1) 「ニーチェが生を肯定するような作用をもたらすと主張するのはお人好しである。事実はその逆を証明しているからだ。」(Fritsch,S.114)一フリッチュがこう述べる一方で、ハマーは、「彼(※引用者注：ニーチェ)は誇り高き者の自死を賞賛したが、生きることに疲れた者の自殺は軽蔑した」として、ニーチェ読書による「自殺」の可能性を否定する(Hammer1914, S.111)。

* 2) Ernst1914, S.105.

* 3) ドイツ語では „sich ausleben“ と表記される。直訳すれば「自己発展する」という意味にも解釈できる言葉だが、1890年代においては青年の享楽主義、道徳的頹廢行動、性的逸脱行動を意味する「流行語」であった(Vgl. Havenstein1906, S.19)。

* 4) Hammer1914,S.142. ニーチェ派に対する批判の根拠とされたのは、ニーチェがキリスト教以上に厳格な性道徳の持ち主であったこと(Ibid.)、「余りに大多数の人間が生まれること」を嘆くツアラトウストラの台詞(Ibid., S.146)、そしてニーチェ自身が生涯独身だったという事実(Ibid., S.147)である。

* 5) Ibid., S.147.

* 6) Ibid., S.146-147.

* 7) Ibid., S.147-148.

* 8) Ibid., S.148.

* 9) Ibid.

* 10) 山内紀幸「モンテッソーリにおける『子ども』— 19-20世紀転換期の優生学的な知の中で—」『教育哲学研究』第77号、1998年、78-91頁所収、79-80頁を参照。

* 11) ハマー自身「優生学的な知のネットワーク」が形成されつつある傾向を歓迎している。「生物学的な根拠に基づく人間のより高次の育成は、最近10年間でさまざまに試みられつつある。1909年ザルツブルクで開催された会議には81名に及ぶドイツ人の自然科学者と医者が参加し、この問題について綿密な話し合いが持たれた。」(Hammer1914, S.150)

* 12) KSA4, S.85.

* 13) Hammer1914, S.150.

* 14) Key,E.: The Century of the Child. 1900. 原田実訳『児童の世紀』玉川大学出版部、1960年、38-39頁。

* 15) 山内、前掲書、79頁を参照。

* 16) 優生学といえば、犯罪人類学の創始者ロンブローゾの名前を出さないわけにはいかないだろう。ただ、興味深いことに、同じロンブローゾの理論を援用しても、ニーチェへのアプローチの仕方がまったく異なるというケースも起こりうる。第2章第2節において取り上げたノルダウを想起してみよう。すなわち、一方でノルダウは、ロンブローゾの理論に依拠しながらニーチェ思想に「変質(退化)」の徴候を読み取っていたが、他方でハマーは、ロンブローゾ流の優生学理論にもとづきつつニーチェの「超人」を優生学的な理想と見なしているのである。

* 17) 先遣隊同盟について上山安敏は次のように指摘している。「先遣隊は生活改革、節制の普及を狙っている。が、この運動の裏には『民族衛生学』といわれる目標を抱えていた。これは社会ダーウィニズムに連結しうるものである。ここにドイツのネオ・ロマン主義の両義性を見せつけられる。」(上山、前掲書、90頁)

* 18) 社会ダーウィニズム的な文脈におけるハマーのニーチェ理解は、例えば次のようなものである。「ニーチェは個人主義者であり、当然のことながら、同一評価、同一化を目指す社会主義の敵対者である。彼はわれわれに対して、偉大な個人、力強くて個性的な人格の低い評価が人類にもたらす危険性を示してくれているとも言える。しかしニーチェは社会主義の洗練されたかたちをわれわれに教えている。今日、群衆を底上げし、人類のレベルを高めようとするなら、ニーチェに辿り着くだろう。彼は、重要な人格を育成し、より高次の種属としての人間、つまり超人を産出する試みを薦めている。道筋は違うけれども、目標は同じなのである。」(Hammer1910-b, S.29)「超人という言葉によってニーチェは、個別的に存在する強力な人格だけではなく、まったく新たな種属のことも考えている。彼にとってはダーウィニズムこそが出発点だったのである。」(Ibid., S.46)

* 19) Vgl. Herfurth, S.109. 例えばハマーは次のように述べている。「ニーチェがわれわれに与えてくれたもっとも重要なものは、優生学的に基礎づけられた生の教説(eine rassehygienisch begründete Lebenslehre)であり、アルコール禁止はその教説の前面に本質的な点として受容されている。まさにこの要求こそ、慌ただしく神経質な現代に、幸福をもたらすものとして幅広く作用しなければならない。というのも、まさに今日、アルコール摂取による理性の遮断が致命的な影響を与えかねないからである。」(Hammer1914, S.154)

* 20) Hammer,W. (1910-c): Schlittensport. Leipzig 1910.

* 21) Hammer,W.: Die Gefahren des Wintersports. Leipzig 1912.

* 22) 「大都市」に関して、例えばハマーは次のように述べている。「大都市に住むわれわれが脅かされている数多くの健康上の危険を撃退する一番よい方法はスポーツである。」(Hammer1910-c,S.4)「われわれは、文明化され過度に装飾された大都市の住民という仮面を剥ぎ捨て、不自然な数多くの抑制的先入観から自分自身を解放すべきである。」(Ibid., S.19)

* 23) Hammer1912, S.10.

* 24) Ibid., S.3.

* 25) フィギュアスケートは次のように評価されている。「フィギュアスケート競技は、まさに美的教育(ästhetischer Erziehung)にとって、また美感の訓練や研鑽にとって、願ってもない絶好のチャンスを提供してくれる。」(Ibid., S.6-7)

* 26) Ibid., S.4.

* 27) Ibid.

* 28) Ibid., S.9.

* 29) Ibid.

* 30) Ibid. またハマーは次のようにも述べている。「ウィンタースポーツの真の愛好家は、別に危険だからといって後ずさりするようなことはない。むしろ彼らは自分がどれだけ過酷さに立ち向かえるかを楽しんでいるのだ。」(Ibid.)

* 31) 例えばハマーは、1917年に『誇り高き鷲のごとく』と題する兵士向けの歌集を出版している。Hammer,W.(Hrsg.): Wie ein stolzer Adler. Elberfeld 1917. ポケットサイズのその歌集には、行軍歌や祖国を偲ぶ歌などが収録されている。ハマーはその「序文」において次のように述べる。「以前からドイツ民族は歌好きであった。ドイツ民族はほぼ3年前から粘り強く敵地で耐え抜きながら世界中の敵国と戦っているわけだが、戦地に赴いたドイツ民族の神髄は、歌の歓びである。—このような生死を賭けた恐ろしい戦闘においては、どんなものでも利用しなければならない。ドイツ民族のあらゆるよき精神の記憶を呼び覚まし、その精神を戦地に送り込まなければならない。ドイツ人が歌好きであるということも、最終的な勝利を勝ち取ることが求められる切迫した状況下においては、その力を貸さなければならない。—だからこそ前線に歌集を(Liederbücher an die Front)!」(Hammer1917,S.3)ハマーは合唱が持つ「超人的な力」に期待をかけたのである。「合唱は、驚異的な作用をもたらす。その力は圧倒的で、合唱することによってわれわれは、元気になり、熱くなり、感動する。合唱は、ほとんど超人的とも言えるような力を発散させるのだ。(…略…)もう心配は無用だ。勝機はわれわれの側にこそある。」(Ibid.) このように、第1次世界大戦においてもハマーは煽動者的な役割を担っている。

* 32) グルリットの教育思想を論じたものとして次のものを挙げておく。大矢美奈子「ワンダーフォーゲル運動の形成と Ludwig Gurlitt の教育思想」日本独文学会北陸支部編『ドイツ語文化圏研究』第3巻、2005年、18-30頁。

* 33) Gurlitt,L.: Friedrich Nietzsche als Erzieher. In: Das freie Wort 13 1914, S.130-136. この中でグルリットは「ヴァルター・ハマーの新刊本『教育者としてのニーチェ』(ライプツィヒ、Dr. Hugo Vollrath 出版、1914年、全166頁)の登場を歓迎しよう」と述べている(Ibid., S.133)。

* 34) Ibid., 131.

* 35) Ibid., 133.

* 36) Ibid., 134.

* 37) Ibid., 135.

* 38) グルリットは、一方でニーチェを「危険な青年の誘惑者」と見なした点においてパウルゼンを批判し、他方、1906年に発表されたハーヴェンシュタインの弁明書『フリードリヒ・ニーチェ、青年を墮落させる者?』を「最初の、素晴らしい例外」として高く評価している(Ibid.,S.131-133)。

* 39) Ibid., 136.

* 40) ハマーもグルリットを高く評価している。「そこ(※引用者注：ヴァンダーフォーゲル)で教育は宗教となり、そこでは天才が創造され、人間は偉大さへと増強される。また、そのような行為のために

われわれが必要とするのは成人男性であり、文献学者ではなく、教育者であって、学校教師ではない。君のために私はひとりだけ名前を挙げようと思う。ご存知、グルリットだ！」(Hammer1914, S.23)

* 41) Riedel,O.: Nietzsche als Erzieher. In: Führerzeitung 2 Nr.3. 1914, S.66-67.

* 42) Ibid., S.66.

* 43) Hammer1914, S.5.

* 44) Vgl. Riedel1914, S.66. リーデルはハマーを次のように酷評する。「この本を一通り読み終えた後、この著者がニーチェを超えて成長したなどという主張は、私には言語道断の思い上がりであるように思われた。」(Ibid.)

* 45) Ibid., S.67.

* 46) 青年運動研究者のヘルフルトによれば、ハマーの1914年著作は「第1期のヴァンダーフォーゲル時代から第2期の自由ドイツ青年へと移行した青年運動の展開を特徴的に示している」(Herfurth,S.88)という。

* 47) もっとも、「教育者としてのニーチェ(Nietzsche als Erzieher)」という表記に注目すれば、ハマー以前にも使用例は確認されうる。例えば、ラウシャーの1908年論文「教育者としてのニーチェ」、メルデの1910年著作『ニーチェのツァラトゥストラと現代の学校に対するその意義』の最終章「教育者としてのニーチェ」などを挙げるができる。しかし、ラウシャーはニーチェを「教育者」と把握しているわけでもなく、むしろその論旨はニーチェの思想がいかにか「教育」とは縁遠いものであるかを論じる批判的内容であり、またメルデはニーチェを肯定的に評価してはいるものの、この表記をメインタイトルとして採用しているわけでも、ニーチェを積極的に「教育者」として評価しているわけでもないため、両者の試みを「教育者としてのニーチェ」論に数え入れることはできない。以上を踏まえれば、やはりハマーが最初の「教育者としてのニーチェ」論者であると考えなければならないだろう。なお、以下は、ラウシャーの1908年論文からの引用である。「(…略…)ニーチェの教育学理論がどの程度までオリジナルなのかという問い以前に、これらの理論が果たして正当かどうかという問いの方が重要であろう。むしろ、ニーチェの教育学理論が正確な観察眼と正当な主張を数多く含んでいることは否定できないし、また否定されるべきでもない。しかしだからといって最終的な総括判断は何も変わらない。しかもこの総括判断は有罪判決でしかありえない。というのも、ニーチェの教育理想と教育目標は、ただ『天才的』ないし『天才家系』の人間だけを考慮に入れているに過ぎず、圧倒的多数派である他の人々を教育に値しない大衆として教育の門戸から閉め出しているからである。」(Lauscher1908,S.151)「ニーチェの教育学体系を苦しめている内的矛盾のこと、彼の未来構想の大部分を占める明らかな誇張表現や幻想的性格のことは、これ以上いちいち指摘する必要もないだろう。貴族主義的なラディカリズムと結びついた極端な個人主義は、彼の哲学思弁にとっても、彼の教育学にとっても、致命的なものとなったのである。」(Ibid.)

◆第4節

* 1) Havenstein,M.: Nietzsche als Erzieher. In : Oehler,M.(Hrsg.): Den Manen Friedrich Nietzsches. 1921, S.91-108.

* 2) Havenstein,M.: Nietzsche als Erzieher. Berlin 1922.

* 3) Havenstein1922, S.7. Vgl. Havenstein1921, S.93.

- * 4) Havenstein1921, S.93.
- * 5) Ibid., S.94.
- * 6) Ibid., S.96.
- * 7) Ibid.
- * 8) Havenstein1922, S.22. ハーヴェンシュタインは次のようにも述べている。「ニーチェはあらゆる著述業を嫌った。彼のツァラトゥストラが『文学』だとするような考えは彼に嘔吐を催させた。彼は、真正なる教育者性 (echtes Erziehertum) が生き生きとした人格の発露であって言葉や思想の産物ではないということを知っており、したがってまた彼はあらゆる真正なる教育者や人間形成者と同様、人間釣り師 (Menschenfischer) だったのだ。」 (Havenstein1921, S.96-97)
- * 9) Havenstein1922, S.38.
- * 10) Havenstein1921,S.106. なおハーヴェンシュタインも「超人」の動物学的解釈には批判的である (Vgl. Havenstein1922, S.335-337)。
- * 11) 例えばハーヴェンシュタインは 1906 年著作において、青年の墮落の「責任」をニーチェに負わせることに断固反対している。道徳的頹廢行動を繰り返す青年は「ニーチェを一行読む前からすでにその身に墮落的な要素を孕んでいる」 (Havenstein1906,S.56)。ニーチェの著作とニーチェ派の道徳的頹廢行動とのあいだには因果関係は成立しないと主張したのである。しかし、「教育者」モデルにもこれとまったく同じ論理が適用されなければならないだろう。ニーチェ読書【原因】が教育効果【結果】をうむか否かは、究極的には各々のニーチェ読者に委ねられてしまうからである。
- * 12) Havenstein1921, S.97-98.
- * 13) Havenstein1922, S.VII.
- * 14) Ibid.
- * 15) Havenstein1907, S.33.
- * 16) Ibid.
- * 17) Havenstein1921, S.99.
- * 18) Ibid.
- * 19) ニーチェ思想の「矛盾」を否定的に捉える人々にとってニーチェは決して「教育者」たりえないという (Ibid., S.98)。
- * 20) それは「全ニーチェ (Der ganze Nietzsche)」 (Havenstein1922,S.7)、「生き生きとした人格 (lebendigen Persönlichkeit)」 (Ibid.,S.23)、「生き生きとした統一体 (einer lebendigen Einheit)」「全人格 (ganzen Persönlichkeit)」 (Ibid.,S.37) といった表現に象徴されている。
- * 21) Jonkoff, S.6.
- * 22) Gottlieb, S.265.
- * 23) Itschner, S.12.
- * 24) Havenstein1922, S.12-13.
- * 25) Havenstein1907, S.33.
- * 26) 書評も含め、ハーヴェンシュタイン以後の「教育者」モデルを年代順に挙げれば以下のとおりで

ある。Budde,G.: Nietzsche als Erzieher. In: Barmer Zeitung 89 Morgenausgabe. Nr.174. 1922. Budde,G.: Nietzsche als Erzieher. In: Hannoversche Schulzeitung 1926, S.51-54. Adelman,J.: Nietzsche als Erzieher. In: Die Scholle 3 1927, S.784-787. Budde,G.: Nietzsche als Erzieher. In: Die Deutsche Schule 34 1930, S.168-170. Honegger,J.: Nietzsche als Erzieher. In: Schweizerische Lehrerzeitung 75 1930, S.489-493. Liebmann,K.: Nietzsche als Erzieher. Ein Aufruf an die deutsche und europäische Jugend. In: Die Lebenskunst 25 1930, S.1-5. Oster,O.: Nietzsche als Erzieher. Zu Friedrich Nietzsches 35. Todestag am 25. August. In: Münchner Neueste Nachrichten 88 25. 8. 1933, S.3-4. Hager,A.: Friedrich Nietzsche, der Erzieher des deutschen heroischen Menschen. In: Allgemeine Deutsche Lehrerzeitung 62 1933, S.577-579.

Kappstein,Th.: Friedrich Nietzsche im Dritten Reich. Der deutsche Erzieher zum heroischen Menschen. In: Westermanns Monatshefte. Bd.154. 1933, S.557-560. Kappstein,Th.: Friedrich Nietzsche. Deutschlands Erzieher zum heroischen Menschen. In: Berliner Tageblatt 62 Sonntagsausgabe. Nr.235. 1933. Leja,G.: Nietzsche als Erzieher zu nationalsozialistischer Weltanschauung. In: Der Bücherfreund 24 Nr.1. 1937. Döring,W.: Nietzsche als philosophischer Erzieher. In: Die Erziehung 12 1937, S.41-45.

* 27) Vgl. Hoyer2002,S.37. ハーヴェンシュタインの『教育者としてのニーチェ』への同調的な言及は近年もなお見られる。例えば以下のものを参照。Löw,R.: Nietzsche, Sophist und Erzieher. 1984, S.148-150. 黒柳修一「F.W.ニーチェの教育思想についての一考察」1994年、114頁。相澤伸幸(1998-b)「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」1998年、2頁。

* 28) むろん1920年代以降にも「教育学者」モデルは登場している。こうしたニーチェの初期思想に対する高い評価は、1930年代以降から本格的に開始される新教育運動の歴史記述において継承され、ニーチェの初期思想→青年運動→新教育運動という予定調和の物語を完成させるとともに、やがて教育史におけるニーチェの地位を決定づけたと考えられる。Simonic,A.: Nietzsche als Pädagoge. In: Die Quelle 78 1928, S.843-850, S.948-954. Staemmler,R.: Nietzsche als Pädagoge. In: Deutsche Schulzeitung in Polen 8 1931/32, S.87-89. Pointner,L.: Nietzsche als Pädagoge. In: Der neue Weg 15 1938, S.630-635.

* 29) この点に関してわれわれに興味深い指標を示してくれているのは、意外にもヴェーバー教育学に関する研究を発表したレンナーである。すなわち彼は、ヴェーバーの学位論文の特徴を明らかにするために、他の教育学者によるニーチェ論と比較したのである。彼によれば、教育学的な意図からなされるニーチェ受容には、決定的に異なる2つのタイプが存在するという。①「きわめて信心深く、ニーチェの哲学によってあらゆる教育問題が解決されることを期待するような論」(Hammer1914, Havenstein1922, Jonkoff1911)と②「むしろ批判的な距離を保ちつつ、教育学的問題に関するニーチェの見解を研究しようとする論」(Kluge1955, Hotter1958, Kokemohr1973, Blass1975, Blass1976, Blass1978)である。そのうえでレンナーはヴェーバーを②のグループに分類しているが(Renner,S.117)、ちょうど①が「教育者」モデル、②が「教育学者」モデルに対応しているとも見てよい。

* 30) ニーチェへの言及はわずかに確認できる程度である(Vgl. Weber1907-a,S.414 ; Weber1910,S.276)。

* 31) Vgl. Renner, S.122.

* 32) Weber,E.: Dichter und Jugendbildung Bd.1. Deutsche Dichterpädagogik 1.Teil. Prag, Leipzig, Wien 1921. Weber,E.: Dichter und Jugendbildung Bd.2. a.a.O. Weber,E.: Der deutsche Lehrer in Fesseln. Deutsche Dichterpädagogik 3.Teil. a.a.O. Weber,E.: Dichter und Pädagogenzunft Bd.1. a.a.O. Weber,E.: Dichter und Pädagogenzunft Bd.2. a.a.O.

- * 33) Renner, S.37.
- * 34) Havenstein, M.: Friedrich Nietzsche als Führer. In: Schule und Wissenschaft 9 1926, S.340-351.
- * 35) Ibid., S.349.
- * 36) 1926年論文においてハーヴェンシュタインは、「すべての教育者が指導者であるわけではない」、「あらゆる指導者は同時に教育者でもある」といった簡単な概念整理の後、ニーチェを「指導者」と把握するが、内容的には、本人も認めているように1922年著作を踏襲したものとなっている。
- * 37) Havenstein, M. (Hrsg.) / Rauh, S.: Grundfragen des deutschen Unterrichts. (Pädagogische Reihe Bd.4.) 1923.
Havenstein, M. (Hrsg.) / Rauh, S.: Deutsche Spracherziehung in der Schule. (Pädagogische Reihe Bd.5.) 1923.
Havenstein, M. (Hrsg.) / Rauh, S.: Der deutsche Schulaufsatz und seine Umgestaltung. (Pädagogische Reihe Bd.17.) 1923.
Havenstein, M. (Hrsg.) / Rauh, S.: Prosa und Poesie im deutschen Unterricht. (Pädagogische Reihe Bd.18.) 1923.
- * 38) Havenstein, M.: Thomas Mann. Der Dichter und Schriftsteller. Berlin 1927.
- * 39) Havenstein, M. (1930-a): Weichlichkeiten in der modernen Erziehung. In: Die Erziehung 5 1930, S.160-175.
Havenstein, M. (1930-b): Das Recht zur Kritik an der modernen Erziehung. Erwiderung an Erich Weniger. In: Die Erziehung 5 1930, S.315-320. Havenstein, M.: Modernitätsstreben im Deutschunterricht. In: Die Erziehung 7 1932, S.639-647. Havenstein, M.: Autorität und Liberalität. In: Die Erziehung 8 1933, S.551-570. Havenstein, M. (1936-a): Die höhere Schule im deutschen Volksstaat. In: Die Erziehung 11 1936, S.171-177. Havenstein, M. (1936-b): Egoismus und Altruismus. Eine Grundlegung der Ethik in Prima. In: Die Erziehung 11 1936, S.209-227.
- * 40) Havenstein 1922, S.VIII.
- * 41) ハーヴェンシュタイン自身も、「教育的な人格」の内部構造や作用のメカニズムを「きわめて謎に満ちている (so geheimnisvoll)」(Havenstein 1921, S.94)と述べている。
- * 42) 両者のもうひとつの共通点はナチズムに対する姿勢である。すなわち、ヴェーバーもハーヴェンシュタインもともにナチズム支持を表明したのである。とりわけヴェーバーの姿勢は積極的だったとされる。「(…略…)堂々たる無邪気さ、あるいはまた『指導者人格 (Führerpersönlichkeit)』といった主要なナチズム的世界観と彼自身との親和性、こうした要素が宿命的に作用し、ヴェーバーは一目惚れのようにナチズム支持 (in die Gefolgschaft des Nationalsozialismus) を表明した。」(Renner 1979, S.76) ナチズム期における両者の政治的発言やニーチェ思想との関係性については今後の課題としなければならない。

結章 教育学とニーチェ思想との関係性再考

結章では、第1章から第5章までの考察結果を総括し、1890-1920年代のドイツ教育学におけるニーチェ受容史の特質を整理するとともに、教育学とニーチェ思想との関係可能性について考察する。

1. 総括—教育学とニーチェ思想との関係性の歴史的検討

(1) 1890年代の青年におけるニーチェブーム

1889年の発狂以前にはほとんど注目されなかったニーチェの著作が突然、世間の注目を集めることになる。1890年代初頭、ニーチェ受容史の開幕である。この時期の青年によるニーチェ受容はちょうど「ニーチェの初期思想→青年運動」の時期と重なることから、教育史上きわめて意義深い現象であると見なされてきた。しかし実際に当時の一次史料を検討してみると、ヴァンダーフォーク青年とは一線を画す「大都市の青年」の存在、彼らによるニーチェ受容の「通俗性」が明らかとなった。その象徴が当時ニーチェに与えられた「流行の哲学者」という称号である。大都市青年によるニーチェ受容は、「健全な青年の自発的な欲求」というよりはむしろ「発狂した哲学者に対する通俗的関心」に起因した一過性の現象＝ブームだったのである。

ただ、通俗的という理由のみでこの現象の資料的価値までもが損なわれるわけではない。たしかにこのニーチェブームは、受容形態としては「キャッチフレーズのつまみ食い」としか呼べないような表面的な行為にすぎず、社会現象としては「憂うべき青年問題」、すなわち過激な後期思想に熱狂した青年集団「ニーチェ派」による道徳的頹廢行動でしかなかった。しかしそれゆえにこそこの現象は、年長世代にニーチェ思想に対する態度決定を迫る直接的な契機ともなった。年長世代に属する学者やジャーナリストは『反ニーチェ』や『反ツァラトゥストラ』といった論駁書を出版し、キリスト教道徳を全否定するニーチェに対して容赦なく攻撃を加えた。青年のあいだで人気を博した「流行の哲学者」も、年長世代から見れば「青年を墮落させる者」や「青年の危険な誘惑者」にすぎなかったのである。

当時の文献を見る限り、この種の反駁書によってニーチェ派の青年が「改宗」したという例は確認できず、年長世代のニーチェ批判が目覚ましい成果をあげたと考えることは難

しい。それどころか年長世代の攻勢によって、むしろニーチェ派と反ニーチェ派の対立構図はより鮮明なものになった。それは「無規律の熱狂」対「無規律の憎悪」という二項対立を強調する同時代人の描写からもうかがえる。結局のところ、ニーチェ派と反ニーチェ派が自陣の主張を繰り返すだけの噛み合わない議論は平行線を辿り、互いの優劣も決しないままニーチェブームをめぐる混乱や騒々しさだけが顕在化することになる。ニーチェ受容史上、1890年代はまさに「喧噪の時代」だったのである。

(2) 1890年代アカデミズムが見たニーチェ思想

この「喧噪」に巻き込まれた一人が、社会学者として知られるテンニースである。1890年代のテンニースといえば、すでに主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を発表し、第一級の学者として活躍しはじめた頃である。その彼が小論「ニーチェばか」や著作『ニーチェ崇拜』を発表し、「哀れなニーチェよ！」と冷静さを欠く反応を示したことは興味深い。本来持ち得ていたはずの明晰な洞察力や学者としての冷静さを保てないほどニーチェブームは激しく展開されたのである。テンニースの場合に見られた非学者的な姿勢は当時ニーチェについて発言した他の学者にも見られる特徴である。ニーチェブームとの距離の近さ、これは1890年代のアカデミズムの宿命的な限界だったのである。

しかしこのような状況の中でも、「ニーチェ研究」の先駆的試みは確実に芽生えつつあった。例えばテュルクやシュタイナーらによる精神病理学的なアプローチは、ニーチェに対して向けられたもっとも早いアカデミックな関心のひとつである。すなわち、ニーチェ思想に見られる諸特徴が「精神異常」の症例として診断されたのである。ニーチェが「学者」ではなく「患者」として受容史デビューを飾ったのは皮肉な話であるが、これらの動きは、何らかの「科学的根拠」に基づいてニーチェを解明しようとする意識の高まりを示すものであった。

実際、世紀転換期が近づく頃には、ブームから距離をとって冷静な議論をするべきだとする学者も現れてきた。こうした試みの中では、例えばニーチェの思想形成過程が3～5段階に区分されたり、思想内容がドイツ精神史のうちに位置づけられたり、あるいは他の思想家や哲学者との比較対照が行われるなど、得体の知れないニーチェの思想に何らかの性格や意味を与えようとする「学問化」の試みが見られるようになる。19-20世紀転換期以降、ニーチェ思想は「崇拜／非難」の対象から「研究」の対象へと徐々にシフトしていったのである。

では教育学はどうだったのか。ドイツ教育学におけるニーチェ受容の前史としてパウルゼンとツィーグラールという2人の教育学者に注目し、両者によるニーチェ思想の取扱いについて考察した結果、ニーチェ思想に対する彼らの冷遇ぶりが明らかとなった。またニーチェブームやニーチェ思想に対する批判的な態度は、青年教育に従事する学校教師においても共有されていた。「思春期青年の危険な誘惑者」と見なされたニーチェの思想は、少

なくとも 1907 年まではドイツ教育学の「圏外」に位置していたのである。

(3) 「教育学者ニーチェ」の発見

こうした状況下に登場したのがヴェーバーである。ヴェーバーは従来もっぱら芸術教育運動に積極的に関与した教育実践家として紹介されてきたが、その新教育批判、実験教育学批判などの論文には、「教育学の自律性」を強く求める教育学者としての姿が確認される。ヴェーバーは「学としての教育学」を志向する学者だったのである。

その彼が学位請求論文のテーマに選んだのがニーチェの思想である。1906 年に受理された学位論文『その世界観と人生観との関連から見た若きニーチェの教育学的思想』は、翌 1907 年に公刊の運びとなった。タイトルからもうかがえるように、この著作においてヴェーバーは、ニーチェブームを想起させる後期思想に関する論述を回避し、かわりに 1890 年代においてほとんど注目を集めなかった初期思想に照明を当てている。また論述方法の特徴としては、ニーチェの見解をしばしば他の教育学者や教育家のものと比較している点を確認することができたが、とりわけ教育思想史におけるカリスマ的存在であるペスタロッチーや「学としての教育学」の象徴的存在たるヘルバルトとの比較は、そもそも門外漢であったニーチェを「教育学者」に昇格させる上で有効な手段となったと言える。こうしてヴェーバーはニーチェの思想を「人格的教育学」として高く評価したのである。

ヴェーバー以前の論者は、後期の作品にこそニーチェ思想の核心部があるという判断から『ツァラトゥストラ』以降の著作に深入りし、非体系性や非論理性、過激性や誤謬などの諸問題に直面することになった。こうして彼らは、ニーチェ思想が「学としての教育学」に受容されがたいとの結論を導き出すことになる。それに対してヴェーバーは、ニーチェが「流行的教育学者」となることを、すなわち彼の思想が教育学に受容されることを期待した。第 3 章で考察したように、ニーチェの後期思想そのものに対する評価という点では、じつはヴェーバーも 1907 年以前の論者と同じ見解を示している。にもかかわらず、ヴェーバーがこのような結論を導き出せたのは、彼がさまざまな問題を含み込んだ後期思想や中期思想を大幅に捨象し、初期思想に焦点化することによって、論理的で健全な思想の持ち主としてのニーチェの姿をアピールすることに成功したからであろう。ニーチェの初期思想だけを取り上げるという一見した限りでは消極的にも思えるヴェーバーの限定的受容は、さまざまな問題を抱えたニーチェ思想を確実に教育学に取り込むための積極的な戦略だったのである。

ヴェーバーのこの戦略は成功を収めることになる。彼の『若きニーチェの教育学的思想』が公刊された 1907 年、ライン編の第 2 版『教育学事典』第 6 巻に「ニーチェ」という項目が掲載されるという象徴的な出来事が起きたのである。それは文字通りニーチェ思想がドイツ教育学に受容された瞬間であった。

(4) 「教育者としてのニーチェ」論の成立背景

ドイツ教育学におけるニーチェ受容史のなかで「1907年」がひとつの大きな分節点をなしていることは明白であろう。教育関係者がニーチェを論じるケースも1907年頃を境に確実に増えている。ニーチェが教育学に受容されたというこの出来事は、少なくともニーチェ思想の意義を主張していた論者にとっては歓迎すべき第一歩となるはずであった。しかしアカデミズムによるニーチェ受容はかえってニーチェ信奉者を複雑な心境に追い込むことになる。例えばハーヴェンシュタインはヴェーバーの1907年著作に対する書評の中で、偉大な教育家の列に加えられることによって逆に「ニーチェのオリジナリティが否認されているような印象を受ける」とコメントしている。確固たる教育思想史のうちに位置づけられ、コメニウスやペスタロッチーらとの共通点を強調され、「人格的教育学」というもっともらしい性格を付与されたニーチェ思想にどれだけ「ニーチェらしさ」が残っているのか。ハーヴェンシュタインはこの種のアポリアに直面したのである。

ニーチェが学問化されていくことに違和感や抵抗を示した論者はハーヴェンシュタインが最初ではなかった。教育学とは直接の関係を持たないものの、コンラートという人物がすでにニーチェ思想の学問化とも呼べる時代の趨勢に違和感を示していたのである。ニーチェ思想と学問研究の相性の悪さ、ニーチェ思想の非「学問」的な性格に直面して、コンラートが採った方策は、いわばニーチェ思想を「人格化」することであった。学問研究のメス及び得ない「人格」という不可侵の領域に目を向け、その重要性を強調することによって逆にニーチェ思想へのアカデミズムの介入を阻止しようと訴えたのである。

一方で、ニーチェが「教育学者」と評価されること、彼の思想が学問研究の対象とされることへの違和感が示されたとするならば、他方で、ドイツ教育界において顕著になっていたのは「教育者」の登場を期待する声である。①学校という枠を超出していること、②生徒と個人的な関係を結ぶこと、③生き生きとした人格であること・人格的な影響力を有していること—これらを意味内容として条件づけられた「教育者」概念がまさに19世紀末以降の文化批判的思潮のなかで醸成されていたのである。

興味深いのは、「教育者」概念の意味内容(①～③)と「読書」という行為の性格とが高いレベルで整合性を有するという点、そして「ニーチェブーム」に代わる「ニーチェ読書」という新たなニーチェ受容形態が実際に普及していたということである。第4章において解明された2つの新事実、すなわち「教育学者」モデルに対する仲間内からの違和感、1910年代にニーチェ読書が普及したという時代背景が、「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立を後押しすることになるのである。

(5) 「教育者ニーチェ」の誕生

『教育者としてのニーチェ』という名の書籍出版がもっとも早く企画されたのは、いわ

ゆる青年運動の領域であった。1914年、ハマーが青年運動の参加者向けに『教育者としてのニーチェ』という単行本を発行したのである。1907年のヴェーバーの著作とは異なり、『教育者としてのニーチェ』においてはニーチェの後期思想が積極的に評価されている。なかでも「超人」は、厳しい自己規律による我欲の克服を意味する思想として高く評価された。ブームのような通俗的受容形態では決して得ることのできない教育効果が「ニーチェ読書」には期待できると考えられたのである。

ニーチェ読書による青年の「自己教育」。これが「教育者としてのニーチェ」という解釈を成立させているメカニズムであった。ところがハマーのこのような主張はあるひとつの事実によって相対化されてしまう。というのも当時のドイツにおいてはニーチェ読書による青年の「自殺」が実際に何件も報告され、「毒殺者ニーチェ」の存在が社会問題となっていたからである。一方でハマーは「矛盾」にニーチェの生き生きとした「人格」や「自己超克」の証しを読み込み、それが読者を「自己教育」へと促すのだと説明した。しかしながら他方でフリッチュやエルンストらは、ニーチェ思想の「矛盾」が十分な判断力を持たない若い読者を翻弄し、「自殺」へと向かわせるのだと主張していた。このように、両者の言い分は完全に平行線を辿るのである。

ニーチェ読書の普及という時代背景が『教育者としてのニーチェ』という著作の成立を後押ししたことはおそらく間違いないだろう。ただその一方で「教育者としてのニーチェ」論は、その成立から自論の妥当性判断に至るまで、ほとんどニーチェ読者に依存せざるを得ないという構造的問題をも内包していた。すなわち、ハマーがどれだけ「教育者」としてのニーチェの意義を主張したとしても、ニーチェが自己教育を促す「教育者」になるか、それとも自殺へと誘う「毒殺者」になるかは、最終的にはニーチェ読書を経験する青年個人の問題にまで還元されてしまうのである。

「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルを教育学の領域において定着させたのはハーヴェンシュタインであった。青年運動家のハマーにとって「教育者としてのニーチェ」論はあくまでも「青年教育」のひとつの具体的な手段を意味していた。しかし、ハーヴェンシュタインにとって「教育者としてのニーチェ」論は「青年教育」の手段以上の意味を持つものであった。かねてよりヴェーバーの「教育学者としてのニーチェ」論に違和感を覚えていたハーヴェンシュタインは、ついに1922年の著作の中でヴェーバーの名前を挙げ、「ニーチェは教育学者ではなく教育者だ」と断言するにいたる。これまでの研究で指摘されることはなかったが、この著作は意識的にヴェーバーの「教育学者」モデルを克服しようとする試みだったのである。

2. 1890 - 1920年代のドイツ教育学におけるニーチェ受容史の特質

第1章から第5章までの考察を振り返ってきたが、1890年代から1920年代のドイツ教

育学におけるニーチェ受容に関して本研究がとりわけ強調しておきたい点を、序章で設定した研究の視座に基づきつつ、以下に示しておきたい。

第一に指摘したいのは、従来「選択の歴史」として説明されてきたニーチェ受容史の力動性ないし多層性である。本研究においては、ニーマイヤーらの言う「選択」の実態解明を行うために、「超人」思想に注目して考察を進めてきた。①大都市の青年(1890年代)、②教育学者ヴェーバー(1907年)、③青年運動家ハマー(1914年)のうち、①青年と③ハマーは「超人」を受容し、②ヴェーバーは受容しなかったという意味において、たしかにこの時期のニーチェ受容は「選択的」である。しかし彼らは、予め「あるもの」と規定された「超人」を選択したのではなかった。彼らは「超人」に、①道徳的無規律状態としての「我欲」の権化、②「猿→人間→〇〇」に該当する生物進化論的新種、③「自己教育(自己規律による我欲の統制)」の目標／優生学的に選別された次世代の人間など、さまざまな意味を付与していた。また「超人」思想との関わり方も多種多様だったと言えるだろう。というのも、青年は生活様式として「超人」を体現し、ヴェーバーは学問研究の対象として「超人」を回避し、ハマーは青年に向けたメッセージとして「超人」を利用したからである。このように、1890年代から1914年の「選択」は、自らがニーチェ思想に意味を読み込み、さまざまなスタイルで受容(あるいは非受容)するという多層的かつ力動的な性格を有していたのである。

第二に確認しておきたいのは、青年におけるニーチェ受容の形態が1890年代と1910年代以降とでは確実に異なっていたという事実である。すなわち、1890年代においては熱狂的なニーチェブームという形態、1910年代頃からは静かなニーチェ読書という形態で、それぞれ性質の異なる現象として展開されていたのである。本研究では、さまざまな資料の詳細な分析によって、顕在的なブームの終焉と潜在的なニーチェ読書の普及がちょうど入れ替わるようにほぼ同時に訪れたこと、大都市の教養市民層を中心に展開されたニーチェブームとは対照的に、ニーチェ読書という現象が地理的にも階級的にも1910年代のドイツに広く普及したことなどを確認することができた。さらに、それぞれの時代の青年によるニーチェ受容を「行為」として捉え直し、1890年代のブームと1910年代の読書との相違点を探った。その結果、ブーム期に見られたような集団的かつ表面的なニーチェ受容とは異なり、ニーチェ読書がすぐれて個人的かつ沈潜在的な受容行為であること、またニーチェ読書が当時の「教育者」概念の意味内容ときわめて高い整合性を有していたことも明らかとなった。1910年代の青年のあいだで普及したニーチェ読書という新たな受容形態は、まさにニーチェを「教育者」と評価することのできる解釈史的な背景を用意したのである。

第三の強調点は、19-20世紀転換期以降のドイツに登場した2つのニーチェ解釈モデル、すなわちヴェーバーの「教育者としてのニーチェ」論とハーヴェンシュタインの「教育者としてのニーチェ」論の特質と意味をそれぞれ詳細に解明したことである。彼らの理想とする教育論はともに「人格的教育学」、生き生きとした人格を持つ「教育者」によって

個別的な教育が行われることであった。しかし両者におけるニーチェ思想の役割はまったく異なるものと言わなければならない。すなわち、ヴェーバーはニーチェの初期思想【学説】を「人格的教育学」と評価しているのに対し、ハーヴェンシュタインはニーチェ自身【人格】を「教育者」と評価したのである。「学問研究」によってニーチェ思想の教育学的意義を解明したヴェーバーと、「ニーチェ読書」の教育的意義を強調したハーヴェンシュタイン、両者の違いは明白であろう。ところが従来の研究においては、ヴェーバーの「教育学者」モデルに対するハーヴェンシュタインの批判的書評の存在や意義が見落とされてきたために、「教育者としてのニーチェ」論の成立過程が解明されず、結果的に両解釈モデルの関係もほとんど検討されることはなかった。改めて結論を示すなら、等しく「教育」の文脈でニーチェを高く評価しながらも、ヴェーバーの「教育学者」論とハーヴェンシュタインの「教育者」論は、内容的にも構造的にもまったく異なる2つのニーチェ解釈モデルなのである。

以上の考察結果を踏まえれば、1890年代から1920年代にかけてのドイツ教育学におけるニーチェ受容史は、「選択」や「歪曲」といった一面的歴史観では説明できないほど複雑な展開を示したと言えるだろう。

3. 教育学とニーチェ思想との関係可能性—受容史研究のアクチュアリティ

本研究を締め括るにあたり、教育学におけるニーチェ受容史の研究、とりわけ1890年代から1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈モデルの変遷を解明した試みがどのような意義を主張できるのかについて述べておく必要がある。

(1) 「新教育」研究への示唆

19-20世紀転換期ドイツの教育という点に注目すれば、本研究の成果を「新教育」研究の指標として用いる可能性も指摘できるだろう。一方で、この分野の研究は、「新教育」が内包する両義性、すなわち近代批判としての意味と近代性(あるいは近代批判の限界)としての意味との両面に関心を寄せる傾向にある。他方、「新教育」をく19世紀末の文化批判に端を発し、世紀転換期以降の青年運動を経て、1920年代にピークを迎えたあらゆる教育改革を求める諸努力へと辞書的に捉えるなら¹⁾、ちょうど「新教育」の時期に「教育学者」と「教育者」という2つのニーチェ解釈モデルが登場したことになる。本研究が指摘したいのは、2つのニーチェ解釈モデルが「新教育」の両義性に対応しているのはいか、すなわち「教育者」モデルが近代批判、「教育学者」モデルが近代性にそれぞれ符合しているのではないかという点である。

すでに明らかなように、「教育者としてのニーチェ」論は、1910年代ドイツに普及した

ニーチェ読書という現象ないし行為がその成立の鍵を握っていた。ニーチェ読書は、その形式的な側面に注目すれば、まさに近代教育の象徴、すなわち学校というシステム、教師から集団に向けた一斉授業、合理的な知識伝達などに対するアンチテーゼとしての意味を有していたと言えるだろう。また、ニーチェ読書の内容的側面に目を向けるなら、当時よく読まれていたニーチェの後期著作には近代批判的な見解が数多く見出せる。「彼(※引用者注：ニーチェ)の教説はひとつの近代批判である」²とハマーも述べている。このように考えれば、例えば「教育者としてのニーチェ」論の中核を担う「自己教育」という形式は、「自殺」問題に直面して親や教師が制御不能状態に置かれてしまうという点も含め、近代批判を実現した教育の一形態と見ることもできるかもしれない。

それに対して「教育学者としてのニーチェ」論は、「新教育」における近代性を象徴しているように思われる。ひとつは近代批判の集成であるニーチェの後期思想が予め捨象されているという点、もうひとつは、ニーチェ思想が「学としての教育学」、すなわち近代教育学に確実に取り込まれているという点である。事実、ヴェーバーに見られるような初期ニーチェの高い評価は、ノールに代表される精神科学的教育学派の新教育運動史の内容とも一致する。このように考えれば、ヴェーバーの「教育学者」モデルは、しばしば指摘される「新教育」の近代性(=近代批判の限界)を示す興味深い一事例とも捉えることができるだろう。

序章でも述べたように、教育学におけるニーチェ受容史研究は従来ノールらの予定調和史観を相対化することに主眼をおいてきた。そしてこの点に関しては一定の成果をあげたと言える。しかし、そもそもノールは「新教育」の理念史をテーマにしているのであって、「教育学におけるニーチェ受容」の歴史それ自体に興味を示しているわけではない。だとすれば、われわれにはニーチェ受容史研究の側から「新教育」研究を逆照射するという課題も残されているのではないか。この点のさらなる検討は今後の課題としたい。

(2)教育学とニーチェ思想の新たな関係性構築に向けて

本研究が示しうるもうひとつの意義は、教育学とニーチェ思想との関係可能性を探るための示唆である。近年ニーチェ思想がどのように論じられているのかについて英語圏とドイツ語圏の教育学の動向を比較調査したローズナウによれば、いまなおニーチェの現代的意義を論じている英語圏【「教育者としてのニーチェ」陣営】と、過去を反省しつつ受容史研究に着手したドイツ語圏【「教育学におけるニーチェ？」陣営】の姿勢は、対照的であるという。すなわち、英語圏の教育学者はニーチェ思想の教育的意義を認めているのに対し、ドイツ語圏の教育学者はニーチェ思想に対して懐疑的だというのである。

受容史研究の重要性を主張している点において、本研究も基本的にはドイツ語圏陣営に賛同する。しかしすでに言及したように、ニーマイヤーに代表されるドイツの受容史研究者は、ハーヴェンシュタインがヴェーバーの「教育学者」モデルを批判的に克服した事実

に目を向けないなど、必ずしもニーチェ受容史の実態を解明しているとは言い難い。その結果、彼らは例えば「教育学によるニーチェ受容は結局のところ常に選択的なものでしかありえない」³といった見解を示し、教育学とニーチェ思想との関係可能性を否定的に捉える傾向にある。「ニーチェの学説は、教育学において受容されてはいるが(rezipiert)、別に尊敬されているわけではない(nicht respektiert)」⁴というエルカースの診断は象徴的である。ローズナウの言葉を借りるなら、彼らはまさにニーチェを教育学から「除名」⁵しようとしているのである。

ただ、これでは受容史研究の意義は半減してしまうだろう。教育学とニーチェ思想との関係性を肯定か否定かで論じるのではなく、両者がどのような関係性を結びうるのかを考えることが、この研究の第一目的だからである。「肯定／否定」の二者択一的な思考に陥ることなく、まさに英語圏の「熱烈な合意」とドイツ語圏の「猛烈な拒否」の彼岸において⁶、教育学とニーチェ思想との関係可能性を模索することが求められているのである。

では、本研究はこの問いに対してどう答えることができるだろうか。ここで注目したいのは、ニーチェ思想の非「教育学」的な性質、つまり矛盾や誤謬といった問題への対応である。というのも、この点にこそ近代教育批判の可能性をはじめとするニーチェ思想のアクチュアリティが存していると考えられるからである。受容史を手掛かりに考えるなら以下のとおりととなる。

「教育学者」モデルのヴェーバーは、矛盾や誤謬など問題の多いニーチェの後期思想を「回避」「除去」した。それは、彼がニーチェ思想を矛盾も誤謬もない「学説」として説得的に示す必要があったからである。それに対して、「教育者」モデルのハマーやハーヴェンシュタインは後期思想をも含めたニーチェ思想の全体を射程に入れており、したがってまた誤謬や矛盾を予め避けたり取り除いたりしているわけではない。その意味では「教育者」モデルはアクチュアルなニーチェ受容に成功しているかに見える。しかし彼らもまた、矛盾や誤謬といった問題をすべてニーチェ自身の「生」や「人格」のうちに統一的に解消するという安易な対応を見せる。「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルは、いわばニーチェというひとつの「神話」を作り上げてしまうのである。

むろんヴェーバーの「教育学者」モデルも、ハマーやハーヴェンシュタインの「教育者」モデルも、それぞれの時代背景の中で登場したニーチェ解釈モデルであり、その確固たる同時代的意味についてはこれまでも述べてきたとおりである。例えば、前段で述べた「教育者」モデルの「神話」性に関して付言するなら、1910年代後半のドイツに登場したゲオルグ派による神話的ニーチェ像の形成がひとつの解釈史的背景を用意しているとも考えることもできる。ゲオルグ派とは、詩人シュテファン・ゲオルグとその弟子ベルトラム、ヒルデブラントらによって結成された文学集団であるが、西尾幹二によれば、「第一次大戦後に属するゲオルグ派の新しいニーチェ像の特徴は、(…略…)ニーチェという『全体人間』の生の動的な姿に当たり、多様な形姿をひとつの魂の統一像として、複義的に浮かび上げようとした点に求められる」⁷。実際、ニーチェ思想をひとつの「神話」として捉えた

ベルトラムの 1918 年著作『ニーチェ、一神話の試み』⁸には、矛盾を「生」のうちに統一的に解消したり⁹、病気や苦悩と闘った人間ニーチェに感情移入¹⁰するなど、ニーチェ思想を「人格化」する手続き¹¹が確認できる。「教育者」モデルの「神話」性は、まさにこのような歴史的背景を踏まえてはじめて理解できるのである。

しかしながら、過去の行為を顧みない姿勢は厳しく審問されなければならない。ニーチェ受容史それ自体に関心を向けようとしなない英語圏教育学の態度もさることながら、しばしば「〇〇者としてのニーチェ」という表記を使用する日本の教育学にもその批判的視線は向けられよう。例えばホイヤーは「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルを「理論回避の一形式」と特徴づける¹²。「哲学者」や「教育者」はまだ許容できるとしても、「自己教育者」¹³、「自己復帰者」¹⁴、「実存者」¹⁵、「反道徳者」¹⁶など、見慣れない呼称も見受けられる。ニーチェ自身の「生」や「人格」を強調すること自体に必ずしも問題があるわけではないが、ニーチェの「神話」を語ることが目的でないとするなら、いま少しニーチェ思想の「人格化」がもたらす正負の効果、あるいは誤謬や矛盾の行方に注意を払う必要があるのではなかろうか。

またドイツ語圏の教育学も、ニーチェ受容史研究の重要性は認識しているものの、得られた研究成果を教育学側の反省材料として用いようとする姿勢に欠ける。彼らの意識は「いったいニーチェはどれだけ教育学に耐えうる存在なのか」¹⁷といういささか高圧的な問いのスタンスに象徴されていよう。例えばヴェーバーはニーチェ思想の誤謬や矛盾を「回避」「除去」した点において暴力的であると批判されていたが、ドイツの受容史研究者はまさにヴェーバーと同様の行為を繰り返しているのではないか。なぜなら、すでに述べたように、彼らは 1 世紀にも及ぶ教育学とニーチェ思想との関係を一方的に解消しようとするからである。

ニーチェ思想が内包する誤謬や矛盾などの問題を前にして、われわれに残された方策は何であろうか。それは誤謬や矛盾といった問題を直視することであろう。ニーチェ思想の諸問題を「回避」「除去」するのではなく、またニーチェ自身の「生」や「人格」のうちに安易に「解消」するのでもなく、なぜニーチェ思想が誤謬や矛盾を犯さざるを得なかったのか、その理由や意味を問う姿勢が、教育学とニーチェ思想の新たな関係可能性¹⁸を開いてくれるように思われる。

例えば、ニーチェ思想による教育学の再審ということも可能なのではないか。周知の通り、貴族主義、君主道徳と奴隷道徳、権力への意志といったラディカルな言葉を用いるニーチェの思想は、ときにわれわれを当惑させる。しかし、ポストモダン時代の到来を予告するその思想の背後には、民主主義、真理、道徳といった「近代的理念」に対する問いや批判意識が存している。ニーチェ思想に見られる誤謬や矛盾のいくつかは、場合によっては「近代」そのものに由来するものとも考えることも可能なのである。

他方、教育学はその「近代」性を見直しが迫られていると言えよう。価値相対主義やライフスタイルの多様化が進み、もはや大人社会が子ども世代に将来の明確なヴィジョンを

示せない時代＝ポストモダンの状況下において、教育学の語る言葉はいかに説得力を示しうるのか。まさに民主主義、真理、道徳など、教育基本法等にも明記されている教育の目的・目標としての「近代的理念」とその「教育」のあり方が問われているのである。

このように考えれば、ニーチェ思想と教育学の両者はまさに「近代」をめぐる問題圏において共鳴すると言えるだろう。われわれは、ニーチェを従来通り「教育学者」や「教育者」と端的に評価するのではなく、彼のテクストをあらためて「思想」として捉え直す必要がある。このとき注意しなければならないのは、両者の関わり方である。ニーチェ思想から「回答」を受け取ろうとするのではなく、むしろニーチェとともに「問う」ような姿勢が教育学には求められよう。教育学とニーチェ思想がいかなる関係を結べるかという問いに対して本研究が示しうるひとつの回答は、教育学が「近代」問題を徹底的に考え抜いたニーチェと問題関心を共有し、ポストモダンの状況における「近代的理念」や「教育」の持続可能性を検討するというものである。

注

* 1) 例えば、教育思想史学会編『教育思想事典』419頁、項目「新教育」を参照。

* 2) Hammer1914, S.113.

* 3) Weiß, S.264. Vgl. Hoyer1998, S.45.

* 4) Oelkers, S.213.

* 5) Rosenow2000, S.875.

* 6) Vgl. Ibid., S.876.

* 7) 西尾、前掲書、55-56頁。

* 8) Bertram, E.: Nietzsche. Versuch einer Mythologie. Berlin 1918. 浅井真男訳『ニーチェ、一つの神話の試み』(上・下巻)、筑摩叢書、(1970)1985年⁴。なお浅井訳の底本は7.Auflage, Berlin 1929.

* 9) 例えば以下を参照。「ニーチェという現象の提示する多様性の統一は、きわめて矛盾に満ちたことだが、この現象の現存在の根底にまで根を下ろした二重性のなかにこそ実現され、表現されているのである。」(同上書、18頁)

* 10) 例えば以下を参照。「あのニーチェの強大な印象はそれ自体として近世精神史において無比のものであるが、あらゆる絶対的評価を無視すれば、あの印象があれほど強烈であるのは、この人物が稀有な純粋さをもって自分の世紀の瞬間の魂の宿運を具現し、明白化したかゆえであり、彼が自分の世紀の不治の病気であったと同時にそれを見、この病気と戦ったと同時にそれに殉じたかゆえであるように見える。」(同上書、17頁)

* 11) 例えば以下を参照。「伝説のなかだけで預言者と後世とが出会う。そして、人格は、たとえいかほどくっきりとした輪郭を与えられ、いかほど明瞭に歴史的知識によって限定された人格でも、作用し

つつ生産し続ける力としてはただ伝説という形式においてのみもろもろの時代を超えて永続するのである。(まことに<作品>もやはり人格であって、伝説の法則に従うものである。)それゆえ人格はひたすら像として、形姿として、ひたすら神話として生きるなのであって、何か過去のものの知識および認識としてではない。」(同上書、8頁)

* 12) Hoyer1998,S.44. u. Hoyer2002,S.42. 例えばホイヤーは次のように述べる。「きわめて無難に聞こえる『教育者としてのニーチェ』という定式の背後に何が隠されているのか?極端な場合は、その哲学者の教育学的思想の削除である。」(Hoyer1998,S.44) ホイヤーの着眼点と問題意識は本研究にも通ずるところがあり興味深いが、この「教育者としてのニーチェ」という脆弱な解釈モデルが「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルへの批判意識から生まれた点など、重要な歴史的事実を見逃している。

* 13) 麦倉、前掲書、20頁。

* 14) 宮澤 1991、前掲書、57頁。

* 15) 宮澤 1993、前掲書、91頁。

* 16) 阪本 1996、前掲書、315頁。

* 17) Prondczynsky, S.76.

* 18) 教育学とニーチェ思想との新たな関係性を示す試みも登場しつつある。例えば以下のものを参照。土戸敏彦『冒険する教育哲学—<子ども>と<大人>のあいだ—』勁草書房、1999年。矢野智司『自己変容という物語—生成・贈与・教育—』金子書房、2000年。今井康雄「ニーチェの教養批判と言語批判」(課題研究:<教養>の語り方をめぐって—他者・経験・物語—)『教育哲学研究』第87号、2003年、23-28頁。

参考文献

◆ ニーチェの著作

Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe, 15Bde. (einschl. Kommentar u. Konkordanz), Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (de Gruyter/ dtv) München, Berlin, NewYork 1980. (KSA)

◆ 第一次史料

Adelmann, J.: Nietzsche als Erzieher. In: Die Scholle 3 1927, S.784-787.

Bab, J.: Friedrich Nietzsche und die deutsche Gegenwart. In: Die Hilfe Nr.53. 1914, S.872-874.

Barkan, R.: Was kann Nietzsche der Schulreform sagen ? In: Sozialistische Monatshefte 31 Nr.62. 1925, S.22-25.

Baumeister, A.: Friedrich Nietzsche, ein gefährlicher Verführer der heranwachsenden Jugend. In: Lehrproben und Lehrgänge aus der Praxis der Gymnasien und Realschulen 70 1902, S.1-19.

Berg, L.: Der Übermensch in der modernen Litteratur. Ein Kapitel zur Geistesgeschichte des 19. Jahrhunderts. München 1897.

Bertram, E.: Nietzsche. Versuch einer Mythologie. Berlin 1918.

Bölsche, W.: Die Gefahren Nietzscheschen Philosophie. In: Freie Bühne 4 1893 Reprint 1970, S.719-722.

Bölsche, W.: Das Geheimnis Friedrich Nietzsches. In: Neue Deutsche Rundschau 5 (Freie Bühne) 1894 Reprint 1970, S.1026-1033.

Conrad, M.G.: Aus Friedrich Nietzsches Leben. In: Die Gesellschaft 6 1890, S.1253-1262.

Conrad, M.G. (1895-a): In purpurner Finsterniß. Roman-Improvisation aus dem dreißigsten Jahrhundert. Berlin 1895.

Conrad, M.G. (1895-b): Jugend ! In: Die Gesellschaft 11 1895, S.1-3.

Conrad, M.G. (1895-c): Der Übermensch in der Politik. Stuttgart 1895, S.25,26,29. zit.n. Hillebrand, B.: Nietzsche und die deutsche Literatur. Bd.1. Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963. Tübingen 1978, S.99-100.

Conrad, M.G.: Der Kampf um Nietzsche. In: Die Wage 48 1899, S.811-814.

Conrad, M.G.: Was duenket Euch um Nietzsche ? In: Die Insel 1 (2) 1900, S.201-207.

Dauthendey, M.: Gedankengut aus meinen Wanderjahren. München 1913. In: Gesammelte Werke. Bd.1. Autobiographisches, München 1925, S.339-405, S.399f. zit.n. Hillebrand 1978, S.172-173.

Döring, W.: Nietzsche als philosophischer Erzieher. In: Die Erziehung 12 1937, S.41-45.

Duboc, J.: Jenseits vom Wirklichen. Eine Studie aus der Gegenwart. Dresden 1896.

Duboc, J.: Anti-Nietzsche. Dresden 1897.

Ernst, O.: Jugend von heute. Leipzig 1899.

Ernst, O.: Flachsmann als Erzieher. Edited with notes and vocabulary by Elizabeth Kingsbury. Boston, NewYork, Chicago, London 1904.

Ernst, O.: Nietzsche der falsche Prophet. Leipzig 1914.

Fritsch, Th.: Nietzsche und die Jugend. In: Hammer Nr.209. 1911, S.113-116.

Gärtner, F.: Friedrich Nietzsche als Dichterphilosoph und Pädagog. In: Bayerische Lehrerzeitung. Eigentum des Bayerischen Volksschullehrervereins 36 1902, Nr.7-9. S.134-136, S.157-159, S.181-183.

- Goldberg,R.: Nietzsche und Tolstoi als Schaffende am Erziehungsproblem. In: Leipziger Lehrerzeitung 18 Nr.43. 1911, S.968-970.
- Gottlieb,A.: Das Gymnasium, die Realschule und Friedrich Nietzsche. In: Zeitschrift für das Realschulwesen 36 1911, S.193-205, S.257-265.
- Grimm,E.: Das Problem Friedrich Nietzsches. Berlin 1899.
- Grottewitz,C.: Der Kultus der Persönlichkeit. In: Freie Bühne 2 1891, S.233-236.
- Gurlitt,L.: Der Deutsche und seine Schule. Berlin (1905) 1906².
- Gurlitt,L.: Friedrich Nietzsche als Erzieher. In: Das freie Wort 13 1914, S.130-136.
- Hammer,W.: Nietzsche im Hochgebirge. In: Davoser Blätter 37 Nr.34. (19. Sept.) 1908, S.3-5.
- Hammer,W. (1910-a): Nietzsche und sein Wille zur Gesundheit. In: Gesundes Leben. Familienblätter für Gesundheitspflege und allseitige Lebensreform 1910, S.121-125.
- Hammer,W. (1910-b): Friedrich Nietzsche. Der Lebensreformer und seine Zukunftskultur. Leipzig 1910.
- Hammer,W. (1910-c): Schlittensport. Leipzig 1910.
- Hammer,W.: Die Gefahren des Wintersports. Leipzig 1912.
- Hammer,W.: Nietzsche und der Vegetarismus. In: Vegetarische Warte 46 den 29. März 1913, S.63-65.
- Hammer,W.: Nietzsche als Erzieher. Leipzig 1914.
- Hammer,W. (Hrsg.): Wie ein stolzer Adler. Elberfeld 1917.
- Hartleben,O.E.: Tagebuch. Fragment eines Lebens. München 1906, S.117, S.118f. zit.n. Hillebrand1978, S.68.
- Havenstein,M.: Friedrich Nietzsche. Ein Jugendverderber ? Eine Verteidigungsschrift. Leipzig 1906.
- Havenstein,M.: Nietzsche als Pädagog. In: Der Säemann 3 1907, S.30-34.
- Havenstein,M.: Nietzsche als Erzieher. In: Oehler,M.(Hrsg.): Den Manen Friedrich Nietzsches. Weimarer Weihgeschenk zum 75.Geburtstag der Frau Elisabeth Foerster-Nietzsche. 1921, S.91-108.
- Havenstein,M.: Nietzsche als Erzieher. Berlin 1922.
- Havenstein,M.: Friedrich Nietzsche als Führer. In: Schule und Wissenschaft 9 1926, S.340-351.
- Havenstein,M.: Weichlichkeiten in der modernen Erziehung. In: Die Erziehung 5 1930, S.160-175.
- Havenstein,M.: Das Recht zur Kritik an der modernen Erziehung. Erwiderung an Erich Weniger. In: Die Erziehung 5 1930, S.315-320.
- Havenstein,M.: Modernitätsstreben im Deutschunterricht. In: Die Erziehung 7 1932, S.639-647.
- Havenstein,M.: Autorität und Liberalität. In: Die Erziehung 8 1933, S.551-570.
- Havenstein,M.: Die höhere Schule im deutschen Volksstaat. In: Die Erziehung 11 1936, S.171-177.
- Havenstein,M.: Egoismus und Altruismus. Eine Grundlegung der Ethik in Prima. In: Die Erziehung 11 1936, S.209-227.
- Hecht,M.: Friedrich Nietzsches Einfluß auf die Frauen. In: Die Frau 6 1899, S.486-491.
- Heine,H.: Friedrich Nietzsche als Pädagoge. In: Neue Bahnen 13 1902, S.275-287, S.329-343.
- Heman,F.: Weltanschauungen und Nietzsche. In: Der Türmer Nr.2. 1910, S.228-230.
- Henne am Rhyn, O. (1899-a): Zur Frage der Ausführbarkeit der Ideen Friedrich Nietzsches. In: Das neue Jahrhundert. Februar 1899, S.652-659.
- Henne am Rhyn, O. (1899-b): Anti-Zarathustra. Gedanken über Friedrich Nietzsches Hauptwerke. Altenburg 1899.
- Holz,A.: Socialaristokraten. (1896) Das Werk von Arno Holz. Erste Ausgabe mit Einführungen von Dr. Hans W. Fischer, Bd.5, Berlin 1924, S.71. In: Emlich,W. u. Holz,A.(Hrsg.): Werke Bd.4. Neuwied, Berlin, Spandau 1962, S.5-93. zit.n. Hillebrand1978, S.106.
- Horneffer,E.: Nietzsche-Vorträge. Leipzig 1908.

- Itschner,H.: Einige Gesichtspunkte zur Erschließung des pädagogischen Gehaltes der Werke Nietzsches.
In: Achtzehnter Bericht über das Großherzogliche Lehrerseminar zu Weimar 1909, S.3-36.
- J.: Ohne Titel. (Nachruf auf Friedrich Nietzsche) In: Kraus,K. (Hrsg.): Die Fackel 2 Nr.51. Ende,
August 1900, S.19-22.
- Jonkoff,Th.: Nietzsches Idee vom Übermenschen als Erziehungsideal. Zürich 1911.
- Kaatz,H.: Die Weltanschauung Friedrich Nietzsches: Cultur und Moral. Dresden, Leipzig 1892.
- Kaatz,H.: Die Weltanschauung Friedrich Nietzsches: Kunst und Leben. Dresden, Leipzig 1893.
- Key,E.: The Century of the Child. 1900. (原田実訳『児童の世紀』玉川大学出版部、1960年)
- Kiefl,F.X.: Friedrich Nietzsche und die christliche Pädagogik. In: Der Aar 2 1912,
S.817-826.
- Kleinpeter,H.: Nietzsche als Schulreformer. In: Blätter für deutsche Erziehung 14 1912, S.99-101.
- Köhler,F.: Nietzsche als Erzieher. In: Pädagogische Studien 38 1917, S.225-249.
- Lauscher,A.: Nietzsche als Erzieher. In: Kölnische Volkszeitung, Literarische Beilage 49 Nr.20. 1908,
S.149-151.
- Lauscher,A.: Friedrich Nietzsche. Kritische Studien. Essen 1909.
- Lauscher,A.: Friedrich Nietzsche. In: Monatsblätter für den katholischen Religionsunterricht an höheren
Lehranstalten 11 1910, S.103-109, S.138-144, S.161-166.
- Lehmann,R.: Erziehung und Erzieher. Berlin 1901.
- Lehmann,R.: Erziehung und Unterricht. Grundzüge einer praktischen Pädagogik. Zweite neu bearbeitete
und erweiterte Auflage von „Erziehung und Erzieher“. Berlin 1912.
- Levenstein,A.: Nietzsche und die Arbeiterklasse. In: Dokumente des Fortschritts 4 (April) 1911,
S.238-240.
- Levenstein,A. (Hrsg.): Friedrich Nietzsche im Urteil der Arbeiterklasse. Leipzig (1914) 1919².
- Lilliencron,D.v.: Brief an M.G.Conrad vom 15. 4. 1889. In: Ausgewählte Briefe. Bd.1. Berlin 1910,
S.196. zit.n. Hillebrand1978, S.64.
- Mayer,A.: Nietzsche als Denker, Dichter und — Verderber. Stuttgart 1907.
- Mayreder-Obermayer,R.: Der Klub der Übermenschen. In: Neue Deutsche Rundschau 6 1895,
S.1212-1228.
- Melde,M.: Nietzsches Zarathustra und seine Bedeutung für die moderne Schule. Berlin 1910.
- Möbius,P.J.: Ueber das Pathologische bei Nietzsche. Wiesbaden 1902.
- Morgenstern,Ch.: Brief an die Mutter Friedrich Nietzsches vom 6. 5. 1895. In: Morgenstern,M. (Hrsg.):
Ein Leben in Briefen. Wiesbaden 1952, S.97. zit.n. Hillebrand1978, S.104.
- Morgenstern,Ch.: Nietzsche, der Erzieher. In: Neue Deutsche Rundschau 7 1896 Reprint 1970,
S.709-712.
- Morgenstern,Ch.: Brief an Frisch vom 24. 2. 1902. In: Morgenstern,M. (Hrsg.): Ein Leben in Briefen.
Wiesbaden 1952, S.137-138. zit.n. Hillebrand1978, S.138-139.
- Morgenstern,Ch.: Nietzsche. Stufen. Eine Entwicklung in Aphorismen und Tagebuchnotizen.
(Hrsg.v. Morgenstern,M. u. Bauer,M.) München(1929)1941, S.80f.,83f.,85. zit.n. Hillebrand 1978,
S.110-111.
- Nordau,M.: Entartung. 2Bde. Berlin 1893.
- Oehler,R. (1911-a): Nietzsche als Bildner der Persönlichkeit. (Vortrag gehalten am 16. Oktober 1910 im
Nietzsche-Archiv zu Weimar.) 1911.
- Oehler,R. (1911-b): Ist Nietzsche wirklich tot? In: Der Türmer Nr.4. 1911, S.554-556.
- Paulsen,F.: Zum Nietzsche-Kultus. (1897) In: Paulsen,F.: Zur Ethik und Politik. Gesammelte Vorträge
u. Aufsätze. Bd.1. (Deutsche Bücherei. Bd.31.) Berlin 1905, S.54-58.

- Paulsen,F.: Das geistige Leben des deutschen Volkes im neunzehnten Jahrhundert. (1900) In: Zur Ethik und Politik. 1905, S.59-66.
- Paulsen,F.: Väter und Söhne.(1907) In: Paulsen,F. (Hrsg. v. Spranger,E.): Gesammelte Pädagogische Abhandlungen. Stuttgart, Berlin 1912, S.497-516.
- Reuschert,W.: Friedrich Wilhelm Nietzsche. In: Pädagogische Studien 22 1901, S.278-287, S.338-350, S.391-405.
- Riedel,O.: Nietzsche als Erzieher. In: Führerzeitung 2 Nr.3. 1914, S.66-67.
- Roderich-Stolthheim,F. (Pseud. Fritsch): Nietzsche's Macht-Philosophie und der Deutschenhaß. In: Hammer. Blätter für deutschen Sinn 14(1. Januar 1915, Nr.301), S.1-7.
- Roloff,E.M. (Hrsg.): Lexikon der Pädagogik. Freiburg Bd.1. 1913, Bd.3. 1914.
- Roßmann,W.: Nietzsche und die Reformen. In: Bremer Schulblatt 12 (10. Mai 1907) S.57-59.
- Rott,J.: Nietzsche und die klassische Bildung. In: Blätter für deutsche Erziehung 14 1912, S.4-8.
- Schädel,E.: Nochmals Nietzsches Pädagogik. Eine nicht „unzeitgemäße“ philosophisch-pädagogische Studie. In: Sächsische Schulzeitung (Organ des Sächsischen Lehrervereins und seiner Zweigvereine, sowie des Sächsischen Pestalozzi-Vereins.) Nr.14. (Freitag den 1. April) 1904, S.213-218.
- Schmitt,E.H.: Friedrich Nietzsche an der Grenzscheide zweier Weltalter. Versuch einer Beleuchtung vom Standpunkte einer neuen Weltanschauung. Leipzig 1898.
- Servaes,F.: Nietzsche und der Sozialismus. In: Freie Bühne für den Entwicklungskampf der Zeit 1892, S.85-88, S.202-211.
- Simon,O.: Nietzsches Stellung zur Pädagogik. In: Pädagogisches Jahrbuch 32 1909, S.86-100.
- Simon,A.: Nietzsche als Pädagoge. In: Die Quelle 78 1928, S.843-850, S.948-954.
- Spindler,J.: Nietzsches Persönlichkeit und Lehre im Lichte seines » Ecce homo « . Stuttgart, Berlin 1913.
- Stein,A.: Die Stellung des jungen Nietzsche zu den Fragen der Erziehung und Bildung. In: Pädagogisches Archiv 52 1910, S.73-99.
- Stein,L.: Friedrich Nietzsche's Weltanschauung und ihre Gefahren. Ein kritischer Essay. Berlin 1893.
- Steiner,R.: Nietzscheanismus. In: Litterarischer Merkur 12 Nr.14. (2. April 1892), S.105-108.
- Steiner,R.: Friedrich Nietzsche. Ein Kämpfer gegen seine Zeit. Weimar 1895.
- Steiner,R.: Die Philosophie Friedrich Nietzsche's als psycho-pathologisches Problem. In: Wiener klinische Rundschau 14 Nr.30-31. 1900, S.598-600, S.618-621.
- Steiner,R.: Friedrich Nietzsche's Persönlichkeit und die Psycho-Pathologie. In: Wiener klinische Rundschau 14 Nr.37 1900, S.738-741.
- Stöcker,H.: Zur Nietzsche-Lektüre. In: Der Volkserzieher. Blatt für Familie, Schule und öffentliches Leben 2 (Nr.45. 6. November 1898 u. Nr.46. 13. November 1898)
- Stöcker,H.: Der Wille zur Macht. In: Jugend Nr.18. 1903, S.306-308.
- Thieme,P.: „Also sprach Zarathustra“ Vortrag. Gehalten im Weißenfelder Lehrerverein am 13. Dezember 1900. In: Der praktische Schulmann 1901, S.218-235.
- Tögel,F.: Friedrich Nietzsche und die Lehrerpersönlichkeit. In: Leipziger Lehrerzeitung (Organ des Leipziger Lehrervereins) 24 Nr.42.(Mittwoch, den 19. Dezember 1917), S.597-600.
- Tönnies,F.: Nietzsche-Narren. In: „Ethische Cultur“ und ihre Geleite. Berlin 1893, S.5-29.
- Tönnies,F.: Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Leipzig 1897.
- Tönnies,F.: Selbstdarstellungen. In: Schmidt,R.(Hrsg.): Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen. Bd.3. Leipzig 1922, S.199-234.
- Tönnies,F. u. Paulsen,F./ Klose,O. u.a. (Hrsg.): Briefwechsel 1876-1908, Ferdinand Tönnies und Friedrich Paulsen. Kiel 1961.

- Türck,H.: Fr.Nietzsche und seine philosophischen Irrwege. Dresden 1891.
- Wallaschek,R.: Nietzsche über Erziehung. In: Monatsschrift für christliche Sozialreform (Juni) 1911, S.302-313.
- Weber,E.: Zum Kampf um die allgemeine Volksschule. (Ein Versuch zur Klarlegung der eigentlichen Grundfragen und ein Beitrag zur bevorstehenden Deutschen Lehrerversammlung Pfingsten 1904) Langensalza 1904.
- Weber,E.: Nochmals „Experimentier-Pädagogik“. In: Der Säemann 1 1905, S.228-232.
- Weber,E.(1907-a): Verbrecher, Dutzendmensch und Pädagog. In: Die Deutsche Schule 11 1907, S.401-415.
- Weber,E.(1907-b): Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt- und Lebensanschauung. Leipzig 1907.
- Weber,E.(1907-c): Nietzsche, Friedrich Wilhelm. In: Rein,W.(Hrsg.): Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik Bd.6. Zweite Auflage. Langensalza 1907, S.281-287.
- Weber,E.(1907-d): Ästhetik als pädagogische Grundwissenschaft. Leipzig 1907. (大津親人訳「教師の価値創造と人格価値(『教育学の基礎科学としての美学』の部分訳)」『福岡学芸大学紀要(第四部:教職編)』1963年、1-17頁)
- Weber,E.(1909-a): Die Lehrerpersönlichkeit. In: Der Säemann 5 1909, S.269-277.
- Weber,E.(1909-b): Freie Geister ! In: Die Deutsche Schule 13 1909, S.14-20.
- Weber,E.(1909-c): Hermann Itschners Unterrichtslehre. In: Die Deutsche Schule 13 1909, S.119-122.
- Weber,E.: Schlagwörterpädagogik. In: Die Deutsche Schule 14 1910, S.273-276.
- Weichelt,H.: Friedrich Nietzsche: Also sprach Zarathustra. Erklärt und gewürdigt. Leipzig 1910.
- Weichelt,H.: Zarathustra-Kommentar. Leipzig 1922.
- Wessely,R.: Friedrich Nietzsche als Vorkämpfer für Erziehungs- und Schulreform. In: Pädagogisches Archiv 54 1912, S.601-631.
- Winterfeld,A.v.: Unser Erziehungswesen in der Auffassung Nietzsche's. Leipzig 1910.
- Zerbst,M.: Nein und Ja ! Antwort auf Dr. Hermann Türck's Fr. Nietzsche und seine philosophischen Irrwege. Leipzig 1892.
- Ziegler,Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. (1.Aufl.) Berlin 1899.
- Ziegler,Th.: Friedrich Nietzsche. (Vorkämpfer des Jahrhunderts. Eine Sammlung von Biographien, Erster Band) Berlin 1900.
- Ziegler,Th.: Die geistigen und socialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. (2.Aufl.) Berlin 1901.
- Ziegler,Th.: Allgemeine Pädagogik. Sechs Vorträge. (Aus Natur und Geisteswelt. Sammlung wissenschaftlich-gemeinverständlicher Darstellungen Bd.33.) Leipzig (1901)1905².
- Ziegler,Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. (3.Aufl.) Berlin 1910.
- Ziegler,Th. (1911-a): Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. (4.Aufl.) Berlin 1911.
- Ziegler,Th. (1911-b): Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im neunzehnten Jahrhundert. (5.Aufl.) Berlin 1911.
- Ziegler,Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert. (6.Aufl.) Berlin 1916.
- Ziegler,Th.: Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert. (7.Aufl.) Berlin 1921.

◆ ニーチェ受容史研究文献

- Aschheim, St.E.: Nietzsche und die Deutschen. Karriere eines Kults. Stuttgart, Weimar 1996.
(Übersetzung von: The Nietzsche Legacy in Germany 1890-1990.)
- Cancik, H./ Cancik-Lindemaier, H.: Philolog und Kultfigur. Friedrich Nietzsche und seine Antike in Deutschland. Stuttgart, Weimar 1999.
- Deesz, G.: Die Entwicklung des Nietzsche-Bildes in Deutschland. Würzburg 1933.
- Del-Negro, W.: Nietzsche und die Gegenwart: Wandlungen des Nietzschebildes. In: Deutschlands Erneuerung 26 1943, S.346-354.
- Ehrentreich, A.: Wandlungen des Nietzsche-Bildes in den letzten Jahrzehnten. In: Die Sammlung 6 1951, S.140-148, S.239-248, S.271-277.
- Guzzoni, A. (Hrsg.): 100 Jahre philosophische Nietzsche-Rezeption. Frankfurt am Main, Hain 1991.
- Herfurth, Th.: Zarathustras Adler im Wandervogelneist; Formen und Phasen der Nietzsche-Rezeption in der deutschen Jugendbewegung. In: Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung 16 1986/87, S.63-110.
- Hillebrand, B.: Nietzsche und die deutsche Literatur. Bd.1. Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963. Tübingen 1978.
- Hoyer, T.: Über 100 Jahre Pädagogische Literatur zu Friedrich Nietzsche — mit einem Exkurs zur schultheoretischen Rezeption des Philosophen. In: Niemeyer, Ch./Drerup, H./Oelkers, J./Pogrell, L.v. (Hrsg.): Nietzsche in der Pädagogik ? Weinheim 1998, S.39-55.
- Hoyer, T.: Nietzsche und die Pädagogik. Werk, Biografie und Rezeption. Würzburg 2002.
- Köster, P.: Der verbotene Philosoph, Studien zu den Anfängen der katholischen Nietzsche-Rezeption in Deutschland 1890-1918. Berlin, NewYork 1998.
- Krummel, R.K.: Nietzsche und der deutsche Geist. Bd.1. Ausbreitung und Wirkung des Nietzscheschen Werkes im deutschen Sprachraum bis zum Todesjahr des Philosophen. Ein Schrifttumsverzeichnis der Jahre 1867-1900. Berlin, NewYork 1974.
- Krummel, R.K.: Nietzsche und der deutsche Geist. Bd.2. Ausbreitung und Wirkung des Nietzscheschen Werkes im deutschen Sprachraum vom Todesjahr bis zum Ende des Weltkrieges. Ein Schrifttumsverzeichnis der Jahre 1901-1918. Berlin, NewYork 1983.
- Niemeyer, Ch. (1998-a): Nietzsche und die deutsche (Reform-)Pädagogik. Vorüberlegungen zur Behebung eines Forschungsdesiderats. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.13-38.
- Niemeyer, Ch. (1998-b): Nietzsche als Jugendverführer. Gefährdungslage und Pädagogisierungsoffensive zwischen 1890 und 1914. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.96-119.
- Niemeyer, Ch. (1999-a): „Plündernde Soldaten“. Die pädagogische Nietzsche-Rezeption im Ersten Weltkrieg In: Zeitschrift für Pädagogik 45 1999, S.209-229.
- Niemeyer, Ch. (1999-b): Nietzsches Vorträge ‚Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten‘ im Kontext. Kritische Anmerkungen aus rezeptionsgeschichtlicher Perspektive mit Schwerpunkt auf Wagner, Lagarde und Langbehn. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 75 1999, S.173-207.
- Niemeyer, Ch. (1999-c): Volkserziehung und Popularisierung. Zum merkwürdigen Verhältnis von Freude und Zorn des Pädagogen gegenüber dem Populären am Beispiel Nietzsches und der Nietzsche-Rezeption. In: Drerup, H./Keiner, Ed. (Hrsg.): Popularisierung wissenschaftlichen Wissens in pädagogischen Feldern. Weinheim 1999, S.215-230.
- Niemeyer, Ch.: Wie wurde mit Nietzsche im 20. Jahrhundert Bildungspolitik gemacht ? Ein Rückblick auf gut einhundert Jahre Rezeptionsgeschichte. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 76 2000, S.117-138.

- Niemeyer,Ch. (2001-a) : Nietzsche als ‚Prophet der Jugendbewegung‘ — ein Mißverständnis ? In: Reschke,R. (Hrsg.) : Zeitenwende — Wertewende. Berlin 2001, 181-187.
- Niemeyer,Ch. (2001-b) : Nietzsche im Schrifttum der deutschen Jugendbewegung ? Ein kleiner Test auf eine große These anhand von drei Jugendbewegungszeitschriften. In: Jahrbuch des Archivs der Deutschen Jugendbewegung 2001, S.119-145.
- Niemeyer,Ch.: Nietzsche, die Jugend und die Pädagogik. Eine Einführung. Weinheim, München 2002.
- Niemeyer,Ch.: Nietzsche, völkische Bewegung, Jugendbewegung. Über vergessene Zusammenhänge am Exempel der Briefe Nietzsches an Theodor Fritsch vom März 1887. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik 79 2003, S.292-330.
- Niemeyer,Ch.: Nietzsche — ein Züchtungstheoretiker ? Kritische Anmerkungen zu Timo Hoyers Dissertation Nietzsche als Erziehungstheoretiker am Exempel seiner Deutung von Aphorismus Nr.295 aus Jenseits von Gut und Böse. In: Pädagogische Rundschau 58 2004, S.297-321.
- Nolte,E.: Nietzsche und der Nietzscheanismus. Frankfurt am Main, Berlin 1990.
- Oelkers,J.: Einige Bemerkungen Friedrich Nietzsches über Erziehung und der Status eines „Klassikers der Pädagogik“. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.211-240.
- Philippi,J.: Das Nietzsche-Bild in der deutschen Zeitschriftenpresse der Jahrhundertwende. (Diss.) Saarbrücken 1970.
- Pronczynsky,A.v.: Historische Konstruktionen. Zur Rezeption Nietzsches in „Geschichten der Pädagogik“. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.56-79.
- Pütz,P.: Friedrich Nietzsche. Stuttgart (1967) 1975².
- Riedel,M.: Nietzsche in Weimar. Ein deutsches Drama. Leipzig 1997. (恒吉良隆・米澤充・杉谷恭一訳『ニーチェ思想の歪曲—受容をめぐる 100年のドラマ』白水社、2000年)
- Rosenow,E.: „Nietzsche als Erzieher“ kontra „Nietzsche in der Pädagogik ?“ Ein Vergleich der anglo-amerikanischen und der deutschen Nietzsche-Interpretationen am Vorabend des 21. Jahrhunderts. In: Zeitschrift für Pädagogik 46 2000, S.867-879.
- Schirmer,A./ Schmidt,R. (Hrsg.) : Widersprüche. Zur frühen Nietzsche-Rezeption. Weimar 2000.
- Steffen,H. (Hrsg.) : Nietzsche. Werk und Wirkungen. Göttingen 1974.
- Uhle,R.: Der Nietzsche-Kultus in der Wahrnehmung philosophischer Pädagogik — das Beispiel Friedrich Paulsens. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.80-95.
- Weiß,E.: Nietzsche und seine pädagogikhistorische Problematik. Theoretische und rezeptionsgeschichtliche Bemerkungen zu einer provokanten Bildungsreflexion. In: Nietzsche in der Pädagogik ? 1998, S.241-279.
- 恒吉良隆「表現主義におけるニーチェ受容(Ⅰ)—序説—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第44号、1980年、39-56頁。
- 恒吉良隆「表現主義におけるニーチェ受容(Ⅱ)—シュテルンハイムの『ドン・ファン』をめぐる—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第48号、1984年、50-64頁。
- 恒吉良隆「ニーチェにおけるユダヤの問題」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第60号、1996年、103-126頁。
- 恒吉良隆「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(Ⅰ)」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第62号、1998年、45-63頁。
- 恒吉良隆「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(Ⅱ)—エリーザベトとルドルフ・シュタイナー—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第63号、1999年、91-112頁。
- 恒吉良隆「ニーチェをめぐる女性たち—ニーチェの女性観の背景(Ⅰ)—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第66号、2002年、53-85頁。

- 恒吉良隆「ニーチェをめぐる女性たち—ニーチェの女性観の背景(Ⅱ)—」福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第 67 号、2003 年、143-174 頁。
- 西尾幹二『ニーチェ』第 1 部、中央公論社、(1977)1993 年⁴。
- 舟越清「ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況Ⅰ」成城大学文芸学部編『ヨーロッパ文化研究』第 3 巻、1983 年、99-114 頁。
- 舟越清「ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況Ⅱ—十九世紀転換期の近代自然科学者に見る内的世界の構造の変化—」成城大学文芸学部編『ヨーロッパ文化研究』第 4 巻、1984 年、79-111 頁。
- 舟越清「ニーチェのドイツ文学に与えた影響史論考」成城大学文芸学部編『成城文藝』第 161 号、1998 年、119-132 頁。
- 松原岳行「19-20 世紀転換期の教育学におけるニーチェ受容— E.ヴェーバーのニーチェ論の同時代的意味—」『教育哲学研究』第 81 号、2000 年、58-74 頁。
- 松原岳行「『教育者としてのニーチェ』という解釈モデルの成立過程とその意味— 1907-1914 年のドイツ教育学におけるニーチェ受容—」『教育哲学研究』第 89 号、2004 年、103-119 頁。
- 松原岳行「E.ヴェーバーの教育学構想に関する—考察—その新教育批判、実験教育学批判から見えるもの—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 32 号、2005 年、63-76 頁。
- 松原岳行「1890 年代アカデミズムが見たニーチェ思想— F.テンニースの場合—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 34 号、2006 年、135-152 頁。
- 松原岳行「M.G.コンラートによるニーチェ思想の人格化」『九州産業大学国際文化学部紀要』第 40 号、2008 年、115-125 頁。
- 三島憲一「ニーチェ—力への意志のモルフォロジー—」『現代思想の源流』講談社、1996 年、87-157 頁。

◆その他の参考文献

- Aloni,N.: The Three Pedagogical Dimensions of Nietzsche's Philosophy. In: Educational Theory 39 No.4 1989, pp.301-306.
- Cooper,D.E.: On Reading Nietzsche on Education. In: Journal of Philosophy of Education 17 No.1 1983, pp.119-126.
- Flitner,W./Kudritzki,G. (Hrsg.): Die deutsche Reformpädagogik. Bd.1. Die Pioniere der Pädagogischen Bewegung. Stuttgart 1982.
- Golomb,J.J.: Nietzsche's Early Educational Thought. In: Journal of Philosophy of Education 19 No.1 1985, pp.99-109.
- Gordon,H.: Nietzsche's Zarathustra as Educator. In: Journal of Philosophy of Education 14 No.2 1980, pp.181-192.
- Hammerstein,N. (Hrsg.): Deutsche Bildung ? Briefwechsel zweier Schulmänner Otto Schumann — Martin Havenstein 1930-1944. Frankfurt am Main 1988.
- Hillesheim,J.W.: Suffering and Self-Cultivation. The Case of Nietzsche. In: Educational Theory 36 No.2 1986, pp.171-178.
- Hillesheim,J.W.: Nietzschean Images of Self-Overcoming: Response to Rosenow. In: Educational Theory 40 No.2 1990, pp.211-215.
- Johnston,J.S.: Nietzsche as Educator. A Reexamination. In: Educational Theory 48 No.1 1998, pp.67-83.
- Kokemohr,R.: Friedrich Nietzsche (1844-1900). In: Scheuerl,H. (Hrsg.): Klassiker der Pädagogik. Bd.2.

- von Karl Marx bis Jean Piaget. München 1979, S.34-45.
- Löw,R.: Nietzsche, Sophist und Erzieher.— Philosophische Untersuchungen zum systematischen Ort von Friedrich Nietzsches Denken. Weinheim 1984.
- Löwisch,D.J.: Friedrich Nietzsche. In: Fischer,W./ Löwisch,D.J.(Hrsg.): Pädagogisches Denken von den Anfängen bis zur Gegenwart. Darmstadt 1989, S.212-226.
- Nohl,H.: Die neue deutsche Bildung. (1920) In: Pädagogik aus dreißig Jahren. Frankfurt am Main 1949.
- Nohl,H.: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt am Main (1935) 1957⁴.
- Reichelt,H.W./ Schlechta,K. (Hrsg.): International Nietzsche Bibliography. North Carolina 1968.
- Renner,K.: Ernst Weber und die reformpädagogische Diskussion in Bayern. Stuttgart 1979.
- Röhrs,H.: Die Reformpädagogik als internationale Bewegung. Bd.1. 1980.
- Rosenow,E.: Nietzsche und das Autoritätsproblem. In: Zeitschrift für Pädagogik 38 1992, S.3-16.
- Rudolph,G.: Friedrich Nietzsche und Ferdinand Tönnies. Der 'Wille zur Macht' widerlegt von den Positionen eines 'Willens zur Gemeinschaft'. In: Der Nietzsche-Kultus. Eine Kritik. Berlin 1990, S.107-139.
- Sassone,L.A.: Philosophy across the Curriculum. A Democratic Nietzschean Pedagogy. In: Educational Theory 46 No.4 1996, pp.511-524.
- Scheibe,W.: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim, Basel (1969) 1974⁴.
- 相澤伸幸 (1998-a) 「ニーチェの形成論と 19 世紀の生理学概念」『東北大学教育学部研究年報』第 46 集、1998 年、45-59 頁。
- 相澤伸幸 (1998-b) 「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」『教育哲学研究』第 78 号、1998 年、1-16 頁。
- 相澤伸幸 「ニーチェ形成論へのゲーテ自然学的アプローチ—ニーチェの教育学的人間形成論の構築に向けて—」『旭川大学女子短期大学部紀要』第 29 号、2000 年、1-18 頁。
- 相澤伸幸 『ニーチェと人間形成論—近代ドイツの教育学的人間形成論の系譜において—』(博士論文・東北大学)、2002 年。
- 相澤伸幸 「ニーチェ<力への意志>と人間形成論」仙台ゲーテ自然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第 7 号、2004 年、91-108 頁。
- 相澤伸幸 「ニーチェ<永遠回帰>と人間形成論」仙台ゲーテ自然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第 8 号、2005 年、101-126 頁。
- 相澤伸幸 「教育学的視点から見たニーチェの<超人>」仙台ゲーテ自然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第 9 号、2006 年、95-114 頁。
- 荒巻敦 「Ernst Weber における教育方法の芸術性」『広島大学教育学部紀要』第 44 号第 1 部、1995 年、99-106 頁。
- 荒巻敦 「授業における指導の芸術性— E.ヴェーバーの教育芸術論を手がかりに—」『教育方法学研究』第 22 巻、1997 年、31-39 頁。
- 荒巻敦 「芸術家としての教師— E.ヴェーバーの教師論を手がかりに—」『広島大学教育学部紀要』第 48 号第 1 部、1999 年、71-78 頁。
- 石井慎一郎 「言語と教育についてのニーチェの思想」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第 25 号、2003 年、29-36 頁。
- 石井慎一郎 「日本の教育思想とニーチェ—美育あるいは芸術教育について—」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第 26 号、2004 年、11-20 頁。
- 石井慎一郎 「金子筑水と Fr.ニーチェ—その教育と芸術についての思想—」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第 27 号、2005 年、129-139 頁。
- 今井康雄 「ニーチェの教養批判と言語批判(要旨)」『教育哲学会第 45 回大会発表要旨集録』(2002 年 10 月 19-20 日開催)78 頁。

- 今井康雄「ニーチェの教養批判と言語批判」(課題研究：<教養>の語り方をめぐって—他者・経験・物語—)『教育哲学研究』第87号、2003年、23-28頁。
- 上山安敏『世紀末ドイツの若者』三省堂、1986年。
- 大石紀一郎・大貫敦子・木前利秋・高橋順一・三島憲一編『ニーチェ事典』弘文堂、1995年。
- 大川勇「ニーチェの教養理念—『われわれの教育機関の将来について』にみられるフンボルトへの回帰—」京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会編『社会システム研究』第9号、2006年、1-11頁。
- 大津親人「美学と教育学—E.ヴェーバーにおける教育学の美的理論—」『福岡学芸大学紀要(第四部：教職編)』1962年、1-11頁。
- 小笠原道雄「新教育運動の学問的基礎—ドイツ—」長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書、1988年、46-64頁。
- 岡本三夫「イヴァン・イリッチがやってきた—そこに二十世紀のニーチェをみる—」『月刊教育の森』第6巻第2号、毎日新聞社、1981年、76-79頁。
- 尾田生馬「ニーチェにおける人間の『形成』」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第47巻第1部、2001年、1-5頁。
- 小野塚正樹「ニーチェにおけるニヒリズムと人間形成」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第56集、第1号、2007年、11-28頁。
- 木内陽一「実験教育学の終焉—新教育運動における教育理解と科学理論的基礎づけのずれ—」『教育哲学研究』第61号、1990年、50-63頁。
- 黒柳修一「F.W.ニーチェの教育思想についての一考察—『生涯学習論』との関連で—」『武蔵野美術大学研究紀要』第25号、1994年、113-119頁。
- 小林真『ニーチェの病跡—ある哲学者の生涯と旅・その詩と真実—』金剛出版、1999年。
- 小林万里子「ハンブルク学校改革運動における『子どもから』の教育学—民衆学校教師の存在基盤としての意味内容—」『教育哲学研究』第79号、1999年、59-74頁。
- 坂越正樹『ヘルマン・ノール教育学の研究—ドイツ改革教育運動からナチズムへの軌跡—』風間書房、2001年。
- 阪本恭子「F.ニーチェの教育観—<Zucht>の概念を手掛かりにして—」大阪大学文学部編『待兼山論叢(哲学篇)』第28号、1994年、29-43頁。
- 阪本恭子「F.ニーチェにおける子供・道徳・教育」日本道徳教育学会編『道徳と教育』No.290-291、1996年、311-315頁。
- 清水本裕「ニーチェの教育観—三つの側面から見た教育者ニーチェ—」渡辺二郎・西尾幹二編『ニーチェ物語—その深淵と多面的世界—』有斐閣、1980年、267-269頁。
- 鈴木幹雄『ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期 G.オットーの芸術教育学へ—』風間書房、2001年。
- 高橋勝「F.W.ニーチェ—『自己教育』思想の開拓者—」天野正治編『現代に生きる教育思想 第5巻(ドイツ②)』ぎょうせい、1982年、13-47頁。
- 田村栄子『若き教養市民層とナチズム—ドイツ青年・学生運動の思想の社会史—』名古屋大学出版会、(1996)2002年²。
- 土戸敏彦『冒険する教育哲学—<子ども>と<大人>のあいだ—』勁草書房、1999年。
- 内藤貴「ニーチェにおける遠近法主義のダイナミズム—ニーチェの自己形成論に関する一考察—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第52号、2001年、63-70頁。
- 内藤貴(2006-a)「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung理解を中心として—」三田哲学会編『哲学』第115号、2006年、1-23頁。
- 内藤貴(2006-b)「ニーチェの人間形成論における価値観・世界観の変容に関する研究—ニーチェの教育論および人間形成論の解明を目指して—」『慶應義塾大学大学院社会

- 学研究科紀要』第 62 号、2006 年、177-179 頁。
- 原弘巳「ニーチェと人間の『形成』」『愛媛大学教育学部紀要：第 1 部(教育科学)』第 48 卷第 2 号、2002 年、1-18 頁。
- 平野正久「新教育運動の提起したもの—ドイツ—」長尾十三二編『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988 年、54-70 頁。
- 舟越清「ニーチェの教育観(一)」成城大学文芸学部編『成城文芸(人文・社会編)』第 38 卷 10 号、1985 年、146-159 頁。
- 松田幸子「ニーチェの『教育者としてのショーペンハウアー』」『上田女子短期大学紀要』第 27 号、2004 年、1-9 頁。
- 水野清志「ニーチェの教育論」『実存主義』以文社、1974 年、58-61 頁。
- 溝口隆一「『永遠回帰』における教育の重要性について」『関西教育学会紀要』第 24 号、2000 年、31-35 頁。
- 溝口隆一「誘惑と自己教育—ニーチェ哲学の教育的属性—」同志社大学哲学会編『哲学論究』第 17 号、2002 年、23-42 頁。
- 溝口隆一「ニヒリズム時代の道徳教育—遺稿におけるニーチェのニヒリズム論の研究—」『関西教育学会紀要』第 27 号、2003 年、16-20 頁。
- 溝口隆一「ニーチェの『解釈』に基づく公民教育の原理」『関西教育学会紀要』第 28 号、2004 年、11-15 頁。
- 溝口隆一「ニーチェにおける知の伝達としての教育」同志社大学哲学会編『哲学論究』第 20 号、2006 年、1-22 頁。
- 宮澤知江美「ニーチェにおける自己教育—学校教育を包括するものとして—」『関東教育学会紀要』第 18 号、1991 年、53-59 頁。
- 宮澤知江美「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」『教育哲学研究』第 67 号、1993 年、86-99 頁。
- 麦倉達生「初期ニーチェの教育観」『滋賀大学教育学部紀要：人文科学・社会科学・教育科学』第 39 号、1989 年、11-34 頁。
- 森野衛「ニーチェ初期作品にみられる教育観」『沼津工業高等専門学校研究報告』第 21 号、1987 年、233-241 頁。
- 森本倫代「初期ニーチェにおける教育論—ギムナジウムにおける教養教育と自己教育思想—」青山学院大学教育学会編『教育研究』第 45 号、2001 年、1-14 頁。
- 森本倫代「ニーチェの『超人』思想—シュタイナーのニーチェ論を手がかりに—」『東京工芸大学芸術学部紀要』第 12 号、2006 年、79-83 頁。
- 諸富祥彦「ニーチェ」教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000 年、542-544 頁。
- 矢野智司『自己変容という物語—生成・贈与・教育—』金子書房、2000 年。
- 山内紀幸「モンテッソーリにおける『子ども』—19-20 世紀転換期の優生学的な知の中で—」『教育哲学研究』第 77 号、1998 年、78-91 頁。
- 山名淳『ドイツ田園教育舎研究—「田園」型寄宿制学校の秩序形成—』風間書房、2000 年。
- 山本恵子「ニーチェの哲学的教育論」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(第 1 分冊)』第 51 号、2005 年、15-23 頁。

1890-1920 年代のドイツにおけるニーチェ受容史関連年表

1888 年	ニーチェに関する G.ブランデスの講演成功 ニーチェ、『偶像の黄昏』『反キリスト』『この人を見よ』などの著作を執筆	
1889 年	1 月初旬、ニーチェ発狂昏倒 (その後の 10 年間で精神錯乱状態で過ごす) リーエンクロン、ニーチェ発狂の情報を M.G.コンラート宛の手紙に記す	
1890 年	コンラート「フリードリヒ・ニーチェの生から」	ニーチェブームの発生
1891 年	テュルク『Fr.ニーチェとその哲学的迷路』	
1892 年	ツェルプストがテュルクに対する反駁書を出版 シュタイナー「ニーチェ主義」	
1893 年	エリーザベト、ニーチェ資料館の設立を計画 L.シュタイン『フリードリヒ・ニーチェの世界観とその危険性』 テンニース、小論「ニーチェばか」を発表 ノルダウの 2 巻本『変質』公刊	
1895 年	ニーチェ全集(ケーゲル編：全 12 巻)の刊行開始 マイレーダー=オーバーマイヤーの小説『超人クラブ』 コンラートのニーチェ小説『堇色の闇の中で』 コンラート『政治の中の超人』	
1896 年	ホルツ『社会貴族主義者たち』 モルゲンシュテルン「ニーチェ、教育者」	
1897 年	デュボク『反ニーチェ』 テンニース『ニーチェ崇拜』 パウルゼン、テンニース宛の書簡の中で『ニーチェ崇拜』を高く評価 パウルゼン「ニーチェ崇拜について」	
1899 年	ヘンネ・アム・リューン、2 つのニーチェ論を相次いで発表 著作『反ツァラトウストラ』 論文「フリードリヒ・ニーチェの理念の実現可能性を問う」 グリム『フリードリヒ・ニーチェの問題』 ツィーグララー『19 世紀の精神的社会的思潮』(初版) コンラート「ニーチェをめぐる闘い」	ニーチェブームの拡大
1900 年	8 月、ニーチェ死去。 シュタイナー、2 本のニーチェ論を発表 「精神病理学問題としてのフリードリヒ・ニーチェの哲学」 「フリードリヒ・ニーチェの人格と精神病理学」 ツィーグララー『フリードリヒ・ニーチェ』 コンラート「君はニーチェに何を思う？」	
1901 年	ツィーグララー『一般教育学』(初版) ディーメ、教員組合主催講演「『ツァラトウストラかく語りき』について」 上級学校教師ロイシェルト「フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ」	
1902 年	メービウス『ニーチェにおける病的なるもの』 パウマイスター「フリードリヒ・ニーチェ、思春期青年の危険な誘惑者」 ゲルトナー「詩人哲学者および教育者としてのフリードリヒ・ニーチェ」 ハイネ「教育者としてのフリードリヒ・ニーチェ」	
1904 年	シェーデル「もう一度ニーチェ教育学」	

青年の危険な誘惑者

1905年	E.ヴェーバー、論文「もう一度『実験教育学』」を發表
1906年	ヴェーバーの学位論文が受理される 論文題目『その世界観と人生観を背景にした若きニーチェの教育学的思想』 M.ハーヴェンシュタイン『フリードリヒ・ニーチェ、青年を墮落させる者？』 →反ニーチェ派を相手にニーチェの正当性を弁明する
1907年	ヴェーバー、上記の学位論文を出版 書名『その世界観と人生観との関連から見た若きニーチェの教育学的思想』 W.ライン編『教育学事典』に項目「ニーチェ」収録（執筆担当はヴェーバー） 『 「教育学者としてのニーチェ」という解釈モデルの成立 』 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">ハーヴェンシュタイン、ヴェーバーのニーチェ論に批判的書評を寄せる</div> ヴェーバーの著作『教育学の基礎科学としての美学』 ロスマン「ニーチェと改革者たち」 マイヤー『思想家、詩人、そして墮落させる者としてのニーチェ』
1908年	ハマー「高き山上のニーチェ」 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ニーチェブームの沈静化</div>
1909年	ヴェーバー「教師の人格」 ジモン「教育学に対するニーチェの位置」 イチュナー「ニーチェ作品の教育学的内容を解明するための若干の見解」 ラウシャー『フリードリヒ・ニーチェ——批判的研究』
1910年	ヴェーバー「キャッチフレーズ教育学」 A.シュタイン「教育と教養の問題に対する若きニーチェの位置」 ヴィンターフェルト『ニーチェの見解における現代の教育制度』 メルデ『ニーチェのツアラトウストラと現代の学校に対するその意義』 ツィーグラール『19世紀の精神的社会的思潮』（第3版） →ニーチェブームがまだ「現在進行中の現象」と把握される ヘーマン「世界観とニーチェ」 →このなかでニーチェブームの終焉＝ニーチェの死を宣告 ラウシャー「フリードリヒ・ニーチェ」 ハマー「ニーチェと彼の健康への意志」 『フリードリヒ・ニーチェ—生活改革者と未来文化』 『滑走スポーツ』 ヴァイヒェルト、『ツアラトウストラ』の解説書を出版 『ツアラトウストラ』累計発行部数7万部 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ニーチェ読書の普及</div>
1911年	ヨンコフ『教育理想としてのニーチェの超人理念』 ゴットリーブ「ギムナジウム、実科学校、フリードリヒ・ニーチェ」 ヴァラシェク「ニーチェの教育観」 ゴルトベルク「教育問題の創造者としてのニーチェとトルストイ」 ツィーグラール『19世紀の精神的社会的思潮』（第4版） → <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ニーチェブームが「過去の現象」と把握される</div> フリッチュ、「ニーチェと青年」においてニーチェ読書による青年の「自殺」問題に言及 →ニーチェが「毒殺者」として把握される R.エーラー、「ニーチェは本当に死んだのか？」においてヘーマンの見解を否定 R.エーラー『人格形成者としてのニーチェ』 レーヴェンシュタイン「ニーチェと労働者階級」（調査報告）
1912年	ヴェッセリー「教育改革や学校改革の先駆者としてのフリードリヒ・ニーチェ」 ロット「ニーチェと古典的教養」 クラインペーター「学校改革者としてのニーチェ」 キーフル「フリードリヒ・ニーチェとキリスト教的教育学」 ハマー『ウィンタースポーツの危険』
1913年	ハマー「ニーチェと菜食主義」

1914年	<p>ハマー、『教育者としてのニーチェ』においてニーチェ読書の「教育効果」を主張</p> <p>「教育者としてのニーチェ」論の登場</p> <p>レーヴェンシュタイン『労働者階級から見たフリードリヒ・ニーチェ』 →ニーチェ読書による「自己教育」を体験した労働者の証言が紹介される グルリット、ハマーの『教育者としてのニーチェ』に好意的な書評を寄せる リーデル、ハマーの『教育者としてのニーチェ』に批判的書評を寄せる</p> <p>エルンスト、『誤った予言者ニーチェ』においてニーチェ読書の「弊害」を憂慮 ヴェーバー『芸術教育と教育芸術』</p> <p style="text-align: center;">【1914 - 1918年 第一次世界大戦】</p> <p>1917年、ケーラー「教育者としてのニーチェ」 テーゲル「フリードリヒ・ニーチェと教師の人格」</p>
1921年	ハーヴェンシュタイン「教育者としてのニーチェ」
1922年	<p>ハーヴェンシュタイン『教育者としてのニーチェ』</p> <p>「教育学者」モデルの克服＝「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルの確立 ブッデ「教育者としてのニーチェ」 『ツアラトウストラ』累計発行部数 30 万部</p>
1926年	<p>ブッデ「教育者としてのニーチェ」 ハーヴェンシュタイン「指導者としてのフリードリヒ・ニーチェ」</p>
1927年	アーデルマン、ハーヴェンシュタイン『教育者としてのニーチェ』に書評
1928年	ジモニック「教育学者としてのニーチェ」
1930年	<p>ブッデ「教育者としてのニーチェ」 ホーネッガー「教育者としてのニーチェ」 リーブマン「教育者としてのニーチェ」</p>
1932年	シュテンムラー「教育学者としてのニーチェ」
1933年	<p>オスター「教育者としてのニーチェ」 ハーガー「フリードリヒ・ニーチェードイツの英雄的人間の教育者」 カップシュタイン、2編のニーチェ論を発表 「第三帝国におけるフリードリヒ・ニーチェー英雄的人間へと導くドイツの教育者」 「フリードリヒ・ニーチェー英雄的人間へと導くドイツの教育者」</p>
1937年	<p>レーヤ「ナチズム的世界観へと導く教育者としてのニーチェ」 デーリンク「哲学的教育者としてのニーチェ」</p>